
魔法少女リリカルなのは For Myself

はくおろ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは For Myself

【Nコード】

N5272U

【作者名】

はくおろゝ

【あらすじ】

これはまだ少女が不屈の心と出会う前から始まる物語。
一人の少年と出会うことで彼女たちの運命はどのように変わって行くのだろうか…

注意…これは作者の思いつきと勢いだけで書いています！
もしかしたら、原作やキャラの崩壊があるかもしれませんので、ご了承ください。

そのいち！(前書き)

なんか思いついたので書いてみた。
基本短めです。

そのいち！

これはまだ少女が不屈の心を手に入れる前のお話。

夕方すぎの誰もいなくなった公園。

ここで一つの出会いがあった。

一人の少女と一人少年。

彼女は一人。彼も一人。

この出会いは偶然なのか、また必然なのか。

それは誰にもわからない。

けれど、この出会いは二人の大切な思い出となっている。

それだけはきつと確かだから…

魔法少女リリカルなのは For My Self ? 始まります。

~~~~~

「次は、缶蹴りしよーぜ」

「よし、ならジャンケンだ！」

「」「」「ジャンケン、ポン！」「」「」

「げ、俺が鬼かよ…。なら30数えるからサッサと隠れろよ」  
目を瞑って、円の中で数を数える。

「うわ、奏真か…。急がないとマズイぞ！」

「「逃げろー！！」」

「いーち、にー、さーん、よーん」

さてと、あいっらは何処に隠れるかな。

「じゅーに、じゅーさん」

まあ、直ぐに見つけてやるさ！

「にじゅーはち、にじゅーく、さんじゅう！　よし、行くぞ！！」  
俺は目を開けて、逃げた奴らを探す。

さすがに、見えるところにはいないか。

ふと、ブランコに目を向けると、女の子が一人で乗っていた。

あれ？　あの娘、前も居なかったけ？

確か…二日くらい前にも見たような。

そんなことを思っていると、視界に友達の影が映った。

「おっと、集中集中」

女の子のことを一旦忘れて、  
俺は影を追いかけるコトにした。

~~~~~

「よし、俺の勝ち！」

「ちえ、奏真、足速すぎ」

結局、缶蹴りは俺が全員捕まえて終了した。
：途中、連携を取られたときはかなり危なかったけど。

「へへへ、まーな！　よし、なら次はーー」

「透ー！　夕飯だから、もう帰って来なさい」

そんな言葉を皮切りに、

「真名ちゃん。私たちも帰りますよ」

「あ、お母さーん。ゴメン、俺帰るわ！」

「ママー！ 奏真くん。私も帰るね」

どンドン、母親に連れられて友達が帰って行く。

「あ、おう。また明日な！」

一人、また一人と減っていった最後は俺一人になった。

「…まだ5時か。さてと、何かして時間潰さないとな」
そう言って公園を見渡す。

砂場、シーソー、ジャングルジム、すべり台、鉄棒。

順々に見て行くが、ピンとこない。

ならブランコ、と思って見てみると、まだあの女の子がいた。

女の子の顔は伏せていて、よく見えなかったが…

「…泣いてる？」

その時、俺には女の子が泣いてるように見えた。

なんか見てないふりっていうのも嫌だなと思い、

「なあ、お前暇か？」

俺は話しかけるコトにした。

~~~~~

怪我して入院しているお父さん、忙しいそうなお母さん、近づくにくい雰囲気を出してるお兄ちゃん、お店のお手伝いを頑張ってるお姉ちゃん。

みんな、なのはに構ってる暇がないくらい大変そうで…  
手伝いたくてもなのはにできることはなにもなくて…

せめて、せめて迷惑だけは掛けないようにって、それだけを考えて  
ました。

けど、やっぱり辛くて、寂しくて…。

下を向いていると突然、声を掛けられました。

「なあ、お前暇か？」

「ふえ…？」

~~~~~

「いや、ふえ…じゃなくてさ。お前、まだ帰らない？」

「え、あつ、うん」

おっ、時間はOKみたいだ。

「そっか。ならさ、一緒に遊ばね？」

「ふえ、な、なんで？」

いや、なんでと来ましたか。

「なんでって、お前も一人、俺も一人。一人で遊んでも楽しさは一倍にしかないけど…二人なら楽しいのも二倍になるだろ？」

「楽しいのも二倍…」

「おう。ついでに、二人だと辛いこととか悲しいこととかも半分になるんだ」

「半分に…？」

「そう。だから友達は大変なんだってさ。昔、父さんが言ってた」
完全に父さんの受け売りだしな。

「友達…」

「んで、どうするんだ？俺と一緒に遊んで、友達になってみないか？」

「…ふえ、っ、く、ううう」

い、いきなり泣き始めましたよ！？ この娘！

「えっ、おいおい、泣くなよ。えーと、うーんと、うー、ゴメン。なんか嫌なことしちゃったか？」

「ひぐっ、ち、違うの。えぐ、嫌じゃ、なあい、の」
泣きながら言ってるから聞き取り辛いけど…嫌じゃないらしいので、良かった。

その後、泣き止むのに時間が掛かって結局、遊べなかった。

あ、けど自己紹介はした。

もう暗くなったので、一緒に帰ることに。

「…ごめんなの、奏真君。遊ぶ時間なくなっちゃって」
目に見えて落ち込んでいるなのは。

「うん。あー、いいよ別に。確かに今日は遊べなかったけどさ。なのはと俺は友達になったんだ。これからいつでも遊べるだろう？」

「奏真君…。うん！ そうだね。なら明日遊ぶの！」

「明日か。いいぞ、なら明日の昼に公園に集合だ！」

「うん。お昼、だね。絶対に行くの！」

これが、俺達の出会い。

別に何か特別ってわけじゃない。
けど、これから何十年経っても、決して出会ったこの日を俺達は忘れないだろう。

~~~~~

「…ただいま」  
鍵を開けて、家の中に入る。

「母さんは、まだかえってないか…」  
ふと、電話が光っているのが目に付いた。

「留守番、か」

P i !

【…奏真？ お母さんだけど、ゴメンね。今日も帰るの遅くなるの。  
お金はいつもの所にあるから、それを使って食べて。それじゃあね】

P u — P u — P u —

「…了解」

それに！  
(前書き)

連投です！

それに！

一夜明けて、日曜日。

今日は休日。

遊ぶための日だ！

俺は公園の入り口でなのはを待っている。

そろそろ来るかな…？

「ん？ お、来たか。おーい！ なのはー！！！」

「奏真くーん！ おはようなの」

俺は見かけると走ってやって来る

「まあ、もう昼だけだな。よし、行くぞ！ みんなが待ってる」

「ふえ？ みんなって？」

「みんなはみんなだ。着いて来ればわかる」

そう言って俺はなのはを連れてみんなの待つ公園の中へと歩いていった。

「おーす。みんなもう集まってる？」

「おっせーぞ、奏真。みんな集まってるぞ」

「奏真くんが遅れるのって珍しいね」

「そうそう。いつも1番なのに…って、その娘、誰？」

「えっと、そ、奏真君」

いきなり注目されて、腰がひけているのは。

「こいつが遅れた理由だ！ 今日はこちらも一緒に遊ぶぞ。ほら、  
なのは。自己紹介！」

「う、うん。えっと、高町、にゃのはです！」

一瞬、世界が止まった。

（囁んだね）

（囁んじやったね）

（囁んだ…）

みんなから暖かな視線がなのはに集まる。

あっ、徐々に赤くなって来た。

…仕方ないな。

「…ぷっ、あはははー！ にゃ、にゃのはだって！ 猫みてーだな。  
ぷっくく」

「奏真君！ 笑すぎなのー！」

怒りながら、俺の頭をポカポカと叩いて来る。

「悪い、悪い、ツボに入った。んで、まー、なのはだ。あだ名はにゃんこ。ちなみに俺の子分だ。よろしくしてやってくれ」

「にゃ！ 私、子分なんかじゃないのー！」

（あだ名はにゃんこなんだ）

（にゃんこは否定しないんだ）

（にゃんこか）

「何いってんだ。お前、俺より年下だろ？ ねんこーじよれつつて奴だ」

「ううう、年齢を出すのは卑怯なの！」

「…はあ、分かったよ。なら子分が嫌だと言うんなら、今日の遊びで俺に勝つんだな。そしたら子分は辞めよう」

「わかったの！ 絶対に負けないの！」

そう言って、なのはは気合いを入れた。

なんか背景がメラメラと燃えている

…まあ、これで緊張は溶けただろ。

~~~~~

そんな感じでなのはも加わり、今日の遊びを決めることに。

様々な協議の結果。

「つーことで、今日は色つき鬼だ！」

「奏真君。色つき鬼って？」

「良い質問だよ、にゃんこ君。色つき鬼とは、簡単に言えば、鬼が色を指定して、その色に触っていれば捕まらない。しかし、モタモタしていると、捕まっちゃうという遊びだ」

「な、なるほど…奥が深そうな遊びですね、教授。って、このノリは何なの？」

…愚問だよ、なのは君。

そんなの俺も、

「知らない。んじゃ、さっそくやろうぜ！」

「鬼決めは、ジャンケンでいいよね」

「なら行くぞ。いざ、運命を決める！ ジャンケン！」

「」「」「ポン！」「」「」

~~~~~

そんな訳で色つき鬼が幕を開けた。

最初は、無難な色を言っているこの遊びも、後半はカオスなことになる。



「次は俺が鬼か。よし、行くぜ！」  
俺の言葉に全員が注目している。

なのはも、聞き逃すまいと、しっかりとこちらに聞き耳を立てている。

「虹色ー！」

「ま、マジでかー！」

「キャー！」

「あ、あそこに虹があるぞ！走れー！」

「にゃ！虹色なんてズルいのー！」

みんな遠くの空に掛かる虹へと走っていく。

だが、逃がすか！

「タッチだ。なのは！」

「にゃ。ううう、奏真君。足速いの」

「ふふふ、俺から逃げ切るなんて百年早いわ！」

「なら、次で捕まえて見せるの！」

そういうながら、まだ俺を一回も捕まえていないのはであった。

~~~~~

うーん。奏真君が中々捕まらないの。

ここは、難しい色にするの！

「行くよお、透明色ー！」

「ええっ、透明色ー！？」

「ヤバい、とにかく逃げなくちゃ！」

「えっと、えーと」

やった！ みんな慌てる。

ふふん。これなら奏真君だって…！

そうして、奏真君を見ると、宙に手をかざしてた。

???

はっ、まさか空気に触ってるってことなの！？

もう一度、奏真君を見ると、なんか凄く得意げな顔をしていた。

~~~~~

？

ふう、危なかった。

さっき俺も考えたんだよね、透明色。

おかげで対策もバッチリです！

俺を見て、みんなも空気に触ってるし。

さあ、どうする？？

なのは！

~~~~~

うー、奏真君のを見て、みんな真似しちゃったよ。

なんとかしなくちゃ！

うーん。何かないかな？

あっ、あれは！

「イルカさんなのー！」

~~~~~

「イルカさんなのー！」

はあ？ イルカって色じゃねえぞ。

そもそもイルカなんて…

そう思っていると、他の三人が一斉に俺へと向かって来た。

「ちょ、お前ら、一体どうした!?」

「イルカ発見ー!」

「うん。イルカさんみーつけた!」

「イルカはここだ。確保ー!」

そう言いながら、俺を押し倒し、俺の足に――

「って、靴下のマークかー!」?

「うん。そうだよ! でもまだ奏真君は触ってないの。というわけで奏真君、タッチなの!」

「お、俺の負けか」

「これで私は子分じゃないの!」

胸を張りながら、そう言って来るのは。

「やったな! にゃんこ!」

「良かったね。にゃんこちゃん」?

「おめでとう!」

「うん。ありがとうなの！」

他のみんなからの賛辞になのは嬉しいそうに笑った。

「くっ、ここで俺は敗れても、第二、第三の奏真が…」

「ふん。何度でも倒してあげるの」

こうしてなのはも溶け込んで行き、俺達と一緒に遊ぶようになった。

そのさん！（前書き）

また連投！

短いと書きやすいね。

そのさん！

なのはと出会って二ヶ月が経った。

なのはは最初に会った時と比べて、凄く明るくなった。

やっぱりみんなで楽しく、遊べば嫌なことも吹っ飛んじゃうよな。

…この時間だけだとしてもさ。

おっと、そういえば俺のコトを紹介していなかったな。

俺の名前は山城 奏真。

四歳だ。覚えておけ！

趣味は外で遊ぶこと。

将来の夢は、空を飛ぶことだ！

それから――

「奏真君。何をぶつぶつ言ってるの？」

「ん？ いや、なんとなく、今の内に自己紹介しないといけない気がする」

「???」

「まあ、気にするな。それよりお父さんの病室はこっちでいいのか？」

そう、今日はなのはのお父さんのお見舞いにやって来た。

「えっ、う、うん。このまま真っ直ぐ」

突然、なのはの顔に陰がさす。

それはブランコに一人で乗っていた出会った日のなのはだった。

「はぁ、なんて顔してんだよ」

俺は暗い顔のなのはの鼻にデコピンをした。

：デコじゃないけど。

「にゃ、い、痛いよ！ 奏真君！」

鼻を赤くして涙目なのは。

「痛くしてんだから、痛いのは当たり前だ。それより早く行くぞ」

「あっ、待ってよ」

こうして、俺達は病室へと向かった。

~~~~~

病室に着いた。

ガラガラ、とドアを開けると、見えるのは真っ白な部屋に一つのベッドだった。

人工呼吸器の音だけがする室内。

その音が、生きているという証に思えた。

なのはも廊下では少し元気を取り戻していたが、病室に入るとまた暗くなった。

当たり前だ…

こんなの見て、明るくなれるわけがない。

元気に笑ってるわけでもなく、こちらに何か反応するわけでもない。
父親のこんな姿を目の当たりにして、どうして明るく振る舞える？

そんなコト出来るわけじゃないか！

顔を伏して、泣きそうなのはとベッドに横になっているなのはの
お父さんを見て、なんか無性に腹が立ってきた。

この人が悪いわけじゃない。

そんなのは分かってる。

誰が悪いってわけでもない。

それも分かってる。

分かってるさ！

それでもっ！

「ーやってんだよ」

「えっ？」

なのはが俺の声に反応したようだが、そんなのは知らない。

「何やってんだよ！ あんたは!!」

気がつくのと、大声で怒鳴ってた。

「あんたはなのはの父親だろ！ 家族の大黒柱だろ！ 守らなきゃいけないじゃねえのかよ！！」
歯止めが効かない。

どンドン声が大きくなっていく。

「そ、そうま君」

もうなのはは完全に泣いていた。

「そのあんたが何、なのはを泣かせてんだよ！ もういい加減にしろよ！」

あんたが起きないせいで、なのはが苦しんでんだぞ！
こんなに泣いてんだぞ！

「こんな所で寝てないでっ、さっさと起きやがれー！！」

腹から出た俺の最大の声。

騒音を聞いて駆け付けて来た看護師たちは、意識不明の人に怒鳴ってる幼稚園生を見て混乱していた。

そして、

「そ、れは、すまな、いことをした、な」

奇跡が起きた。

「お、お父さん？」

「な、のは、ゴメンな、し、んぱいかけて。とうさ、ん、すぐに、よくなる、から」

「お父さん、お父さーん！ ふええええ、う、くう、うえーん。」

なのはが大声で泣いている。
沢山の涙を流している。

もしかしたら、未だに家でこっそり泣いていたのかもしれない。

でも、それも今日で終わりだ。

明日からきっと笑顔で毎日を過ごしていけるはずだから。

~~~~~

あの後は大変だった。

看護師が大慌てで医者呼びに行き、すぐに検査。

なのはの家族も全員飛んで来て、みんなで泣きながら、喜んできた。

そんな中、俺はというと、

「いいですか！　今回は偶々、目が覚めるきっかけとなりましたが、病室では静かにするのが当然です！　だいたい――」  
婦長さんからお叱りを受けてます。

まー確かに病室で大声出すのはマナー違反っていうのは分かるから、お叱りはしっかり受けるつもりなだけけど…

いや、でも、ほら、何というか、ねえ。

「まったく、最近の看護師と来たら、すぐに――」

だんだんと愚痴になってませんか？ 婦長さーん！ お願い、戻って来てー！

それから一時間お話は続きましたとさ。

~~~~~

やっと婦長から解放された俺が、病室に戻ると、なのはの家族にお礼を言われた。

「貴方が奏真君ね。いつも、なのはと遊んでくれてありがとう」
凄く綺麗で優しそうな人がお母さんの桃子さん。

「へえ、君が噂のガキ大将か」
なんか失礼なことを言ってる三つ編みでメガネをかけてる美少女がお姉さんの美由希さん。

「うん。君が、奏真君か」
俺を見ながら、何やら頷いているイケメンがお兄さんの恭也さん。
っていうか何か目が怖いんですけど…

「そう、この子が私の友達の奏真君なの！」
何やら、自慢げに胸を張っていらっしゃるのが、我らがなのは様。

「えっと、山城 奏真です。いつもなのはちゃんとは楽しく遊ばさ

せて貰ってます」

一応、俺もあいさつ。

なんか丁寧に言い過ぎて、間違ってるような気がして来た。

ま、いっか。

「あら、しっかりしているわね。今度、ウチの店にも遊びに来てちようだいね」

「あ、はい。今度、行かせて貰います」

「それと、今日は本当にありがとう。貴方のお陰で土郎さんの目が覚めたわ」

そう言っつて桃子さんは頭を下げた。

「いや、俺は何もしてないですから。ただ、自分が思ったことを大声で言っただけですし、周りに迷惑かけましたし」

「それでもよ。土郎さんが言っつたわ。貴方の声が聞こえたつて、強い想いが届いたつて」

「俺からも礼を言う。ありがとう」

「本当にありがとね！ 奏真くん」

「いえ、そんな」

実際にたいした事してないしな：

ただ、怒鳴っただけ。

正直、感謝されるようなことはしてない。

それなのに：

「うんうん。奏真君のおかげなの！ 奏真君は凄いの！ お父さんを言葉だけで治したの！」

なんでこんなキラキラした目で俺を見るかな。

まあ、みんな嬉しそうだし。
どうでもいいか！

~~~~~

「ただいまー」

「あっ、おかえり！ 遅かったわね」  
家に帰ると母さんが帰って来ていた。

「うん。友達と一緒にお見舞いに行ってきた」

「ふーん、そっか。あっ、母さん、また出掛けるからお留守番よろしくね！」

「：うん。分かった」

「お弁当買って来てるから、温めて食べてね！ それじゃ、行って来ます」

そう言って、母さんは私服で出掛けて行った。

「…ハンバーグ弁当。昨日食べたんだけどな」

そのよん！（前書き）

まだまだ続くぜ！



そのよん！

あれから、季節は変わって春になった。

春は出会いと別れの季節。

今年はどんな出会いがあるのかな？

とまあ、柄にもないことを考えてた今日この頃。

あっ、あと五歳になりました！

テッテッテー

遂に！ 遂に我が幼稚園にあいつがやって来た！

「なのは襲来！！」

「にゃ！ 人をどこかの世界の人類の敵みたいに言わないでなの！」

そう、もう分かると思うけど…

なのはがウチの幼稚園にやって来た。

年中組からの途中参戦を平気でやるなのは様の男っぷりには敬意を評します。

…まあ、友達もいるから入りたかったんだろうけどね。

そうそう、公園で遊んでるメンバーって日に日によって違うし。実

は年も同じではないんだよね…

上は俺の一個上、下は二個下までとなっておりまーす！

まー、そんなんで、なのはもこの幼稚園に友達がたくさんいるわけですよ。

そりゃあ、来ますよね。

で、今さっき、進級入園式があったんだけど…

高町家、目立ちすぎ…

士郎さんは写真取りまくってるわ。

桃子さんは泣いてるわ。

カオスだね！

あと、恭也さん、美由希さん？

あんたら学校はどうしたの？

サボり、サボりなのかー！！

それにしても士郎さん。

まだ、半年も経ってないよね！？

なんでそんなに元気なのさ。

…高町家は海鳴の七不思議だよ。

~~~~~

あれから毎日、幼稚園の自由時間や夕方に公園とかで遊んだ。

そんなこんなをしている内に6月になった。

明日は遠足です！

？山です！山彦してきます！

って言っても、途中までバスでいってから最後にちよつと歩くって感じだけど…

まあ、楽しみです。

でも、その前に…

「…母さん、明日なんだけど」

「ん？ 明日は何かあるの？」

「えっと、明日は遠足なんだ。だから給食が出ないんだけど…」

「あっ、そうなの？ まったく面倒ね、わかったわ。お金あげるから朝、お昼買って行きなさい」

そう言って、千円札を渡して来る。

「うん。ありがとう」

…分かってたさ。

期待なんて、とうの昔からはしてない。
してなんか、ない…

~~~~~

天気は快晴!!

まさに遠足日和です!

しかし、バラバラの学年で、ランダムに班を作ったはずなのに、何故になのはと一緒なのですかね?

まあ、別に楽だからいいけど…。

「あっ、奏真君! あそこにテントウムシがいるの!」  
なのはが指差すところを見ると、葉っぱにテントウムシが着いていた。

「ん? おっ、ホントだな」

「赤色に黒の水玉でかわいいの」

「ほら、なのは」

指にテントウムシを乗せて、なのはの掌に渡してやる。

「うわゝ、とっても小さいの」

「確かに小さいな。でも、知ってるか? なのは」

「ふえ？ 何を？」

首を傾げながら、なのはは不思議そうな目をこちらに向けてくる。

「実は、テントウムシは肉食なんだ…。五秒以内に手から離さないと手の肉を食い千切られてしまうんだ」

「え？ に、にゃああああー！ もう五秒過ぎてるの！ 取って、奏真君！ 早く取ってなの！」

一瞬の沈黙の後、言葉の意味を理解したなのはは、掌をこちらに出してくる。

「もう、俺にはどうすることも…」

「そんなあ、奏真君！ 見捨てないでなの！」

「なら、なのはを救うとっておきの呪文を教えよう！」

「にゃっ！ 早く教えてなの！」

「そうぶんぜを逆から読むんだ」

「えっと、ぜ・ん・ぶ・う・そ、ぜんぶうそ！ ……あっ」

騙されたと気付いたなのはの顔がだんだんと赤くなってゆく。

「ふっ、認めたくないものだな。若さ故の過ちというものは…」

「奏真君っ！ またなのはに嘘ついたの！」

そう言って、なのはが頭をポカポカと叩いてくる。

「昔の偉い人は言いました。騙される方が悪い」

「えっと、なら嘘つきはどろぼうなの！」

…いや、嘘つきは泥棒の始まり、な。

~~~~~

その後も、遠足は続いてゆく。

途中で、なのはをからかって追いかけっこしたり、班のみんなとしたりとりをしたり、歌を歌ったりと楽しく山道を歩いて行った。

そんなこんなをしていると、あっという間に目的地の頂上に到着した。

一旦、集合して、各班で点呼を取るとすぐにお昼ごはんとなった。

みんな、色とりどりのお弁当を取り出して、笑顔で食べている。

なんとなく、その光景を見ていたくなくて、一番見晴らしのいい所に移動した。

「うん。いい景色を見れば、食べるものも美味しくなるってものだ」
そう言って、朝にコンビニで買ってきた弁当を食べる。

「まあまあかな…。さてと、自由時間は何をしようかな」
そんなことを考えていると、

「奏真君！　こんな所にいたの」
なのはがやって来た。

「…どうしたんだ？　なのは？」

「一緒にお弁当食べようって言ってたの！」

「あゝそっか、悪い悪い。つい、景色が綺麗だったから忘れてた」

「もう！　今度からちゃんと声かけてね？」
なのはは、プンスカと怒りながらも、俺の隣に座り、お弁当を開いた。

「あれ？　奏真君のお弁当、お店なの？」

「…あー、うん。母さん、忙しいから俺がイイって言ったんだ」

「そうなんだ。お母さん、お仕事大変そうなの？」

「…みたいだな。毎日、遅いし。これ、もうらい！」
隙についてなのはの弁当から、から揚げを奪取！

「あっ！ から揚げが」

「はむ。ん。これ、うまつ！ 桃子さんって、料理上手いんだな」

「そうだよ。お母さんは料理がとても上手なの！」
えっへんと、なのはは自慢げにそう言った。

「そう言えば、なのはは何か作れるのか？」

「にゃ！？ わ、わたしだって作れるもん！ 目玉焼きとか」

「ブー、目玉焼きは焼くだけなので料理にはカウントしません。別のものを要求します」

「べ、別の…えっと、あ、あとはお茶漬けくらいなら」

「ブー、それもお湯をかけるだけなので却下します。結論、なのはは料理が出来ません」

「むー、なら奏真君は何か作れるの？」

ほっぺたを膨らまして、そう言って来るなのは。

「出来ん！」

「ふえ？ そうなの？」

「ああ、全く出来ん」

「意外なの。奏真君、何でもできるイメージがあったから」

「俺は完璧超人じゃ、無いぞ。何回か作ったんだけど…とにかく不味いんだ」

硬くて噛めなかったり、

味がなかったり、

真っ黒になったりとまともなのは無かった…

「うーん、そうなんだ。あっ！　なら今度、一緒にお料理を習うの！」

「桃子さんに？」

「うん！　お母さんなら教えてくれるの！」

「うん、それもいいかな。なら、料理作るか！」

確かに、桃子さんに習えば上手くなれるかもしれない。

「決まりなの！　絶対に奏真君より美味しいの作ってみせるの！」

「ふん。俺がなのはに負けるわけないだろ」

そんな風に話ながら、昼飯を食べ終え、自由時間に！

広場には大きなアスレチック遊戯があったので、それを使って陣取りをしたり、

ボールを持って来たので、みんなでサッカーをしたりした。

いつもと、違う場所はとても新鮮で、凄く楽しかった。

~~~~~

帰るまでが遠足です。

そんな言葉もあるように、家に着けば遠足は終わるわけです。

「ただいま」

家に入ると、玄関に見たことのない靴があった。

「誰か来てるのかな？」

そう思いながら、リビングへと向かう。

「あ、やっと帰って来た。奏真ー！遅いわよ」

「：ただいま、母さん。今日は遠足だったから、いつもより遅くなっただよ」

リビングに入ると、母さんと見知らぬ男の人がいた。

「あー、そうだったわね。まっ、いいわ。それよりも今日は奏真に紹介したい人がいるの」

「紹介したい人？」

そう言って、男の方を見る。

「そ。母さんね、この人と再婚するの」

「え…？」

？

そのご!

「それでね。今日からこの人、正さんっていうんだけど…ここで暮らすから」

「えっ、えっ?」

頭が凄く混乱している。

今日からこの人が家に住む?

「とにかく、仲良くしなさい! イイわね!」

有無を言わせないといった感じで母さんは俺に言って来た。

「…うん、わかった」

~~~~~

…痛い。

今日もまた、蹴られた。

身体中が痣だらけだ。

これ、いつまで続くんだろ…

始まったのは、アイツが家に来て何日か経った後。

最初からあまり友好的とは言えなかったが、それまでは特に何もなかった。

ある日、家に帰るとアイツは俺の部屋に居た。

何故？ と不思議に思っていると、視界にあるものが入ってきた。

それは細かくなった紙切れだった。

まるでハサミで切り刻まれたかのようにこなごなになった紙切れ。

それがアイツの手元からひらひらと、宙を舞っていた。

そして、俺にはそのひらひらと、舞っている紙切れに見覚えがあった。

当たり前だ。

なぜなら、それは時間がある時に何度も眺めた大切な：

綺麗に写真立てに飾っていた家族写真。

左に父さんがいて、右に母さん。その間にまだ小さい自分がいる。たった一枚しかない、思い出の写真だ。

俺が一番幸せだった時の、そんな毎日がずっと続いていた頃
の：

そんな大切なものを忘れるわけがない。

今朝だって、いつも通りに机の上にあったはずなのだ。

ならば、どうして――

――ナンデ、アノシヤシガコナゴナニナツテイルノ？

答えはたった一つしかなかった。

写真は勝手にこなごなにはならない。

だとすれば、その原因はたった一つしかなかった。

「あ、あ、あああああああああああああつ!!」

もう二度と手に入らない大切なものを一瞬で失った悲しみは、一瞬で俺の心を支配した。

こなごなになった写真を必死で拾い集める。

それを見て、アイツは嗤う。

心底、愉快といった感じで嗤い続ける。

俺はキツ、とアイツを睨んだ。

「…なんだ。その反抗的な目は…」

「……………」

「ほんと、ムカつくガキだな！」

「…アンタもな」

「チッ、仕方ない、反抗的なガキにはお仕置きしないとな」
そう言うときアイツは俺に暴力を振るった。

悔しかった。

俺の大事なものを壊れたアイツに殴られ続けるのはいやだった。
だから、最初は必死に抵抗した。

けれど、体格差が全然違う。

大人に体力がある方とはいえ、五歳児が敵うはずもなかった。

それからは、コトあるごとにアイツは教育として暴力を振るって来た。
た。

何度か母さんに助けを求めたけど、母さんは見ていないふりをした。

…仕方ないさ。

母さんは女の人だから、アイツには勝てないし。

俺は抵抗を辞めた。

抵抗しないほうが早く終わることが分かったからだ。

そして、今もまた、殴られている。

早く、終わってくれ：

~~~~~

今日は前に約束していた料理を習う日だ。

毎日、一緒に遊んでいるけれど、あんまりなのは家に行ったことはない。

基本的に外であそんでいるからなあ

「桃子さん！ 今日よろしくお願いします！」

「はい。今日は頑張って美味しいの作りましょうね」  
ニコニコと、笑顔で桃子さんはそう言った。

という訳で、三角巾とエプロンを見に付けて、いざ！レッツ、クツキング！！



「まずわ、下ごしらえからね」

少年、少女、下ごしらえ中

「にゃゝ、め、目が痛いのゝ」

「くっ、クソ！ このっ、玉ねぎのくせに」

玉ねぎの攻撃に二人してダメージを受けたり、

「ふっ、にんじんめ、中々やりおるわ」

「奏真君！ にんじんの大きさがバラバラなの！」

「なんで、先っちょは細いんだよ」

にんじんの形に文句をいったり、

「「せゝの！」」

「なのはのほうが大きいの！」

「バカ！ よく見てみろ！ 俺のほうが気持ち、大きいぞ！」

皮を剥いたジャガイモの大きさを勝負をしたりと、下ごしらえを着々と進めていった。

桃子さんは基本的にやることを教えて、始めにやり方を見せるだけで、後は全部自分たちでやった。

「いざ、調理へ」

お肉はきちんと焼くのがポイントらしいです。

まず、塩、黒こしょうを振り、小麦粉をまぶします。  
次に鍋にバターを溶かして、全体を焼きます。  
そして一回、鍋から肉を取り出します。

「うーん。もうすでに食べても美味そうなのだが…」

「にゃ！ 奏真君！ まだ食べちゃダメなの！」

牛肉を炒めた鍋にサラダ油を足して、始めにんにくと玉ねぎ（みじん切りペア）を飴色になるまで炒めます。  
ここもポイントらしいので要チェックです。

「ふえー、色が変わってきたの！」

「すげー、本当だ！」

食材が調理すると変わっていく度に反応する俺となのは。

桃子さんはそれを後ろから嬉しいそうに眺めていた。

次はその他の野菜を鍋に入れます。

炒め合わせれたら、赤ワインを加えるらしいです。  
この時に、デグラッセ？ という小技を使うとより美味しくなる  
とのこと。

残った赤ワインを興味深く見ていると、少し、舐めてみる？ と桃  
子さんに言われた。

なのはと二人して頷くと、みんなには内緒ね、と言って、少しグ  
ラスに入れてくれた。

味の感想は…

「うえ、し、渋いの」

「むう、これの何がおいしいんだ？」

まだまだ俺らには大人の味はわからないようです…

いよいよ、残すところ調理は煮込みだけとなります！  
まずフォンドヴォー（ブイヨンで代用）を加えます。  
ブーケガルニを加えて、煮立った所で弱火にします。

40分くらい（あくを取りながら）煮込んだら、お肉の登場です！

10分くらい煮込んで濾します。これはしなくてもいいのですが、  
した方が美味しいとのことですよ。

濾したら、元に戻して、

デミグラスソースを加えてまた10分ほど煮込みます。

「うわー、いい匂いなの！」

「なのは！ もうすぐ俺たちの大作が完成するぞ！」  
完成を間近に俺たちのテンションは最高潮に！

あとは仕上げのみ。

塩、黒こしょうで味を調えれば完成だ！

~~~~~

「「「「ごちそうさまでした」「」」」」

「「お粗末さまでした」」

結構調理に時間がかかったので、高町家で夕食を食べることになった。

俺たちのビーフシチューも食卓に並んだ。

ビーフシチューはかなり美味しくできた。

みんなにも好評で、作った鍋が空になったのを見て、なのはと二人でやったな、と喜びあった。

…ただ美由希さんだけは、

「：負けた。幼稚園生に負けた」
と、かなり落ち込んでいた。

そんなこともあり、高町家での夕食は終わった。

誰かが話せば、みんなで聞き、
みんなで笑う。

温かな家族の団欒。

久しぶりに心があったかくなるのを感じて、俺は自然と笑顔になっていた。

~~~~~

良かった。

奏真君、笑ってるの。

わたしは笑顔な奏真君を見て、そう思った。

：最近の奏真君は、少し元気がないの。

あれは遠足にいった後、少し経ってからかな。

その頃からなんか無理している、感じがするの。

遊んでいる時も、いつもと変わらないように見えるけど…どこか違うくて。

浮かべる笑顔はなんだか悲しい笑顔なの。

：あんな奏真君は見たくないの。

――二人だと辛いこととか悲しいこととかも半分になるんだ。  
だから、友達は大切なんだって――

奏真君はあの時、わたしにそう言った。

本当に辛くて、悲しいとき、側にいてくれた。  
下を向いていたわたしの手を引いてくれた。  
わたしの大切な初めてのの、お友達。

だから、今度はわたしが奏真君の助けになりたい！

だから教えて、奏真君。  
何があったのかを。

そのろく！

「…奏真君」

「ん？ どうしたんだ、なのは？」  
士郎さん達と談笑しているとなのはが声をかけてきた。

「奏真君となのはお友達、だよね」

「は？ 何いってんだお前？ そんなの当たり前だろ？」  
なのはのいきなりな発言にびっくりしたが、すぐに返事を返す。

「奏真君、言ってたよね？ 二人だと辛いこととか悲しいこととかも半分になるって。だから、友達は大切なんだって」

「ああ、初めてなのはと会った時にいったな」

「…本当にそう思ってる？」

「あ、ああ、思ってるけど…」  
一体なのはは何が言いたいんだ？

「なら、どうして？」  
なのはは顔を暗くして、そう問いかける。

「なのは？ 何のことを言ってるー」

「なんで、最近、悲しそうな顔をしているの？」

一瞬、呼吸が止まった。

顔に出てたのか…

いや、外では笑顔でいたはずだ。

「…な、何いってんだよ。いつもと変わらないだろ？」

「嘘なの！ 奏真君、最近、変なの！」

「別に変じゃない！ 変わったことなんで何もない！ 大体なんでものはにそんなことがわかるんだよ！？」

「分かるよ！ だって友達だもん！ いつも見てるもん！ なのは、奏真君のことなら何でも分かるもん！」

「だから！ 別に何もーーー」

ない、と言おうとしたら、

「奏真君、少しいいかい？」

士郎さんが話に入ってきた。

~~~~~

「…士郎さんまでなんですか」

いつもより、低い声で奏真君が聞いて来る。

「いや、二人とも熱くなっていたからね。少し落ち着こうか」

正直、なのはがあそこまで言うとは思わなかった。
友達だから分かる、か：

その内、それ以上の感情を持つんだろうな。

娘の成長を嬉しく感じるも、少し寂しくもなった。

しかし、今は奏真君のことだ。

「…そうですね。確かに少し冷静じゃなかったかもしれませんが
そう言くと、奏真君は少し落ち着いた。」

前から思っていたが、この子は精神的に大人だ。
遊んでいるときは年相応だが、こういう時は本当に五歳かと、思っ
てしまう。

「さて、話を戻すか。親バカと思うかもしれないが、なのはがいき
なりこんな事を言い出すのは普通じゃないことだと思うんだ。良か
ったら何かあったのか教えてくれないかい？」

再度、問うてみるが、

「…別に、これといって変わったことはありません」
すぐに否定される。

「嘘なの！」

「嘘じゃない！」

「ほら、二人とも。また熱くなってるわよ」

また、熱くなってきた二人を桃子が落ち着ける

「うっ…」

二人ともバツの悪そうな顔になる。

…まったく、息もピッタリだな。

「なら、質問を変えよう。少し気になっていたんだが…ケガか何かしているのかい？ どこか庇っているように感じたんだけど…」

攻め手を変えて、先ほどから気になっていたことを聞いてみる。

「っ！ ど、どこも庇ってなんていませんよ」

ビンゴ、か。

見えるところにケガはない。
となると後は…

ガシッと、服に手をかける。

「えっ、ちょっと、待って！」

奏真君がそう言うってくる。

しかし、悪いが待つ気はない。

一気に服をめくると、そこには…

「ひ、ひどいの…」

「誰がこんなことを！」

奏真君の身体は痣だらけだった。

桃子は泣きそうになりながら、奏真君を抱きしめた。
なのはにいたってはもう泣き出している。

「…これでも、まだ何もないっていうのかな？」

「これは、遊んでいてこけちゃった時に…」
苦しい言い訳と思ったのか、声がだんだんと小さくなっていく。

「これはこけて出来る痣じゃない。誰がやったんだ？」

「……………」

恭也が聞くが奏真君は答えない。

「答えたくない、か」

「…すみません」

謝るくらいなら、全部話して欲しいんだが…

「なら、仕方がない。君の親御さんに聞いてみるしかないな」
そう言って立ち上がり玄関へと向かう。

「っ！ 待ってください！ それだけはっ！ それだけはっ、辞めてください！」

すると、奏真君は慌てて俺の足を掴んで、行かせないようにしてくる。

「何を言っている！ 子供にそんなケガを負わせる奴を庇う気なのか！」

恭也がそう怒鳴るが：

「…俺が、少しだけ我慢すれば、済む話なんです。だから、お願いします！」

奏真君は頭を下げるだけだった。

「…そこまでの理由が何かあるのかい？」

一応、ここまでする理由を聞いてみる。

正直、これを行った人間を許す気はない。

「…母さんは、父さんが死んでから、女手一つで俺を、育ててくれました。いつも忙しそうで、もっと構って欲しいとか思っても、俺のために頑張ってる母さんにそんなことは言えませんでした」

そう言えば、この子の家はシングルマザーだったな…

「その頑張ってる母さんがやっと掴んだ幸せだから。だから、俺が母さんの幸せを壊したくはないんです！」

そう言って、真剣な目をこっちに向けてくる。

話はなんとなくわかった。

犯人は母親が連れてきた男ということか。

しかし、壊したくない、か。

一度、目をつむり、了承する。

「…そうか、わかった」

「「「（お）父さん！」」」

「あなた…！」

家族の非難の視線が飛んでくる。

「…ただし、これ以上ひどいことをされたら絶対に言うんだ。いいね？」

それらを無視して奏真にそう告げる。

「分かりました。ありがとう、ございます」
そう言ってから奏真君は家に帰っていった。

~~~~~

「父さん！なんで、家に返したんだ！」

「そうだよ！ あんなにケガさせるような家だよ！」

「…そんなことはわかってる！」

俺は思わず、ギリっと歯を噛み締めた。

「…じゃあなんで！ このまま見て見ぬ振りをするっていうの！」

「そんなことは、言っていない！ もし、あの子が助けを求めてきたのなら全力で守ってやるさ！ だが、今は…」

「…あの子の意思を尊重したい？」

「ああ、今回だけだ。次にまた傷が増えていたら、その時は何かなんでも助ける！」

俺がこの決断を心底後悔することになるのは、2日後のことだった。

そのなな！

「ハアハア、ハアハア」

わたしは車から降りて、全力で走る。  
彼が眠っている病室へと急ぐ。  
早く、早く、もっとはやく動いてよ。

こんな時、自分の運動神経の無さが恨めしい。  
毎日、外で遊ぶようになってからは大分マシになったとはいえ、それでもまだ脚は遅い方だ。

ナースステーションで部屋を聞いて、また駆け出す。

何度か注意を受けながらも、わき目も降らずに走り抜ける。  
そして、着いた。

『山城 奏真』

ここだ。

はやる気持ちを抑えて扉を開ける。

扉の奥にはきつと元気な奏真君の姿が…

P i . P i . P i

わたしを迎えたのは奏真君の声ではなく、奏真君に繋がれた機械の音だった。

2日ぶりに見た奏真君はボロボロだった。

身体は至る所に包帯を巻き、右足は折れているのか、固定されている。

頭にも包帯を巻きつけ、右目も隠れている。

口には人工呼吸器を付け、苦しそうな音にする。

ひどい。

ひどい。

ひどすぎるよお。

なんでこんなことができるの？

なんで、奏真君がこんな目に合うの？

「奏真君…うつ、ひぐっ」



わたしは、奏真君の手を握りながら泣き出した。

~~~~~

奏真君の病室に入ると、なのはが手を握りながら泣いていた。

奏真君の意識はまだ戻らない。

医師の話によると、二度も心肺停止したそうだ。

今は落ち着いているが…今後どうなるかは、分からないそうだ。

事件のあらましはこうだ。

昨日の夜、最近、山城家に住んでいた男は、奏真君の母親を殺害。
奏真君も半殺しの状態にして、逃走。現在もまだ捕まっていない。

男は薬物・窃盗の常習犯だったらしい。

ちなみに、奏真君の母親からも薬物反応が出たことから、日常的に
使用していたこともわかった。

また発見時、奏真君を守るように、母親が死んでいたことから、男
から奏真君を庇ったと思われる。

ちなみに第一発見者は、幼稚園の先生らしい。

連絡もなく、奏真君が休んだのを不思議に思い、家に行ったら血だらけの奏真君がいたということだった。

思わず、壁を殴る。

手から血が出たが…そんなことはどうでもいい。

なんであの時、無理やりにも引き止めなかったのか。

なんである時、家に乗り込んでも暴行を辞めさせなかったのか。そんなI Fばかりが頭に浮かぶ。

「士郎さん…」

隣の桃子が心配そうな顔を向けてくる。

「…大丈夫だよ。自分の馬鹿さ加減に腹が立ったただけだから」

俺はどこかで、樂觀視してたのかもしれない。

奏真君がいい子だから、あんな事をされ続けたら、母親だってそんな男とは別れるだろうなんて考えてたのかもしれない。

確かに、母親は奏真君を庇った。

やっぱり奏真君が大事だったのだろう。

けど、こんな結果はあんまりじゃないか！

あまりにも奏真君が報われない。

とにかく、今やることはひとつ。

「…桃子、なのはと奏真君の側に着いていてくれ」

「わかったわ。…行くの？」

「ああ、行ってくる」

そう言い残して、病室を出る。

そこには、二人の弟子がいた。

「父さん！ 俺たちも行く！」

「奏真君をあんな目に合わせた奴を生かしては置けないよ」
二人とも戦士の眼になっていた。

「よし、わかった。行くぞ！！」

~~~~~

「っう、ん」

目を開けると、光が眩しくて、直ぐに目を瞑った。

もう一度、今度はゆっくりと開けるとだんだんと景色が見えてくる。

知らない場所だった。  
見たことのない天井。  
見たことのない部屋。  
見たことのないものだらけだ。

…どうやら、ここは病室みたいだ。  
起き上がろうとしたが、うまく力が入らず、できない。  
あれ？　なんで？  
そんなことを考えていると、部屋のドアが開いた。

「そ、奏真君？」

「ん？　おう、なのはか、　おはよう！」  
何時かはわからないけど、今起きたからいいだろ。

なのははコチラを目を丸くして見ている。

あっ、なんかおもしろい。

「どうしたんだ？　変な顔して。すげえ、おもしろいぞ、それ」  
そう言うと、なのはがプルプルと震え出した。

…まさか、怒らせた？？  
ヤバイな。今、逃げれないんだが…

「奏真君ー！」

「ごめん。謝るから許して！」

なのはは飛びかかって来ると、俺にしがみつき、泣き出した。

「奏真君、奏真君、奏真君、  
奏真くーん」

「あれ？　なんで泣いていらっしやるのでせうか？」

「奏真君が早く起きないからだだよ」

「…んー。よくわかんないけど、心配かけて悪かったな。もう大丈夫だから」

そう言っ、しがみついて来るなのはの頭を撫でた。

「…うん」

この後、すぐに桃子さんもやって来て、一瞬驚きの顔をした後にまた抱きしめられた。

~~~~~

「はあ？　俺は三ヶ月も眠ってたんですか？」

なんとか落ち着いた桃子さんに、驚愕の事実を聞く。

あつ、なのはは未だにしがみついています。

「そうよ。なのはなんて毎日、お見舞いに来てたんだから」
そう言っ、にやにやと笑う桃子さん。

「へえー、なのはがねえ。お前、そんなに暇だったのか？」

くつついているなのはにそう言っ、ギュツと脇腹をつねられた。

「いったあ、痛い。痛いですよ、なのはさん。」

「…奏真君のばか」

その後、しばらくなのはさんの機嫌は良くなりませんでした。

~~~~~

「記憶障害!？」

奏真君の検査が終わった後、医師に呼ばれた。  
そこで言われたのは驚きの事実だった。

「で、でも私たちのことも覚えてましたよ」

「ええ、どうやら事件の日のことだけを覚えていないようです。おそらくは母親が目の前で殺されたことが原因で一時的に、記憶に障害が出ているんだと思います」

「じゃあ、まだ奏真君は…」

「はい。母親が死んだ事を知りません。ですが、私個人としては、事故で亡くなったことにした方がいいと思います。無理に思い出させることはない」

「そう、ですね。知らない方がいいこともあります。今は事実を話さない方がいいのかもしれませんが」

これ以上、彼を傷つける必要はない。  
真実は彼が大きくなってから話せばいい。

士郎さんと相談してみよう。

~~~~~

「母さんが死んだ？」

「そう、交通事故だね。奏真君を庇ったんだ」

検査の後、士郎さんにそう教えられた。
なのはは席を外している。

母さんが死んだ…
三ヶ月も前に。
俺を庇ってーーーー

「…ごめんなさい」

誰に謝っているのか、わからないが、自然とその言葉が出た。

「奏真君。…君は生き残ったことを後悔しているのかい？」

士郎さんが真剣に問いかけて来る。

だから、俺も正直な思いを話す。

「…そうですよ。だって、そうでしょう！ 俺は最後の最後まで、母さんに迷惑をかけることしか出来なかったんだ！！ ？何でだよ！
なんで俺が…母さんじゃなくて俺が死ねば良かったー！！」

「ふざけるな！ 死ねば良かった？ それは命をかけて守ってくれた人に対する冒涇だ！」

「けど、俺は母さんに何も返せなかった。…アイツが言ってたんだ。俺は母さんの重荷だって、ホントは母さん、俺が嫌いなんだって」

「そんなことあるはずがないだろ！ 嫌いな奴をどうして命を張って守る？ 自分で産んだ子供を嫌う母親なんていやしないさ」

「…そうよ。お腹を痛めて産んだ大切な子供ですもの。嫌いなはずはないわ」

「うつ、母さん、母さーん！」

俺は泣いた。

今まで一番泣いた。

しばらく泣き続けた。

~~~~~

「あ、ありがとうございます。桃子さん」

泣いている時に胸を貸してくるた桃子さんにお礼を言う。

「いいのよ、もう大丈夫？」

「はい。母さんに助けられたこの命。大切にいきます」

泣くだけ泣いたら、スッキリした。

なんか新しい自分になった感じた。

「あつ、すいません。服汚しちゃって…」

桃子さんの服は、涙とか色んなもので汚れていた。

「別に構わないわ。息子のためなもの！」

そっか、良かった。って！

「む、息子？」

「そうだよ。今日から君は家の子だ！ 俺のことはお父さんと呼ぶように！」

「私のこともお母さんと呼ぶように！」

「え、えええええー！ うそー！」

こうして、俺は高町家の子どもになった。

そのはち！（前書き）

新キャラ登場です。

そのはち！

俺が高町家の子どもになって一年半がたった。

あれからリハビリが大変だった。

三ヶ月も寝ているから筋力が落ちてる落ちてる。

結構、辛いリハビリも家族みんなの助けを借りてなんとか終わらせた。

気がついたら、年が明け

て、あつという間に卒園式になった。

前に出て父さんがカメラ回したり、母さんが泣いたり、とまた目立ってた。

あと、兄さんも姉さんも学校はー？

これからは学校が違う友達もいるので少し悲しくなった。

けど、人は次に出会うまで最後の顔を覚えているらしいから…

みんな笑顔でさよならをした。

家に帰ってから、少しだけ泣いたけど…

小学校は私立聖祥大附属小学校というところに行くことになった。

…俺、勉強もできるんだぜ！

すいません、嘘をいいました！！

たまになのはに教えて貰って、なんとか凌いでます！

そんなこんなで、月日は流れ、今日はなのはの入学式なのです！

そう言えば、なのはは俺のことをお兄ちゃんとは呼びません。

なんでも、奏真君の方が愛着があるらしいです。

まあ、苗字は変えなかったので、別にいいんですけど…ね。

一人っ子だったんで、少しだけ言われてみたかったんだけどなあ。

~~~~~

今日からわたしも小学生になったの！

えへへ、奏真君とお揃いの制服〜！

この制服、カワイイから好きなの！

新しい学校。

新しい出会い。

友達がたくさんできるといいな。

入学式はたくさんの人がいて、少し緊張したけど…二年生の席にいた奏真君が小さく手を振ってくれたのを見て、安心できた。

ただ、校長先生のお話は長いの…

あつ、奏真君寝てる。

入学式が終わったら家族みんなで全員集合!!

：ただ、奏真君も言ってたけど、お兄ちゃんとお姉ちゃん、学校は
大丈夫なの？

なのはは、そこはかとなく心配です。

あと、お祝いにお寿司を食べました。

すごく美味しかったけど、奏真君のせいでわさび入りをたべちゃ
ったの。

鼻がつーんとして痛い辛かったのに、奏真君は大爆笑。

お返しに奏真君の好きなウニを全部食べてあげたの!?

むしろくしゃしてやった! 後悔はしていないって奴なの!!

いよいよ、明日からは授業がはじまるの!

授業が解らなくなるないように

わたし、高町なのはは、頑張ります!

~~~~~

来た! 来た! 来た!

ついに来たあゝ!!

これからはおれの時代だ!

おっと、取り乱しちまったぜ! おれとしたことになってこった!

まあいい、おれは神崎 竜也。

俗にいう転生者って奴だ。

だが、残念ながら神様がミスしてどうのこうのって訳じゃない。  
気がついたら、赤子になってた。

はじめは人生のやり直しだ！ やっふゝってなったけど…赤子の自由の効かなさにすぐにテンションは下がった。

だがしかし！ ここが海鳴市と聞けば、テンション再浮上ですよ！  
幼少のころは親戚から神童と呼ばれたりもしたんだぜ。

そして今年、遂に聖祥大附属小学校に入学したわけだ！

目指すぜ！ハーレム！！

さてと、とりあえず、なのは、アリサ、すずかのお友達イベントに参加してっと。

魔法関係を考えるのは、まだ先でいいや。

~~~~~

なのはが入学してから二週間が経った。

もうそろそろ新しい環境にみんな慣れ始めて来たころだ。

そんなわけで、俺は今、一年の教室に向かっている。

「たのも〜!」

ガラガラと扉を開けて、中に入る。

「あっ、奏真君!」

早速、俺に気がついたなのはが近くに寄って来る。

「よしす。元気してるか?」

「うん、元気だよ〜」

うん、元気みたいだ。

まあ、朝は一緒に登校しているんだけどな。

「あー、そーまだ!」

「本当だ! そーま!」

なのはと話していると、何人か見知った顔がやって来た。

「おっ、みんな、久しぶり!」

「久しぶり! そーま! 今日はどうしたの?」

「ん? アレだ! せっかくの昼休み! 飯を食べるだけで終わるのは勿体無くないか、いや勿体無い!!」

「うわー、そーまの反語も久しぶりだ〜」

「つーわけで、遊ぶぜ！ グランドに集合！！」

「「「おー！」」」

声を合わせて、グランドに向かう昔馴染み。

「というわけだ！ みんなもどうだ？ 一緒に遊ばないか？」
先程からのやり取りを興味深げに見ていた奴らに声をかける。

「いいの？ わたし、友達でもなんでもないんだけど…」

「ああ、友達じゃないなら、友達になればいいんだ！ 混ざりたい奴は大歓迎だ！」

「なら、行こうかな」

「うん。わたしも」

「俺も行く！」

ぞくぞくと参加者が増えはじめた時。

「昼休みにグランドで遊ぶなんてバツカじゃないの？」
水を差すようなことをいう奴が現れた。

「…何がバカなんだよ。ああ、先に行っててくれ！」
参加者たちを先に行かせる。

「だから、昼休みに外で遊ぶなんてナンセンスなのよ！ 大体、食後すぐの運動は体にも良くないわ。アンタ、二年生なのにそんなことも知らないの？」

心底バカにしたように金髪娘が言ってくる。

しかし、こんな奴、同級生にもいたな―

こっちの方が何倍も手強そうだけど…

このタイプは負けず嫌いと言場が決まってる！

「…ふーん。負けるのが怖いんだろ？」

「なんですって！？」

「だから、勝負に負けるのが嫌なんだろ！ だから、何かと理由をつけてやらないんだろ？」

「そんな訳ないじゃない！ アンタなんて一捻りよ！」

ビンゴってね！

「へえー、じゃあやって貰おうじゃあねえか。グラランドに行くぞ」

「上等よ！ 覚悟しなさい！！」

そうして、俺は金髪とグラランドに向かった。

「にゃ！ 奏真君に置いて行かれたの！」

あつ、なのは忘れてた…

~~~~~

結局、人数は一、二年合わせて二十人を超えた。

「んじゃ、今日は人数も結構いるし、けいどろをやるぞ!」

「けいさつやりたい人ー?」

5・6人が上がった。

あの金髪もその中にいる。

「んじゃ、残りはどろぼうってことで! 場所はグラウンド内だけ、校舎内はなしな。制限時間はチャイムがなるまでだから、あと30分ってとこだな。牢屋の希望は?」

「あの朝礼台の下にするわ!」

「OK! なら1分後に、スタートだ!!」

こうして俺たち、どろぼうは逃走を開始した。

「奏真君。何か作戦はあるの?」

ボール倉庫の裏に隠れていると、俺について来ていたなのはがそう

聞いて来た。

「いや、今回は歓迎会みたいなもんだし。純粹に足で逃げようかと俺がそういうと、落胆したように下を向く。

「ううう、わたしは足遅いのに…」

「大丈夫だ。もし、なのはが捕まったら、助けに行ってやるから待つてろ」

「…本当？」

なのはは、少し上目遣いでそう聞いて来る。

「ああ、俺は嘘はつくけど、約束は破らないぞ」

「うん、わかったの！　なら待つてるね！」

いや、笑顔で言うのはいいんですがなのはさんや、捕まる気満々ですか？　助けに行くの結構リスク高いんだけど…

~~~~~

その後はけいさつの姿が見えたので、なのはとは別れた。

しかし、奴らは何かすごく動きがいい。

個々の能力というより、うまく統制されてるって感じた。

…これはいいリーダーがいるな。

そんなことを考えていて、周りへの集中が切れた時。

「見つけたわ！」

目の前に突如、金髪が現れた。

「うわー ヤバイ！」

「P4は北にまわって、P2は裏から、P6は私について来なさい！」

どんどん指示を出していく金髪。

どうやら、あいつがリーダーだったようだ。

徐々に俺を包囲していく。

「マジで、やべっ！ スピードアップ！」

囲まれる前に俺はすぐさまスピードをあげ、敵の脇を抜ける。

「待ちなさい！！ くっ、予想以上に速いわね」

「残念だったな。あばよ、とつつあん！」

俺は距離をどんどん離していき、奴らの索敵範囲から離脱した。

「ごめん、見失った！」

「…こっちの予想よりも速かったのだから仕方ないわ。次は捕まえるわよ！」

「了解！」

「じゃあ予定変更よ！
捕まらないわ！」

P6は裏手に行つて。奴は先回りしないと

「わかった！」

そのきゅう！

そのきゅう

残り時間はあと10分。

俺は今、牢屋の近くに来ている。

どうやら、ほとんど奴らに捕まっているようだ。

：もちろん我らがなのはさまも牢屋にいらっします。

はあ、約束したし、助けに行かないとな。

見張りは二人。

おそらく奴らは、P3、P5だ。

：一人は仲間が必要だな。

透と、合流するか。

俺は合流地点へと向かった。

~~~~~

「あと三人か。楽勝かな」

「バカ、油断するなよ。牢破りに来るかもしれないぞ」

見張りたちの話が聞こえる。

三人の中に奏真君がもちろん入っている。

きつと奏真君は約束通り、助けに来てくれる。

だから、わたしはおとなしく待つのだ！

そして時間があと5分になった時。

「P3！ あいつが近くに現れたの！ 時間がないわ、すぐにこっちに来て！」

あの金髪の娘（確か、アリサちゃんだったかな？）の声が聞こえてきたのだ。

わたしは少し、声が低いようにも感じたけど：

（今の奏真くんかな）

（たぶん、そうなの）

どうやら、私だけじゃなかったみたい。

隣の娘と小声で話す。

「よし、応援に行ってくるわ」

「了解！ 後は任せとけ」

そんなやり取りをして、見張りは一人が応援に行った。

見張りはあと一人なの。



すると、幼稚園からの付き合いがある透くんがコッチにやってきたのが見えた。

透くんは見張りをを見ると、慌てて逃げ出した。

「残念でした！ まだ俺がいるぜ！」  
最後の見張りは透くんに向かっていった。

これは絶対に奏真君の作戦なの！  
だって今、完全に牢屋は自由な状態だ。  
この状況を作ったのなら、今がチャンスなはず…  
そう思っている…

「これで、ミッションクリアだな」  
木の影から奏真君がゆっくり出てきて、私たちを解放してくれた。

さすが、奏真君なの！  
わたしたちは、牢屋からの脱出を果たした。

~~~~~

「おい。応援に来たぞ！」

あの奏真とかいう奴を四人がかりで探しているときに、牢屋の見張りを任せといた奴がやってきた。

「はぁ？ 応援なんて呼んでないわよ？」

私は応援なんて呼んでない。

他の三人も、頭を傾げている。

「えっ、でもさっき、すぐ来いって言っただろ？」

「…それ、私じゃないわ。クソっ！ ハメられたわ！ すぐに牢屋に戻るわよ」

…こんなことするのはアイツしかないわ。
だとしたら、牢屋がマズイ！
お願いだから、持ちこたえてよ！

牢屋につくと、そこはもぬけの殻だった。

士気はだだ下がり。

残り時間はあと、3分。

私たちの敗北が決定した。

~~~~~

キーコンカーンコーン

終了を知らせるチャイムが鳴った。

結果は、捕まった数が1

匹になった透だけだった。

よって、われらどろぼうが勝利を収めた！

なんかそれはそれでいけないような気がするけど…

「…私の負けよ」

見てわかるほど、金髪は落ち込んでいた。

「ああ、今回は俺の勝ちだ。だから、次は期待してるぜ、アリサ！」

「えっ？」

きょんとした顔をするアリサ。

「ん、なんだ？ もうやらねえのか？」

「いや、えっと、でも…」

「またやろうぜ！ まあ、次も俺が勝つけどな！」

「…冗談言わないでよ！ このわたしがそう何度もまけるもんですか。また勝負よ、奏真！」

こうして、俺たちの仲間に新しいメンバーが加わった。これからアリサはかなり強敵になるだろう。

また、楽しくなるぞ！

~~~~~

一年と二年が一緒に遊ぶようになって一ヶ月くらいたった。

GWも集まって色々遊んだ。

みんなかなり仲良くなったと思う。

人数も増えて、多い時は三十人くらいになった。

アリサとの勝率は今のところ、

俺が一歩リードといったところだ。

ただ最近、一人、気になる奴がいる。

なのはとアリサのクラスの奴なんだけど…俺たちが遊んでいるのをよく眺めてはいるんだけど、入って来ないんだ。

今更、入りづらいのかもしれないから、今日は誘って見ようと思う。

そんなことを思いながら、歩いていると、声を掛けられた。

「なあ、ちよつといいか？」

~~~~~

何なんだよアイツは！？

おれこと、神崎 竜也は焦っていた。  
なぜなら、おれの知ってる原作には出てこない、人物が現れたからだ。

そいつは、山城 奏真というらしい。  
何故か、既になのはは懐いているし。  
アリサとも仲がいい。

…まだ、すずかとは接触してないが、油断は出来ない。  
後はいつも、昼休みと放課後に人を集めて遊んでいる。

お友達イベントが発生していないせいで、おれは三人と話しさえできていないっていうのに…

これは確かめるしかない！  
アイツの正体はおれがあばいてみせる！

アイツを探していると、ちょうど廊下の前を歩いていた。

とにかく声をかけてみる。

「なあ、ちよつといいか？」

「ん？ 何か用か？」

アイツは笑顔でそう言ってきた。

おれはいきなり本題に入る。

「単刀直入に聞くぞ。お前、転生者か？」

「は？ てんせいしゃ？ 何だそれ？」

むう。

この反応、一応嘘をついているようには見えないが：

「なら、ニコ動とかAmazonとかに聞き覚えはないか？」

「悪いけど：聞いたことないな」

少しも動揺した様子もない。

これも、ダメか。

なら、最後に：

「これが最後だ。魔法少女リリカルなのはって知ってるか？」  
直球勝負だ。

だが、これもダメだった。

「…なあ、お前、頭大丈夫か？」

怪訝そうな、それでいて心配そうな目をしてコイツはおれを見ている。

…そんな目で見てくんじゃねえよ。

「…知らないのなら、いい。邪魔したな」

その視線に耐えられなくて、足早にそこを立ち去った。

結論。

アイツ、ただのオリキャラだった。

くそ、これが世界の修正力か…

おれというイレギュラーの対抗にイレギュラーを投入して来るとは…

いや、まだだ。まだ諦めんよ！

おれはオリ主になって見せる！！

アイツには負けん！

~~~~~

「行っちゃまったな…」

アイツ、なんだったんだろう？

確か、なのはと同じクラスだったはずだけど…

？

てか、何だよ魔法少女リリカルなのはって。

まあ、夢とかアニメかなんかが混ざったんだろうな。

でも、魔法があったなら、一回

空を飛んでみたいな…

絶対に気持ちいいと思うし。

俺は窓から見える青空を少しの間、眺めていた。

~~~~~

もうお決まりになったこの時間。

俺は一年の教室に急ぐ。

今日はあの娘を誘わないといけないからな…

教室に入るといつものようになのはがやってきた。



「あ、奏真君だー！」

「よ！ 他称、魔法少女さん」

「???」

なのはの頭に？が浮かんでいる。

まあ、意味わかんないよな。

俺もわかんないし。

「…アンタは一体、何を言ってるのよ」

俺たちのやり取りを見ていたアリサも近くにやって来る。

…なんでもこのアリサ。

なのはが言うには、けいごろの時に発揮したリーダーシップをクラスでも出して、まとめ役になってるそう。

…人って変わるもんだよな。

なんか前は、少し浮いた感じだったのにさ。

まあ、いいことだしな。

素直に喜ぼう！

「よし、アリサ。特に中身のある話ではないから気にすんな」

「ふーん、ならいいわ。で、今日は何をするのかしら？」

「そうだな。久しぶりにドッチボールでもしよーかなとは思っているぞ」

「ドツチね、わかったわ。なら早く行きましょ」  
そういつてアリサが急かして来るが、俺にはまだ用事がある。

さつきからのやり取りを本を読みながらもチラチラと見ている娘の  
ところに向かう。

「ちょっと、何処いくのよ!？」

「奏真君？」

アリサとなのはの二人も俺について来るようだ。

俺はその娘の前に来ると、

「なあ、一緒にドツチやらないか？」  
と声をかけた。

~~~~~

私は普通の人間じゃない。
夜の一族っていう、吸血鬼なの。
力も強くて、血を吸う化け物。
それが、私。

だから、学校ではあまり人と関わらないように生活をしていた。

クラスで少し浮いてしまったけれど、同じように浮いていた娘がいたから少し安心していた。

…でもその娘は、ある男の子がやって来てから変わった。

クラスでリーダーシップを発揮し出して、あっという間にクラスに溶け込んだ。

最近をよく友達と笑っているのを見る。

それを見て、少しいいなと思った。

そんなことを思ったからか。

気がつけば、私は遊んでいる彼らを眺めるようになった。

いつも楽しそうにグラウンドを走りまわっている。

いいな…

もう五月の半ばに入った頃。

いつものように男の子がやって来た。

高町さんとバンニグスさんと話している。

あの三人は、特に仲がいい様に感じる。

そのまま、外に行くのかと思ったなら男の子がこちらにやってきた。

そして、私に

「なあ、一緒にドッチやらないか？」

そう声をかけて来た。

~~~~~

俺が誘うと、女の子は驚いた顔をした。

「えっ、私？」

「ああ、いつも俺たちが遊んでいるの見てただろ？ 見てるだけじゃ、つまんないし。人数は多いほうがいいからな。一緒やろーぜ」

「…でも、私は」

「ケガか何かしているのか？」

…もし、そうなら悪いこときいたかな。

「ううん。ケガとかはしていないけど…」

「なら、俺たちと遊ぶのが嫌、とか？」

「そんなことないよ。いつも楽しそうだし…」

「よし！　なら参加決定！」

そう言って、女の子の手を引いて席を立たせる。

ケガもないし、嫌でもないなら問題なし。

さあ、グランドへ！

行こうとしたら、

「アンタ、ちょっと待ちなさいよ」

「奏真君！　いきなり女の子の手を握るのはダメなの！  
二人に止められた。」

「まだ、その娘の意思を確認してないでしょうが！　何、いきなり  
連れ出してんよ！」

「そんなの遊んで、楽しければ問題ないだろ？」

「アンタね…」

頭がいたいわ、と続けるアリサ。

「奏真君！　だから、いつまで手を握っている、の！」  
俺がこの娘の手を握っているのが気に食わない、なのは。

俺と二人を見て、オロオロしている女の子。

うん、イイ感じにカオスだ。

「とにかく、時間がないからグランドに行こうぜ！」

とりあえず、三人を連れてグランドに行った。

…なのはは逆の手を握らせたら、怒りが収まった。  
本当、よくわかんないです。

~~~~~

あれから、ドッチボールをみんなでしたんだけど…
すずか（女の子の名前）は最強だった。

取ってよし。

投げてよし。

逃げてよし。

の三本仕立て。

一躍、時の人となりました。

「アンタ、やるじゃない！ 見直したわ」

「すずかちゃん。凄かったの！」

「…そんな、たまたまだよ」

いい感じでなのは達とも仲良くなったみたい。
うん。よかった、よかった。

…ただ、すずかに当てたところが凄く痛いんです。
何本か避けてたら、豪速球が飛んでくるようになりましたよ、俺だ
け。

後から、聞いてみると。

「奏真くんなら大丈夫かなーって思ったんだ」
らしいです。

信頼されてるのかもだけど、思いが痛いんです…

そのじゅう！（前書き）

やっと、原作に入った…

そのじゅう！

すずかとも仲良くなり、あれから一年。遊びまくった。

まあ、勉強は…うん。あれだよ。

聞かないで！！

こうして、俺は三年生に。

なのはたちは二年生になった。

しかし、いいことばかりではなかった。

三年生になると、授業の時間がいっきに増えた。

そうなるとう放課後に一緒に遊ぶのは難しくなった。

また、クラブに入る奴や塾に通い出す奴も現れて、俺達はみんなです遊ぶのを辞めた。

昼休みはたまに遊んだが…それでも回数めつきり減った。

少し、寂しいけど。

これも仕方ないのかなと思った。

悲しいけど…これも現実なのよね、とはアリサの談だ。

そんなわけで、放課後の時間が空いた。

俺は翠屋での仕事を手伝うようになった。

業務は主に皿洗いを担当しています。

ふ。俺のことは、食器洗浄機と呼んでくれたまえ！

あと、翠屋JFCに参加することにもなった。
体は動かしたいしね。

ま！ こっちも頑張ってます。

んな感じで、俺の生活も変わったけど…
相変わらず、なのは、アリサ、すずかの三人とは遊んでいる。

ゲームでボコボコにされまくったり、アリサン家の犬に追われたり、
すずかん家の猫にじゃれつかれたりと楽しくやっている。

大きな出来事はないけど…それでも毎日が楽しくて。
こうやってずっと日々を重ねていくものだと思ってた。

―――転機は四年生になった春。

変わる。

誰が変わる。

わたしが変わる。

心が変われば、運命が変わる。

この春。
俺たちの運命がまた変化した。

~~~~~

「お願い、誰か…僕の声聞いて…力を、貸して…魔法の力を……」

変な夢を見た。

断片的にしか思い出せないけど、変な夢だったのは覚えてる。

夜。

周りは木だらけ。

黒い影。

赤い玉。

何の夢か、さっぱりだ。

ただ、

「…助けを求めてた、よな」  
それだけはわかった。

力を貸して、か。

「また見たら、今度はしっかり覚えよう」

変な夢を見たからか、いつもよりダルい体を起こそうとするが、動かない。

「ん？　なんだ、なのはか」

布団の中を見てみると、なのはがしがみついて寝ていた。

「…俺は抱きまくらかってーの」

俺が動いても、起きる気配が全く無いのは。

仕方ない。

俺は携帯を取り、アラームの音を最大にして、なのはの耳元に置いた。

途端に響く大音量。

朝が苦手なのはも一発で起きる代物だった。

「にゃああー！　耳が痛いのー！」

高町家の朝はいつも通りです。

~~~~~

「奏真君！ あの起こし方はやめてって何度も言ってるの！」

まだ耳がキンキンするの。
もっと優しく起こしてほしいの！

「あれが一番早いんだから、いいだろ。大体、どんな風に起こしてほしいんだよ」

「そ、それはー」
そう言われて、私は考えてみることにした。

「なのは、妄想中」

「なのは、朝だよ。早く起きて」

「うーん、もうちょっと」

「もう仕方がないな、俺のお姫様は」
奏真、なのはをお姫様抱っこする。

「ほら、起きて。なのは」

「んー、おはようのキスしてくれたら起きる」

「いいよ、なのは頼みなら」
二人、キスをする。

〽妄想終了〽

「えへへ」

少し恥ずかしいけど…結構いいかもなの。

「…コイツ、何を考えてんだ？」

〽〽〽〽〽〽

高町家の朝食は桃色空間であると言われている。
いや、何を言ってるのって思いかもしれないけど…
初めて来た人はみんなそう言うんだ。

「ん」。今朝も美味しいなあ…特にこのスクランブルエッグが」

「本当っ？トッピングのトマトとチーズ、それからバジルが隠し味なの」

「みんな、あれだぞ…こんな料理上手なお母さんを持って幸せなんだから分かってるのか？」

「あーん、もうやだあーあなたったら。フフフ」

俺は、朝っぱらから繰り広げられる新婚夫婦みたいなやり取りを見ないように視線をズラす。

「美由希、リボンが曲がってる」

「えっ？　本当？？」

「ほら、貸してみろ」

…こっちもだった。

はあ、みんな仲のよろしいことで。

そんなことを考えながら、俺はもくもく、と朝食を食べていく。

あつ、サラダにドレッシングを掛けてなかったな…
キヨロキヨロと、ドレッシングを探していると。

「はい、奏真君！」

「おつ、サンキュー！」

なのはが、俺の好きなドレッシングを取ってくれた。

だから、お返しに。

「ほら、口にケチャップついてんぞ」

ティッシュを取り、なのはの口を拭いてやる。

「あ、ありがとなの」

なのはが赤くなって、お礼を言って来る。

：口についてたのに気づかなくて、恥ずかしかったんだろうな。

俺たちのそんなやり取りを見て、他の奴らがニヤニヤしている。

「…なんだよ」

「いやー、別になんでもないわよー。ただ、仲がいいなって思っただけ」

「正直、母さんたちに言われたくはない」

こうして朝食を終えた。

~~~~~

言っていなかったが…

ウチの学校はスクールバスが出ている。

今日もなのはとバス停へ向かう。

一年生からのくせで手を握っているが、いつまで続くんだか…



それにしても、やっぱり体が重い。  
風邪引いたかな？

「「おはようございませう」」

「なのはちゃん、奏真君！」

「あっ！」

「なのは、奏真、こっちこっち」

アリサとすずかが一番奥の椅子に座りながら手を振っていた。

「すずかちゃん、アリサちゃん」

「おはよ」

「おはよう」

「おはよう、二人とも」

アリサが右に少しずれて俺たちの座るペースを空けた

「今日の宿題出来た？」

「私、最後のところだけ出来なかったの」

「奏真に聞けばいいんじゃない？ 学年も一つ上なんだし」  
アリサがこちらをにやにやしながら見てくる。

俺が勉強出来ないと知っての発言だな。…このやろー

「ふん。俺の手を借りたら、なのはの成長が止まるだろ。だから、俺は手を貸さないんだ」

「…奏真君の宿題。私が教えてるのに？」

「奏真くん。なのはちゃんに教えてもらうのはちょっと」

「まあ、なのはが分からないなら、奏真じゃあムリか」

くっ、三人の刺すような視線が痛いです。

~~~~~

「さて、次の問題です。ご石をぎっしりとならべて、一辺に8個のご石がならんだ正三角形を作りました。全部で何個のご石をならべましたか。」

黒板に先生が問題を書いていく。

俺は頭を抱えこんでいた。

問題が分からないなら、ではなくて、純粹に頭が痛いからだ。

…まあ、たぶん問題も答えられないけど。

「それじゃあ、この問題をー」

先生が当てる前に、席を立つ。

「？ 山城くん？ どうかしましたか？」

「先生、ちょっと頭が痛いので、保健室に行ってもいいですか？」

「ええ、わかりました。保健室に行って来なさい」

先生の許可を得て、保健室に向かう。

「38.6℃ 完璧に風邪ね。今日はもう、家で休んだほうがいいわ」

「はい、帰って寝ます」

「でも、珍しいわね。山城君が風邪で保健室に来るなんていつもは擦り傷とかなのに、と笑う保険医。

「ははは、俺も風邪は久しぶりですよ。とにかく、薬飲んで寝ときます」

俺はそう言って、保健室をあとにした。

くくくくく

家に帰ってきた。

服を着替えて、薬を飲んでベッドへ

あつ、なのはにメールしとかないと…

これでよし。

お休みなさいく

そのじゅういち!

奏真君からメールが来た。

お熱があるんだって、家で寝ているらしいけど…すごく心配なの。

「奏真、何だって?」

「熱がでたから家に帰ったんだって…」
そう言って、メールを見せる。

「あの、奏真くんが!?!」

「アイツが風邪ね…。天変地異でも起こるのかしら?」
アリサちゃんが玉子焼きを食べながら、空を見上げる。

「…アリサちゃん。思ってもいっちゃ、ダメだよ」

「そうね。本当に起こったら嫌だし」

…ふたりとも結構ひどいの。

それから、またお弁当を食べていると、アリサちゃんが話を振って

きた。

「そういえば、先生の話、考えた？」

「将来かあゝ…アリサちゃんとすずかちゃんはもう結構決まってるんだよね？」

「ウチは…お父さんもお母さんも会社経営だし…一般勉強してちゃんと後を継がなきゃ…ぐらいだけど」

「私は機械系が好きだから…工学系で専門職がいいなって思ってるけど…」

「そっか…二人共凄いやね」

本当に凄いの。

二人ともちゃんと将来を考えてるんだ。

…でも、私は。

「でもなのは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「うん…それも将来のビジョンの一つではあるんだけど…やりたいうことは何かあるような気もするんだけど…まだそれがなんなのかはつきりしないんだ」

私は、少し落ち込みながらそう話した。

それをアリサちゃんは、はあゝと溜息をついて、

「将来の夢ならあるじゃないの」
と言ってきた。

「ふえ…?」

いきなりそう言われて、頭を傾ける。

「…そうだね。なのはちゃんはもっと明確な目標があるんじゃないかな」

すずかちゃんまでもがそう言ってくる。

「??.?」

二人とも何のことを言ってるの?

「…あんたの夢は奏真のお嫁さんでしょ?」

そう言われて、私の心臓が跳ねた。

「っ! な、なんで…」

知ってるの、と続けようとすると。

「なのはちゃんを見てればわかるよ。たぶん、みんな知ってると思うよ」

それは衝撃の事実だった。

まだ、誰にも話してないのに…

ってことは、まさかっ!

奏真君にも…

「…あゝ、けど、奏真は気づいてないわね」

「そうだね。奏真くん、そういうの興味なさそうだし」

「うっ、複雑なの」

知られてなくて良かったような、知ってほしかったような…

「ま、とにかく頑張るなさい」

「応援してるからね」

「うん！　ありがとうなの」

二人の応援を受けて。

私、高町なのはは、頑張ろうと思います！

~~~~~

学校が終わり、放課後。

本当は奏真君が心配なんで家に帰りたいんだけど…今日は塾なので  
す。

「あっこっちこっち…ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」



突然走りだしたアリサちゃんを追いかける。

途中でアリサちゃんは、突然止まり公園の横道を指差した。

「そうなの？」

「うっ…結構、道がひどいの」

「まあ、少しね」

三人でその道を進んでいく。

「あれ？」

ここ、夢で見たところに似ているの。

「なのはちゃん？」

「どうかしたの？」

「ううん、何でもないよ」

心配そうな顔をしている二人に大丈夫だと言う。

…うん。きっと気のせいなの。

(…助けて)

「っ！」

突然、声が聞こえた。

「…なのは？」

「なのはちゃんも具合が悪くなったの？」

「今、声がしなかった？」

私が聞くと、二人は頭を横に振った。

…やっぱり気のせい……

(…助けて！)

じゃない！！

私は声のする方に駆け出した。

少し進むと、地面に傷ついたフェレットが倒れていた。

私たち三人は慌てて、動物病院へと向かうのだった。

助けを呼んだのはこの子だったのかな…

~~~~~

塾が終わり、家に帰ってきた。

夕方のフェレットのことをお父さんとお母さんに話すと、家で飼っていることになった。

うれしくなった私は、奏真君に知らせに部屋へと向かった。

「奏真君。入るよ」

いつもより小さい声を出す。

部屋に入ると、奏真君は眠っていた。

頭に置いてあるタオルがずれていたので、元の位置に戻してあげる。

おデコは凄く熱くて、熱が全然下がっていないことがわかった。

「お粥は食べれたらしいけど…」

お母さんがいうには食欲はあったらしい。

というか、食べないと治らんって言ってたらしい。

それを思い出して、苦笑い。

本当に奏真君らしいなと思った。

「…早く、良くなってね」

私はそう言って、奏真君の汗を別のタオルで拭いてあげた。

すると、突然。

（聞こえますか？　僕の声が？　聞こえますか？）

と声が聞こえ頭の中に赤い宝石が浮かび上がった。

「これって夕べの夢と昼間の声と同じ声…」

（聞いてください！　僕の声が聞こえるあなた！　お願いします！
僕に少しでも力を貸してください！）

（あの子がしゃべってるの……？）

（お願い！　僕の所へ！　…時間が…危険な………ほう！）

最後が聞き取りづらかったがそれきり声が聞こえなくなった。

私は…

「助けに、いかなきゃ…」

「えっ？」

奏真君が突然、寝言？ を言い出した。

「はやく、行ってあげ、なくちゃ…」

苦しそうに奏真君が言う。

今の奏真君は動けるような状態じゃない。
だから…

「安心して、奏真君。私が助けに行ってくるから。だから、任せて」
そう言うと、奏真君は安心したように、また寝息を立て始めた。

「…行ってきます」

~~~~~

私は夜の町を走っていた。

「ハア……ハア……」

動物病院まで……あとちよつと！

走る。走る。走る！

逃げ。逃げ。逃げ！

久しぶりの全力疾走だった。

動物病院に着くと、いきなり耳なりがした。

「うつ……何、この音……」

目を閉じ耳を塞ぐ。

すぐに音は聞こえなくなった。

そして目を開けると、周りの景色の色が灰色っぽい色へと変わっていた。

グオオオ……

唸り声が見ると、

「あれはっ！」

フェレットを見つけた。

その後ろには謎の生物…

…何？ あれ？

そう思っていると。

謎の生物はフェレットに突っ込み、宙へと突き飛ばした。

私は手を伸ばしフェレットをキャッチする。

「なっ…なにに？ 一体、なに？」

目の前で蠢く謎の生物に驚いて、ついフェレットに聞いてしまう。

「来て……くれたの？」

「し、しゃべった!？」

まさか、言葉が返ってくるとは思わず、びっくりしてフェレットを落としそうになったがなんとかキャッチした。

「君には、資質がある。お願い、僕に少しでも力を貸して！」

「資質？」

「はい。だから、願います！ お礼は必ずします！ 僕の持っている力を…あなたに使ってほしいんです。僕の力を…魔法の力を！」

「魔法って…」

そんなのあるの？ って言おうとしたら…

グウオオオオ…

また、さっきの生物の声がした。

私は声のした方向…つまり上を見ると謎の生物が口を開け突進してくる！

咄嗟に、右に避ける。

うまくよけた。

危なかったの…

昼休みにドッチボールをやって良かったの！



後ろを見ると、さっきの生物は地面に激突したまま動き回っていた。

「で、どうすればいいの？」  
私はフェレットさんに聞く。

「これを！」

フェレットさんは赤い宝石を口に加え私に渡してきた。

「暖かい……」？

その赤い宝石はすごく暖かった。  
なんか力が湧いてくるような感覚がする。

「それを手に目を閉じて、心を澄まして！……そして僕の言う通りに  
言って！」

「わかった！」

フェレットさんの言うことに頷く。

「いい？　いくよ！」

「うん！」

両手で赤い宝石を握り締め、目を閉じた。

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり…」

「契約のもと その力を解き放て！」

「えっと…契約のもと その力を解き放て！」

ドクンツと赤い宝石は波動を発した。

「風は空に 星は天に」

「風は空に 星は天に」

さらに赤い宝石の波動が強まる。

「そして不屈の心は…」

「そして不屈の心は…」

「「この胸に！…この手に魔法を…レイジングハート、セットアップ！」」

私は赤い宝石を高く掲げた。

するとレイジングハートと呼ばれた赤い宝石は光りだし…

(Stand by. Setup)

と喋った。

そしてとてつもない光を発する。

「なんて魔力だ……」  
フェレットさんがそう呟く。

「落ち着いてイメージして！ 君の魔法を制御する魔法の杖の姿を！  
そして君の身を護る強い衣服の姿を！」

「そんな…急に言われても…えっと…え…と」

えっと、どうしよう。

杖？ 強い衣服？

目を閉じる。

すると頭に杖の映像が浮かんた。

そして服も…

「とりあえずこれで！」

無意識に赤い宝石にキスをする。

すると、レイジングハートはさっきイメージした杖となり…

服は白と青がベースの、特に白を重視した、長いスカートを履き、  
胸あたりに赤いリボンのある服となった。

そして、地面に降り立つ。

「よし、成功だ！」

「へっ？ ふえ？…うそっ？ な…なんなのこれ？」

目を開けると、変身していた。

わ、私、魔法少女になっちゃったの…！

グオオオ

黒い生物が動きだし、赤い瞳で私を見た。

「!? ふえゝ!!」

なんか怖いです。

いまにも襲いかかってきそうな雰囲気が…

私…どうなっちゃうのー!

そのじゅうに！

あの、黒い生物…クロイのでいいや。

クロイのはいきなり、飛びかかってきた。

「魔法を！」

そ、そんなこと言われても、わかんないよお

しかも、さっきより速い！

ダメ、やられる！

奏真君っ！ 助けて！

(p r o t e c t i o n .)

迫り来る恐怖に目を閉じていると、そんな電子音が聞こえた。

おそるおそる、目を開けると、

障壁があり、クロイのの攻撃を防いでいた。

「うわゝ、こ、これが魔法？」

一旦、クロイのが距離を取る。

「そうです。僕らの魔法は発導体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです！　そしてあれは…」

フェレットさんは距離を取ったクロイのを見た。

「忌まわしい力の元に生み出されてしまった思念体…あれを停止させられるにはその杖で封印して元の姿に戻さないと行けないんです！」

説明している間にもクロイのは形を変え、蠢こうとしている。

少し、グロいの…  
でも今は。

「よく分かんないけど…どうすれば？」

「基本魔法はさっきみたいに心に願うだけで発動しますが…より大きな力とする魔法には呪文が必要なんです！」

「呪文？」

「心を澄まして…心の中にあなたの呪文が浮かぶはずですよ」

そう言われて、私は目を閉じる。

目を閉じている間に、クロイのが私に向かって襲いかかってきた。

それと同時に、私は目を開いた。

そして杖を掲げ…

クロイのに杖を向けた。

(p r o t e c t i o n .)

障壁を張り、クロイのの攻撃を防ぐ。

「リリカルマジカル…」

「封印すべきは忌まわしき器ジュエルシード!!」

「ジュエルシード…封印」

そして、そのまま封印しようとした時…

「うおおー! 間に合ったー!」

「えっ…?」

一人の男の子が飛び出してきた。

~~~~~

やあ、久しぶりだな。

そうだ、俺だ!

神崎 竜也だ!

今日は、無印が始まる記念すべき日だ！
昨日の夜、あの夢を見たから間違いない！

つまり、俺にも魔力が…！
よし、これで勝つる。

これで、なのはとの関係も一歩深まるぜ。

…実は、三人とはあんまり仲良くなっていんだよな。
一年の時はきっかけがなかったし、クラスは二年から離れたし…
親に、知り合いがやっているとかいいう塾に行かされるし。

計画通りに進んでいない。

だから、今日は大きなチャンス！

家をこっそり抜け出して、動物病院に急いだ。

家から動物病院は結構遠い…
しかも、日頃運動しないもんだから、苦しい苦しい。

だが、ここであきらめるか！
走れ！ 俺！

動物病院に着くと、なのははもう変身した後だった。
それを少し、残念に思ったが：

「うおおー！ 間に合ったー！」

こっちの気持ちの方が大きかった。

~~~~~

男の子が飛び出してきたことで、封印の術式が解けた。

「あっ」

く、もう一度！

そう思って、杖を握る手に力を込めると。

いきなり、クロイのは私から目標を男の子に変えた。

これはマズイっ！

男の子に声をかける。

「逃げて！」

「うわ。こ、こっちくんない！」

男の子は間一髪で攻撃を躲した。

クロイのは体制を整え、もう一度男の子を襲おうとするが：

「…させないよ」

(p r o t e c t i o n . )

男の子の前に出て、障壁を張る。

「少し、暴れ過ぎなの…。レイジングハート」

(S e a l i n g M o d e . S e t u p . )

杖から3枚の光の羽根が展開する。

そしてクロイのを魔法の縄で拘束すると謎の生物の額に？？？という文字が現れた。

(S t a n d b y r e a d y . )

「リリカルマジカル…ジュエルシードシリアル21…封印！」

(S e a l i n g )

するとクロイのの姿が消滅した。

ふう、なんとかあったの。

これで終わり、かな。

そう思っ、男の子の方を振り向く。

…あれ？ どこかで見たことがある子なの？

「君、大丈夫？」

「あっ、はい」

男の子は、私をブーツと見つめている。

…どうしたんだろ？

そんなことを考えていると、道路の上に光る宝石を見つけた。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

フェレットさんの言うとおり、レイジングハートを近付けるとジュエルシードが宙に浮かび杖のコア…赤い宝石に取り込まれた。

( R e c e i p t   N o .   ? ? ? . ? )

すると私の体がピンク色に光り…元の服の姿にもどった。

杖は赤い宝石の姿に戻り、手のひらの上に乗る。

「あっ… 終わったの？」

「はい、あなたのおかげで…ありがとうございます…」

そう言ってフェレットさんは倒れた。

「ちょ…ちょっと！ 大丈夫？ ねえ？」

その様子に慌てていると、サイレンの音が聞こえた。

「も…もしかしたら私たち…ここにいと大変あれなのでは……と  
…とりあえずごめんなさい」

そう言って、男の子の腕を掴んで走り出した。

~~~~~

なのはが俺を助けてくれた。

俺の前に悠然と立ち、ジュエルシードを封印した。

その背中がすぐカッコ良くて。

心配そうに声をかけてくる目がとても優しくて。

腕を掴んだ手がとても暖かくて。

気がつくと俺はなのはをボーッと見つめていた。

ヤバイ…

惚れたかも…

~~~~~

私たちは公園まで全力で走った。

「ハア…ハア…ハア…」

ゆっくりと息を整えていると。

「すみません」

倒れたフェレットさんが声をかけてきた。

「あっ…起こしちゃった？　ごめんね乱暴で…ケガ痛くない？」

「あっ…ケガは平気です…もう殆ど治っていますから」

「えっ…？」

フェレットさんの包帯を取り、傷あとを見た。

「ほんとだ…ケガの跡が殆ど消えてる……凄い…」

「助けてくれたおかげで、残った魔力を治療に回せました」

「よく分かんないけど…そうなんだ」

「はい…本当にありがとう…」

そういうと、フェレットさんは頭を下げた。

「気にしないでいいよ。困っている人を助けるのは当然だもん」

そんな風にフェレットさんと話していると…

「あ、あのー俺も話に入れてー」

あの男の子が話かけて来た。

「あつ、ごめんね。えーつと…」

「も、もしかして俺のこと覚えてない？」

「にゃ！ にゃはは、見覚えはあるんだけど…名前はちょっと」

どうやら、知り合いだったみたい。

少し、気まずいので笑って誤魔化す。

「じ、じゃあ、自己紹介しよっか」

私は、少しショックを受けたような男の子とフェレットさんにそう提案した。

「う…うん」

フェレットさんが頷く。

男の子は…うん、まだちょっと落ち込んでるみたい。

…悪いことしちゃったな。

「わ、私から行くよ。私、高町なのは、小学三年生。家族とか仲良しの友達はなのはって呼ぶよ」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから…ユーノが名前です」

「ユーノ君か…？ うん、可愛い名前だね」

そして次になのは男の子を見た。

「あ、あなたのお名前は？」

「…俺は神崎 竜也、年齢は8才…小学生三年生だ。な、なのはとは、一年のとき同じクラスだったんだけど…」  
覚えてない？ と続ける竜也君。

「えっと、ごめんね。竜也君、でも見覚えはあるんだよ！」

そう言って、また落ち込む竜也君を慰めた。

…結構、それに時間がかかって詳しいことは明日ってことになった。

…早く帰らないと、お父さんたちに怒られちゃう。

私はユーノ君を連れて家へと足を進めるのだった。



そのじゅうさん!

風邪は朝まで寝ていたら治った。

やっぱ、葉ってすげえなと思いつつ、下に降りて行く。

どうやら、俺が最後みたいだ。

「おはよ〜」

「「おはよう」「」」

「おはようなの、奏真君! もう起きて平気なの?」  
なのはが早速、声をかけてくる。

「ああ、もう治った」

「…すごい。本当に熱が下がってる」  
俺の額に手を置いて、なのはがそう言う。

「葉、様々だな。あっ、あと看病してくれた母さんのおかげもある  
か」

そう言って、母さんの方を見る。

「良くなったなら、よかったわ。食欲はある?」

「うん、ふつうに腹減った」

「なら、すぐに用意するわね」

母さんはそう言って、台所に向かう。

ふと、視線をズラすとなにやら膨れているのがいた。

「ん〜！」

「どうした？」

「むう、私も看病したんだよ！」

タオル変えたりとか、と言うなのは。

「そっか。なら、なのはのおかげもあるな。ありがと、なのは」  
そう言って、なのはの頭を優しくポンポンと叩く。

すると、なのはの機嫌はたちまち直った。

「あつ、あとね！家でフェレットを預かることになったの」

「…フェレットを？」

「うん。ほら、ユーノ君！」

なのはがそう呼ぶとなのはの肩にフェレットがよじ登って来た。

「うわ〜、賢い奴だな。よろしく、ユーノ」

俺は優しく、ユーノを撫でてやる。

ユーノはキューッと鳴いた。

~~~~~

よかった…

奏真君、元気そうなの。

私は、隣を歩いている奏真君を見ながらそう思った。

昨日の熱はうそみたいに引いていたし。

今朝もご飯をいっぱい食べてた。

うん、もう安心かな…

今は授業中。

私は念話でユーノ君からお話を聞いています。

あつ、あと竜也君も念話をきいてるの。

（ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ……本来は手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど……力の発現が不安定で、夕べみたいに単体で暴走して使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるし……）

私は、その話を聞きながら昨日の事を思い出していた。

（たまたま見つけた人や動物が間違って使用してしまつて……それを取り込んで暴走するときもある）

（そりゃあ、危険だな）

（そんな危ない物がなんでウチのご近所に？）

（僕の性なんだ……僕は故郷で遺跡発掘を仕事としているんだ。そしてある日、古い遺産であれを発見して……調査団に依頼して保管してもらったんだけど……運んでいた時空艦船がなんらかの人為的災害に会つてしまつて……）

私は、勉強しながらユーノの話を聞いていく。

（21個のジュエルシードはこの世界に散らばつてしまつた……今まで見つけれられたのは、まだたったの2つ……）

（じゃあ、後19個かあ……つてあれ？　ちょっと待つて……話を聞くかぎりジュエルシードつて別に全然ユーノ君の性じゃないんじゃない……）

（ああ、ユーノが悪いわけじゃない）

竜也君もそう言ってきます。

私もそう思うの。

（だけど……あれを見つけてしまったのは僕だから……全部見つけて……ちゃんとあるべき場所へ返さないとダメだから……）

（だから、それは別にユーノに責任があるわけ……）

竜也君の念話を遮って、私は話す。

（なんとなく……なんとなくだけどユーノの気持ち分かるかもしれない……真面目なんだね……ユーノ君は）

うん。きっと責任感が強いんだよ、ユーノは。

だから……

（えっ……？）

そう話している間に、クラスのみんなが大爆笑していた。

うう、面白いお話だったのかな。

あとでアリサちゃん達に聞こう。

（えっと……夕べは巻き込んでごめんね。助けてもらって本当に申し訳なかったけど……この後、僕の魔力が戻るまでの間ほんの少し休ませてもらいたいただけなんだ……1週間……いや、5日もあれば力が戻るからそれまで……）

（戻ったら…どうするの？）

（また1人でジュエルシードを探しに出るよ…）

（それはダメ…）

（ダメだな…）

（だ、ダメって…竜也まで？）

（私、学校と塾の時間は無理だけど…それ以外の時間なら手伝えるから…）

（俺も空いた時間なら手伝えるぜ）

（だけど…昨日みたいに危ないことだってあるんだよ）

（だってもう知り合っちゃったし…話しも聞いちゃったもの…放っておけないよ。それに夕べみたいなのが近所で度々あったとしたら…皆さんのご迷惑になっちゃうし…ね？）

私は少し笑った後、そうユーノ君に言った。

（ユーノ君、1人ぼっちで助けてくれる人…いないんでしょ？ 1人ぼっちは淋しいもん…私にもお手伝いさせて！）

（俺に、何ができるかわかんないけど…なのはとユーノを手伝うぜ）

(二人とも…)

(それに助けられる力があるなら…その時は迷っちゃいけないって……お父さんが言ってた)

学校のチャイムが鳴った。

私が立ち上がって体をんゝと伸ばしていると…

後ろから結んでいる髪を下に引っ張られた。

「にゃ、……いててて」

「フフツ」

アリサちゃん、ひどいの。

すずかちゃんも笑ってないで止めてよゝ

帰り道…

(ユーノ君は困ってて…私はユーノ君を助けてあげられるんだよね？…魔法の力で…)

(うん……)

(私…ちゃんと魔法使いになれるかどうか…あんまり自信ないんだけど…)

（なのははもう魔法使いだよ……多分僕なんかよりずっと才能がある）

（そうなの？ 自分では良く分からないんだけど……とりあえず色々教えて）

私はアリサとすずかと別れて、帰路についた。

竜也君は、授業中に話を聞いてなかったらしく……居残りだって。

（私……頑張るから……）

（うん……ありがとう……）

こうして、私はジュエルシードを集めるお手伝いをする事になりました。

あと、奏真君も念話が聞こえてたみたいだってユーノ君に伝えた。

ユーノ君が言うには奏真君も魔力を持ってるみたい。

奏真君にも手伝って貰おうって話したら、ユーノ君と竜也君の二人から止められた。

何でも、魔法は管理外世界では隠さないといけないんだって……

竜也君は何でかはよくわからなかったけど、ダメだった。

奏真君、空を飛んでみたいって言ってから、教えてあげたかったんだけどな…

〃
〃
〃
〃
〃

最近、なのはの様子が変わった。

夕方によくユーノを連れて出掛けるし、帰ってくるのも遅い。

兄さん達に何か知らないかっていわれたけど…
俺も知らない。

ユーノの飼育主探しか？
だったら俺にも言ってくるだろうし。
うーむ、わからん。

まったく、何やってんだか？

そんなわけで、俺は一人、暇なんで、散歩している。

こら、そこ！ 友達いねえとか言うな！ みんな塾とか、用事があるんだってさ。

「ん？ なんだこれ？ 石、か？」

ぶらぶらと歩いていると、道端に綺麗な石が落ちていた。

「うーん。石ってか宝石？ 誰かの落とし物か？」

近づけたり、遠くに離したりして眺める。

「ま、交番にでも届けるか」

来た道に戻り、交番へいこうとすると。

「待って」

後ろから呼び止められた。

「ん？」

「ジュエルシードを渡してください」

振り返ると、金髪の見たことない女の子が立っていた。

そのじゅうよん!

「じゅえる、しーど? ってこの石?」

「はい。その石を渡してください」

「いいよ、ほい」

そう言っ、石を手渡す。

「えっと?」

女の子は驚いているのか、ぽかんとしている。

「どうしたんだ? いらないのか」

「あつ、いります!」

そう言っ、女の子はしっかりと石をポッケにしまった。

「あの、なんで…」

「ん? だって俺はいらないし。君は必要だったんだろ?」

「…うん」

女の子は小さく頷く。

「なら、君が持つてるほうがいい。探し物か何か?」

「うん。集めてるんだ」

「そっか、まだ何個あるんだな、あれ。そうだ、暇だし。ちょっと話でもしないか？」

「えっ？」

「あつ、もしかして時間ない？」

「時間は大丈夫だけど…」

「なら、決まり！」

そう言っていると、俺は自販機で飲み物を二つ買った。

そのまま近くのベンチへ

「ほい、んで、あれ全部で何個あんの？」

俺は飲み物を女の子に渡す。

「あ、ありがとう。えっと、確か全部で21個あるんだ」

「うえー、あんなちっさいの21個も探すのか」

「…うん」

うーん。この娘、人と話すの苦手なのかな？

さっきから、おどおどしてるけど…

それにしても石集め、ね。

石、石、石、ん？

そういえば、友達がなんか綺麗な石を見つけたとか昨日言ってたな。

「…なあ、もう一回あの石貸してくれないか？」

「えっ、う、うんいいよ」

女の子から石を受け取り、携帯で写真を取る。

石は女の子に返して、すぐに友達にメールを送る。

「…あの、何をしているの？」

「友達にメール。なんか昨日、綺麗な石を拾ったとか言ってたから
そう言っ、携帯を閉じる。」

「あっ、そうなんだ…」

「まあ、すぐに返事が来るさ。そういえば、自己紹介してなかった
な。俺は山城 奏真」

「わ、私はフェイト、フェイト・テストロッサ」

「よろしく、フェイト」

「うん、奏真」

それから、色々話をした。

なんでもフェイトは最近、この町にやって来たんだと。

あと、学校じゃなくて、家で家庭教師の人に勉強を教えて貰ってたらしい。

俺も、学校での出来事とか、家であつたことなどを話した。

フェイトも軽くだが、笑ってたからつまらなくはなかったんじゃないかな…

「…ふーん。じゃあ、あの石はお母さんが集めてるのか」

「うん、そうなんだ。だから、早く集めないと」

そう言ったフェイトの顔は真剣だった。

それを見てお母さんが大好きなんだな、と思った。

そんなこんなで結構話していると、友達からメールが返って来た。

中を見てみると、拾った石とすごく似ているらしい。

「…どうする？ 友達の家に行ってみるか？」

「うん。その石がジュエルシードかもしれないから」

というわけで、二人で友達の家に行くことになった。

~~~~~

「うーす」

「おっ、奏真。家に来たんだ」

「まあな、早速で悪いんだけど、拾った石を見せてくんない？」

「いいぞ。ほら、これ。写真のとソックリだろ」

そういつて見せてきた石は、確かに俺が拾ったのと同じように見えた。

「どうだ、フェイト？ 探してる物か？」

「…うん。間違いない、ジュエルシードだ」

そう言つて、フェイトは頷く。

「なあこれ、この娘の探し物なんだ。悪いんだけど、譲ってくれないか？」

俺は友達に頼んでみる。

「まあ拾ったものだし、別にいいけど…」  
うーん。と考えたふりをしてくる。

「今度なんか奢るからさ。たのむよ！」  
そう言うつ、俺を手招きしてくる。  
近くに行くと小声で、

「なら、それで手を打とう。あとさ、あの可愛い娘、紹介してくん



ない？」  
「言ってきた。」

「…別にいいけど、フェイト！ ちょっと来て」  
「ちよいちよいと手招きしながら、フェイトを呼ぶ。」

「なに？ 奏真？」

「いやな、石を譲ってくれることになったから、フェイトからもお礼を言って」

「あつ、うん。えっと…」

「はじめまして、井上 準です！」

俺の友達、準は気合いが入っているのか、普段より大きな声で、自己紹介をした。

「…は、はい。えっと、フェイト・テストロッサです。今日はありがとうございました」

フェイトは準の声にびっくりしながらも、なんとかお礼の返事を返す。

その後も、準が何かフェイトに言っていたが、  
フェイトが視線で助けを求めてきたので、助け舟を出す事に…

「さて、そろそろ帰らないとな、フェイトも用事があるって言うって  
たし」

「う、うん、そうだね。帰らないと」

「そ、そっか。残念だけど、用事なら仕方ないね…」

「それじゃあ、今日はサンキューな。また明日学校で」

「それじゃあ、さよなら」

準にそう言っただけ俺たちは帰って行った。

…準がすげえ目でこっち睨んでたな。

はあ、明日学校で何か言われるな、こりゃ。

~~~~~

準の家から離れ、最初に会った場所に戻ると、フェイトがお礼を言
ってきた。

「奏真、本当にありがとう。おかげで、二つも集まったよ」

「別にお礼はいいよ。友達のためにしたことだから」

俺がそう言うと、フェイトが呆然とした顔でこっちを見る。

「…とも、だち？」

「ああ」

「誰が？」

「俺とフェイトがだ。名前で呼び合って、少しだけど…色んな話をした」

「…うん」

「俺と話したりして、フェイトは楽しくなかったか？」

「…楽しかった」

ううん、と首を振り、フェイトはそう言った。

「俺も楽しかった。またフェイトと色々話をしたいし、一緒に遊んだりもしたいって思った」

「私も、また奏真と話をしたい。けど…友達ってどうすればなれるの？」

「だから、いったろ。もう俺とフェイトは友達なんだ。友達になり方なんてない。敢えていうなら、お互いが友達だと思うことかな？」

友達のなり方なんて考えたことなかったな。
いつも一緒に遊んだら、友達になってたし…

「お互いが…」

「ああ、俺はフェイトはもう友達だと思ってる。後はフェイトがど

「思うかだ」

「そう言っつてフェイトの目を見る。
紅くて綺麗な目をしていた。」

「…私も奏真と友達になりたい」

「なら今日から友達だな。よろしく、フェイト」

「うん、よろしく。…ありがとう、奏真」
フェイトがまたお礼をいつてきた。

「だから、何度もお礼はいいってーの」

「…何度でも言いたいんだ。奏真に、ありがとうって」
そう言っつてフェイトは微笑む。

それは夕陽が背景にあったからだろうか、すごく綺麗に見えた。

「まあいいか。あの石、また見つけたらフェイトに渡すから、連絡
先を教えてくださいませんか？」

「そう言っつと俺は携帯を取り出す。」

「えーと、連絡先？」

「携帯とか、まあ家の電話でもいいけど…」

「電話…」

「ちょっと待とうか、フェイトさんや。」

まさか、家に電話がないなんてことは…

「家に、電話はないよ？」

あるんですね、このやろー！

「…電話ないと不便じゃないのか？」

「別に、普段は念話を使ってるし…」

「念話？ 何だそれ？」

念話って、あの念を飛ばして会話するってやつか？

「あつ、そうか。奏真は念話を知らないよね」
そう言うのと、フェイトは目を閉じた。

その直後、

（こういうやつだよ）

頭にフェイトの声が響いてきた。

「うそ、本当に…」

（奏真、聞こえてる？）

目の前のフェイトは全く口を開いていない。
それに、この頭に響いてくる感じ…

「マジか…」

（奏真？）

「ああ、聞こえてるよ」

（本当。ならよかった）

「フェイト、念話以外にも何か出来るのか？」

「うん。私は魔導士だから」

いや。魔導士ってなんぞ？

そのじゅう！

な、なんとフェイトは魔導士だった。

っていつでも、何なのかよく分からない。

詳しく聞いてみると：

フェイトは魔法が使えるらしい。

あとフェイトは外国人じゃなくて、異世界人らしい。

なんでも、世界はたくさんあるんだとか。

さらにいえば、あの石も魔法関係の代物で暴走すると危ないらしい。

らしい、ばっかだな。

たくさん、話してくれたけど…俺に教えて良かったのか聞いてみると、

「…本当はダメだけど、友達に隠し事はしたくないから」

と笑顔で言われた。

「えっ？ 俺も魔法、使えるの！？」

「うん、奏真からも魔力を感じるし。あと念話も聞こえたでしょ？あれは魔力がないと無理だから」

マジか！？

やばい、魔法とかすげえ使ってみたい！

「…念話ならすぐに出来ると思うよ」

（こんな感じで、相手の心に向かって話しかけるの）

「えっと」

（…こんな感じかな）

（うん、聞こえてるよ）

（本当か！　　おーい、フェイト）

（大丈夫だよ、奏真）

（やったー、できたぜ！）

そうま　は　ねんわ　を　おぼえた！
テッテッテ！

「これで、いつでもフェイトと連絡が取れるんだな？」

「うん。あんまり距離が遠いとむりだけど…」

「そっか。でも、なんかワクワクするな！」

「ワクワク？」

何が？　といった感じで頭を傾げてくる。

「だって、他の人には聞こえない、俺とフェイトだけの秘密の連絡方法だぞ！？　なんかそれだけでワクワクするじゃん」

「…確かにそうだね。二人の秘密だ」

そう言って、二人で笑いあう。

さて、そろそろ帰らないとな。
もう暗くなってきたし…

「それじゃあ、フェイト。また石が見つかったら連絡するよ」

「…うん」

俺がそう言うと、フェイトは目に見えて暗くなった。

「やっぱり訂正する。石が見つかんなくても、また連絡するから。フェイトも暇なときとか話したいときとかに連絡してくれ」

「うん、わかった！」

フェイトに元気が戻った。

見つかったらじゃ、いつになるかわかんないしな。

「さて、と。帰るか… またな、フェイト」

「うん。またね、奏真！」

こうして、俺たちは別れた。

そして、今後もちょうちよく連絡を取り合っていくのだった。

~~~~~

「ただいま」

「おかえり、フェイト。おそかったね」

「うん、アルフ。今日ね、友達が出来たんだ」

「本当かい！？ そりゃあよかったねえ。で、どんな奴なんだい？」

わたしは、アルフに奏真のことを話した。

アルフは自分のことのように嬉しそうに聞いてくれる。

奏真とはまだ、少ししか話していないけど…一緒にいて暖かい人だと感じた。

ジュエルシードを二つも見つけくれたし。

学校の話とか色々教えてくれた。

わたしの、初めての友達。

また、たくさん話をしたいな…

そういえば話したいときに連絡しろって言ってた。

…連絡してみようかな。

でも、何ていえばいいのかな？

わたしがそんなことをベッドの上で考えていると…

（フエイト？ 聞こえてるか？）

（そ、奏真？）

奏真から念話が届いた。

いきなりで少しびっくりした。

（おっ、家からでも届くみたいだな、よかったあ）

（ど、どうかしたの？）

（いや、念話の確認とあと実は…）

(じ、実は?)

ゴクリと喉が鳴る。

何かたいへんなことがあったんじゃない…

(暇だったからだ)

(へ?)

何かあったんじゃないの?

暇って…

(……………)

(フェイト?)

(奏真! 人を心配させるのはいけないと思うんだ)

うん、すごく心配したわたしがバカみたいだ。

(い、いや、まあそうだけど…)

(言い訳は良くないよ)

(うっ、ごめん)

まったく、奏真は。

まあ反省しているみたいだから、許してあげた。

念話して来てくれたのはやっぱり、うれしかったから…。

この後も少しだけ話をした。

うん、今日はいい夢が見れそうだ。

~~~~~

フェイトと出会って数日が過ぎた。

ほぼ毎日、夜とかに連絡を取り合っている。

最初はフェイトからは念話してこなかったけど、この頃はしてくるようになった。

うん。いい傾向だと思う。

そんなこんなで、今日は日曜日。
我らが翠屋JFCの試合の日だ！

「奏真君〜！ 頑張っ〜」

「奏真〜、私たちが応援してるんだから、負けるんじゃないわよ！」

「奏真くーん！ ファイト！」

三人からの声援に、やる気も断然、あがってくる。

…ただ、一緒にいる男の子は誰だろ？

どっかで見たことはあるんだけどな…

思い出せない。

「奏真。応援を独り占めだな…」

一人、そんなことを考えていると…

キーパーの山内が話しかけてきた。

「ん？ まあ、ウチの中じゃあ仲いいの、俺くらいだからだろ？」

他の奴はあんまり面識ないだろうし…

「いや、お前がいるから応援に来てるんだと思うけど…」

「んなわけないだろ。どうせ父さんに誘われて応援には来るさ。それより、マネージャーは誰かさんの活躍を期待していると思うぞ」
にやにやしながら、山内を見る。

「う、うるさいな。いいだろ、別に」

「まあな。さて、じゃあ頑張るとしますかね」

「お前が点取れば、俺が無失点に抑えるよ」

「言ったな。なら、決めてやるよ」

そう話をして、俺達はポジションについた。

ちなみに俺のポジションはFW。点を取るのが仕事だ。
さあ、試合開始だ！

~~~~~

おす！

久しぶりだな。

神崎 竜也だ！

えっ、この紹介ばかりだなだと…

仕方ないだろ！ 出番があんまりないんだから！！

コホン。

ともかく、今俺はサッカーの試合を応援している。

昨日、ジュエルシードを探している時に、なのはに誘われたんだ。そう、なのはが誘ってくれたんだ！もう嬉しくて、飛び跳ねたね！

…ただ、アイツの応援ってのは正直微妙だけど。

今も隣では…

「奏真君！ 頑張って！」

「そこよ！ 奏真！」

「今がチャンスだよ！ 奏真くん」

三人はアイツの応援ばっかだ。

くそ、試合の間に色々と話しかけようと思ったのに…

しかもアイツ、サッカーうますぎだろ？

マークが二、三人いるのに平気でかわしていくし。

ドリブルしたらボール取られないし。

パスも正確だし。

ここがサッカー漫画の世界でも十分やっていけるぞ。

あと、あの問題のキーパーもやっぱりうまい。

さっきから決定的なの何本か止めてるし…

やっぱり、原作通りジュエルシードを持ってるのかね。



持ってんなら、なのはが落ち込まないように、早く回収しなくちな。

~~~~~

試合はまだ010だ。

そろそろ、山内の援護射撃をしたいところ。

「奏真！」

俺はパスを受ける。

後ろを確認すると、マークが二人。

普通だったら、ここは、はたか、キープなんだろうけど…

俺は今回。

敢えて…前を向く！

足の裏でボールを転がし、前を向いた。

マークの二人は、そのプレイに驚いたのか、動きが止まった。俺はその隙に二人の間を抜ける。

敵はあと、ディフェンス一人にキーパー一人。
ゴールが見えるまでドリブルで駆け上がる。

そして、ゴールが、見えた！

「いっけー！奏真君！」

「決めなさい！ 奏真！」

「いけるよ！ 奏真くん！」
なのはたちの声が聞こえる。

俺がシュートを打とうとすると、ディフェンダーが飛び込んで来た。

けど、それはフェイントだ。

「なっ、キックフェイント！？」

驚いているディフェンスをかわし、キーパーと一対一。

俺はキーパーが距離をつめてくる前にシュートを放つ。

ボールはキーパーの手に当たらず、ゴールネットを揺らした。

「よし！」

ガッツポーズを決めていると、仲間達が駆け寄ってきた。

「やったな！ 奏真！」

「ナイスゴール！ 奏真！」

「これでこの試合、勝てるぞ！」
仲間からの祝福を受けつつ、ポジションに戻っていると。

「奏真君ー！ ナイスシュート！」
こちらに大きく手を振ってるのはが見えた。

それに俺は手を振り返すのだった。

結局、試合は3ー0で俺たちが勝った。

約束通り、山内は無失点に抑えて、俺は1ゴール2アシストだった。

二人で喜びあっていると、山内が：

「そういえば、奏真。この石、探してたよな？」
と言ってジュエルシードをカバンから出してきた。

「おう、友達の探し物なんだ。サンキュー」

俺はそういつて受けとる。

「なら代わりに、ほれ！」

貰いっぱなしはさすがに悪いので…

「映画のタダ券？」

「この間、当てたんだ…代わりにこれやるよ、マネージャーと行っ
てきな」

「…う、うん、行ってくる。ありがとな」
山内は赤くなりながらそう言った。

~~~~~

翠屋で昼食を仲間達と食べた。

解散になったので、俺はなのはたちのいる外のテーブルへと向かう。

「よーす」

「あつ、奏真君！ お疲れさま」

「大活躍だったね」

「はん、私たちが応援したんだから当たり前でしょ！」

「ああ、アリサたちの応援のおかげだ。ありがとな」  
そういつて俺は笑う。

「わ、わかればいいのよ」

赤くなりながら、いつもの勢いが無いアリサ。

「なんだ、照れてんのかアリサ？」

「て、照れてなんか無いわよ！ うっさいわね」

今日もアリサはアリサでした。  
ツンデレ乙。

「そういえば、一緒にいた男の子は！」

「あー、一年の時のクラスメイトよ。もう帰っちゃたけど…今日は  
なのはが連れてきたの」

「へえ、なのはが…」

そういつてなのはに視線を向けると…

「うん。竜也君はお友達なの！」  
俺を見て大きく頷いた。

「ふーん、竜也っていうのか」

「うん！ 最近、仲良くなったんだ！」

「そっか。じゃあ、なのはの彼氏君に今度あったら、あいさつしたいとな」

今日も応援に来てくれてたみたいだし、お礼もいっとかないと…

「えっ！？ ち、ちがうよ！ 竜也君は彼氏とかじゃなくてー」

「わかってる、みなまでいうな。それにしてもなのはにねえ。あつ、兄さん達に話したら面白いことになりそうだな！」

その時の、兄さんたちの反応を想像して思わず、笑いが溢れる。

その時、先程連絡して置いたフェイトから念話が来た。

（奏真？ もう少しで着くよ）

（ん、了解！ 俺もすぐに行くから）

集まるのは最初に会った場所だ。

さて、じゃあ行かないとな！

「だからね！ 奏真君！ 竜也君はー」

「悪い、なのは。帰ってから話は聞くから。俺、用事があるから先に帰るな！」

「えっ!?! 奏真!」

「んじゃ、アリサもすぐかもまた来週な!」

俺はそう言い残して、約束した場所へと向かった。

そのじゅうろく！

「行っちゃった…」

私は遠ざかっていく奏真君の背中を見ながらそう呟いた。

「行っちゃったね」

「行っちゃったわね」

アリサちゃんたちも少し呆然としている。

「にゃああ！ まだ誤解が解けてないのにー！」

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

竜也君と付き合ってるって勘違いされた…。

本当にどうしよう。

「だ、大丈夫よ、なのは！ 後で話は聞くなって言ってたんだし、きちんと話せばあいつだって…」

「そ、そうだよ、なのはちゃん。元気出して！」  
？

「…うん」

二人が慰めてくれるけど、このダメージはすぐには回復しないわけ  
で…

キューっと鳴くユーノ君を見ても…ダメみたい…



はあゝ

~~~~~

「アリサちゃん、どうしよう？」

「…あれはしばらくどうしようもないでしょ。まったく、奏真の奴、バカなんだから」

「仕方ないよ、奏真君だもん」

すずかの一言で納得してしまう。

あいつは恋愛とかに余り興味がない。

人のをからかうことはあっても、自分でするのには興味がないみたいだ。

あれで、奏真は結構モテる。

ラブレターを貰っていたことも何度かあるし、確か、告白もされていたはずだ。

その度に、なのはがソワソワしていたからよく覚えている。

それも全部断ってるし…

あと、実は人の機微に敏感だったりする。

：なら何故、なのはの気持ちには気が付かないのか。
たぶん、今までの距離が近すぎたんだと思う。

あいつの態度見てても、妹に接する兄貴みたいな感じがするし…

つまり、恋愛に興味がなくて、なのはを妹みたいに思っている。

それは今回みたいな勘違いも起こるわよね…

はあ、なのは。

あんたの恋は厳しい戦いになりそうよ…

~~~~~

「よっ、フェイト！ 待たせたか？」

「奏真！ ううん、私も今来たところだよ」

あのベンチにいくと、フェイトはもう来ていた。

「そっか。ほい」

そう言って、ジュエルシードを渡す。

「あ、ありがとう」

フェイトはそれを受け取り、杖を取り出す。

(Sealing Form. Setup.)

あ、説明していなかったけど、この場所は高台にあって人はほとんど来ない。

「ジュエルシード…シリアル10! ……封印!!」

(Yes sir.)

「終わったのか…?」

「うん。もう大丈夫だよ」

「へえ、しかし、この小さい石が危険物とはね」

「…信じられない?」

「まあ、フェイトがいうんだからそうなんだろうけど…まだ、見たことないしな」

正直、どう危ないのか検討もつかん。

「もし、暴走したら危険だから奏真は近づいちゃダメだよ」  
ずい、と顔を近くに寄せ、フェイトがそう言ってくる。

「わかってるよ。危ないことはしないし。危なくなったらすぐにフェイトに連絡を入れる」

もう、念話で耳が痛くなるくらい聞いているしな。

「今日も時間は大丈夫なのか?」

「えっ？ うん、夜からは探索に戻るけど、それまでは大丈夫」

「そっか。ならまた話でもするか」

「うん！」

そうして、俺たちは暗くなるまで話をした。

俺が今日の試合のことを話したら、フェイトが今度は見に行きたいっていつていた。

ならってことで、今度の試合があったら、誘うように約束した。

「魔法を？」

「うん、まだ見つかっていないジュエルシードもあるし、簡単な防御魔法くらい使えるようになっていた方がいいと思うんだ」  
話をしている途中でフェイトがそう言い出した。

「うーん、確かに…。けど、フェイトに悪いし…」

魔法か…

使ってみたいけど、フェイトの探索の時間を削ることになるよな…

「少しくらいなら大丈夫だよ。それに奏真にお礼をしたいし…」  
フェイトがそう言うってくる。

ここはお言葉に甘えるか。

うん、何かの役に立つかもしれないしな…  
それに空を飛んでみたいしな。

「わかった。ならお願いします、フェイト先生」  
そう言って、俺は魔法を習うことにした。

「せ、先生？」

「だってフェイトから習うわけだし…ここは先生と呼ばないと」

「…そうだね、私は奏真の先生なんだ、うん。しっかり教えてあげないと…」  
なにやらやる気のフェイト先生。  
ガッツポーズをして気合いを入れている。

「じゃあ、まずは魔力の運用方法から――――」

それからフェイト先生による熱心な魔法講義が始まった。

~~~~~

おかしい。

なんで、ジュエルシードを渡さないんだ？

しかも、原作で映画なんて行ってたっけ？

翠屋からキーパーの奴をストーキングして、早二時間。
今、俺は映画館に来ている。

キーパーがジュエルシードを出す時に横から奪い取るという作戦を
立てていたんだが：

もしかして、持っていない？

んー、わからん。

アリサたちのお茶を泣くなく抜けて来たというのに：

何故なんだー！！

~~~~~

フェイト先生の講義が終わり、宿題まで出されて疲労困憊で家に帰  
ると、どんより暗いのがいた。

「なのは、どうかしたの？」

近くにいた、兄さんに聞くが：

「わからん。俺が帰ってくる前からずっとああらしい」

「そうなんだ。なら、聞いてみるか…」

「ああ、お前に任せる」

いや、兄さん。

任せされても自信はないよ？

「おい、なのは。ただいま」

俺がそう声をかけると、ガバッと起き上がり。

「奏真君！　なんでこんなに遅いの！」

理不尽な怒りをぶつけられた。  
てか、元気じゃん。

「聞ってるの！　奏真君！」

「あー、聞ってる聞ってる」

「人は本当のことは二回も言わないの！　昔、CMでやってたの！」

ずいぶん懐かしいのを出して来たな。

あれ、お酒のCMだったっけ？

「確かにやってたな。あ、ほんとだ。俺、二回言ってる…。んで、何をそんなに怒ってんだ？」

話がそれてきたので、本題に戻る。

「お昼の続きなの！ あかね、奏真君。私と竜也君は付き合っていないの！」

「あゝ、その話か。なるほど、まだ付き合っていないんだな」

「だ、か、ら！ 竜也君とはただのお友達――」

「ちょっと待て、奏真！ その竜也って奴のことを教えろ！」  
おそらく、隣で聞き耳を立てていた兄さんが話に入ってきた。

「あれだ。なのはの彼氏、いや彼氏候補生だ。今、ランクダウンした」

「なにー！ そんな奴が……。で、どんな奴なんだ？ 特徴は？」  
さらに詳しい情報を聞いてくる兄さん。

「いや、俺もまだ、遠くからちよろっとしか見てないんだよ。だから詳しいことはわからん」

「くっ、何者かは知らんが、なのはに手を出してタダで済むと思うなよ」  
拳をワナワナさせていて、呪詛を呟いている兄さんから、少し離れる。

あつ、なのはがプルプルしている。  
そういうや、話を折られてから一回も話してないや……



「お兄ちゃん」

「なんだ、なのは？ 安心しろ、その竜也とかいう奴は俺が懲らしめてやるからな」

「お兄ちゃんのーー」

「ん？」

あつ、耳を塞いどころ。

「お兄ちゃんのバカアーーー！！」

「ぐはあっ！」

兄さんに74852のダメージ。

兄さんは倒れた。

〵〵〵〵〵

一方、その頃。

「なんだよ、結局何にも起きなかったじゃんか…」

俺は風呂に入りながら、呟く。

「あゝあ、半日無駄にしたな。あのままお茶してれば良かった」

そんなことを言っていると急に寒気がしてきた。

まるで何か目を付けられたような…

「何だよ、今の」

何なのかよくわからなかったが…

俺はとりあえず、風呂に頭まで浸かることにした。

そのじゅうなな!

「なのは、まだか?」

下からそんな兄さんの声が聞こえる。

「んゝ。ごめん! もうちよつと!」

なのだが：なのはは、用意が出来ているのに行こうとはしない。  
まあ、原因は俺らしいのだが：

「いや、もう諦めろよ」

「ダメ! すずかちゃんたちにも連れてくって言っちゃったし：」

「いやいや、俺は一言も行くって言ってないですよ!？」

「奏真君も来るの! この間の埋め合わせを要求するの!」

この間の埋め合わせとは、あの彼氏うんぬんのことだ。  
なんでも、ただの友達らしく俺の誤解だったらしい：

それで、なんか一つ言うことを聞くコトに勝手に決まった。  
俺は認めた覚えはないんだけどな。

はあ、仕方ないか。

フェイトの宿題をせねばならんというのに：

「わかったよ、行けばいいんだろ？　行きますよ」  
そう言って、服を着替え始める。

「っ！！　う、うわわ」

着替え終わって振り返ると顔を赤くしたなのはがいた。

「ん？　どうかしたのか？」

「そ、奏真君！　女の子の前でいきなり着替えるなんてデリカシーに欠けているの！」

俺が聞くとプリプリと怒りだした。

「はあ？　何いってんだ？　去年くらいまで、一緒に風呂に入ってたじゃないか」

「にやああ！　それとこれとは話が違うの！」

まだ、怒りが収まらない様子のなのは。

「…よくわかんないけど、もう行くぞ」

面倒だけど…仕方ないな。

ほい、となのはに手を出す。

なのはは手を握ると、落ちつきを取り戻した。

…俺は精神安定剤かなんかか？

~~~~~

月村家に着くと…

なのはがドアホンを鳴らした。

ガチャ…

「あっ…」

「恭也様、奏真様、なのはお嬢様、いらっしやいませ」

月村家のメイド長のノエルさんが出てきてくれた。

「ああ、お招きにあずかったよ」

「お邪魔しまーす」

「こんにちはあ」

三人であいさつを返す。

それにしてもノエルさん。

相変わらず、無口な人だけど…美人でかっこいいな。

そんなことを考えていると、なのはが腕をつねってきた。
いや、痛い！

なのはさん！　ほんとに痛いですから。

「では……どうぞ、こちらです。みなさん、お待ちですよ」

ノエルさんはそう言って、俺たちを屋敷の中に招き入れた。

奥に入ると、

「なのはちゃん！　奏真くん！　恭也さん！」

「すずかちゃん！」

「来たぞー！」

「なのはちゃん、奏真君、いらっしやい！」

すずかと俺の天敵、ファリンさんが迎えてくれた。

何故、天敵なのかは後ほど明らかになるだろう。

「恭也……いらっしやい」

「ああ……」

一方で、あきらかに違う空気を出していらっしゃるのが：兄さんの彼女の忍さんだ。

「あら：奏真君は久しぶりね！」

「そうですね：翠屋ぐらいでしか会わないし。まあ、忍さんが俺の義姉さんになれば変わってくるんでしようけど：」
俺がそう言って、兄さんを煽る。

「な、何を言ってるんだ、奏真！」

「あら？　ならすぐに顔を合わせるようになるわね！」

「そうなるコトを期待してます」
兄さんは動揺していたが：忍さんは軽口に乗ってくれた。
：本気な感じはすぐするけれど、気にしちゃあ負けだ。

挨拶も済んだところで、

「お茶をご用意致しましょう、なにがよろしいですか？」
とノエルさんが言ってきた。

「任せるよ」

「なのはお嬢様と奏真様は？」

「私もお任せします」

「俺もなのと同じので……」

残念ながらお茶には詳しくないのだ。
喫茶店の子供なのに：

「かしこまりました、ファリン！」

「はい、了解です。お姉様」

「じゃあ私と恭也は部屋に居るから」

忍さんがそうノエルさんに言う。

「はい、そちらにお持ちします」

ファリンさんはテクテクと歩きノエルさんの横に並んだ後：
お辞儀をして調理場に向かっていった。

「よっ………」と

なのはが、イスに寝転んでいた猫をどけて座る。

俺もなのはの隣に座った。

左からすずか、俺、なのは、アリサの順だ。

「おはよう」

「うん、おはよ」

「おはよう、早いなアリサ」

「さっき、来たところよ」

「そっか、俺は無理やり連れて来られた」
じとつとした視線をなのはに向ける。

「そ、それより、ね。お兄ちゃんと忍さん、すっごく仲がいいよね！」

その視線を感じたのか、あからさまに話題を変えてくる。

「確かに見ててラブラブって感じだよね」

扉の方を見ると忍さんは嬉しそうに兄さんと腕を組んでいた。

「お姉ちゃん、恭也さんと知り合ってから…ずっと幸せそうだよ」

「ウチのお兄ちゃんは…どうかな？…でも昔に比べてなんだか優しくなったかな…」

忍さんと兄さんは腕を組みながら中へと入っていった。

「へえ」

「よく笑うようになったかも」

「そっか。やっぱり恋は人を変えるのね！」

「…なんか少女漫画でありそうな話だな」

「夢のない奴ね…」

「奏真くん、冷めすぎだよ…」

二人からじとつ、とした視線を頂きました。

…これは意外とキツイな。

「そういえば…今日は誘ってくれてありがとうね」

「ああ、ほんとにありがとう」

なのはが話を変えたので便乗することに…ナイス、なのは！

「ううん、こっちこそ来てくれてありがとう」

「今日は…元気そうね」

「ん？」

「なのはちゃん…最近少し元気なかったから…」

その間にアリサはコップに手をつけ、ゆっくりと紅茶を飲んだ。

…よく見てんな。

確かに最近、少しどころじゃなくなのはは変だし。

まあ、言いたくないんだろうから聞かないけど…

「もし何か心配事があるなら…話してくれないかなって…2人で話してたんだけど…」

その言葉に嬉しいのか、なのはは目を潤ませる。

「すずかちゃん…アリサちゃん…」

キュッ…!!!

突然の鳴き声に4人がびっくりした？

ユーノが猫に追いかけられ必死に逃げている最中だった

「ユーノ君！」

「アイ！ 駄目だよ！」

その時…あの人が笑顔で紅茶、お菓子を持ってきた…

「は…い、お待たせしました。イチゴミルクティーとクリームチー
ズクッキーです！」

……俺は神を呪った。

ファリンさんの足下でクルクルと逃げ回るユーノとアイ。

ファリンさんは踏まないように足を交互に上げていたが…

「わぁ……わぁあわあわあわ」

クルクルと周り、目を回してしまう。

「ファリン！！ 危ない！！」

すずかの声をきっかけに…

「！！！」

俺、なのは、すずかの三人は駆けた。

ガシャン……

「う……ん？」

「セ……セーフ……？」

「いや、アウトだ……」

倒れかけたファリンさんを3人で支えていた。

お茶は無事だったが、チーズケーキは見事、俺の頭の上に…

「はっ！……うわあああ！ すずかちゃん！ なのはちゃん！ って
奏真君！ 何度もごめんなさ〜い！」

「…いや、慣れてるからいいよ…」

そう、これは俺が月村家来ると毎回起こる。

だから、ファリンさんは俺の天敵なのだ！

避けても避けたとこに飛んで来るから、最近は抵抗しないことにし

ている…

ファリンさんの叫び声は忍さんの部屋にも聞こえていたらしく…

「またやってる…」

「あの子にも困ったものです」

「奏真…強く生きろよ」

という会話があったとかなかったとか。

俺は慣れた足取りでお風呂場を借りに行った。

~~~~~

「うわー、見てよ。あの背中、哀愁漂ってるわね…」

「にやはは。奏真君、ガンバなの」

お風呂場に向かう、奏真君の背中を見て、アリサちゃんとそんな話をする。

「もう、ファリンは…。奏真くん、怒ってないかな？」  
「すずかちゃんはため息をつきつつ、心配そうにそう言う。」

「それは大丈夫だよ、奏真君はそんなことじゃ、怒ったりしないよ……諦めてはいるかも、だけど……」

「そっか。なら良かった」

ほっと、した表情を見せるすずかちゃん。

「……それで、なのは。奏真の誤解は解けたの？」

「うん。何度もお話したら、分かってくれたよ」

そう、あれは大変だったの……

途中でお兄ちゃんが邪魔してくるし。

竜也君はそんなんじゃないのに……

あ、竜也君はなんか風邪で寝込んでいるみたい。

今日も来たがってたんだけど……残念ながら不参加。

また、誤解されるのは嫌だから、少しほっとしたのは内緒なの。

「良かったね！　なのはちゃん」

「うん！　本当に良かったの」

アリサちゃんたちとそんなことを話していると……  
ジュエルシードの反応を感じた。

（なのは！）

（うん、すぐ近くだ！）

でも、どうやってこの場から抜け出そう…  
それを考えていると、

（任せて！）

ユーノ君がいきなり走り出した。

「あらら？ ユーノ、どうかしたの？」

「うん、何か見つけたのかも…ちょっと探してくるね」

「だったらみんなと一緒に行こうか？」

「大丈夫、すぐ見つけて戻ってくるから待っててね」

私は二人にそう言って、ユーノ君の後を追いつ出した、

「発動した！？」

「すぐに結界を張るよ」

「結界…？」

「最初に会った時と同じ空間！ 魔法効果の生じてる空間と通常空間の時間進行をズラすの！ 僕が少しは…得意な魔法！」

ユーノ君は、そう言う目を瞑り念じた。  
すると…緑色の円形の魔法陣が展開される。

「あまり広い空間は切り取れないけど……この家の付近くらいは…  
なんとか…」

ユーノ君がいる地点を中心に紫っぽい色の結界が作られ月村家を  
囲む。

その直後、大きな光とともに巨大化した猫が現れた。

「にやはは、これは…」

「た、たぶん…あの猫の大きくなりたいていう願いが正しく叶え  
られたんじゃないかと…」

正しくって…  
こんなサイズになって何がしたいんだろ？

「そ…そっか」

「だけど…このままじゃ危険だから元に戻さない」と

「そ…そうだね、流石にあのサイズだと…すずかちゃんも困っちゃ  
うし…襲ってくる様子もないしササッと封印を…」

私はネックレスにしていたレイジングハートを取り出し…



「じゃあ…レイジングハート!」

セツトアップをしようとしたその時…

私の横を金色の魔力弾が通り過ぎ、巨大化猫にヒットした。

「!!!?」

「魔法!?!」

私とユーノ君は同時に後ろを振り向く。

すると、少し離れた電柱の上に金髪ツインテールの少女が立っていた。

そのじゅうはち!

「バルディッシュ：フォトン・ランサー：連撃」

Photon Lancer. Full Auto Fire.  
)

女の子は黒い杖みたいなものの先を向け、巨大な猫に魔力弾の集中放火をした。

「にゃ……にゃ〜!」

魔力弾が当たって痛いのか……  
猫は苦しそうに鳴いた。

「なっ……? やっぱ魔法の光……そんな……」

ユーノ君は、まだ女の子が魔法を放ったことが信じられないみたい。

「あっ……! レイジングハート……お願い!」

(Stand by. Ready. Setup.)

女の子がまた攻撃しようとしているのを見て、私は服をバリアジャケットへと換装する。

(Flier Fin.)

私の足に魔力の羽根が生える。

そして、巨大猫の元に急ぐ。

迫り来る魔力弾。

それに私は向き直り、レイジングハートを構えた。

(Wide Area Protection.)

魔法障壁を展開させ、女の子の攻撃から猫を守る。

「…魔導士…か」

女の子は一旦、攻撃をやめて木の枝に降り立った。

「同系の魔導士…ロストログアの探索者か…」

あの娘もやっぱり魔導士なんだ…

じっと女の子を見つめる。

「……………」

「間違いない……僕と同じ世界の住人…そしてこの子…ジュエルシードの正体を……」

ユーノ君がそう呟く。

「バルディッシュと同系のインテリジェントデバイス…」

「…バル、ディッシュ…?」

あの娘のデバイスの名前…なのかな?

「ロストログア…:ジュエルシールド」

(Scythe Form Setup)

バルディッシュと呼ばれたデバイスは少し姿を変え…魔力の刃を有した鎌みたいなものになった。

「…申し訳ないけど、頂いていきます!」

そういうと女の子は突如、私の前に現れて鎌を振ってきた。

(Protection)

咄嗟に障壁を張って防ぐ。

魔力刃と障壁がぶつかり合い、火花が散る。

決めきれないと思ったのか、女の子は一旦、後ろに少し距離を取る。

それにほっとしたのも束の間。

女の子は鎌を横に構えた。

…何かしてくる気だ。

(Arc Saber)

女の子が鎌を振ると、魔力の刃が、ブーメランみたいに私に飛んでくる。

「…!!」

(p r o t e c t i o n.)

私はそれを防ぐためにもう一度、障壁を張る。

刹那…衝突し、爆発音が響いた。

「なのは！」

ユーノ君がそう叫ぶ。

私はなんとか防いで、さらに上空へと一旦、逃げる。

けど…もう目の前には、バルディッシュを振りかぶる少女がいた。

「!!」

とっさにレイジングハートで斬撃を防ぐ。

「なんで……なんで急にこんな…」

なんで戦わないといけないの…

「答えても…多分…意味がない」

「っ！」

二人とも、また距離を大きくとる。

(Device mode.)

バルディッシュは元の姿に戻る。

(Shooting mode.)

レイジングハートは射撃用にへと姿を変える。

(Divine Buster. Stand BY.)

私はレイジングハートを少女に向ける。

(Photon Lancer. Get Set.)

女の子もバルディッシュを私に向ける。

きつと…私と同じ年ぐらい…

綺麗な瞳と綺麗な髪…

だけど…この子…。

…なんでそんな寂しいそうな目をしているの？

「っ！　なのは！」

「えっ？」

ユーノ君の声で気がついた時には、もう遅かった。

「…ごめんね」

(Fire.)

私は女の子がそう言ったのを最後に気を失った。

~~~~~

風呂場から帰ってくるとなのはがいなかった。

「あれ？　なのはは？」
アリサ達に聞いてみる。

「さっき、ユーノを追いかけていったわよ」

「…けど、遅いね。見つからないのかな？」

二人も知らないみたいだ。

とりあえずお茶を飲みながら待っていると：

なのはが探していたはずのユーノが一人で戻ってきた。

「あれ？ ユーノだけ？」

「入れ違いになっちゃたのかな？」

アリサとすずかがそういうが、俺はなんか嫌な予感がしてきた。

ユーノが俺たちを見て鳴く。

それも、必死に何か伝えるように：もしかして：なのはに何かあった？

だから俺はユーノに問いかけた。

「：ユーノ、なのはの居場所、分かるか？」

するとユーノはキュー、と鳴いて頷く。

「：よし、案内しろ！」

そういうと、ユーノは駆け出した。

「奏真。一体どうしたのよ？」

「：なんか嫌な予感がする。とにかく、ユーノを追いかけてみる」
アリサにそういつて、俺はユーノを追いかけた。

ユーノの後を追うと、木の近くに、なのはが倒れていた。

俺は慌てて、駆け寄る。

「なのはっ！」

状態を確認すると、擦り傷くらいで特に大きなケガはないように見える。

：気絶しているだけか。

それに安心し、ほう、とため息をつく。

良かった…

横でそれを見ていたユーノの頭を撫で、
「ユーノ、知らせてくれてありがとうとな」
と言った。

それにユーノはキューっと鳴いて答えた。

その後、なのはを背負ってアリサ達の所に向かった。

気絶しているなのはを見ると、みんな大慌てになった。

結局、お茶会は中止となり…

なのはは夕方まで目を覚まさなかった。

~~~~~

その日の夜。

フェイトから念話が届いた。

（奏真？ 起きてる？）

（ん？ フェイトか。ああ、借りてた本を読んだ。どうかしたか？）

フェイトがこんな遅くに連絡をしてるのは初めてだ。  
…これは何かあったな。

（えっとね。今日、ジュエルシードを一つ見つけたんだ…）

（本当か！ やったな、フェイト！）

（…うん）

あれ？？

あんまり嬉しそうじゃない？

（フェイト、…何かあったのか？）

（ううん、何もないよ…）

…何も無いわけないだろ。

そんな暗そうにして。

（フェイトは嘘が下手だな。そんなんで俺を騙そうなんて百年早いぞ！ …話せよ。聞いてやることくらいなら俺でも出来るから）

（奏真…）

（こんな時のための友達だぞ）

（…うん。今日ね、女の子と戦ったんだ…）

（戦ったって…ケガとかしてないか？）

戦いつてやっぱり、魔法関係か…

（あつ、うん。ケガとかはないよ。ただ、あっちの子に少し、ケガをさせちゃって…）

なるほどね。

それで落ち込んでいるつと。

（そうか。…ケガさせちゃったのはフェイトが悪いな）

（…うん、それにきつとまた戦うことになる、と思う）  
また戦うことが嫌なのだろう。  
フェイトは辛そうにそう話す。

しかし、また戦うことになる、ね。  
たぶん、ジュエルシード関係だろうな。  
他にも集めてる奴がいるのか…

（けど、フェイトにも譲れないものがあるだろう？　だったら、迷っちゃダメだ）

フェイトにはジュエルシードを集める理由がある。  
だったら今は、前に進むべきだと思う。

（奏真…。うん）

（ただし、全部が終わったら謝りに行くぞ。俺も一緒に行くから）

（…うん、そうだね。…許して、くれるかな？）

不安そうにフェイトがそう聞いてくる。

（許してくれるまで謝ればいいさ。大丈夫、フェイトは一人じゃないから）

（…ありがとう、奏真。うん、なんか力が出てきたよ）

（なら、良かった。ってもうこんな時間か…悪いな、フェイト。もう休むわ）

話し込んでいたら、もう寝ないとヤバイ時間になっていた。

（あ、ごめんね。おやすみ、奏真）

（ああ、おやすみ、フェイト）

そう言って俺たちは念話を終えた。

この時、俺は知らなかったんだ。

フェイトと戦った女の子が隣の部屋にいることも…  
暴走したジュエルシードの危険性も…

まだ、俺は本当に何も…  
知らなかったんだ…

そのじゅうぎゅう!

なのはの様子がおかしい：

確かに最近、変ではあった。

家にすぐには帰らず：夜もうろついたりしていたし：

疲れも溜まってるようにも見えた。

けど、今はそれよりも何かを考え混んでいるように見える。

正直、あまり待つのが好きではない俺は直接、聞いてみることにした。

「なあ、なのは」

「んー。何、奏真君？」

「お前最近、何をしてんだ？」

~~~~~

「えっ？」

一瞬、奏真君が何を言っているのかわからなかった。

「…なのはが何をやってるのかは知らないけど…なんか悩んでるだろ？ それは俺にも話せないことなのか？」

奏真君が真剣な顔で聞いてくる。

「それは…」

正直に言うと、奏真君に話を聞いてもらいたい。

きっと奏真君なら、私が悩んでもすぐにもいい答えを出してくれると思う。

…だけど。

「…ごめんなさい」

奏真君に魔法のことを話す訳にはいかない。

そして、何より私は――

「…自分で答えを見つけないってか」

「えっ？ な、なんで」

わかったの、と言おうとすると。

「わかるぞ。なのはのことなら、俺はわかる。だって大切な友達で、大切な家族だからな」

奏真君は笑いながら、そう言った。

その笑顔を見て、私の胸がきゅんとなった。顔も赤くなっているかもしれない…

そして、すごく嬉しい。

私のことを奏真君がわかっていてくれることが…本当に嬉しい。

「…まあ、俺じゃあ力にはなれないんだろうしな。なのはが悩んで出した答えなら、きっと上手くいくさ」

「奏真君は力になってくれてるよ、すっごく！」

奏真君はそういうけど、そんなことはない。

奏真君と話をするだけで…

ただ、そばにいてくれるだけでも、私は力が湧いてくるんだから。

「…そっか。無理はしないように。さて、もうすぐ夕飯だから、母さんの手伝いしないとな」

私の頭をぽんぽん、と叩いて奏真君は下に降りていった。

悩みは何も解決していないけど…さっきより自分が元気になったのを感じた。

~~~~~



なのはから話を聞くことはできなかった。

正直、聞いたら教えてくれると思ってた…  
けど、なのははごめん、と謝ってきた。

なのはの成長を嬉しくも思い、  
寂しくも思った。

まあ、今できるのは、なのはが自分で答えを出すのを待つだけだな…

はあく。結局、待つのかよ…

~~~~~

いっつやっほおう!!

ここは湯のまち、海鳴温泉ー!

来たぜ、来たぜ、来たぜーい!
遂にあのフェイトに会える!

この間は風邪引いて、会いに行けなかったからな…
だから今日が初対面って奴だ。

「ーやーー」

うーむ。

なんて声かけよう？

「ーやくん！」

いや、それより先にアルフが来るじゃあねえか。
うーん。

「竜也君！」

「うわっ。な、なのは、どうかしたのか？」
いきなりなのはに声を掛けられて驚く。

「もう！ 自己紹介、竜也君の番だよ！」

「えっ？」

なのはに言われて周りを見ると、全員が俺に注目している。

やべえ、考えごととして気づかなかった。
と、とにかく、最初が肝心だからな…

「えっと、神崎 竜也です！ なのはとは仲良くさせてもらってます！」

あれ？ 俺、大したこと言えてない…

「ふむ、君が竜也君か…」

「ああ、彼が噂の…」

「うーん。どっかで見たことあるんだけどな…ダメだ、思い出せない」

なにやら男衆がぶつぶつ、いつている。

つか、山城 奏真！ お前とは話したこともあるだろうがっ！！

あと、恭也さん？

視線が怖いです…

そんなわけで合計12名で出発した。

車の内訳は一台が俺たち小学生5人、士郎さん、桃子さん。

もう一台が恭也さん、忍さん、ノエルさん、ファリンさん、美由希さんとなった。

そして今、俺は憎つき山城 奏真の隣にいる。

こいつは俺の恋敵だ。

なのはのことが本当に好きになった俺はハーレム計画を中止にした。

まあ、他の子とも仲良くはなりたいたいけど…

そこっ、ロリコンとかいうな！

好きになったもんはしょうがないだろ！

なんとかこいつよりもかっこいい所をなのはに見せないと…

俺は車の中でそんなことを考えていた。

~~~~~

旅行は久しぶりだ。

結構前から楽しみにしていた。

だけど今、俺は車の中で苦しんでいる。

…やばっ、すげえ眠い。

昨日の夜もいつもみたいに魔法の練習をしていたのだから…思いのほか、はかどってしまっただけで寝るのが遅くなってしまった。

そのせいで今、俺は非常に眠いのです。

なのに…

「うわー！ 奏真君！ 今、鹿さんがいたの！」

なのはさんが寝かせてくれません。

俺の後ろの席なのですが、これはあんまりです。

「…悪い、なのは。俺は少しねー…」

「今度は狸さんなの！ ほらほら奏真君、見て！」

せめて言わせて！

この後、30分間は眠れなかった。

~~~~~

私たちは、目的地である“旅館山の宿”に着きました。

まだ、あの女の子のこととか考えないといけないことはたくさんあるけど…この2日間は私も年相応にお子さまらしく！
目一杯遊んでしまおうと思います！

早速、私たちは温泉に入ることにしたのですが…

「…ねむ」

奏真君は、まだ眠そうです。

車の中でも寝ていたけど…昨日は夜更かしでもしたのかな？

「はあ、はあ、はあ」

その隣では、竜也君が息を切らしています。

車から荷物を運ぶ時に、私たちの分を持つと言って運んでくれたのですが…やっぱりきつかったみたいです。

だから、断ったのに…

「奏真？ 眠いなら部屋で休んでる？」

「うーん、やめとく。今から寝ると、夜に寝れなくなりそうだし…」

お母さんが心配そうに聞いてきますが、奏真君は断ります。

「ま、温泉に入れば目も覚めるよ。そうだ！ 奏真君、背中流してあげようか？」

いきなり、忍さんがそう言ってきます。？

そ、それは奏真君も一緒に入るということで…
ダ、ダメ！ 奏真君と一緒に恥ずかしいの！

「…嬉しいお誘いですけど、俺、今年で十歳ですよ？」

「あら？ まだ、九歳でしょ？ 問題ないわよ」

「うーん。そういえば、奏真とは最近入ってないし、それもあり、かな」

にゃああ！ お姉ちゃんまで、そんなことを：

「姉さんまで：。俺は遠慮するよ。なのは達が嫌がるだろうし」

「私は別にいいけど：」

「私も奏真くんなら問題ないよ？」

ちよっ、アリサちゃん！ すずかちゃん！

「はぁ、俺が恥ずかしいの。とにかく、俺は久しぶりに父さん達と裸の付き合いをするから：」

さぁ、行こうとお父さんの背中を押して行く、奏真君。

お父さんは背中を押されながらも、どこか嬉しそうに笑ってた。

：良かったの。

私はほっ、と息を吐く。

奏真君と一緒にじゃ、恥ずかしくてゆっくりできないの。

私がそんなことを考えていると：

「あんたは行かないの？」

「もう、みんな行っちゃったよ？」

まだ、その場に残っていた竜也君がアリサちゃん達にそう言われていた。

竜也君は…

「…扱いが違いすぎるぜ、このやろー！」
と叫び、ユーノ君を連れて走っていた。

…どうしたんだろ？

そのにじゅう!

今、俺は父さんの背中を流している。

鍛えあげられた背中はとても大きく、傷もたくさんあった。

そんな背中を見ながら、俺も大人になったらこんな背中になれるかな、と思っっている…

「奏真、最近どうだ？」

父さんがいきなりそう聞いてきた。

「楽しくやってるよ、友達と家族には恵まれてるからな、俺は」

「そうか、それは良かった」

そう言っって、父さんは笑う。

今度は交代して俺が父さんに洗ってもらう。

「おっ？ 少し、背中も大きくなったな」

「まあ、成長期だからね。すぐに父さんよりも大きくなるさ」

「なーに、俺だってまだまだ負けんよ」

俺と父さんはそう言い合う。

身体も洗い終わり、湯船につかった。
すると、父さんが…

「奏真、なのはのことなんだが…」
なのはの話振ってきた。

俺が変だって気づくんだ…
父さんたちが気づかないわけがない。

「…ああ、俺にも話せないんだってさ。けど、大丈夫。きっとなのはなら自分で解決するよ」

「奏真がそういうなら、大丈夫だろうな」
お前はなのはをよく見ているから、と続ける父さん。

「うん。それにもし、何かあったら俺が守るから安心していいよ」
今の俺なら、少しは魔法も使えるし…何かあっても助けられると思う。

「ははは、頼もしいな。けど、どうしても無理な時は俺たちに頼っていいんだからな」

始めは笑いながら、けど途中からは真剣な声で父さんが言ってきた。
すごく頼もしい声。

その声を聞いて、なんか安心した。

「…うん。ありがとう」

だから、俺はお礼を言って湯船に顔をつけた。

…本当に俺は家族に恵まれているな。

~~~~~

俺の隣では今、何やらハートフルな会話がなされている。

何だよ、この空気…

俺、場違い感が半端じゃないんだけど…

そんなことを思っている。

「竜也君、俺が背中を流してやろう」

恭也さんがそう言ってきた。

あれ？ これは何かのフラグですか…死亡的な意味で。

ユーノ助けて！

俺はユーノに視線を向けるが…

（竜也、ファイト！）

そう念話があるだけだった。

くそっ、この淫獣め…

「君はなのはと仲がいいそうだね」

「えっと。はい、仲良くさせてもらってます」

「…そうか。それで、なんだが…まさか付き合ったりとかは、していないだろうな」

いや、恭也さん。

後半から声が変わったよね!?

「つ、付き合っているんですよ、い、今は」

はっ!?! つい、願望が…

「ほう。今は、か。つまり後からはそうなる?」  
だんだん背中を洗う手に力が入ってきた。

「は、はい、そうなるといいなーって」

俺の口のバカー!

止まれ、止まれ、止まってよー!

…でも、付き合うか。

なのはが彼女に…

そうなれば、手を繋いでデートしたり、公園とかでキスしたり、そして、大人になったら…」

「…大人になったら、どうするんだ？」

「えっ？」

ま、まさか考えてたことを口に出してたー！？

「…なのはにつく悪い虫は早めに排除しないとな」

「ぎ、ぎゃあああああ！」

俺はそこからの記憶がしばらくない。

~~~~~

俺は、父さん達より一足早く上がった。

竜也と兄さんがなんかしてたけど、何だったんだろう？

最後、父さんも参加していたし…

そんなことを考えながら、旅館を歩いていると…なのは達がいた。

「おい先に上がったのか？」

俺がそう声をかけるも、三人とも様子が少しおかしい。
アリサはなんか怒ってるし、なのはは考えこんでる。

とりあえず、すずかに話を聞いてみると、どうやら酔っ払いに絡ま
れたらしい。

まあ、色々な人がいるんだし。

そんなこともあるさ…

今はせつかくの旅行中なのだ、楽しまないと損。

というわけで、俺は三人を引き連れ、遊ぶことにした。

お土産を見たり、卓球とかゲームをしたりと色んなことをした。

最初は乗り気じゃなかった三人も、すぐにさっきのことを忘れて楽
しそうにしていた。

〳〳〳〳〳〳

夜も遅くなった頃。

アリスちゃん達は眠っていたけれど…私はまだ起きていた。

（ユーノ君、起きてる？）

（う…うん）

ユーノ君に話しかけると返事が帰ってきた。
まだ、起きてたみたいだ。

（昼間の人…この間の子の関係者かな？）

（多分ね）

（またこないだみたいなことになっちゃうのかな？）
あまり予想したくないことをユーノ君に聞いてみる。

（多分………）

返ってきたのは肯定だった。

（なのは、僕ね…あれから考えたんだけど…やっぱり、これからは僕が…）

（ストップ！　そこから先言ったら…怒るよ？…ここからは僕一人
でやるよ…これ以上なのは巻き込めないから…とか言うつもりだ
ったでしょ？）

（うん…）

（ジュエルシード集めのことだって最初はユーノ君のお手伝いだったけど…今はもう違う。私が自分でやりたいと思ってやってること

だから)

私は、笑顔でユーノに話しかける。

そう、自分で決めただ。

まだ…あの女の子とどうするかは決めてないけど…

ジュエルシードに関しては、自分の意志で集めることを決めた。

(だから、私を置いて…竜也君も置いて一人でやりたいって言った
ら怒るよ)

(うん)

(少し、眠つとこ。また今夜でも何かあるかもしれないからね…)

それから私たちは眠ることにした。

それから、しばらく経った後。

「!？」

(なのは!)

(うん)

ジュエルシードの反応を感じた。

私とユーノ君は念話で竜也君を起こして、三人でジュエルシードの場所へと向かうのだった。

~~~~~

物音がして目を覚ます。

隣を見てみると竜也が部屋を出て行くところだった。

「…あいつ、こんな時間にどこにいくんだ？」

気になった俺は竜也について行くことにした。

途中で竜也を見失い、探していると空に見知った奴らがいた。

「あれは!？」

…な、なんで。

フェイトはまだわかる、俺に魔法を教えた張本人だし。魔法が使えるのは知っていたから…けど、もう一人は違う。

「なんでお前がそこにいるんだよ、なのは…」  
俺の中で全てがつながった気がした。

最近、変だったなのは。

俺にも話せないこと…

つまり、フェイトが戦った相手ってのはなのはで。  
この間、なのはが気絶していたのもフェイトが…

全くの予想外だ。

こんなことになるなんて…

いや、とにかく今はあいつらを止めないと。

俺は、飛翔魔法を使い、なのは達の元へと飛び立った。

~~~~~

発動したジュエルシードを封印しようとしていると。

あの子がやって来た。

今日は前にはいなかった男の子も一緒だ。

「あゝらら、あらあらあら」

「あっ……!？」

あの子がアルフに反応する。

そういえば今日、会ったって言ってた。

「子供はいい子でって言わなかった？」

「それを！ ジュエルシードを…どうする気だ!？…それは危険なものなんだっ！」

「さあね？ 答える理由が見当たらないよ……それにさ…あたし親切に言ったよね?…いい子でいないとガブッていくよって!」
アルフの姿が大型の狼へと姿が変わる。

「やっぱり…あいつ…あの子の使い魔だ!」
フェレットがそう叫ぶ。

「使い魔？」

「そうさ、あたしはこの子に作ってもらった魔法生命…制作者の魔力で生きる変わり…命と力の全てを賭けて護ってあげるんだ!」

「アルフ…無茶しないでね…」

私はアルフが心配で、そう声をかける。

「おっけー！」

それに返事をしてアルフは、あの子たちへと飛びかかっていった。

それを男の子が前に出て障壁を張り、アルフの攻撃を防ぐ。

「ちっ……」

「なのは！こいつは俺たちに任せろ！」

「なのはは！あの子をお願い！」

「させるとでも……思ってたの！」

「させて……みせる！ユーノ！」

「任せて！竜也！」

障壁を張る魔法陣の上にさらに魔法陣を展開するフェレット。

「移動…魔法？…マズっ…！」

その瞬間アルフは消えた…。

「結界に、強制転移魔法……いい使い魔を持っている…」

「ユーノ君は……使い魔ってやつじゃないよ！ 私の大切な友達！」

「…！」？

私とあの子。

橋の上で睨みあいが続く。

「それで？ どうするの？」

私はあの子に尋ねる。

「話し合いで…なんとか出来るってこと…ない？」

「私は…ロストログアの欠片を…ジュエルシードを集めないといけない。そして、あなたも同じ目的なら…私はジュエルシードを賭けて戦う敵同士ってことになる」

「だから！ そういうことを簡単に決め付けない為に…話し合いって必要なんだと思う！」

「…そうかもしれないね。けど、今は知らない。私は、迷わない！」

奏真が迷わず、前に進めってってくれたから…

私はバルディッシュを構える。

高速で移動して…あの子の後ろに回り、バルディッシュを振り抜く。

(Flier Fin.)

あの子は空に飛んで、それを回避した。

それを追うために、私も飛び上がる。

「それがわかってるならなんで…」

「私には譲れないものがある。ただそれだけだ！」

バルディッシュとあの子のデバイスがぶつかり、火花を散らす。

私が、一旦離れて砲撃を放とうとした時。

「フェイト！　なのは！　止めろ！！」

ここで居るはずのない、奏真の声でそれを止めた。

そのにじゅういち!

「フェイト!　なのは!　止めろ!」

私は突然、奏真君の声を聞いて驚く。

あの女の子も同じみたいだ…

フェイト…?　この子の名前?

ふたりは知り合いなの?

奏真君が私たちの近くにやって来る。
って、奏真君!　魔法が使えるの!?

「ふう、良かった。間に合ったみたいだ…」

「そ、奏真君…。なんで魔法を…?」

私は奏真君に聞いてみる。

「ん?　ああ、フェイトに習ったんだよ。まだ、たいしたことはできないうんだけどな」

奏真君はそう言う。

この子に習ったんだ…

私は女の子に視線を向ける。

しかし、女の子はそれを気にせず、奏真君に話しかけた。

「奏真…。どうしてここに？」

「ほら、今日は旅行に行くって前に言ってただろ？　その旅館に止まってんだ」

どうやら、二人は前から連絡を取っていたみたい…。二人は会話を続ける。

「そうなんだ…」

「フェイトに連絡すれば良かったな。そしたら、昼にも会えたのに…」

「うん、そうだよ。今度からは連絡して、ね？」

「わかったよ。あつ、フェイトにお土産も買ったから、後で渡すよ」

「うん、ありがと」

あんなに寂しそうな目をしていた女の子は奏真君と話をしている時には、そんな目をしていなくて…

すごく楽しそうに話をしていた。

この子、あんな顔も出来るんだ…

少し、置いていかれた私は奏真君に聞いてみることにする。

「それで、奏真（君）。その子とどんな関係？（なの？）」「

そしたら、見事に女の子、フェイトちゃんと被った。

~~~~~

「ど、どんなんて、友達だけど…？」

俺は二人にの質問に、そう返した。

「奏真の友達だったんだ…」

「奏真君のお友達…」

二人は何やら考え込む。

「だから、止めたんだよ。友達が戦い合うのは見たくなかったんだ  
俺はそう言う。

：フェイトには迷うな、とかいいながら俺は何を勝手なこと言っ  
てんだろう。

少し、自己嫌悪。

「まあ、ともかく。ここは一旦――」  
休戦しよう、と言おうとした時。

ジュエルシードが発動した。

「「っ！」」

なのはとフェイトも身構える。

目の前には実る大きな樹…  
これがジュエルシードの力…

前に、フェイトが危険だって言ってたけど…  
こんな風になるんだ…。

そんなことを考えていると…突然、大樹が樹の枝を伸ばし、襲いかかってきた。

俺たちの体を簡単に貫けるくらいのスピードでこっちに向かって来る。

それをなのはとフェイトは素早く回避した。  
けど、俺はまだそんなに早くは飛べない。

「奏真っ！」

「奏真君っ！」

二人が叫ぶ。

けど、これくらいなら…

俺は障壁を前に張って、大樹の攻撃を防ぐ。  
障壁はなんとか大樹の攻撃に耐え切った。

ふう、何とかだったな…

そう思って油断したのがいけなかったのか。

「っ！ 奏真、後ろ！！」

「えっ？」

フェイトの声で後ろを振り向くと…樹に足を捕まえられた。

「うわあああああ！」

そのまま、樹の本体へと引っ張られる。

上と下が逆さまに見える…

本体の近くに来ると、一斉に他の枝が俺の身体を覆ってきた。

「くそっ！」

…まさか、取り込む気か！

俺は必死に抵抗しようとするが…身体が動かない。

「奏真君！」

なのはが悲鳴にも似た声を出す。

「奏真っ！」

フェイトが俺を助けようと猛スピードで向かって来る。

けど、フェイトが間に合う前に…

俺は、大樹の中へと取り込まれた。

~~~~~

「なのは！」

私の側にユーノ君と竜也君がやって来る。

どうやら、異変を感じて来てくれたみたいだ…

「なのは！ 何があったんだ？」
竜也君がそう聞いてくるけど…

私はうまく言葉にできない。

「奏真君が…奏真君が…」

「あいつがどうしたんだ？」

「奏真君が…取り込まれちゃった…」

私は奏真君を取り込んでから、さらに大きくなった樹を見つめてな
んとかそう言った。

~~~~~

私の責任だ。

ジュエルシードを先に封印していなかったことも。

まだ、魔法を使い始めたばかりの奏真を一人にしたことも。

…全部、私の責任だ。

だから、奏真は必ず、必ず助け出す！

「奏真を…奏真を返せー!!」

私は、奏真を取り込んだ大樹へと接近し、その幹を切り裂く。  
しかし、すぐに樹は再生して元通りになった。

それならっ！

再生するより早くダメージを与える！

「バルディッシュュ！」

Photon Lancer. Full Auto Fire.  
)

フォトンランサーを連射して攻撃する。

けれど、樹は素早く攻撃をしてもすぐに再生してしまった。

これじゃあ、キリがない…

早く、奏真を助けなくちゃいけないのに…

私は、焦る気持ちを抑えて攻撃を続けるのだった。

~~~~~

「私の、私のせいだ…」

なのはが突然、そう呟いた。

「…なのは？」

様子が変なのはに声をかける。

「私が早くジュエルシードを封印していれば…。私があの時、奏真君を連れて回避していれば…」

「なのは！」

もう一度なのはを呼ぶが、俺の声は届いていないらしい。

「私が…」

こんななのはは、初めて見る。

原作でもこんな風にはなってなかったぞ。

なんで、ここに来て樹の事件が起こるかね。

大体、あれは人が発動させたから大きな被害になったんじゃないのか？

てか、発動したジュエルシードが人を取り込むなんて事件はなかっただろうが！

くっそ！ もう原作知識は当てにならなくなったな。

あいつのせいか、俺がいるからなのか…。

とにかく、今のなのはの状態はあいつのせいだ。

なのはをこんな風にしゃがって、あいつ。
ただじゃ置かねえ！

~~~~~

「フェイト！」

アルフの声で、何とか避けれた。  
少し、大きめに距離を取る。

「はあ、はあ、はあ」

少し、キツイ。

魔力も大分消費してしまった…  
けど、そんなことはどうでもいい。  
早く、奏真を。



「フェイト！ 一旦、引こう。このままじゃあ、キリがないよ」  
アルフがそう言うてくるけど…そんなことはできない。

「…ダメ、奏真が待ってる。早く助けて上げないと…」

「けど、さっきの砲撃でかなり魔力を使ったじゃないか！？ 少し、休まないと…」

そう、私はさっき砲撃を放った。

射撃魔法ではダメだとわかったから…

だけど…あの樹は障壁を張って防いだ。

障壁とあの再生力を超える攻撃じゃないと奏真は救えない。

今の私の魔力量じゃ、救えない…

私は、あの子に視線を向ける。

さっきから呆然としているみたいだ。

なんで？

私はそう思った。

なんで、奏真が囚われているのに、貴女は動かないの？

奏真は友達なんじゃないの？

大切じゃないの？

気がつくと私はあの子の近くへと飛んでいた。

## そのにじゅうに！(前書き)

お気に入りが入りが50件を超えてました！  
みなさん、ありがとうございます！

そのにじゅうに！

奏真君…。

私が…もつと…ちゃんと…やれていれば…。

ごめんなさい…。

奏真君…

「貴女は何をしているの…？」

私がそんな事を考えていると、フェイトちゃんが私にそう言ってきた。

「…まだ、奏真はあの中にいる。…痛いかもしれない…苦しんでいるかもしれない…助けを待っているかもしれない…なのに、貴女はそこで何をしているの？」

フェイトちゃんの静かな怒りを感じる。

間違いなく、怒ってる。

「私は…」

「貴女は奏真の友達じゃないの？ 大切じゃないの？」  
フェイトちゃんのその言葉に私は反応する。

「そんな事ない！ 奏真君はとても大切な…。でも私のせいで、奏真君は…」

そう言って、私は下を向く。

奏真君は私にとって、すごく大切な人。

けど今、危ない目に合っていて、それが私のせいだと思うと…  
膝が震えて、身体が動かない…

「…そう。ならいい、ずっとそうやって下を向いていればいい。奏真は…奏真は私が助ける！」

フェイトちゃんはそう言うのと再び、大樹へと向かっていった。

フェイトちゃんの攻撃はあまり大樹に効いていない。  
傷をつけてもすぐに再生してしまうからだ。

それでもフェイトちゃんは諦めない。

何度、防がれても…

何度、再生されても…

何度、吹き飛ばされても…

ボロボロになってもフェイトちゃんは諦めない。

フェイトちゃんも奏真君のことが大切なんだ…

だから、あんなに必死になれる。

なのに、私はこれでいいの？

こんな風に、ただ見ているだけで…

何もしないで…

私は目を閉じる。

違う。

いいはずなんてない…

奏真君をフェイトちゃんに任せるの？

そんなこと、出来るわけがない。

このままじゃあ、きつと私は後悔し続けることになる。  
身体が動かないとか言ってる場合じゃない。

今はただ…

私は目を開く。

「レイジングハート…待たせてゴメンね」

(It is in time still. My master  
r.)

「うん！ 行くよ、レイジングハート！」

私は、フェイトちゃんの元へ飛んでいった。

~~~~~

「はぁ、はぁ、はぁ。くっー」

私は障壁を張って樹の攻撃を防ぐ。

アルフがサポートをしてくれているが…もう避けられない攻撃が出て来た。

けど、対抗策が見つからない…
いや、あると言えばあるんだけど、それは一人じゃ…

「フェイト！」

「っ！」

思考中の隙を突かれて、攻撃に気が付かなかった。
迫り来る樹の攻撃。

私は来る衝撃に備えて身構えた。

(Divine Buster.)

私に当たるはずだった攻撃は桃色の砲撃によって防がれた。

「大丈夫!? フェイトちゃん!」

そう言って、あの子が私の近くによってくる。

「…ありがとう」

私は一応、お礼を言った。

「ううん。私の方こそ、今まで一人で戦わせてゴメンね」

「奏真とジュエルシードのためだから…」

「…うん、私。フェイトちゃんにお願いがあるの…今回のジュエルシードはフェイトちゃんに譲る。だから、奏真君を助けるために力を貸して!」

あの子、なのは、だったかな。

なのはは真剣な顔をして私にそう言ってくる。?

「…わかった、今回は休戦。でも次はないから」
そう言って、私はまた来た樹の攻撃を回避する。

休戦は今回だけ。

奏真を助けるまでの間。

「うん、うん! ありがとうフェイトちゃん!」
なのはも、回避に専念しているようだ。

その状態で私たちは会話を続ける。

「あいつを倒すには、あのバリアを抜かないといけない」

「うん、そしてもう再生できないような攻撃…」

「二人で同時に攻撃！（だね！）」

「そう、でもあいつのコアの場所が分からない…」
エリアサーチをかけても、正確な位置がわからなかった。

「どうしようか…」

私となのはの二人で考えていると…

（おい、二人とも聞こえるか？）

いきなり、奏真から念話が届いた。

~~~~~

（おーい、ってあれ？ きこえてないのか？）  
んー。これはマズイ状況かな。

（そ、奏真！？ 聞こえてるよ！ 大丈夫なの？）

（そ、奏真君！ 無事なの！？）

おっ、良かったー

聞こえてるみたいだ。

（ああ、一応無事みたいだ。さっきまで気を失ってたけど…）

（そっか、良かった…）

（本当に、良かったー）

二人がほっと息を吐く。

どうやら、すごく心配させたみたいだ。

（心配かけて、ゴメンな…）

（奏真が無事なら、それで…）

（うん。すぐに助けてあげるからね！）

それから二人に作戦を聞いた。

どうやら、なのはとフェイトが同時に攻撃するらしい。  
ただコア、元になっている場所がわからないとのこと。

元になっている場所って、ジュエルシードがあるところだよな…  
うーん、と考えていると。

俺の目の前にジュエルシードが浮いていた。

コアって、ココじゃん！

（二人とも、コアの場所がわかったぞ）

早速、俺は二人に伝える。

（えっ？）

（本当？ 奏真君！）

（ここだ。俺がいる所がコアみたいだ）

（じゃあ！）

（ああ、俺が誘導するから、そこにブチかませ！）

（わかった…）

（わかったよ！ 奏真君！）

（よし、行くぞ！）

そういうと俺は二人に自分の居場所を念話で伝える。

あれ？　ってことは俺も攻撃、食らっちゃう？

~~~~~

奏真君は元気そうだった：

良かった：

本当に良かった…。

頭の中に奏真君の居場所が伝わってくる。

あとは、攻撃を加えるだけ！

今はユーノ君、竜也君、アルフさんが樹を抑えてくれている。
だからチャンスは今っ！

「フェイトちゃん！」

(D i v i n e B u s t e r . S t a n d B Y .)

私はレイジングハートを構えて、フェイトちゃんに声をかける。

「うん。バルディッシュ」

(Thunder Smasher. Get Set.)

それに頷き、フェイトちゃんもバルディッシュを構えてくれる。

私の話を聞いてくれる。

…確かに今回だけかもしれないけど…

「二人でせゝので一気に封印!」

「わかった…」

それでも私は嬉しかった。

「せゝ…の!」

「サンダー…!」 「デイベイン……!」

私とフェイトちゃんは魔力を最大限まで貯める。
…今!

「スマッシュ…!」 ? 「バスター…!」

私たち二人の魔法が大樹へと向かう。
大樹はコアを守ろうとバリアを張ってくる。
けど…

「「負けない！」」

さらに出力が上げ、そのバリアを簡単に突破してコアに当たる。

「「ジュエルシード…封印!!」」

こうしてジュエルシードを封印出来た。
どんどん崩れていく大樹。

そんな中に奏真君もいた。
けれど、様子がおかしい…
奏真君は真っ逆さまに下に落ちていく。
…もしかして動けないの!?

私がそう思って助けに行こうとしていたら、

「奏真、大丈夫？」

フェイトちゃんが超スピードで向かって、抱きかかえていた。

「助かったよ、フェイト。サンキューな」

「ううん、奏真…。良かった…」

なんか二人だけで、いい空気が流れています。
むう、少しおもしろくないの。

だから、私も参加することに。

「奏真君ー！ 大丈夫？ どこか痛くない？」

私は奏真君にそう聞くと…

「身体全身が痛いくて、力が入らない」

「ふえええー！ ど、どうしようフェイトちゃん！」

私は思わずフェイトちゃんに聞いてみた。

「…大丈夫。魔力によるダメージだけだから、一晩ゆっくり休めば明日には動けるようになるよ」

「…そ、そっか。良かったの」

フェイトちゃんが説明してくれて、なんとか落ち着くことができた。

「…奏真。今日はゴメンね…。巻き込んで…」

そういうとフェイトちゃんは悔しそうに顔を歪めた。

「奏真君…私もごめんなさい。もっと、ちゃんと私が…」
私も奏真君に謝る。

そうして、少しだけ重い空気が流れたあと。

奏真君が

「何いってんだ、お前ら？」

と少し怒りながら私たちに言った。

~~~~~

何を言うかと思えば：

まったく、こいつらは。

「いいか。俺があいつに取り込まれたのはただ単に俺が未熟だったからだ」

現にお前たちは避けられただろ？ と続ける。

「でも、奏真はまだ魔法を始めたばかりだし：」

「それでもだよ、フエイト。戦場に出る以上、自分の実力不足も自分の罪になる。：あの時は完全に俺が悪い。正直、ジュエルシードのことを舐めてた」

今日は反省だ。

あんな無様にやられて、こいつらの負担になるなんて：



訓練するしかないな…。  
もっと強くないと！

「そんなことは…」  
なのはがまだ何か言いたそうだが、俺は言わせない。

「それに謝られたら、お前たちにありがとうって言えなくなるじゃないか」

「「えっ？」」

二人の声が揃う。

何回か揃ってるけど、意外と相性いいのかもな。

「助けてくれてありがとう、二人とも。本当に感謝してる」

俺は二人に頭を下げる。

：フェイトに支えられてるから格好はつかないけど…

俺の偽りのない本心を、二人に伝える。

「奏真、頭を上げて。私たちは当たり前のことをしてただけだよ…？」

「そうだよ、友達だもん！」

二人はそう言って笑顔を見せてくれる。

本当、いい奴らを友達に持った俺。



そのにじゅうさん!

「それじゃあ、私たちはもう帰るよ。またね、奏真」  
奏真君を私に渡してきて、フェイトちゃんが帰ろうとする。

「フェイトちゃん!」

奏真君を支えながら、私はそんなフェイトちゃんを呼び止める。

「何?」

「えっと、その…」

言いたいことは沢山あるのに、うまく言葉にできない。

「…休戦するのは今回だけ…次からは敵同士だから」  
そう私に言い残してフェイトちゃんは帰っていった。

「なのは…」

「もっとお話したかったのにな…。奏真君はフェイトちゃんがジュエルシードを集める理由知ってる?」

「…ああ、知ってるよ。けど、俺の口からは言えない。それはなのはがフェイトから直接、聞かないといけないことだ」  
奏真君はそう話す。

「そう、だね。…奏真君は相変わらず厳しいや」

本当に厳しいなあ。

でも、そうだよな。

私がフェイトちゃんに話してもらわないといけないことだもん。

「そんなことはないぞ。これから、なのはたちの手伝いもするつもりだし」

「本当！？ うん、奏真君が入れば百人力なの！」

やった！？

奏真君も一緒なら、私も嬉しいし…。

フェイトちゃんもお話しやすいだろうし。

いいこと尽くしだ。

私がそう思っていると…

「俺は反対だな」

今まで黙っていた竜也君がそう言ってきた。

~~~~~

「俺は反対だな」

俺はそう言った。

確かにジュエルシードは結果的に封印出来たけど、こいつが余計な危機を招いたことは事実だ。

「単刀直入に言うぞ。お前は足手まといなんだよ」

「竜也君！ そんな言い方はあんまりなの！ まだ、奏真君は魔法を始めたばかりで…」
なのはが文句を言ってくるが…俺は続ける。

「だったら尚更だろ。そんな奴はいらねえ。今まで俺となのはとユニの三人でやって来たんだ…。現に今日だって、お前がいなきゃ、もっと早く終わってた！」

「そんなことー…」
なのはが否定しようとするが、それをあいつが遮る。

「いや、なのは。竜也の言うとおりだ」

「奏真君…」

「確かに、今の俺じゃあ居ても邪魔になるだけかな…」

…わかってんのなら、大人しくしてろっの。

「だから、そんなこと…」

「そうだ。だからお前の参加はー…」
認めない、と言おうとしたが、それをあいつに遮られる。

「けど、俺も引くわけにはいかないんだよ…。力が無い？ なら力を付けるさ。経験がない？ なら経験って奴を積んでやる！」
そう言ったあいつの目は確かに本気だった。

「俺は強くなる。なのはやフェイト…大切な奴らを守るくらい、強く！」

「お前…」

その目を見て、俺は言葉が出せなくなった。

くっ、これが主人公の覇気ってやつかよ。

「証明してやるよ…お前に俺の覚悟を！」

やっぱりこいつは気に食わない。

こいつを主人公だと感じてしまう自分にも腹が立つ。

いいだろう、見せてもらおうじゃねえか。

そして、見極めてやる！

お前がこのリリカルなのは似た世界の主人公なのかどうかをな。

「ふん、そうかよ。なら一週間だ。一週間後、俺と戦ってもらう。俺でさえ、サポートくらいしか出来ないんだ。俺に負けるような奴はいらない」

「竜也君！」

なのはが俺を睨んでくる。

あいつに向ける目とは大違いだ。

「…わかった」

「奏真君まで！」

「はん！ 楽しみにしてるぜ。行くぞ、ユーノ」

「…うん」

なのはの視線があいつに向いている間にユーノを連れて退散する。

…正直、なのはにあんな目を向けられて、ショックが大きい。
ずーん、と落ち込む俺。

「竜也、大丈夫なの？」

ユーノの優しさが俺に染み渡る。

お前がこの世界の最後の良心だ！

「ああ、大丈夫だ。心配かけたな」

俺がそう言うのと。

「いや、そうじゃなくて、彼と戦うことだよ。竜也、まだ攻撃魔法
を使えないでしょ？」

「あっ…」

どうしよう…

本当、世界はこんなはずじゃないことばかりだよ…

~~~~~

「奏真君！　なんであんな約束をしたの！？」

竜也が帰った後、俺はなのはに詰め寄られています。

「奏真君！　聞ってるの！？」

「聞ってるよ。…悔しいけど、竜也がいうことは正しいし。俺もこのままじゃあダメだと思ってたからな…」

今のままじゃ、何かあっても、なのはもフェイトも守れない。

「奏真君…」

…そんな顔をすんなよな。

俺が悪いみたいじゃないか。

…いや実際、俺が悪いか。



「なのは…頼みがあるんだけど…」

「私に？ 何かな？」

「俺を鍛えて欲しいんだ」

「えっ、ふええ！？ む、無理だよ！ 私に教えるなんで…」

「そこをなんとか頼む。攻撃魔法と模擬戦の相手だけでいいから！  
防御魔法は使えるし…  
飛行もできる。」

あと、攻撃と経験だけだ。

「で、でも…」

「頼むよ。なのはしか頼りにできる人がいないんだ…お願い！」

「私しか…？」

「ああ。なのはにしかこんなこと頼まない」

やっぱり、頼んでもダメかな？

けど、独学だと間に合わないと思うし…

「そ、そうなんだ。私しか…。も、もう仕方ないな、奏真君は。わかったの！ なのはが奏真君を鍛えてあげるの！」

あれ？

さっき嫌がってなかったけ？

「なのは、本当にいいのか？」

「もちろんだよ！ 奏真君が私だけを頼りにして来たんだから」

今、だけ、を強調しましたよね？ 何で???

「家に帰ったら、私と一緒に二人で特訓なの！ レイジングハート  
！ 奏真君の特訓プランを考えるの！」

(All right!)

「な、なのは？」

やる気に満ち溢れているなのはに声をかけるが反応はない。

「うーん。やっぱり私と一緒に砲撃型にしてっど。あっ！ バリア  
ジャケットもお揃いとかいいよね！ それでー」

人選ミス、したかな…

こうして俺、山城 奏真の強化計画が発動した。

責任者・指導…高町 なのは

監修・指導…レイジングハート

被験者…山城 奏真

~~~~~

俺たちは旅行から帰ってきたらすぐに特訓を始めた。

なのはとレイジングハートに何個か攻撃魔法を習い、後はひたすら模擬戦。

レイジングハートをなのはから借りて、授業中にもマルチタスクを使って頭の中で、仮想敵と特訓。

そのおかげでレイジングハートのセカンドマスターって奴になった。

あ、あとバリアジャケットはなのはとお揃いにされた。
まあ、スカートではないし、リボンもないけど…見た目は殆ど同じだ。

フェイトには何度か連絡は入れたし、お土産を渡したけど、勝負のことは知らせなかった…

俺にジュエルシードには近づくなんて言ってたし。
また心配させるのも悪いと思ったしな。

そんなわけで、一週間がたった。
今日は竜也との勝負の日だ。

今は約束の場所になのはと向かっている。

「奏真君、レイジングハートは本当に使わないの？」

「使わない。竜也もデバイスは使わないんだ…俺だけが使うわけにはいかないよ」

「…そっか。奏真君、頑張ってね！」

「任せろ！絶対に勝つさ」

そして、約束の場所に着いた。

竜也はユーノと先に来ていたようだ。
審判はユーノがしてくれる。

「…逃げずによく来たな」

「…ああ」

竜也と俺は対峙する。

「お前がどのくらい強くなったのか見せてみる！」

「なら始めるか！」

俺たちはバリアジャケットを纏う。

「それじゃあ、奏真対竜也の模擬戦を始めるよ！ レディ！」

俺は構える。

この勝負、勝つ！

絶対だ…。

「ゴー！」

こうして、俺たちの戦いが始まった。

そのにじゅうよん！

俺は竜也へと走りながら、詠唱を始める。

「福音たる輝き、この手で貫け。光のもと、鳴り響け！」

俺は魔力で四つの槍を作る。

まずは様子見だ！

「デイベインランサー、シュート！」

「射撃魔法か…こんなの効かねえよ」

竜也が障壁を張って防ぐ。

けど、それは予想済みだ！

「我が手に剣を、この手に勝利を！」

俺は竜也の後ろに回り込み、魔法で剣を作る。

そして、

「ブレイク、セイバー！！」

剣を振り下ろす。

これには、障壁破壊の術式も入っている。

だから、障壁を張っても防げない。

俺がそう思って放った一撃は見事、竜也に防がれていた。

俺と同じ、魔力で作られた剣によって：

「考えることは同じ：みたいだな」

竜也が俺にそう言うてくる。

「ああ、案外、相性がいいのかもな」
俺がそう返すと、

「お前となんてごめん被るね！」

「そうか、やっぱり気が合うな：俺もだ」
つばぜり合いは俺が押し勝ち、さらに切りかかる。

それを竜也は空に逃げることで回避した。

そこで、剣が壊れる。
デバイスを使えば別だけど：ブレイクセイバーはあまり長くは持たないのが弱点だ。

「なら、次は俺の番だぜ！」

竜也がそういうと、俺に向けてバインドを放って来た。

：あれは確か、チェーンバインドだな。

バインドの数は全部で三本。
かわせないことはない！

俺はそれを飛び回りながら回避する。

「おいおい、逃げるだけか？」

「なら、捕まえてみろよ！」

「言ったな…これでどうだ！」

竜也はさらに二本、増やして来る。

それでも俺は捕まらない。

おかしいな…

これくらいじゃあ、捕まらないのは竜也もわかってるはずなのに…
たぶん、何かある。

そんなことを考えながら、回避を続ける。

ん？ だんだん俺の位置が変わってる？
まさかっ！

そう思ったときには、遅かった。

俺は両手、両足をバインドで固定される。

「くっ、設置型か」

「はん、まんまと引つかかったな…んじや、お前はこれで終わりだ！」

竜也はそういうと、砲撃魔法の準備をする。

これは!?

まさか…

「行くぜ！　なのはと同じ砲撃魔法！」

そして、竜也の砲撃が放たれる。

「ディバイン、バスター！」

「奏真君!!」

なのはの呼ぶ声が聞こえる。

向かってくる水色の魔力の固まり。

俺はなす術なく、その砲撃を受けた。

~~~~~

「はあ、はあ、はあ。やったか…?」  
俺は荒く息を吐きながら、そう呟く。

まだ、煙で隠れていて、あいつの姿は見えていない。

俺の魔力量はそう多くない。

なのはやフェイトみたいに膨大な魔力があれば、砲撃とかもバンバン撃てるんだけどな…

それにしても、勝っちゃったな。

結局、あいつは主人公じゃなかったってことか。  
これからは俺が――

そこで煙が晴れる。

「ふう、危ない、危ない。ちょっと今のは焦った」

「ははは、…やっぱりですか。このヤロー」

やったか…とか、やられフラグ立ててんじゃねえよ、さっきの俺。

「じゃ、今度は俺の番、だな」

そういうとあいつは、周りに魔力弾を作った。その数、20。

そして、

「シュート！」

俺に向けて一斉に放った。

「クソっ！」

俺は必死に障壁でそれを防ぐ。

その隙に、あいつは接近して来て…

「これがなのは直伝！ 必殺！ デイバイン…」

緋色の魔法陣が展開される。

駄目だ…回避できない！

「バスター…！」

俺に砲撃を殴るように放ってきた。

いや、それはスバルの技だからな。

まだ10年くらい早いぞ！

このヤロー…！！

そんな突っ込みを心の中でしつつ、俺は意識を手放した。

~~~~~

奏真君が勝った！

私は急いで、奏真君のもとに向かう。

「奏真君ー！」

「おっ、なのはか。勝ったぞ！」

そういつて、ピースをしてくる奏真君。

「うん、かっこよかったよ！」

「あはは、ありがとう。なのはとの特訓の成果が出たかな…」
本当に嬉しそうに笑う奏真君。

私も嬉しい。

一緒に特訓、頑張ったもんね。

「これからは一緒にジュエルシード集めもできるね！」

「ああ、足を引っ張らないように頑張るよ」

奏真君とそんなことを話していると…

「「っ！」」

ジュエルシールドの発動を感じた。

「早速か…」

「行こう、奏真君！」

竜也君をユーノ君に任せて、私と奏真君はジュエルシールドのもとへと向かった。

~~~~~

「奏真君、フェイトちゃんの相手は私がするの」

「ん、わかった。なら俺はアルフの方だな」

俺たちは役割を確認する。

なのはがフェイトと。

俺がアルフと戦うことに決めた。

「よし、まあ頑張るか！」

「うん！」

ジュエルシードが見える位置に來ると、フェイトとアルフの姿も見えた。

あっちもこちらに気づいたのか…フェイトが早く封印をしようとする。

それを見たのはもレイジングハートを射撃モードに変えた。

フェイトの封印の魔法となのはの封印の魔法が放たれる。

そして、それは同時にジュエルシードに直撃した。

「リリカルマジカル！」

「ジュエルシードシリアル14！」

「封…」

「…印！」

同時にジュエルシードが封印の魔法をさらに浴びる。

しかし…ジュエルシードに変化はなく、ただ宙に浮くだけだった。

「奏真…来ちゃダメっていったのに…」  
フェイトは悲しそうな顔をしてそう言った。

「えっ？ なんのこと？ 奏真君」

「こないだフェイトに連絡した時に、ジュエルシードにはもう近づくなくていわれたんだ」  
俺はなのはに説明する。

「それが分かっているのに、どうして？」  
フェイトが再び問いかけてくる。

「ごめん、フェイト。でも、ジュエルシードがあんなに危ないものだって知ったのに…。なのはやフェイトが危ない目に合うかもしれないってわかったのに…じっとなんてしてられなかったんだ…」

「…奏真」

「俺は、回収の邪魔をする気はない。ただジュエルシードがまた危

険な状態になった時に、防ぎたいだけだ」

「…わかった。けど、あんまり危ないことはしないで」

そうならないことを祈るけど…

たぶん、無理な気がする。

「…善処するよ」

~~~~~

奏真君の話は終わり、次は私の番。

「この間は、自己紹介出来なかったけど…私、なのは！ 高町なのは！ 私立聖祥大付属小学校3年生」
私は前に出来なかった、自己紹介をした。

けど、フェイトちゃんの答えは…

(Scythe Form)

「!-!」

私もすぐにレイジングハートを構える。

フェイトちゃんは攻撃体勢に入り、私に向かって攻撃をして来た。

「レイジングハート！」

(Flier Fin.)

足に魔力の羽根を展開して、その攻撃をかわす。

「なんで…いきなり…」

「…次は敵同士って言った」

そう言うと、フェイトちゃんは追撃をかけてくる。

「…もう！」

(Protection.)

私は障壁を張って、それを防ぐ。

…大丈夫。行ける！

「お話を、しようってば！」

障壁を張りながら、魔力弾を一つ形成。

「シュート！」

それをフェイトちゃんに向けて、発射した。

フェイトちゃんは、それを回避し、凄いスピードで私の後ろに回り込んでくる。

フェイトちゃんはやっぱり、早い！
たぶん、私よりも全然。

けど、私だって…

奏真君と一緒に特訓したんだから！

(Flash Move.)

レイジングハートが私の機動力を上げてくれて、フェイトちゃんの後ろに回り込む。

(Divine Shooter.)

杖の先に魔力を収束させ、凝縮する。

「シュート！」

そしてフェイトちゃんに向かって放った。

それを早く察知したフェイトちゃんは振り向き…

(Defencer.)

バルディッシュを前に出し、防御魔法で防いでくる。

「フェイトちゃん！」

「!!」

「今は、話し合うことはいらなくて言っただけど…じゃあ、いつになったら話をしてくれるの？」

「……………」

フェイトちゃんは何もいわない。
ただ、無言で私を見ている。

「目的が同じだからぶつかり合ったり、競い合うことになるのは…それは仕方ないのかも知れないけど…」
私もフェイトちゃんを見つめながら、話を続ける。

「けど…何も分からないままぶつかり合うのは…私…嫌だ！」
私は思いの丈をぶつける。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で…ユーノ君はそれを元通りに集めなおさないといけないから…！ 私はそのお手伝いで…」

「……………」

まだ、無言のフェイトちゃん。
けど、話は聞いてくれているみたい。

「だけど…お手伝いをするようになったのは偶然だったけど…今は自分の意志でジュエルシードを集めてる！ 自分が暮らしている街や自分の大切な人達に危険が降りかかるのはもう嫌だから！」
そう言って、私は奏真君を一度見る。

「……………」

「これが…私の理由！ フェイトちゃんは？ フェイトちゃんはどうして集めているの？」

「……私は……」

「フェイト！ 答えなくていい！」

フェイトちゃんが答えてくれそうになったその時。
たぶん、奏真君にバインドで動きを封じられていたアルフさんがそう言った。

「優しくしてくれる人たちのところでぬくぬく甘ったれて暮らしているガキンチョになんか…何も教えなくていい！」

「えっ……」？

「あたしたちの最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

その言葉を聞いて再び、バルディッシュを構えるフェイトちゃん。

…お話、聞けそうだったのにな。

その時。

ドクンッ！

私は、ジュエルシードが鼓動を打つのを感じた。

フェイトちゃんもそれに気づいたのか…
急いでジュエルシードへと向かっていく。

私もそれを追いかける。

ドクンッ！

そして、またジュエルシードが鼓動を打つ。

早く、封印しないと…！

私は、レイジングハートをジュエルシードへと向ける。
フェイトちゃんもバルディッシュをジュエルシードへと向けた。

それはほぼ同時で…
そしてーーーー

レイジングハートとバルディッシュが同時にジュエルシードにぶつかった。

「あっ…」

「えっ……?」

そう、奏真君とアルフさんが漏らした声が聞こえた時。

「「!」!」

レイジングハートとバルディッシュに大きなヒビが入った。

その瞬間、ジュエルシードから光が溢れてきて、私たちを吹き飛ばそうとする。

「きゃあああ!」

「くう……くっ……!」

「なのはっ! フェイトっ!」

その光はさらに大きくなり、その輝きをどんどん増していくのだっ

た。

そのにじゅういー

「なのはっ！ フェイトっ！」

いきなりジュエルシードが光を放ち、なのはとフェイトが吹き飛ばされた。

二人ともなんとか無事みたいだが…デバイスにヒビが入っている。

あれじゃあ、封印できないな…

俺は苦虫を噛み潰したような顔になる。

…仕方ない。

悪いな、フェイト。

約束いきなり破るわ…

「…アルフ、お前はフェイトのどこに行け」

そう言って、アルフにかけていたバインドを解く。

「そりゃ、もちろん行くけど…あんた、どうする気だい？」

アルフは俺にはあまり敵対的じゃない。

さっきも、なのはに攻撃を加えようとしたから、止めたけど…俺は一切攻撃してこなかった。

「…ジュエルシードを封印する」
そう言って、俺はジュエルシードへと駆け出した。

俺は封印の術式なんて使えない。
できるのはただ、魔力を注いで力尽くで止める方法だけ…

「っ！ 奏真！」

「奏真君っ！」

フェイトとなのはの静止の声が聞こえる。
…でも俺は止まらない。

俺は光るジュエルシードを素手で押さえ込む。
手の中で暴れ出すジュエルシード。
それを必死で両手で押さえ込む。

手は凄く痛い…。
どんどん血も溢れて来る。

「奏真！ ダメ、やめて！」
フェイトが悲鳴じみた声を出す。

俺は、押さえ込みながらその場に座り…魔法陣を展開する。

「止まれ…止まれ！ 止まれ！」

さらに輝きを増すジュエルシード…。
止まる気配は、ない。

「止まれ！…止まれよ！」

その光は俺までも包んでいく。

俺の力じゃあ止まらないのか…

そんなことを考えていると、俺の手を二つの手が包み込んで来た。

「…奏真は無茶ばかりだ」

「本当に奏真君は…心配かけすぎだよ」

「フェイト、なのは…」

俺は二人に驚く。

なんでこんな危ない所に…
そんな俺の考えを読んだのか。

「放ってなんて置けないよ…」

「…だって友達なんだから」

二人はそう言って来た。

「お前ら…なら、一気に行くぞ！」

「「うん！」」

俺たちは、ジュエルシードへと魔力を注ぎ込む。

すると、だんだんと光が弱くなってきた。

「「止まれ…止まれ…止まれー！」」

そんな声とともにさらに、一気に魔力を注ぎ込んだ。

ジュエルシードの光がさらに弱まり、そして…完全に光が消えた。

「はぁ……はぁ……はぁ…」

立ち上がり歩こうとするが体がふらつく。

…魔力の使い過ぎかな？

「奏真っ！」

「奏真君っ！」

二人の声が聞こえたが俺はそこで意識を手放した。

~~~~~

奏真が倒れた。

あんな無茶をするから…

奏真の手は血だらけで、身体もボロボロだった。  
見ているのも痛々しい。

私は簡単な治癒魔法をかける。  
ゆっくりだが、傷が塞がっていく。

「…奏真君」

隣でなのはも心配そうにしている。

その姿を見て私は…

「大丈夫。魔力の使い過ぎが原因だから」  
だからすぐに良くなる、と教えていた。

「…ありがとう、フェイトちゃん。私、まだ治癒魔法使えなくて…」

「…奏真はまた無茶するだろうから、すぐに覚えたほうがいいと思う」

うん、絶対にこれから無茶をすると思う。  
…だって奏真だもん。

「うん。すぐに使えるように練習する！」  
なのははそう言っていた。

そこで、ハッと気づいた。  
私、なのははと普通に会話している。

敵同士なのに…  
これじゃあ、ダメだ！

なのに…  
「フェイトちゃん。このジュエルシールドはどうするの？」  
となのはが聞いてくる。

「…それは奏真が頑張って封印したものだから、奏真のもの」  
私はそう答える。

「そうだね。奏真君が一番頑張ってたし…」  
そう言っとなのはは奏真を見つめる。

その目はとても優しく、愛おしげで…  
なのははにとっても奏真は大切な人なんだなと感じた。

「ねえ、フェイトちゃん」

「…何？」

「私たち、奏真君のことになると普通にお話できるね？」

「……………うん」

確かになのはと会話するときはいつも奏真が関わってる。  
だから、私は肯定する。

「私はね、フェイトちゃん。今みたいにもっと色んなことをフェイトちゃんと話したい。楽しいことや嬉しいこと。悲しいことや辛いこと。沢山、話がしたいの…友達に、なりたいの」  
なのはは真剣な目を私に向けてそう言った。

友達になりたい…

なのはが言ったその言葉が頭の中でグルグル回る。

私と友達に…

何度も攻撃して、傷つけた私と…

敵同士の私と…

———お互いが友達だと思うことかな———

奏真と友達になった時に奏真が言っていたことが頭に浮かぶ。

お互いが友達になりたいと思えば友達になれる。

なのは私と友達になりたいって言ってくれた。  
…じゃあ、私は？  
私はどう思っているんだろ？

「フエイトちゃん？」

考え込んでいた私はなのはのその声で、意識を戻す。

「フエイトちゃん？ 大丈夫？」

「…うん、大丈夫」

「そっか。なら良かった」  
なのはは笑顔でそう言う。

「…さっきの答えだけど…今はまだ答えられない。ジュエルシードを集める限り、私と貴女は敵同士だから…」

「…うん」

私がそう話すと先ほどの笑顔は消え失せ、なのはの顔は暗くなった。  
だからだろうか。

「けど、全部が終わったら必ず答えを出すから…」  
私なのはにそう言ってしまったのは…。

「うん、うん！ わかったの。待ってるから！」  
なのははそう頷きながら言う。

その顔にはまた笑顔が戻っていた。

~~~~~

「ん？　ここは…」

目が覚めると自分の部屋だった。
どうやら誰かが運んでくれたみたいだ。

枕元には封印されたジュエルシードが置いてあった。

…なんでここに？
そう思っていると…

「あっ、奏真！」

なのはが部屋に入ってきた。

「そうか。竜也が運んでくれたのか…」

あの後、気絶した俺は竜也に家まで運んでもらったらしい。

今度、礼を言わないとな。

そんなことを思いつつ、なのはにジュエルシードのことを聞いてみる。

「なんで、ここにジュエルシードがあるんだ？」

「それはフェイトちゃんが、奏真君が頑張って封印したから奏真のものだって言ってたからだよ」

いや、俺はジュエルシードいらないんだけどな…

けど、どっちに渡せば角が立つし。

これは俺が持っていよう。

それから話を聞くと、まず、レイジングハートは今、自動修復中だけど直るらしいってこと。

次になのはがフェイトに友達になりたいと話したらしい。それにフェイトは全部が終わったら答えを出すって言うてくれたんだとか。

それらを嬉しそうに話すのは見て、全ていい方向にうまく進んでるのかな、と思った。

けど、それは俺のただの勘違いで：

フェイトが辛い目に合っているなんて俺は全く知らなくて：

この時の俺は、ただなのは話を笑いながら聞いているだけだった。

そのにじゅうろく!

(お土産?)

(うん。何がいいかな?)

(うーん…)

俺は今、悩んでいる。

なのはに話を聞いた後。

遅くなったが、夕飯を食べた。

父さんや母さんは何も聞いてこなかったけど…

子どもが気絶して帰ってくるのは、普通のことじゃない。

一応、適当な理由をなのはと一緒に話したけど…絶対に嘘ってバレてるな。

まあ、全部終わったら話すことにしよう。

それでその後、治療のお礼をフェイトにいうために念話したら、冒

頭に戻るというわけだ。

なんでもお母さんへのお土産を何にしようか考えているらしい。

(甘いもの…なんてのはどうだ?)

うん。無難だけど、ハズれることはないだろう。

(甘いもの?)

(ああ、甘いものなら女の人は好きだろうし。確か、何かの研究をしてるんだよね?)

(…うん。何の研究かはわからないけど…いつも研究してるよ?)

(なら、やっぱり甘いものでいいと思うぞ。頭を使うと糖分がほしくなるらしいし)

らしい、というのは俺はまったく、そんなことにならないから分からないんだ。

(…うん、そうだね。いいかもしれない)

(だろ? それに疲れてそうなら、一緒にお茶でもして、休憩させてあげなきゃ)

(一緒にお茶か…いいね)

お母さんとお茶をしてるところを想像したのか、フエイトの声が明るくなる。

（あつ、なんだったらウチの店で買うか？ 結構、人気の店なんだけど…）

（そういえば、前に貰ったシュークリーム、美味しかったね）

というわけで、お土産は翠屋のシュークリームになりました！

（お母さん、喜んでくれるといいな）

（うん）

~~~~~

「お土産はこれでよしっ」と

私は奏真に勧められた、シュークリームの中を確認する。

うん、大丈夫。崩れてない。

「甘いお菓子か？　こんなもの…あの人は喜ぶのかね？」  
アルフが私の手からお菓子が入った箱を取り、持ちあげる。

「昨日、奏真と話し合って決めたんだ。疲れている時は甘いものな  
んだって」

お店に行ったら、まだ営業前なのに売ってくれた。  
奏真が頼んでいたらしい。

…本当、奏真には感謝だ。

「ふうん。でもあの奏真って子には感謝しないとね。フェイトと仲  
良くしてくれてるし」

「うん。大切な友達だよ」

私は笑ってそう話す。

アルフもそんな私を見て笑った。

「じゃあ行こう。次元転移、次元座標876C　4419　331  
2　D699　3583　A1460　779　F3125」

足下に金色の円形の魔法陣を展開する。

「開け　誘いの扉　時の庭園　テストロッサの主の元へ」

こうして私たちは次元転移した。

母さん、お土産喜んでくれるかな。

時間があつたら、奏真が言つてみたいにお茶とかしたいな…

~~~~~

「ん？」

「奏真君？　どうしたの？」

「いや、なんでもない」

今、魔力を感じたけど、一瞬で消えた。

…フェイトたちかな。

頑張れ、フェイト。

学校で授業を受けるが…

今日はレイジングハートがないので、マルチタスクを使つての特訓はなしだった。

相変わらず歴史とか覚えらんねえ。

そういうわけで時間は過ぎ、お昼。

朝、バスの中で誘われたので、今日は久しぶりになのは達とお昼を食べることにする。

「うーす」

「あっ、奏真君！」

「こっちだよー！」

「奏真！ 遅いわよ！」

それぞれ、三人らしい返答が返ってくる。

昼食を取りながら、会話する。

「あんた、昨日。木から落ちて気絶したんだって？」

「ぶっ。な、なんで知ってんだよ…」

俺はギロリ、となのはを見るが…なのはは全力で首を横に振る。

ちなみに木から落ちたというのはのはと竜也が考えた言い訳だ。
…なんでアリサが知ってるの？

「わ、私じゃないよ」

「じゃあ、誰が…」

「竜也くんだよ？ 昨日、気絶した奏真くんを運ぶのは大変だった
ぜ…とか皆にいったから」

俺が考え込んでいると、すずかが真相を話してくれた。

「…あいつ、昨日は感謝したのに…」
今度会ったら、ボコボコにしてやる…。

「かつこ悪いわね、あの山城 奏真ともあろう者が木から落ちて気絶したなんて、他の下級生が聞いたら、ガツカリするわよ」

「奏真くん、下級生のヒーローみたいなものだもんね…」

「いや、ヒーローとかじゃないけど…」

…なんだよ、ヒーローって？
初耳なんですが。

「でも、奏真君。下級生の子から凄く人気あるよ」

「…そうか？」

懐かれてると思うけど…な。

そんなわけで、意外な事実を知ったお昼だった。

〵
〵
〵
〵
〵

パシッ

「うぐっ…」

パシッ

「うっ…」

パシッ

「うわっ！」

「たったの5つ……？　これは…あまりにもひどいわ」
母さんが冷たい目をして私にそう言って来る。

「はい……」

私の服はすでにボロボロに破け散っている。

「ごめんなさい…母さん…」

「いい？　フェイト。あなたは私の娘…大魔導士プレシア・テスト
ロッサの1人娘」

母さんは私の近くに来て、話し始める。

「不可能なことなどあつてはダメ…。どんなことでも…そう…どんな
なことでも、成し遂げなければならぬの」

「はい…」

そう私は母さんの娘なんだ。
だから、どんなことでも…

「こんなに待たせておいて…上がってきた成果がこれだけでは……
母さんは笑顔であなたを迎える訳にはいかないの。わかるわね…フ
エイト」

「はい…わかります」

母さんの期待に答えられなかった私が悪いんだ。

「それと、これは何？」

母さんがお土産の箱を持ってそう聞いて来る。

「…母さんにお土産ー」

買ってきたんだ、と言おうとすると、母さんは箱を下に落とし、足で踏みつける。

「…あっ」

ぐちゃぐちゃに潰れるお土産。

私が呆然とそれを見ていると…

母さんは杖を鞭へと変えた。

「そんなものを買ってくる暇があるなら、早くジュエルシードを集めて来なさい！」

また叩かれるっ！
ギュッと私は目を瞑った。

バシンッ

「っ！！」

バシンッ

「うわぁ！！」

バシンッ

「うっ…」

奏真には悪いことしたな。
…せっかく一緒に考えてくれたのにな。

バシンッ

「っ！！」

バシンッ

「うぐっ…」

バシンッ

「ぐっ……」

バシンッ

「うわぁ……!!」

母さんは鞭を構えなおし、私を見る。

「あのロストログアは、母さんの夢を叶えるためにどうしても必要なの……」

「はい……母さん……」

「あなたは優しい子だから……躊躇ってしまうこともあるかもしれないけど……邪魔する者があるなら潰しなさい!　どんなことをしても……あなたにはその力があるのだから」

邪魔する者……

あの子、なのはを……

「それから、最近、仲が良い男の子がいるわね」
母さんが奏真のことを聞いてくる。

私は素直に答えた。

「……はい。奏真って言って友達に、なったんです……」

母さんにも奏真を紹介したいなって思ってた。

奏真のことで色々聞いてほしい話もある。

だから母さんがその話を振ってきてくれて、嬉しかった。
それなのに…

「そう。じゃあ、その奏真という子、殺しなさい」

「えっ？」

母さんが何を言っているのか理解出来なかった。

…奏真を殺す？

私が…？

「…どうもその子はフェイトに悪影響を与えるみたいだしね」

「……………」

母さんの話が耳に入るけど理解できない。

なんで…

奏真は悪影響なんて与えてないよ？

「ジュエルシード集めの邪魔にもなるから、すぐに殺してしまいなさい」

殺す…

奏真を殺す…

嫌だ。

「…嫌です」

私は初めて母さんに逆らった。

「…フェイト、何と言ったのかしら。私には聞こえなかったんだけど…」

「…嫌です。奏真を殺すなんて私には出来ません…」

そうだ。

奏真を殺すなんて出来るはずがない！

だって奏真は…

「…やっぱり悪影響を与えるみたいね、フェイトが悪い子になってしまったわ」

「奏真は…奏真だけは嫌です。お願い、母さん！他のことは何でもするから、奏真だけは…」

私は母さんに懇願する。

「…仕方がないわね。じゃあ早くジュエルシードを集めて来なさい。あんまり遅くなると、母さん、うっかり手を滑らせてしまうかもしれないわ」

それはモタモタしていると奏真を殺すという脅し。

母さんがそこまで言うなんて…

母さんは鞭を杖へと戻した。

すると、私を吊っていた魔力の紐が消える。

私は地面に落ちて倒れた。

「行ってきてくれるわね？ 私の娘…可愛いフェイト」

「はい…行ってきます、母さん」
私は母さんにそう言った。

本当に母さんは変わってしまったんだ…。
奏真…。
私はどうすればいいのかな。

そのにじゅうなな！（前書き）

どうも、はくおろくです。

PV..45000 ユニーク..3500を超えました！
いつも読んでいただいております！
では本文は第27話です。どうぞ！

そのにじゅうなな!

「なのは、良かったな」

「うん!」

レイジングハートはヒビが直っていて、すっかり元どおりになっていた。

「レイジングハートも直って良かったな」

(Thank you.)

レイジングハートも元気そうな声を出している。

うん、大丈夫そうだ。

「それに引き換え…」

そう言って、俺は隣でゴミ箱に頭から突っ込んで、リアル佐清になっているものを見る。

「…お前、何してんだ?」

「お前がやったんだろうがっ!」

竜也がガバッと起き上がり、そう言って来る。

…なんだ、元気そうじゃん。
あと、なのはが怖がってるからあんまり近づくな。

「あれは自業自得だ。お前が言いふらしたのが悪い」

「べ、別に俺の武勇伝を語っただけじゃないか、何も問題ないだろうが！ …なあ、なのはもそう思うだろう？」

そう言っ、俺の後ろに隠れているなのはに竜也は話しかける。

「えっと…うんと、今回は竜也君が悪いと思うの…」

「なっ、なのはまで…いや、まだだ！ ユーノは？」

なのはにも言われたが、認めたくない竜也はユーノに話を振る。

「うーん。僕も竜也が悪いと思う…」

しかし、現実は無情だった。

「ジーザス！ 俺の味方はいないのかー！！」

竜也は大声でそう叫ぶ。

もはや、大声というより騒音に近い。

「…うるさいぞ。近所迷惑だ」

「竜也君。…少し恥ずかしいの…」

「…竜也…」

「うがぁー！ みんなヒドイ！」

四人でそんなバカなことを話している時。

「「「っ！」「」」

ジュエルシールドが発動した。

~~~~~

「蛇…」

「大きな蛇だね…。バカみたいに鱗は硬いし」

私とアルフは巨大な蛇と対峙している。

アルフの言うとおり、あの蛇の鱗はとても硬くて、私の射撃魔法じゃあ傷もつかなかった。

「今までのより…強いね…それに…」

私は視線を別の方向に移す。  
奏真たちが来たようだ。

奏真……

早くジュエルシードを集めないと…

「よお、フェイト！」

「フェイトちゃんのバルディッシュも良くなったんだ」

奏真となのはが話しかけてくる。

私はそれに答えず…

「…行くよ、アルフ」

「う、うん。オーケー！」

アルフを連れて大蛇へと向かっていった。

ごめんね…

~~~~~

「あつ、フェイトちゃん…」
隣のなのはが落ち込んでいる。

無理もないな…

前は、普通に会話できてたらしいし。

そういう俺も実は少しショックを受けていたりする。
フェイトに無視されたのは初めてだ。

様子もおかしいように見えたし。
また何かあったのか…？

そう思いながら、フェイトの戦いを見る。

大蛇はフェイトが直接、切りつけても少し傷がつくだけでダメージは少ない。

射撃魔法に限っては傷もつかないで、牽制の意味しかないようだ。

それでもフェイトは何度も特攻していく。

その動きはどこか焦っているようにも見えた。

だから俺は――

「…見てるだけなんてできないよな…」

そう呟いた。

「うん。行こう、奏真君！」

なのはも俺の意見に同意してくれる。

俺たちはフェイトを助けるために動き出した。

~~~~~

「はぁ、何だかな」

俺は一人、呟く。

奏真となのははフェイトを助けに向かっていった。

俺とユーノはそれを見ている。

別にそれはいいんだけどさ。

俺とユーノは放置ですか…

そうですか…

「まったく、二人だけで先走りやがって…」

俺にも一声くらいかけてもいいだろうがっ！

なのはとか奏真が一緒になってからはほとんどベツタリだし。

正直に言うと、寂しいわ！

「…竜也…」

ポン、と置かれたユーノの手がその寂しさを和らげてくれる。

俺の気持ちをわかってくれるのはお前だけだよ…ユーノ。



はっ、まさか、驚愕のユーノルート！？

いやいや、俺はノーマルなんだ。  
女の子が好きなんだ！  
なのはが大好きなんだー！！

「た、竜也…？ ブツブツ言っていないで行こうよ…」

〵  
〵  
〵  
〵  
〵

「はあ、はあ、はあ」

攻撃が効かない。  
あの鱗は厄介だ…

付けた傷もあの大樹ほどではないけど、少しずつ治っている。

仕方ない…一気に大技を撃つ！

「バルディツシュ！」

そう、バルディツシュに声をかけ、魔方陣を展開していると大蛇の動きが突然、止まった。

「…止まった？」

なんでいきなり…  
一体何が…

そう思って大蛇を見ると、バインドで動きを封じられていた。

桜色と緋色のバインドが見える。  
…奏真たちみたいだ。

「フェイトっ！ 今だ！」

「フェイトちゃん！」

二人が声をかけてくれる。  
このチャンスは逃さない…

「……貫け、轟雷！」

(Thunder smasher.)

私は、大蛇に砲撃を浴びせる。  
それは大蛇の横っ腹を貫いた。

大蛇は真っ二つに分かれて倒れる。

「やったな！ フェイト！」

「すごいよ！ フェイトちゃん！」

奏真となのはが近くに来て、声をかけてくる。

「……………」

さっき、私はあんな態度を取ったのに…  
どうして…

「フェイト…何かあったのか？ 様子がおかしいけど…」  
奏真が心配そうにそう言ってくる。

「…別に、なんでもないよ。ただ、役目を思い出しただけ」

「…役目？」

「…私はジュエルシードを集めるためにここにいる。それ以外は必要、ない」

母さんがいつ何を奏真にしてくるかわからない…  
私といると奏真は危険なんだ。  
そばにいちや、いけないんだ…

「フェイトそれはーっ！」  
奏真が何か言おうとした時。  
いきなり攻撃が飛んで来た。

私たちはそれぞれ障壁を張って、それを防ぐ。

攻撃のもとを見てみると、真つ二つになったはずの大蛇は二匹に分裂していた。

「うわゝ。なんか反則くせえな」  
奏真がそう言う。

うん。確かにインチキだ。  
分裂するなんて聞いてない。

「でもどうすれば倒せるのかな？　また分裂しちゃうかもしれないし…」

なのはの言うとおりで。  
また分裂するかもしれない。  
どうしよう。

「いや、簡単だ」

「「えっ？」」

私となのはの声が重なる。

…前にもこんなことがあったような気がする。

「一部を破壊するとさっきみたいに分裂しちまうかもしれないなら…もう分裂も再生も出来なくなるくらい、粉々に吹き飛ばせばいい」

な、簡単だろ？ と奏真がいつてくるけど…

言ってることはむちゃくちゃだ。

そんな簡単に…

「うん、それならいけるね！ なら、パパッとやっつけちゃおう！」

その意見になのはも賛同する。

「いや、そんな簡単には…」

いかないと言おうとする私を二人は遮って。

「「できる。三人でなら！」」

そう言って来た。

~~~~~

「「できる。三人でなら！」」

なのはと声を合わせてそう言うと、フェイトは固まっていた。

あつ、なんかおもしろい。
そんなことを考えつつ、言葉を続ける。

「俺たち三人ならできる。あんな蛇程度に負けるわけがない」

「うん！ 絶対に勝てるよ！ だからフェイトちゃん…」

「一緒に戦おう？」

俺たちがそう言うと、フェイトは顔を下に向けた。

「奏真も…なのはも…どうして私に構うの？」
フェイトが小さい声でそう言ってくる。

「なんで私に優しくするの？ なんで…」
フェイトは泣いていた。

理由は分からないけど、家で何か辛いことがあったのかもしれない。

俺は理由を答える。

「当たり前だろ。俺はフェイトの友達だぞ！」

「…私もフェイトちゃんと友達になりたいって言ったはずだよ？」
なのにも自分の思いを答える。

それを聞いて、フェイトはさらに涙を流した。

「私は…私は…」

「フェイト…フェイトに何があったかは、俺には分からない。けど、俺たちはたとえどんなことがあっても——」
また飛ばして来た蛇の攻撃を障壁を張って防ぐ。

今まで空気読んだんなら、最後まで読めってーの。

「——友達だ!!」

~~~~~



「ーーーー友達だ!!」

奏真君の声が響く。

言葉の端々からフェイトちゃんを大切に思っていることが私にも伝わってくる。

…私としては少し複雑なんだけど…

フェイトちゃんを見ると、奏真君の思いが届いているみたい。さっきまで、下げていた顔を上げて、奏真君を見つめている。

むう、新たなライバル登場の予感がするの…

でも今はそんなことより、

「行こう、フェイトちゃん!」

「えっ?」

いきなり声をかけられて、私の方を見るフェイトちゃん。

「早くしないとまた奏真君が無茶しちゃうから、私たちが見て置かないと、ね？」

大蛇の方を見てみると、奏真君が周りを飛び回って、時間を稼いでくれている。

ユーノ君たちもそれをフォローしているみたいだ。

「……うん、そうだね。なのは」

それを見ていたフェイトちゃんも賛同してくれる。

って今！

「名前で呼んでくれたね…」

きちんと私の方を見て呼んでくれた。

私の名前を…

「えっ？ あっ、えっと…」

フェイトちゃんは恥ずかしそうにあわあわする。

…すごくかわいいの。

これは奏真君には見せちゃダメなの。

「すごくうれしいよ、フェイトちゃんがそう呼んでくれて…」

「…私も…なのは友達になりたいんだ。…って、くれるかな？」

「うん、もちろんだよ！　なら、今日から私たちも友達だね！」

「…ありがとう、なのは」

フェイトから友達になりたいって言ってくれて私はすごくうれしくなった。

このまま、喜んでいたいのはやまやまんだけど…早く、奏真君の所に行かないと。

「うん！　じゃあ、フェイトちゃん！　行こう！」

「うん！」

こうして、私たちは奏真君の下へと向かった。

二人で一緒に…。

そのにじゅうなな！（後書き）

最後まで、読んでいただきありがとうございます！

今回のお話はどうだったでしょうか？

楽しんでもらえているとうれしいです！

あと、明日から少し更新速度は落ちますが…一日一話は書いていきます！

**そのにじゅうはち！（前書き）**

どうも、はくおろくです。

今回は VS 大蛇が終わります。

あつ、あとあの人も出てきますよ。

では第28話です、どうぞ！

そのにじゅうはち！

「奏真っ！」

「つと、危ねえ」

ユーノが掛けてくれた声で大蛇の尻尾をかわす。

やっぱ、二匹いるとやりづらい。

ユーノたちのサポートがなかったら、もうやられていただろう。

「よっと」

今度は口から魔力弾を放ってきた。  
障壁を張ってそれを防ぐ。

時間稼ぎだから、負けはしないけど…勝てもしない。

早く来いよ！

なのは、フェイト。

~~~~~

奏真が障壁で防いでいる間に少し休む。

何度か攻撃を入れたが…俺の攻撃じゃあ倒せなかった。

まあ、フェイトの砲撃を食らっても復活してたしな。

俺じゃあ、無理ですよっと。

あとはひたすら奏真のフォローをしてたんだけど…

何だかんだであいつもすげえな。

デバイスなしで、魔法を簡単に使ってるし…

まあ、前に負けたから知っていたけどもうかなり強いし。

成長率が半端じゃありません。

魔法を使うたびに、運用とかうまくなってるってユーノも言ってたしな。

やっぱ、主人公さまは違いますね。

凡人とは全然…。

ティアナもこんな気持ちだったのかな？
これ見せられたら、正直へこむわ…

そんなことを考えていると、桜色と金色の魔力光が目映った。

さて、んじゃ俺はサポートを頑張りますかね。

~~~~~

「「奏真（君）！」」

「やっと来たか。…遅いぞ、二人とも」  
俺はそう二人に言った。



フェイトは…うん、もう大丈夫そうだ。

「にやはは、ごめんね」

「ごめん、奏真」

「来てくれたからいいさ。さてと、じゃあそろそろ…」

もともと怒っていなかった俺は簡単に二人を許し、大蛇を見る。  
そろそろあの蛇にもお灸を据えないとな…

「反撃開始と行こうか！」

「「うん！」」

まずはあの蛇の動きを止めないとな…

俺、なのは、フェイトで牽制に射撃魔法を放つ。

「福音たる輝き、この手で貫け。光のもと、鳴り響け」  
俺は詠唱に入る。

…やっぱデバイス、欲しいな。

「デイベインシューター」

「フォトンランサー」

「ディバインランサー」

「「シュート！」」 ? 「ファイヤー！」

大蛇に無数の魔力弾が飛んでいく。

大蛇はかわそうとするが…数が多くてかわしきれずに直撃する。

これで傷はつかなくても、動きは止まった。

「今だ！」

俺が合図を出すと…三色のバインドが放たれる。

「「「チェーンバインド！」」」

隙を逃さず、ユーノ、竜也、アルフがバインドで大蛇の動きを完全に止めた。

後は、仕上げを残すのみ！

「福音たる輝きよ、全てを撃ち抜け…」  
俺は魔法陣を展開し、詠唱に入る。

(D i v i n e B u s t e r . S t a n d B Y .)

なのはがレイジングハートを構える。

(T h u n d e r S m a s h e r . G e t S e t .)

フェイトもバルディッシュを構える。

「その光を以て、全てを貫け！」

俺も詠唱を終える。

三人で一斉に大蛇を見る。

未だ大蛇はバインドで完全に動きを封じられたままだ。

「「デイベイン…！」」「「サンダー…！」」

三人で魔力を最大限まで溜める。

それを大蛇に…

「「バスター…！」」「？」「スマッシュ…！」」

一斉に放った。

三色の魔力は混ざり合い、一つになって大蛇にぶつかる。  
その攻撃に大蛇は耐え切れず、一瞬で跡形もなく消えてしまった。

ただ一つ。

中に浮いているジュエルシードを除いては…

~~~~~

「す、すごい…」

「なんてデタラメな…」

「本当に凄いわね。…クロノ執務官、直ぐに現場に向かってください。彼らに事情を聞きましょう」

「了解です、艦長！」

~~~~~

「やったな！」

「うん！」

三人で喜び合う。

どうやら、なのはとフェイトも仲良くなったみたいだ。  
二人とも笑顔で笑っている。

それを見て俺も笑っていると…

「それであのジュエルシードはどうするの？」  
ユーノがそんなことを聞いてきた。

「うーん、みんなで封印したしな…」

前回は俺のってことになったけど、またそれってのもな…

うーん。

どうしようか、本当。

そんなことを考えていると、

「…ごめん、なのは。なのはとは友達になったけど…ジュエルシードは譲れないんだ」

「そっか。なら戦おう、フェイトちゃん。正々堂々、あのジュエルシードをかけて！」

ジュエルシードについては、なのはとフェイトとの間で話があっさりとしたようだ。

それなら、確かに後腐れはないけどさ…  
二人とも戦うの好きだよな、ほんと。

そんなわけで、俺は審判をするために二人の間にいる。

「じゃあ、ジュエルシードをかけた戦闘を行うぞ。ルールは、降参か俺が勝負ありとするまで。その他の規制はなし、いいか？」

二人は俺の話を聞き、頷く。

その目はとても真剣で、やる気に満ち溢れている。

「それじゃあ、いくぞ。レディ」

なのはとフェイトが構える。

ユーノたちも少し離れて固唾を飲んで見守る。

「ゴ……っ！」

？「っ！」

俺がスタートの合図を出す瞬間。

俺たちの目の前に一つの魔法陣が展開された。

一体何だ…

俺は身構える。

すると魔法陣から人が現れた。

「ストップだ！　ここでの戦闘は危険すぎる！」

俺たちと同年くらいの男の子だった。  
そいつは…

「僕は時空管理局執務官…クロノ・ハラオウンだ！  
聞かせてもらおうか」

俺たちにそう言って来た。

時空管理局ってなんぞ？？

~~~~~

「あれはっ！」
ユーノがそう呟く。

ついに来やがったか、あのKY野郎。
見ていたならもっと早く来いつーの。

たぶん、フェイトたちは逃げるんだろうけど…
さて、奏真の奴はどうすんのかね。

俺は、そんなことを考えながら奏真たちを見ていた。

~~~~~

「二人とも武器を引くんだ！」

確かクロノ、だっけ？

クロノはなのはたちにそう言ってくる。

こいつは一体何者なんだ？

時空管理局、何て聞いたこともないんだけど…

「このまま戦闘行為を続けるつもりなら……!!」

話を続けるクロノに向かって、突然、上から魔力弾が放たれた。

それに気づいたクロノは障壁を張って防ぐ。

「フェイト！ 撤退するよ！ 離れて!!」

アルフがフェイトに叫ぶ。

どうやら、さっきの魔力弾はアルフが放ったみたいだ。

フェイトはアルフの話を聞いて、飛び上がる。

アルフはさらにクロノに魔力弾を放つが、クロノはそれをバックステップでかわした。

その隙についてフェイトがジュエルシールドへと向かう。

「くっ！」

クロノはそれを見て、フェイトへと杖を向ける。

：コイツ、まさかフェイトに攻撃をつ！

(S t i n g e r   R a y.)

デバイスの電子音と共に魔力弾がフェイトに飛んでいく。

俺は移動魔法を使い、フェイトの前に飛び出してそれを身体で受けた。

「奏真君！」

「奏真っ！」

なのはとフェイトの叫びが響く。

魔力弾がまともに直撃して、俺のバリアジャケットはボロボロになっている。

けど、俺は痛みをあんまり感じていなかった。

「どのどいつだか知らないけど…お前、誰に攻撃してんだよ…」  
そう言ってクロノを睨む。

俺が感じたのは、怒り。

「君もその子たちの仲間か!？」  
クロノはそう言って俺に、デバイスを向けてくる。

「…フェイト。ここは俺に任せて、さっさと行け」  
クロノの言葉には答えず、フェイトにそう言う。

「で、でも奏真…」

俺の姿を見て、フェイトは躊躇しているみたいだ。  
だから今度は強い口調でいい放つ。

「早く行け！」

「…うん、わかった。奏真…気をつけて…」

そう言い残すとフェイトたちは撤退しようと、飛び上がる。

「させるかっ！」

「させるんだよっ！」

撤退の邪魔をしようとするクロノに魔力弾を放つ。

「くっ！」

クロノはそれを防いだが…その間にフェイトたちは撤退していた。

「やっぱり仲間だったのか!？」

それを見たクロノが俺にデバイスを向けながら、そう言うてくる。

「……………」

俺はそれに答えない。

ただ、じっとクロノを睨む。

「答えろっ!!」

クロノがもう一度、聞いてくる。

「俺はフェイトの仲間なんかじゃない」

そういいながら、周りに魔力弾を形成していく。  
なんでかな。

今なら、誰にも負ける気がしない…

「俺はフェイトの……」

そして、構える。

クロノも警戒しているようだ。

「……友達だっ!!」

俺は一斉にクロノへと魔力弾を放った。

時空管理局っていうのがどんなもので…

お前がどれだけ偉いのかは俺は知らない。

けど…お前が俺の友達を傷つけるっていうのなら…

お前は、俺の敵だ!



**そのにじゅうはち！（後書き）**

最後まで読んでいただきありがとうございます！  
さて、今回の話はどうだったでしょうか？

次は VS クロノ戦です。

次もまた見てくれるとうれしいです！

## そのにじゅうきゅう！（前書き）

どうも、はくおろくです！

なんと書けましたので、続きを投稿します。

V S クロノ戦です！

では、第29話です、どうぞ！



そのにじゅうきゅう!

俺は一斉にクロノへと魔力弾を放った。

「くっ!」

俺が放った魔力弾はクロノの障壁によって全て防がれる。

「お返しだ!」

そういつて、クロノが俺に魔力弾を撃ってくる。

それをかわし、空に上がって詠唱を始める。

「我が手に剣を、この手に勝利を!」

その間にクロノは追撃しながら、射撃魔法を放ってくる。

(S t i n g e r R a y.)

向かってくる弾速の速い魔力弾を俺は、魔力で作った剣で破壊する。  
爆散する魔力弾。

周囲の視界が遮られる。

「はあああああ!」

俺はそれを突き抜けて、クロノへと突貫していく。  
しかし、それも障壁を張られて防がれた。

「君！ これは完全な公務執行妨害だ。犯罪者になりたいのか！」

「…犯罪者でもいいさ…友達を守れるならな！」  
そう言って、俺は剣をクロノに振り下ろす。

クロノはそれをまた障壁で防ごうとするが…

「食らえ、ブレイク、セイバー！！！」

俺はその障壁を破壊する。

「なっ、…くっ！」

一瞬、驚きの表情を浮かべたクロノに蹴りを放つが…  
クロノはそれを距離を取ることかわしてきた。

「ディバイン、ランサー」

かわされた後、俺は即座に魔力弾を作る。

「シュート！」

そして、クロノに放った。

クロノはそれに杖を向けて…

(Stinger Snipe)?

同じく、魔力弾で相殺、いや…

「スナイプショット！」

俺の魔力弾を貫通した後、もう一度俺に向かってくる。

俺はそれを剣で破壊しながら、回避する。

すべてを破壊したと同時に剣が壊れたので、もう一度作成し、再びクロノと対峙した。

「はあ、はあ、はあ」

「……………」

くそっ！

強いっていうか、うまいな。

俺よりも全然、戦い慣れしてる…

こんだけやっても息一つ切れていない。

そう考えていると、クロノが突っ込んできた。  
いきなりなこと少しあわてる。

クロノが杖を横薙ぎに振ってくる。

俺はそれを剣で受け止める。

しかし…

(Break Impulse.)

クロノのデバイスがそういうと、俺の剣が一気に砕け落ちた。

「えっ？」

俺はそれに驚いて、動きを止めてしまう。

「ブレイクインパルスは振動エネルギーを送り込んで粉碎する魔法だ。そんな剣では防げない」

クロノはそう言うのと、俺に蹴りを放つ。

「ぐっ！」

蹴りがモロに腹にはいつて一瞬、呼吸が止まる。

腹の中のものが逆流しそうだ。

クロノがその隙を見逃すわけもなく、さらに格闘戦を仕掛けてくる。

俺はそれになんとか耐えようとするが、先ほどのダメージもあり、耐え切れずに下に吹き飛ばされた。

「ぐあああー！」

俺が地面に叩きつけられると、

(S t i n g e r   S n i p e) ?

クロノはさらに上から魔力弾を浴びせてきた。

クロノの波状攻撃に俺は為す術もなく、それを全て食らってしまふ。

そして…

「ブレイズキャノン！」

(B l a z e   C a n n o n.)

すぐさまクロノがトドメの砲撃を撃ってきた。

青色の魔力光が俺に近づいてくる。

このまま、負けるのか。

一撃も与えることができないで…  
終わるのか。

こんな簡単に…

ふざけんな…

俺は自分の思いを通すために…

なのはやフェイト…

大切な人たちをこの手で守るために…

この手に魔法を取ったんじゃないのか。

訓練をしてきたんじゃないのか。

いろんなことが頭の中に浮かぶ。

ただ、耐えるだけじゃない…

いろんな理不尽な出来事に、立ち向かっていけるような。

そんな…

そんな人になりたくて俺は…

そうだ！

だから、俺はっ！

こんなところで…

こんなにあっさりと…

負けるわけにはいかねえ！

回避はもう間に合わない。  
障壁ももう間に合わない。  
なら、あとは…

俺に砲撃が直撃した。

〵  
〵  
〵  
〵  
〵

砲撃が直撃したのを見て、  
「奏真君っ！」  
私は思わず、そう叫んだ。

奏真君はもうあんなにボロボロだったのにつ！  
砲撃まで撃つなんて：

私は現れた男の子を睨みながら、奏真君の下へ向かおうとすると突然、竜也君に腕を掴まれて止められた。

「待て、なのは」

「待ってなんていられないよ！ 早く、奏真君の所にいかなくちゃいけないの！ 竜也君、手を離して！」

私がそうお願いするが竜也君は離してくれない。

「奏真のことが信じられないのか？」

「えっ？」

竜也君が何といったのか、わからずにもう一度聞き返す。

「だから、奏真のことが信じられないのかっていつてんだよ。あいつがそう簡単にやられるわけない。それはなのはが一番、知ってるんじゃないのか？」

「そ、それはそうだけど…」

うん、奏真君は簡単に負けたりしない。  
簡単に諦めたりしない。

それにあの時の奏真君の目は…



絶対に譲らないときの目だった。

「だったら、なのはが一番に信じてやらないと」

「……うん、そうだね。ありがとう、竜也君」

私はお礼の言葉を竜也君に言う。

そうだね。

私が奏真君を信じないと：

応援しないといけなかったんだ。

「それにほら、あいつはまだ全然諦めてないよ」

「奏真君…」

私と竜也君が目を向ける先には、さらにボロボロになりながらも立ち上がっている奏真の姿あった。

~~~~~

「なっ、まだ立てるのか…」

クロノが立ち上がっている俺を見て、驚愕の声を上げる。

「ははは。何とか、耐えたもんね…」

そういつて俺は笑う。

「…もう十分だろう。無駄な抵抗はやめるんだ」

「そう簡単には諦められないんだ。俺にもあるんだよ、男の子の意地っていうのが」

「…そうか。なら、すぐに終わりにするよ」

そう言うのと、クロノはまた再び、突っ込んできた。

確かに、俺は満身創痍。

接近戦なら、あいつの独壇場だろう。

けど…な。

左手に魔力を溜める。

フェイトから習って、毎日続けてきた魔力運用。

最近、身体の部位に溜めることもできるようになった。

クロノが迫ってくる。

俺は構えたりしない。
ただ、立っているだけだ。

たぶんチャンスは一回だけ：
これを逃せば、俺に勝ち目はない。

「はぁー！」
クロノが杖を振り下ろしてくる。
俺はそれを左手一本で受け止める。

ボキッと嫌な音がした。
魔力で強化しても、腕は攻撃に耐えられなかったみたいだ。
けど、俺はそれに構わずに杖と腕をバインドで固定した。

「なっ！」
クロノが俺の行動に驚いている。
その隙を俺は逃さない！

「いっけー！ 奏真君！」
なのはの声が聞こえる。

…応援してくれていたみたいだ。
やっぱりこの戦い、負けられないな！

「ディバイン…！」

一か八かのゼロ距離砲撃。

この一撃に、すべてを賭ける！

「バスター…！」

俺は全力で砲撃を放った。

砲撃はクロノの腹に命中し、クロノは吹き飛んでいった。

「はぁ、はぁ。これで一矢は、報いた、かな…」
そういつて、俺は気を失った。

〵
〵
〵
〵
〵

「奏真君！」

私は倒れた奏真君の下へと急ぐ。

今度は竜也君も止めたりしなかった。

…もし止められても、力づくで来る気だったことは内緒なの。

奏真君は身体中がボロボロで、左腕も折れていた。

私はまだ治癒魔法が使えないので、ただそばにることしかできない。

それを悔しく思っていると…

「…彼から離れるんだ」

クロノ君が立ち上がって、そう言ってきた。

クロノ君も奏真君ほどではないけど、最後の一撃でボロボロになっていた。

「な、なんで…」

もう立ち上がっているの？

「…あの時、寸前で杖から手を離して、後ろに飛ばなければやられていたかもしれない…」

どうやら、クロノ君は直撃を避けていたみたい。

「早くそこから、離れて…」

クロノ君がもう一度そう言ってくる。

「…嫌」

だけど私はそれを拒否する。

「…彼は公務執行妨害で逮捕する。だから君はそこを退くんだ」
そう言ってクロノ君が近づいてくる。

逮捕？

奏真君を逮捕するの？

そんなこと、私はさせない！

「…奏真君を逮捕なんてさせない」

私はそう言って、クロノ君の前に立ちはだかる。

「…そこを退くんだ。邪魔すると君も公務執行妨害で逮捕しなくちゃいけない」

「逮捕したいなら、すればいいよ。私は奏真君を守る」
そう言って、レイジングハートをクロノ君に向ける。

「そうか。君も、か」

クロノ君も私にデバイスを向けてくる。

私たちの間にピリピリした空気が流れていく。

私たちが動き出そうとしたその時。

「クロノ執務官。それ以上の戦闘行為は中止。速やかに彼女たちをアースラに案内してください」

突然、通信が入った。

そのにじゅうきゅう！（後書き）

また、読んでくださってありがとうございます。
さて、今回もいかがでしたでしょうか？

やっぱりクロノは強いですね！
というわけで、次回もまたよろしくお願いします！

そのさんじゅう！(前書き)

遂に、三十話です！

まさか、三十話も書くとは…
では、本文をどうぞ。

そのさんじゅう！

「クロノ執務官。それ以上の戦闘行為は中止。速やかに彼女たちをアースラに案内してください」

いきなり、そう通信が入っていた。

「しかし、艦長！」

「クロノ執務官、これは命令です。いいですね？」

「…わかりました」

そう言って、クロノ君はしぶしぶ了承した。

「その貴方たちも、彼の治療や今回の事件のことについてちょっと話を聞きたいから来てくださいね」
通信越しに女の人が私たちにそう言ってくる。

でも、この人たちは奏真君を逮捕しようとしたし…
そもそも時空管理局って何なのか知らない。

けど、奏真君の治療は早くしないといけないし…
どうしよう…

私がそんなことを考えていると…

「…大丈夫です、彼は逮捕しません。だから、安心して？」
女の人はそう言って来た。

「…わかりました」

こうして私たちは移動することになった。

〃〃〃〃〃〃

「…こっちだ。ついて来て」

「……………」

「あっ、はい」

「へーい」

クロノの後を俺たちはついていく。
初めは宇宙船の中で高くなっていったテンションも、なのはとクロノ
が出している重い空気のせいで、下がってしまった。
二人ともバリアジャケットのままだし…

（ね、ねえ、竜也。この空気はどうかならないのかな？）

（…無理だな。クロノは奏真を逮捕できなかったことでイラついてるし、なのはは奏真を傷つけたクロノを許す気はないだろう。）

空気に耐えきれなくなったユーノが念話で聞いてくるが…

正直、俺にはどうしようもないです。

予想外の出来事だし…

（でもな、ユーノ。信じられないかもしれないけど…あの二人は前世では恋人同士なんだ）

ここで俺はユーノに驚愕の事実を話す。

ま、気を紛らせるにはちょうどいいだろう。

（えっ？ えええええー！ 嘘…だよな？）

ユーノは一際大きな声で驚きを表す。…念話だけど。

（…残念ながらほんとなんだな、これが…）

（いや、どう見ても無理でしょ。空気最悪だよ？）

…うん。これを見たら、誰もそうなるとは思わない。

（まあ前世の話だしな…ユーノ君にライバル登場というわけだ！）

（それを言ったら竜也だってそうじゃないか！）

俺とユーノはお互いになのはが好きなことを話した。
今では好敵手と書いて、友と呼ぶってやつだ！

…前世の話は冗談と思われたみたいだな。
つい、口を滑らせちゃったけど、なんとか誤魔化した。

(まーな。でも最強の敵は…)

(…奏真、だね。あれは強敵すぎるよ…)

そう言って二人で落ち込む。

なんかコーラで一杯やりたいくらいだ…
ちなみに、もう何度かユーノとコーラで一杯をやった。

(初めっから好感度マックスだもんな…あゝ、話していたら落ち込んできたぜ…)

(自滅したね。竜也ってたまにそういうときがあるよね…)

(…うるせー)

そんなことをユーノと話していたら…どうやら到着したようだ。

~~~~~

「…ここだ」

不機嫌そうにクロノ君がそう言う。

不機嫌なのは私もだ…

この船についてから奏真君は医務室に運ばれていった。  
私もついていこうとしたら…

「君は僕たちと話をしないといけないから、一緒に来てもらう」  
そう言っただけでクロノ君に止められた。

奏真君が心配なのに…

そんなわけで、私、高町　なのははすごく機嫌が悪いです。

通された部屋を見ると…

まず、目の前に広がるのは盆栽、お茶のセット。

床は畳…

完全な和室だった。

あれ？　なんで和室？

その奥には畳の上に座る緑色の髪をした女性が一人。

「お疲れ様、まあ…四人とも…どうぞどうぞ。楽にして」

笑顔で私たちを迎えてきた。

「ああ、いつまでもその格好は窮屈でしょう？……バリアジャケットとデバイスは解除して平気よ？」

「あつ、そうですね……それじゃ……」

そういえば、まだ解除していなかったの。

ふと、竜也君を見ると、普通の服装に戻っていた。

…むー。教えてくれてもいいのに。

そう思いながら、私は小学校の制服姿へと戻り、レイジングハートも待機状態に戻す。

「君も……元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

「ああ、そう言えば…そうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

クロノ君がそうユーノ君に言い出した。

何を言っているのか不思議に思っていると…

突然、ユーノ君が光りだした。

一体、何が…

そして、ユーノ君はフェレットの姿から少年の姿に…って！

「へえっ？」

「はあー、なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？  
竜也は話したことはあるけど、見せるのは初めてだっけ？…」

「ふええええええ！！？」

艦内に私の叫び声が響く。

「なのは？」

「ユーノ君って、ユーノ君って…その…なに！？ えゝだって！  
！ うそっ！！ ふええ」

私は軽い錯乱状態になった。

「…けっ、マジで美少年かよ…やってらんねーぜ…」  
竜也君は一人で何か言ってるけど、頭に入ってるこない。  
ユーノ君は人間で…  
男の子で…

「君達の間で何か見解の相違でもあったのか？」

「えっと…な、なのは。僕達が最初に出会った時って…僕はこの  
姿じゃ…？」

ユーノ君がそう聞いてくるが…  
知らない、私はそんなの知らないよー！

「違う、違う！ 最初っからフレットだったよお！」



「ん〜？………あ〜！ そ…そ、そうだった、そうだ！ ごめん  
ごめん……この姿見せてなかった」

「だよね！ そうだよね！ びっくりした〜……竜也君は知ってた  
の？」

私と違ってあんまり驚いていなかった竜也君に聞いてみると。

「ああ……俺は前に話だけは聞いていたし……」  
そう竜也君が教えてくれる。

私だけが知らなかったのかな…少し、ショックなの。

「ああ、でも奏真も知らないと思うぞ？」

「…そうなんだ。私だけかと思っちゃった」  
うん。今度奏真君にも教えてあげよう！

「ああ……その…もういいか？」

「」「あっ……」

クロノ君の声で気がつく。

ここは私たち三人だけじゃなかった…

「君達の事情は良く知らないけど…こちらとしては、なるだけ早め  
に話を聞きたいんだが…」

「あっ、うん。ごめんなさい」

「すみません」

「さーсенでした」

私たちはそう謝り、話をしていくことになった。

~~~~~

「なのはさんたちが暮らしている世界の他にも…魔法使いがいる世界やいろんな世界があるの。その世界を行き来するのがこの船で、それぞれの世界に干渉しあうような出来事を管理しているのが私たち時空管理局というわけよ」

「えーと、つまり…」

「わかりやすく言うと、管理世界を守る警察ってことだな」

なのはがイマイチ理解していなさそうだったので、補足説明してやる。

「なるほど…お巡りさんなんだ」

なのは納得したようにそう呟く。
実際はそんなにいいものじゃないけどな…
最高評議会とか脳髓だし…

それからジュエルシードに話は移っていく。
話はユーノがメインで行った。

「なるほど、そうですか…ジュエルシードを発掘したのは、あなた
だったですね」

「はい…それで僕が回収しようと…」

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」
クロノにそう言われて、ユーノは落ち込む。

「あの…ロストログアって何なんですか？」

「あゝ異質世界の遺産…って言ってもわからないわね……えっと…
…」

リンディが手を顔に当てながら、考え込んでいる。
うまく説明するのは難しいよな。

「次元空間の中には、いくつもの世界があるの。それぞれに生まれて育って行く世界……その中に……ごく稀に進化し過ぎる世界があるの。技術や科学、進化し過ぎたそれらが自分たちの世界を滅ぼしてしまつて、その後に取り残された……失われた世界の危険な技術の遺産……」

「それらを総称してロストログアと呼ぶ。使用法は不明だが……使い用によつては世界どころか次元空間さえも滅ぼす程の力を持つこともある……危険な技術」

「然るべき手続きを以て、然るべき場所に保管されていないという品物……あなたたちが探しているロストログア……ジュエルシードは、次元干渉型のエネルギー結晶体……いくつか集めて、特定の方法で起動させれば……空間内に次元震を引き起こし……最悪の場合、次元断層さえ巻き起こす危険物」

リンディとクロノが交代しながら、説明していく。

一人だとやっぱ、疲れるんだろうな……

俺はそんなバカなことを考えていた。

「君達と黒衣の魔導士がぶつかった時に発生した振動と爆発……あれが次元震だ」

「……」

なのははあの時のことを思い出したのか。

顔を少し顰める。

「たった1つのジュエルシードの全威力の何万分の1の発動でもあ

れだけの影響があるんだ。複数個集まって動かした時の影響は、計り知れない」

「確かに、な…」

俺は原作での6つ同時に発動した時の竜巻を思い出した。確かにすごい威力だった。

「そういうわけで、これよりロストログア…ジュエルシードの回収については…時空管理局が全権を持ちます」

「えっ……？」

「君達は、今回のことは忘れて…それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも………そんな…」

突然そんなこと言われても納得できないよな…
なのはとユーノ顔にもそう書いてある。

「次元干渉に関わる事件だ！ 民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

「でも…！」

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう…今夜一晩…ゆっくり考えて、3人で話し合って…それから改めてお話をし

ましょ？」

やっぱ、白々しいな。

ダメって言ってるのに、話し合う必要はないだろ？

まあ、勝手に動かれても迷惑なんだろうけどな…

それから話は奏真のことに移った。

「じゃあ、奏真君は…」

「ええ。今回は管理局の存在も知らなかったみたいですし…不問にします」

「良かった」

本当に安堵したのだろう。

なのはは、ほっと息を吐く。

「…僕としては不満があるのですが…」

「まあまあ、クロノ。今回は、ね」

クロノは不満そうだったが、結局は反対しなかった。

KYで堅物だけど、いい奴。

それがクロノ・ハラオウンだ！

そんな緩い空気になった時、部屋に通信が入る。

「艦長！ 緊急です！ 彼が…」
エイミーがそう言おうとした時。
突然、部屋のドアが破壊される。

そして…

「なのはっ！ 無事か！」

必死の形相をした奏真が中に飛び込んできた。

そのさんじゅう！（後書き）

また、読んでもらってありがとうございます！

さて、今回の話はどうだったでしょうか？

説明回みたいな感じでしたけど：

また次も読んでもらえるとうれしいです！

そのさんじゅういち!

「うっ、ん。ここは…」

俺が目覚まして、周りを見渡すが知らない場所だった。

左手を見るときっちり包帯が巻かれていてるが、もう動かせるみたいだ。

あまり痛みもない。

全身の傷も治っていることから、誰かが治癒魔法をかけてくれたのだろう。

…魔法ってすげーな。

それにしても…

「…負けた、な」

俺はそう呟く。

あいつは、俺が砲撃を放つ瞬間に後ろに飛んでダメージを抑えていた。

あの一撃では倒し切れてないだろう。

そこまで考えて、思った。

なのはたちはどうしたんだ？

俺が負けた後、一体どうなったんだ？
まさか：

俺のせいで捕まった？

だとしたら、まずいな…
ユーノと竜也がいるにしても、あいつには敵わない。
なのははレイジングハートを捕られているかもしれないし：

助けに行かないとな：

「待ってろよ、なのはは」

俺は病室を出る。

見張りはいないみたいだ。

さて、なのはたちの居場所を調べないとな…
どうするか。

そう考えていると、曲がり角から声がする。
俺は物陰に潜み、話を聞く。

「そういえば、あの女の子、すごい魔力量だったよな」

「ああ、AAAランクあるらしいぞ」

女の子っていうのはたぶんなのはのことだな…
もう少し、話を聞いてみるか。

「けど、クロノ執務官と揉めていたんだってな」

「…ああ、一触即発の雰囲気だったらしい」

なのはがあいつと…

これは、やっぱり早く助けに行かないみたいだ。

「今は艦長と————だよな…」

「AAA———戦力として魅力的だ。けど彼女たちは————」

だんだん離れて行っているのか…

途中が少し聞こえなかった。

艦長の所にいるのはわかった。

けど、戦力？

…こいつら、なのはを利用する気なのか…

それを聞いた俺は、手っ取り早くなのはのもとに向かうことにする。

「我が手に剣を、この手に勝利を」

そう詠唱して少し小型の剣を作り、再び潜む。

少しすると、一人の女性が通りかかった。

「：動くな。あんたに聞きたいことがある」

後ろから女性に近づき、喉元に剣を押しつける。

「は、はい：」

女性はいきなりのことに初めは驚いていたが、すぐに喉元の剣を見て声が震えていた。

「すまない。けど、時間がないんだ：艦長のところにはどういけばいい？」

本当はこんなことしたくはないが：

緊急事態だ。

許してくれ：

女性から居場所を聞き出し、俺は走る。

すぐに追手が来るだろう。

あとは時間との勝負だ。

「いたぞっ！ こっちだ！」

なのはたちのところまであと少し、というところで見つかってしまった。

くそっ！ …ならっ！

「君！ もう止まるんだ！ 別に俺たちは……」

俺の前を塞ぐ男性に魔力弾を撃ち込む。

男性はそれを障壁で防ぐが、俺はその間に横を突破する。

「待てー！」

そう言われて待つやつはいないんだよ。

俺は男性の声を無視して、駆ける。

そして…

ついに、目的の部屋を見つけた。

俺は扉に魔力弾を撃ち込み、中へと突入する。

「なのはっ！ 無事か！」

そう言って、すぐになのはに駆け寄る。

なんかみんな哑然としているようだが…
今はそんなことは関係ない。

そして、なのはの近くに行くと片手で抱き寄せる。

「なのは、ケガはないか？」

そう聞きながらも、俺はそこにいたクロノと女性を睨む。
片手を向けているからいつでも魔法は放てる。
少しでも変な動きをしたら…

「そ、奏真君。う、うん。ケガはないけど…」
なのはは顔を真っ赤にしながら、答えてくる。

「そっか…良かった…」
なのはを抱き寄せる手にもう少し力を加える。
すぐ近くでなのはの体温を感じる。

本当に良かった…
間に合ったみたいだ。

「奏真君…」

そんな俺の感情を読み取ったのか…
なのはが真っ赤な顔を俺の胸に埋めてくる。

「艦長！ ご無事ですか！」

ゾクゾクと巻いてきたやつらが部屋に押し寄せてくる。

「え、ええ」

緑色の髪をした女性が答える。
この人が艦長みたいだ。

しかし、声が少し裏返っているのはなぜだろうか。
何か企んでいるかもしれないな。

要注意だ…

「…なのは、すぐに逃げるぞ」

「そ、奏真君、な、なんで？」

なんでって、理由が分からないのか…

なら、と。

俺がなのはに理由を話そうとする前に…

「逃がすとも思っているのか…」

クロノがそう言うてくる。

どうやら簡単に逃がしてくれる気はないみたいだ。

「簡単にいくとは思ってないさ。けど、逃げ切って見せる！」

そうだ。

帰るんだ、父さんや母さんたちが待っているあの家に！

俺がそう気合いを入れていると：

「…とりあえず、お前は一回落ち着け！」

竜也がそう言って、俺の頭に拳骨をかましてきた。

~~~~~

「いってえー！ おい、竜也！ お前、何しやがる！？」  
そう言ってこのバカは俺を睨んで来る。

こいつは本当にバカ野郎だ。

管理局、敵に回してどうする気だよ。

マジで：

どうせ、状況とかほとんどわかってないんだろうな…こいつ。  
頭に血が昇ると、猪突猛進というか、なんというか。



「で、なんでお前はここから逃げようなんて考えたんだよ？」

「っんなもん、こいつらがなのはを利用しようとしているからに決まってんじゃねえか！」

「…利用って。どう勘違いしたら、そうなるのかしら…」  
リンディがそう呟くが…お前は実際、なのはの魔力を戦力にしたい  
って思ってるだろうが。

「だから、こんな所にいつまでも居られるか。早く逃げるぞ！  
竜也、お前も——」

まだ、言葉が続けようとしたバカにもう一度、拳骨を落とす。

「あだっ！ うっ、ひたかんひまったひゃへえか！」

「奏真君、大丈夫？」

バカは舌を嚙んだらしいが知らん。

あと、いつまでなのはを抱きしめてんだよ！

なのはも動く気はないし…

ああ、妬ましい。

それから、俺たちはバカに事情を説明することになった。

「じゃあ、俺がやった事って…」  
話を聞いてずくと落ち込むバカ。

「で、でも、私は奏真君が駆けつけてくれてうれしかったよ！」  
それをなのはがフォローする。

その姿は実に健気だ…

まだ、少し顔が赤くて、かわいさのレベルも上がっている。

俺にもその顔を見せてくんないかな…

~~~~~

「それじゃあ、あんたたちは俺たちにはジュエルシードをもう集めるなって言うんだな」

なのはたちが受けたすべての説明を聞いた後。

俺はクロノとリンディさんにそう言った。

「そうだ。民間人は干渉してほしくない」
クロノが俺にそう言って来るが：

「悪いが断る」
俺はそう返した。

「なっ、君は…！」

「…理由を聞かせてもらえるかしら？」
また怒り出しそうなクロノとは違ってリンディさんが冷静に訪ねてくる。

「俺たちの住んでいる街にあんなものが、あと9個も落ちています。それなのに何もしないで、じっとなんてして居られるわけがない。少なくとも俺には出来ません」

今更、全部を投げ出して日常に帰れなんて言われても、出来るはずがない。

「だからそれは僕たちが…」
クロノが反論を言おうとするが、俺は言葉を遮る。

「そういうことじゃない。…別に管理局が信用できないからとかでもないんだ」

「…じゃあ、どうしてかしら？」

「敢えて言えば、気持ちの問題です。…自分たちの住む街を自分たちで守りたいって思う…この気持ちはそんなに間違っていることだとは思っていません」

俺は自分の思うことを伝える。

あの街は俺たちの街だ。

それを他人に任せるだけなのはいやなんだ…

「…確かに間違っではないけど、あまりにも無謀だ」

「無謀だろうとなんだろうと、俺はやる！ あとで後悔するのだけはもうごめんだ」

もし、管理局が認めてくれないのなら自分個人でもやってやる。
今までもそうだったんだ…
やりきって見せるさ。

「わ、私も最後までやりたいです！」
なのは俺の意見に賛同してくれる。

「僕もやらせてください！」

「おっと、俺も忘れないでくれよ？」
ユーノ、竜也もそれに続く。

やっぱりみんな、このまま終わるのは嫌だったみたいだ。

「…わかりました」

そして遂にリンディさんが折れてくれた。

「か…母さ…艦長！」

クロノはまだ納得していなさそうだが、最高責任者はリンディさんなので問題はない。

「ただし条件は2つよ、貴方たちの…身柄を一時、時空管理局の預かりとすること……それから指示を必ず守ること……良くて？」

「はい、わかりました。よろしくお願いします！」

「「ありがとうございます！」」

「了解です」

こうして俺たちは管理局とともにジュエルシードを集めることになった。

フェイトの奴、大丈夫かな？

そのさんじゅうに！（前書き）

どうも、はくおろくです。

お気に入りが100人を越えました！！

ありがとうございます！

これからも頑張っていくので、応援よろしくお願いします。

そのさんじゅうに！

私たちはなんとか無事に本拠地へと帰って来ることが出来た。
これも全部奏真のおかげだ。

いつも奏真は暖かくて、優しい目をしているのに…
あの時はギラギラと輝いていて、いつもと違ってた。
私に見せていた背中がとても頼もしかった。

無事、だよね。

奏真…

私がそんなことを考えていると、

「もうダメだよ！ 時空管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにも
ならないよ…逃げようよ…二人でどっかにさ…」
アルフが私にそう言うってくる。

「それは…ダメだよ…」

そんなこと、できない。

母さんが私の帰りを待ってる
それに…

「だって！ 雑魚クラスならともかく、あいつ一流の魔導士だ！

本気で捜査されたら…ここだっていつまでバレずに居られるか…
あの鬼ババ…あんたの母さんだって、訳わかんないことばっか言う
し！ フェイトに酷いことばっかするし！」

「母さんのこと…悪く言わないで」

母さんは本当は優しいんだ。

今は少し、変わってしまったけれど…

ジュエルシードを集めれば、喜んでくれる。

また笑顔をみせてくれるはずなんだ。

「言うよ！ だってあたし…フェイトのことが心配だ！ フェイト
が悲しんでると…あたしの胸も千切れそうに痛いんだ……フェイト
が泣いてるとあたしも目と鼻の奥がズンとして、どうしようもなく
なるんだ！ フェイトが泣くのも悲しむのも…あたし嫌なんだよ！
！」

「……私とアルフは…少しだけ精神リンクしてるからね……ご
めんね…アルフが辛いなら私、もう悲しまないし泣かないよ…」
私がそう言うのとアルフの目から涙が流れる。

「あたしは…フェイトに笑って幸せになってほしいだけなんだ！
なんで……なんでわかってくれないんだよお」

「ありがとう、アルフ…でもね…私、母さんの願いを叶えてあげた
いの…母さんの為だけじゃない…きつと、自分の為…だから…」
また、母さんと笑っていききたいから。
ほめてほしいから。

全部、自分の為だ。

私は目の前で泣いてくれているアルフの頭に手を乗せる。

「アルフ、後…もう少し…最後までもう少しだから…私と一緒に頑張ってくれる？」

「約束して…あの人の言いなりじゃなくて…フェイトはフェイトの為に…自分の為だけに、頑張るって……そしたら…あたしは必ずフェイトを守るから…」

「うん」

ジュエルシードを集めれば、私はきっと幸せになれる。
母さんは昔みたいに戻ってくれて…
奏真やなのはともいつでも会える。

あともう少し、もう少しだけ頑張ればいいんだ。

~~~~~

「すごいや！ この3人：AAAクラスの魔導士だよ！」

「ああ…」

「なのはちゃんは、クロノ君の好みっぽいね」

「エイミィ！ そんなことはどうでもいいんだよ…」

僕たちは今、奏真たちのデータを見ている。

…エイミィが余計なことも言っているが。

「はいはい。魔力の平均値を見ても、なのはちゃんが127万」

「黒い服のフェイトちゃんだけ…フェイトちゃんが143万…そして、奏真君が130万」

エイミィが三人の魔力値を見ていく。

「最大発揮時は、さらにその3倍以上だね！ クロノ君より魔力だけなら上回っちゃってるよ」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない。状況に合わせた応用力と…的確に使用できる判断力だ大事なんだ」

実際に僕がこの三人と戦って勝つ自信はある。

…奏真にも一応は勝ったしね…

「それはもちろん…信頼してるよ、アースラの切り札だもん！ クロノ君は」

「むむ……」

なんかバカにされているような……

そんな時、後ろで扉が開く音がした。  
どうやら母さんがやってきたみたいだ。

「あっ……艦長！」

「ん？……ああ、3人のデータね」

そう言っていると母さんはモニターを見つめる。

「はい」

「確かに……凄い子達ね」

「これだけの魔力がロストログアに注ぎ込まれれば、次元震が起きるのも頷けます……」

「あの子たち……なのはさんたちがジュエルシードを集めてる理由はわかったけど……こっちの黒い服の子はなんでなのかしらね？」  
母さんが考え込むようにしながら、そう言ってくる。

「奏真もなのはも目的は知らないと言ってましたが……随分と……必死な様子でした」

まあ、奏真は知っていても話さないだろうな。

あいつは変な所、頑固で子供だから……

「うーん。まだ小さな子よね…普通に育ってれば、まだ母親に甘えていたい年頃でしょうに…」

母さんはそう言って、もう一度モニターを見つめた。

〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃

俺たちはあの後アースラから家に帰ってきた。  
もうケガは大丈夫なので、包帯をはずして、夕食を食べる。

その夕食の片づけが終わった後。

「さてと……それじゃあ、大事な話っていうのはなんだい？」

「うん……」

俺たちは父さんたちに話をした。

魔法のことは抜いて、どうしてもやりたいことが…  
やらなきゃいけないことが…できた。

そのために何日か家を空けなくてはいけないことを話した。

「たぶん危ないこともあると思う。…けど、最後までやり通したいんだ！ …あとで後悔しないように…」

「お父さん、お母さん。お願い！」

俺となのはは二人で頭を下げる。

「……………」

「……………」

父さんと母さんは何も言わない。

目を瞑って、無言で考えている。

「心配をかけることにはなると思うけど…」

心配を掛けるのはすごく申し訳ない。

でもこれだけはどうしようもないし…

「それは当たり前だ。俺たちはいつでもお前たちを心配しているぞ」

父さんはそう言ってくる。

「……うん」

俺となのは一緒に頷いた。

「それはどうしてもお前たちでないとだめなのか？」

「そういうわけじゃない。…けど、一人、放って置けない奴がいるんだ」

「私たちの友達なの」

頭に浮かぶのは金色の髪の子。  
あいつを一人になんてさせたくない。

「そうか」

「…仕方ない、わね」

「えっ？」

「母さん？」

「奏真となのはがどっちにするか…まだ迷ってるなら…危ないことはダメよって言うと思うけど…でも…もう決めちゃってるんでしょ？ 最後までやり通すって」

「うん…」

「はい…」

俺となのはは母さんの言葉に同意する。

「じゃあ、行って来なさい。…後悔しないように。無事に帰ってくるのを待っているからな」

そう言って、父さんは優しく俺となのはの頭を撫でてくれた。

「うん…ありがとう、お父さん、お母さん!!」

「……ありがとう」

本当にありがとう…

絶対にみんなで無事に帰ってくるから…

こうして、なんとか父さんたちに許してもらうことが出来た。  
さて、あとは…

準備を済ませた後。



俺はフェイトに連絡を入れた。

管理局に協力することになった以上。

たぶんしばらくは、連絡も会うこともできないだろうしな…

（フェイト、聞こえるか？）

（えっ？　そ、奏真！？　本当にあの奏真だよね！？）

（ああ、どの奏真かは知らないけど…フェイトの知っている奏真だよ）

他にどの奏真がいるんだか…

（無事だったんだね…良かった…）

フェイトは安心したのかほっと息をついた。

…念話だけど。

（悪い、心配かけたな…）

（ケガとかしてない？　どこも痛くない？）

立て続けに質問してくるフェイトに思わず、苦笑い。

お前は俺のお母さんかよ…

（治療してもらったからな。もうどこも痛くないよ）

うん、骨折の治ったし。

どこも問題ない。

(…やっぱり、ケガしたんだ…。奏真は無茶ばかりする…)  
あつ、しまった。

ケガしてないって言うべきだったな…

(…ごめんなさい)

俺は素直に謝ることにする。

…言い訳すると説教されそうだな。

(もう、あんまり無茶するのは良くないよ)

それはごもっともです。

フェイトさん。

さて、そろそろ本題に移りますかね…

(うん。…それでな、フェイト。俺、管理局に行くことにしたんだ  
…)

俺はフェイトにそう切り出した。

〵〵〵〵〵〵

（うん。…それでな、フェイト。俺、管理局に行くことにしたんだ  
…）

（えっ？）

私は奏真が何を言っているのか、わからなかった。  
奏真が管理局に…？  
嘘、だよ…

（ジュエルシードを集める条件で管理局に協力しなくちゃいけない  
て…）

（そんな…じゃあ…）

本当に…  
奏真が敵になっちゃう。  
そんなの…

（…嫌だ）

（フェイト…？）

（奏真と敵同士になるなんて嫌だよ！）  
私はそう叫ぶ。  
奏真と敵になるなんて私は嫌だ。

友達じゃなくなるのは嫌だ！

嫌、だよ…

私がそう思っていると…

(…フェイト。俺が言ったこと覚えているか？)  
奏真がそう聞いてきた。

(奏真が言ったこと…？)

なんだろう？

奏真は色々なことを私に教えてくれたから。  
それが何かすぐにはわからなかった。

(ああ。前に言ったよな。俺たちはたとえどんなことがあっても――  
――)

(…あっ！)

そうだ、あの時。

奏真が言ってくれたあの言葉。  
すごくうれしかったあの言葉…

(――友達だって。それだけは絶対に変わらない。……立場と  
しては敵同士ってことになっちゃうんだろうけど…)

(…うん)

奏真と私は敵同士。

それは変わらない現実なんだ…  
それを考えて、私はまた暗くなる。

（…だから、俺を呼んでくれ）  
そんな私に奏真は言ってくる。

（えっ？）

（フェイトにもし困ったことがあったら、名前を呼んでくれ。…俺  
が絶対に助けに行くから）

（奏真…うう…）

奏真のその言葉を聞いて、私の目から涙があふれてくる。

（それだけは絶対、約束するから…）

（……うん）

私はなんとかそう答えた。

～  
～  
～  
～  
～

フェイトとの念話が終わったら、もう出発だ。

「なのは、準備できたか？」

「うん！」

俺がなのはにそう聞くと、元気よく返事が返ってくる。

「じゃあ、行くか…」

そう言って、玄関に向かうと…

「お父さん、お母さん」

「兄さんに姉さんも」

家族みんなが玄関に集まっていた。

「…何も言わずに行くのは関心しないぞ」

「そうよ、行くときにはちゃんと行ってきますって言わないとね？」  
父さんと母さんがそう言ってくる。

こっそり行く気だったことがバレていたようだ。

「「ごめんなさい」」

二人で謝る。

見送りとか恥ずかしいから、こっそり行こうとしたのに…

「…まあ、いいさ。それじゃ、気をつけて…」

「「「行ってらっしゃい」「「「」」

みんなにそう言われて、恥ずかしいけど…  
なんか力が湧いてくるような気がする。

だから、俺たちは、

「…行ってきます！」

大きな声でそう言った。

そのさんじゅうさん!

「というわけで…本日0時を以て、本艦全クルーは、ロストログア…ジュエルシードの搜索と回収に変更されます…また本件に於いては、特例として…問題のロストログアの発見者であり結界魔導士でもあるこちら…」

それを聞いて、ユーノ君が椅子から立ち上がる。

「はい、ユーノ・スクライアです!」

「それから彼の協力者でもある現地の魔導士さん…」

それを聞いて、私たちも立ち上がる。

「あっ…た、高町なのはです!」

一斉に局員さんの視線を浴びて、少し驚いたけど…なんとか自己紹介できた。

「山城 奏真です」

「神崎 竜也です」

奏真君たちも私の後に続く。



「以上四名が臨時局員の扱いで事態に当たってくれます」

「「「よろしくお願いします」」「」」

私たちは同時に頭を下げる。

その時に私とクロノ君の目が合ったんで微笑むと、

「あっ…」

クロノ君は明後日の方を見る。  
どうかしたのかな？

そう言えば、クロノ君とはもう仲直りした。  
これから一緒にやっていくのなら仲直りしなかったら奏真君にも  
言われたし…  
クロノ君が本当は優しいってことも話していてわかったから。

「う……………」

「あのやろう」

そして、何故かクロノ君を睨むユーノ君と唸る竜也君。  
…本当にどうしたんだろう？

けど、奏真君はなんともないみたいだし…  
ま、いっかな。

「じゃあ…ここからは、ジュエルシードの位置特定はこちらですわ…場所がわかったら、現地に向かってもらいます」

「「はい」「」

「了解です」

そういうわけで私たちはジュエルシードが見つかるまで、待機という名の休息を取ることに…

「艦長、お茶です」

「ありがとう」

エイミィさんが持ってきたお茶に、リンディさんが砂糖大さじ2杯とミルクを入れる。

「ん」

リンディさんはそれをおいしそうに飲んでいる。

「うう………」

「…苦いのが嫌なら飲まなきゃいいのに」

「これが噂のリンディ茶。凄いな…いろんな意味を込めて」

「だ、だよね……」

それを見て私たち四人は少し腰が引けてしまいます。  
うーん。ま、抹茶オレみたいな感じなのかな……？

「そういえばなのはさんたちは、お家や学校の方は本当に大丈夫なの？」

お茶を飲みながら、リンディさんがそう聞いてくる。

それはもう問題ない。

お父さんたちには話をしたし……  
アリサちゃんたちにもメールしといた。

「あっ、はい……家族と友達には説明してありますので……」

「授業のノートもあとで見せてくれる約束をしましたし……」

私と奏真君はそう言って、竜也君の方をじっと見る。

そう竜也君は……

「な、なんだよ。俺だってちゃんと置手紙は残してきたぞ！？」

「いや、ダメだろ。置手紙じゃあ……」

すぐさま奏真君のダメ出しが入る。

「お母さんたち、心配するよ？」

私もそう言った。

いきなり置手紙だけじゃ絶対に心配すると思う。

「うっ、で、でも説明しても絶対に行かせてくれないし……」

竜也君が言い訳をしようとするが：

「それでも置手紙だけっていうのは、ね」

「…竜也が悪いと思うよ…」

エイミィさんとユーノ君にもそう言われる。

「ユーノまで…こうなったら、新兵器、クロノ！！」

いよいよ旗色が悪くなった竜也君は、最後の砦と言わんばかりにクロノ君を見る。

「…君が悪いに決まっているじゃないか」

しかし、クロノ君にも一蹴され、竜也君は床に倒れた。

「ぐはぁ。…やめて、もう私のライフはゼロよ」

こんなやり取りをしながら私たちはジュエルシードが見つかるのを待つのだった。

~~~~~

アースラに来て、一日経ったが、なかなかジュエルシードが見つからない。

レイジングハートの勧めもあり、俺となのはは訓練室に行くことした。

時間もあるらしいので…クロノも一緒にすることに。

クロノとは戦ったりしたけど…結局、和解。
今では、そこそこ話もするようになった。

「俺にデバイスを…！」

「ああ、武装局員と同じものだが…」
訓練への移動中にクロノがそう言うてくる。

「欲しいです！ クロノさん！」
いつもは呼び捨てなのに、思わずさん付けで呼んでしまった。

「…君は現金な奴だな。まったく…」

「だって、デバイスですよ！？ 自分の相棒ですよ！？」

今まで、何度かレイジングハートを使わせてもらったけど…
やっぱり、自分の相棒ってほしいよな。

「…まあ、確かにそうなんだが…まったく」

「にやはは、奏真君、うれしそうなの」

「どんなやつかな？ …名前とか考えた方がいいのかな？ うーん」

クロノとなのはが何か言っていたが、もう俺の耳には入っていないかった。

ああ〜早く会いたいぜ！ 俺のデバイス！

装備の保管室でデバイスを貰い、魔法の術式をその中に入れる。

俺のデバイスはストレージデバイスというらしく、人工知能を搭載していない分、インテリジェントデバイスよりも処理速度は速いらしい。

だが、逆に魔法の発動を自己で決定しなければならないので、術者の力に左右されるらしい。

らしい、ばっかりだな…

さてと、それじゃあ…

「さあ、クロノ！ リベンジだ！」
そういつて俺はデバイスを向けた。

「いいだろう。少しつきあうよ…」
そう言つて、クロノもデバイスを起動させた。

~~~~~

訓練の後、奏真君は死んでいた。

：いや、本当に死んでいるわけじゃないんだけど…

ただ、食堂のテーブルに突っ伏してピクリとも動かない。

その目の前ではクロノ君が苦笑いをしながら食後のお茶を飲んで  
いる。

「奏真君、大丈夫？」  
私がそう声をかけると奏真君はだるそうに手を挙げて、それに答える。

どうやら、一応は大丈夫みたい。

「…また負けた…」

「そう簡単に遅れは取らないよ」

奏真君の呟きに、クロノ君がそう返す。  
クロノ君は凄かった。

奏真君が距離を取ろうとしたら、移動先にバインド。  
後ろに回り込もうとしたら、いつの間にか遠くにおいて砲撃の雨嵐。  
負けじと射撃魔法を使えば格闘戦で蹴散らされる。  
バインドをしようとしたら、いつの間にか後ろに回りこんでいた誘  
導弾で叩き落される。

奏真君が何をやろうとしても、すべて先回りされていた。

「うううう……」

「…そんなに睨むな。筋は悪く無かったし、君はまだ魔法をはじめ  
たばかりだろ？ …正直、そんな短時間でここまでできる人はなか  
なかないよ」

なのはを含めてね、とクロノ君は言う。

ユーノ君も言っていたけど…  
魔法を使うのはそんなに簡単じゃないんだって。



だから私と奏真君にはすごい才能があるって言ってた。

…正直、自分ではよくわからないんだけど。

「ううう、次は絶対に倒してやる…」

「ふっ、いつでも相手になるよ」

奏真君にそう返すクロノ君。

二人はなんだかとても仲がいいの。

ライバル関係っていうのかな？

奏真君もクロノ君もなんだか楽しそう。

「言ってる！ …よし、復活した！ …なのは、特訓だ！」

「えっ？ あっ！ 待ってよ、奏真君！」

私にそう言って、奏真君は訓練室へと向かう。  
それを私は、急いで追いかけるのだった。

）  
）  
）  
）  
）

「……………」

「…竜也、大丈夫？」

「……ああ、なんとかな」  
俺はなんとかユーノにそう返す。

置手紙はさすがにダメということで、俺はまた家に帰り、両親に説明をした。  
けど、答えはやっぱりダメだった。

それで、俺と両親は言い合いになったが、結局、認められず…  
仕方ないので俺は気づかれないようにこっそりと家を抜け出してきた、というわけだ。

「それで、そんなに疲れていると…」

「ああ、もうしんどい…」  
こんなにしんどい時はなのは顔でも見て…  
あれ？　なのはは？

「そういえば、なのはは？」  
俺はユーノに聞いてみる。

「今は、必殺技を作るとかいつて奏真と一緒に訓練室に籠ってるよ」

「必殺技ね…」

スターライトブレーカーかな？

本格的に魔砲少女の誕生ってわけだ。

「見に行く？」

「いや、今はやめとくわ…」

今行くと、実験台とかにされそうだしな…

うん。簡単に想像出来たぞ…

「じゃあ、僕は少し見てくるね」

「えっ？ あっ、おいっ。……いっちゃまった…」

俺の声は届かず、ユーノは行ってしまった。

頑張れ、ユーノ。

お前なら耐えられるさ…

そのあと、俺の願いは届かずユーノは星になった。

「…ユーノ……ヤムチャしやがって」



そのさんじゅうよん！（前書き）

今日は二話、投稿できました！

そのさんじゅうよん!

「ユーノ! 竜也!」

俺となのはが囧となり引き連れている間に、ユーノと竜也の捕縛魔法にかける。

これが俺たちの作戦方針だ。

体を魔力のチェーンに繋がれ、動きが封じられる大きな鳥。

うん、マジででかい。

大蛇といいこいつといい、どこの怪獣大決戦だよ…

「わかった! ……よし! 捕まえた!」

「なのは、今だ!」

「うん!」

ユーノと竜也の声になのはは頷き、レイジングハートの形を変化させる。

(Sealing Mode. Setup)

レイジングハートに三つの魔力の羽根が生える。

(Stand by. Ready.)

「リリカルマジカル！ ジュエルシードシリアル8！ 封印！」

(Sealing)

封印すると、鳥からジュエルシードが出てきた。  
なのはがそれをレイジングハートで捕獲する。

(Received Number 8.)

これで終了だ。

俺はほっと息を吐く。

「お疲れ、なのは」

「うん。奏真君もお疲れ様」

なのはと労をねぎらいながら、アースラの報告を待つ。

これで二度目ともなるともう慣れたものだ。

アースラのオペレーター達が状況を報告してくる。

「これで状況終了です。ジュエルシードナンバー8、無事確保…お疲れ様、みんな」

(はい！)

（お疲れ様です）

「すぐにゲートを作るね、そこで待ってて」

こうして、俺たちは話をして時間を潰すことになった。

「フェイトちゃん、現れないね？」

「ああ…こっちは別にジュエルシードを集めて行ってるみたいだからな」

「うん」

そう、俺たちがアースラに来てからはまだ一度もフェイトたちには会っていない。

まあ、見つからないように集めているんだろうけど…

「私たちが手に入れたジュエルシードは、2つ……そしてフェイトちゃん達が手に入れたのが1つだから……」

「あと、6つだな」

あと、6つ。

それで、ジュエルシードが全部そろう。

あと、もうひと踏ん張りだ。



~~~~~

「フェイト、ダメだ…空振りみたい」

「そう……」

私たちが向った時には、もうジュエルシードはなかった。
…たぶん奏真たちが封印したんだと思う。

「やっぱ…向こうに見つからないように隠れて探すのはなかなか難しいよ…」

アルフが肩を落としながら、そう言ってくる。

確かに、隠れながらの搜索は大変だ。

まだ、手に入れたのは1つだけ…

「うん…でももう少し頑張ろう」

私はアルフにそう言って、自分にも発破をかけた。

残るジュエルシードはあと6つ。

これだけ探しても見つからないとなると、
もしかしたら…

~~~~~

そして私たちがアースラに移ってから十日目……

「はあ、今日も空振りだったね？」

私はユーノ君と竜也君にそう話しかける。

今は食堂で休憩中です。

あつ奏真君は、またクロノ君と訓練をしています。

私も行こうとしたんだけど……

奏真君が休んどけていうから、ここで休憩しているの。

ジュエルシードは、あと6つになってからは全然見つからない。

うーん。どこにあるんだろう……

フェイトちゃんたちもまだ見つけていないみたいだし……

「もしかしたら結構長くかかるかもね……なのは、ごめんね」

「えっ？」

ユーノ君が突然、謝ってきたので私は驚く。

いきなりどうしたのかな？

「なのはは寂しくないか？」

竜也君がそう聞いてくる。

うーん。

家族のみんなやアリサちゃんたちに会いたいなと思うけど…

「別に…ちつとも寂しくないよ。ユーノ君に竜也君。それに奏真君も一緒だし。一人ぼっちじゃないから…。…ウチね、私がまだちっちゃい頃。お父さんが仕事で大怪我しちゃって…しばらくベッドから動けなかったことがあるの…」

私は頭の中に身体を包帯で巻かれ、ベッドに寝て動けないお父さんのことを思い出す。

「喫茶店も始めたばかりで、今ほど人気がなかったから…お母さんとお兄ちゃんは、いつもずっと忙しくて…。…お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で…。だから私は一人ぼっちだったんだ」

「そっか…。…」

「でもね。そんな寂しくて、悲しくて公園で泣いているときに、私は奏真君と出会ったんだ…」

そう、あの時のことは忘れられない。

私の大切な思い出…

「奏真君はね、泣いている私に友達になろうって言ってくれたの。…二人なら楽しいことは二倍楽しく、悲しいことは半分になるんだ

って言ってね」

「……………」

「……………」

「それから奏真君とたくさん遊んで、たくさん友達が出来て…気が付いたらもう寂しくなんてなくなってた」

遊びに夢中で、寂しいと感じる暇なんてどこにもなかった。

今、考えると五年くらい前だから…

私の人生の半分くらいは奏真君と一緒になんだね。

「だから、全然平気だよ。奏真君が…みんなが傍に居てくれるもん」

「そっか…」

「そういえば、私、ユーノ君と竜也君の家族の話はあんまり知らないね」

私はふと、思ったことを聞いてみる。

「ああ…僕は元々1人だったから」

「あっ？ そうなの？」

「両親はいなかったんだけど部族のみんなに育ててもらったから…だから…スクライアの一族みんなが僕の家族」

「俺は…両親二人と姉ちゃんが一人いるかな」

「そうなんだ……ユーノ君、竜也君……色々片付けたら、たくさん……  
いろんなお話しようね？」

「うん、色々片づいたらね」

「ああ、全部終わってからな」

でも、色々片付けたら……

ううん、ジュエルシードの問題が全部片付いても……  
きっと私たちは……

私がそんなことを思っていたその時、艦内にアラームが鳴り響いた。

~~~~~

「アルカス・クルタス・エイギアス……煌めきたる円陣よ　いま　導
きのもと　降り来たれ　バルエル・ザルエル・ブラウゼル……」
私は、呪文を詠唱しながら、魔力を溜める。

残るジュエルシードは多分…海の中。

だから…海に電気の魔力流を叩き込んで強制発動させて位置を特定する。

…大丈夫、きっとできる。

「撃つは雷 響くは轟雷…アルカス・クルタス・エイギアス…」
私の作った魔法陣の上には電気が迸る。

あと、もう少し…

「はああ！」

私はバルディッシュを魔法陣に向けた。

(Thunder Fall.)

魔力流が海に大量に打ち出される。

それに6つのジュエルシードが反応し強制発動した。

「はあ……はあ……はあ…見つけた…残り6つ…」

全部、見つけた。

あとは、封印するだけ…

「アルフ、空間結界とサポートをお願い」

「ああ！ 任せといて！」

アルフが元気よく頷く。

大丈夫、きっとできる…

辺りは雨が降り続き、雷も鳴り響く。

強制発動された6つのジュエルシールドは竜巻のようにうねりをあげている。

私はそれを見て、

「バルディツシュ、頑張ろう」

バルディツシュを構え…ジュエルシールドへと向かった。

~~~~~

「なんとまあ…呆れた無茶をする子だわ！」

「無謀ですね、あれは個人が出せる魔力の限界を越えています。間違ひなく自滅する」

「……………」

巨大なモニターにジュエルシールドと戦うフェイトの状況が映し出されていた。

…状況はかなり悪い。

クロノの言うとおりに、あのままじゃ自滅する。

早く助けにいかないと…

その時、メインブリッジの扉が開き、なのはたちが入ってくる。

「フェイトちゃん！……あの私急いで現場に…！」

なのはがモニターに映っているフェイトを見て、そう言うが…

「その必要はないよ、放っておけばあの子は自滅する」

クロノはそう返してくる。

「…！」

「…仮にしなかったとしても、力を使い果たした所で叩けばいい」

「でもっ！」

「私たちは、常に最善の選択をしないといけないわ。残酷に見えるかもしれないけど…これが現実」

確かにクロノやリンディさんのやり方は間違っていないんだろうな。管理局の人間としては…  
けど…な。

「助けに行くぞ、なのは…」

俺はなのはにそう言う。

「奏真君！」



なのは俺の言葉を聞いて顔を笑顔に変える。

ユーノと竜也も目配せすると、しっかりと返してくれた。  
あとは少し、時間を稼いでつと。

「奏真っ！ ダメだ。これは命令だぞ！」

「悪いけど、断るよ。クロノ…」  
クロノに俺はそう答える。

クロノたちには悪いけど…  
フェイトと約束したからな。

「奏真くん、私たちの指示を必ず守ることは条件に入れていたはずよ。このまま、貴方を行かせる訳にはいかないわ」

リンディさんがそう言ってくるが俺は…

「…それでも、俺は行きます」

（奏真っ！ 準備できたよ！）

ユーノから念話が来た！  
よしっ！

「君はっ！ いつまで子供のわがままを言っているんだ！ 少しは大人になれ！」

「…助けられる人を見捨てるのが…それが、大人だっていうんな

「俺は一生、子供のままでいい」

大人になると本当にしたいこともできなくなるのなら…  
自分が正しいと思うこともできなくなるのなら…

「俺は守りたい人たちを守るために魔法を手にとったんだ！ それ  
ができなくなるのなら俺は大人になんてならなくていい！！」

「っ！」

俺はそう言って、転送ポートに走る。

なのは先に動いていたようだ…

クロノ達が止めようとするが…竜也がそれを足止めをしてくれた。  
その隙にユーノが転送してくれる。

俺たちの連携プレイだ。

「すみません。山城 奏真…」

「…高町なのは、指示を無視して勝手な行動をとります！」

ユーノ達に感謝しつつ、

俺たちはフェイトたちのもとへ向かった。



そのさんじゅうよん！（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

さて、今回を話しはどうだったでしょうか？

ご指摘や感想などがありましたら、書いていただけるとうれしいです！

そのさんじゅうじー！

「はあ、はあ、はあ……」

少し、まずいかな…

私は荒れ狂う海の上でそう考えた。

…魔力が全然足りない。

これじゃあ、封印できない。

やっぱり、無謀だったのかな…

ううん。それでも…

やらなきゃ！

私は諦めそうになる心に喝を入れ…

バルディッシュに魔力刃を作り、ジュエルシードへと向かう。

しかし、接近して封印しようとしたが…  
高い波にはじかれてしまった。

「うわああ！」

「フェイト！ フェイト！」

アルフがそう叫んで、駆け寄ろうとするけど…  
暴走したジュエルシードに寄って動きを封じられてしまう。

「くうっ！」

なんとか体勢を立て直しバルディッシュを構える。  
けど、もう魔力は底をついていて…  
うまくバルディッシュの刃の形成が出来なくなってきた。

「はあ…はあ…はあ…」

呼吸も苦しい。

魔力も尽きかけている。

けど、なんでかな…

こないつ死ぬか、わからないような状況だけど…

不思議と怖くはない。

…私、少しおかしくなっちゃったのかな？

「フェイター！！！」

「あ…」

アルフの声で前を見ると、  
竜巻の一つが私に迫っていた。

もうかわす力は残ってない。

ここで終わるんだ…

私はそう悟る。

ジュエルシード…母さんに持って行って挙げられなかった…  
それが、私の心残り。

母さん…ごめんなさい。

私、ダメな子で…

私はそう思って、目を瞑る。

最後に昔の母さんの笑顔が見たい…

——でも頭に浮かんで来たのは…優しい母さんの姿ではなく、  
奏真たちの姿だった。

奏真となのはの笑ってる顔。

本当にきれいで見ているこっちが幸せになれるような笑顔…

…そっか。

私が本当に一番心残りなのは…

もう奏真たちに会えなくなることに。

嫌、だな…  
嫌だよ…



まだ死にたくない…  
死にたくないよお…  
また、奏真たちに…

——俺が絶対に助けに行くから  
だから、俺を呼んでくれ——

「……助けて…奏真…」  
私は、大切な友達の名前を呟く。  
もう竜巻は目の前まで来ていた…

…お願いっ！

「助けて、奏真っー！！」

私は目を瞑り、大声で奏真の名前を叫んだ。

その瞬間…

(flash move.)

そう、機械的な音が聞こえた。

それと同時に誰かに抱かれている感触。

…暖かい。

「…待たせて悪かったな。もう大丈夫だから…」  
その声を聞いて、目を空けると…  
私が出会ったかった人の顔が目の前にあった。

〵〵〵〵〵〵

「…待たせて悪かったな。もう大丈夫だから…」

「……奏真？」

フェイトが放心状態でこっちを見ている。

「ああ。フェイト…助けに来たぞ」

俺はフェイトにそう声をかける。

色々と言いたいことはあるけど…  
まずはこいつを止めないとな。

「…フェイト、少しそのままでいろ」

俺はフェイトにそう言うのと、暴れまわる竜巻に視線を移す。  
さらに即座に魔法陣を展開。

(R e s t r i c t   L o c k .)

光の輪ですべての竜巻を固定する。

嵐は全然おさまらないが、これで竜巻の動きは封じれた。

これなら、少しの間は時間を稼げるだろう。  
俺は改めてフェイトを見る。

…見たところ大きなケガはなし。  
魔力が消耗しているだけか……良かった。

「フェイトちゃん！ 奏真君！」  
俺に少し遅れて、なのはも到着したようだ。

「……なのは…」

「大丈夫？ フェイトちゃん？」

「…うん」

「良かった」  
フェイトの無事が確認できて、安堵の表情を見せるなのは。  
本当に間に合ってよかった…  
結構ギリギリだったし。

それにしても…

「フェイト…お前、人に無茶すんなって言っというて…何、無茶してんだよ…」

「そうだよ！ フェイトちゃん！ フェイトちゃんまでそんなことしたらダメだよ！」

俺となのははフェイトに向かってそう言う。

：しかし、なのはさんや。

君も人のことは言えないのではないかな？

「…ごめん」

フェイトは頭を下げて、俺となのはに謝ってくる。

：反省はしているみたいだ。

下を向いたまま、フェイトは震えている。  
震えてる？

「どうしたんだ、フェイト？」

俺が優しくフェイトに声をかける。

すると、

「……怖かったんだ：初めは何も感じなかったのに、もう二人に会えなくなるって思ったら：すごく怖くなった：」

そういつてフェイトは俺に強く抱きついてくる。

どうやら泣いているようだ。

「俺も怖いぞ、もうフェイトに会えなくなるのは…」

そういつて、優しく頭を撫でてやる。

涙には人の体温が一番だしな。

「私だって怖いよ、もっとフェイトちゃんとお話したいもん」

「だから、もう今度からはこういうのは無しな。……無茶するならみんなでしようぜ」

「そうそう。一人では無茶でも…みんなでやればきつとできるよ。だから、私たちをもっと頼って！」

「俺たちはいつでも力になるから」

「………うん」

フェイトはやっと顔をあげて、そう約束した。  
俺が指で涙を拭いてやっていると…

「フェイト！ フェイトー！」

アルフが泣きながらフェイトに抱きついてきた。

「……アルフ…」

「良かった…良かった…フェイト……」

「…大丈夫だよ。心配かけてごめんね…」

「うううう、フェイト……」

そんなやり取りをなのはと二人で見ていると…  
クロノから通信が入った。

「バカな！ なにをやってたんだ！ 君たちは！？」  
クロノの怒声が響く。

「…本当にごめん、クロノ。罰はあとでいくらでも受ける…けど放っておけないんだ」

「！！」

「フェイトちゃんは私たちの大事なお友達だから…」

「だから、見捨てるなんて絶対できない！」

「…君たちは…はあ。艦長があとで話があるので覚悟していなさい、だそうだ…」

クロノがため息をついている。

もう何を言ってもダメだと分かったみたいだ。

あとリンディさんの説教確定ですか、やっぱり…

「奏真…なのは…」

「ははは、怒られちゃったな…」

「にゃはは、後でお説教かあ…」

不安そうな顔をフェイトがしていたので、なのはと二人で苦笑い。

うううう、許してくれるかな…

後悔はしていないとはいえ、それを考えると少し暗くなった。

「さてと、説教の前に、まずはジュエルシードを停止させないとな  
……」

「うん、僕たちは封印のサポートを！」

俺たちに遅れてやってきた竜也とユーノがそう言ってくる。

確かにジュエルシードの影響で発生した竜巻はさらに勢いを増している。

「フェイトを助けてもらったし、…仕方がないね」

竜也とユーノ、そしてアルフが魔法陣を展開し、バインドをジュエルシードにかける。

竜巻が縛り付けられ、動きがそれによって抑えられる。

その間に俺となのは…

「じゃあ、今のうちにっ」と



「受け取って、フェイトちゃん」

そういつて、俺たちはバルディッシュとフェイトに魔力を分け与えた。

「……ありがとう、二人とも」

俺たちからフェイトとバルディッシュへと桜色と緋色の魔力が流れていく。

(Power charge.)

魔力が回復したのか。

バルディッシュの魔力の刃が再度、形成された。

(Supplying complete.)

レイジングハートも完了を伝えてくる。

「よし、これでもう大丈夫だな」

「どう、フェイトちゃん？」

「うん。もう大丈夫」

フェイトが笑顔でそう言ってくる。  
これで戦闘準備を万全だな。

それにしても…

「けど、大蛇とか大樹とかでつかい怪獣の次は…自然災害が敵か…」

「にやはは。どんどん強くなっていくよね…」

「……だけど、きっとできるよ…」

「「俺たち（私たち）三人なら!!」」

三人の声が揃ったので、俺達は思わず笑顔になる。

それじゃあ、さくっと終わらせようかね…

「じゃあ、三人でせゝので一気に封印!!」

「前にも一回やってるしな…いけるだろう？」

「うん！」

俺たち三人で打ち合わせをし、空へと駆けた。

「レイジングハート！」

(Shooting mode.)

なのははレイジングハートを射撃用にチェンジし、桃色の大きな魔法陣を展開する。

「バルディッシュ！」

(Sealing form. Setup.)

フェイトもバルディッシュを変形させ、魔法陣を展開し出す。

「そんじゃあ、俺も新技で行くか…」

今回は広域攻撃だからな…

俺も緋色の魔法陣を大きく展開し、魔法を集束させる。

「ディバインバスター、フルパワー…行けるね？」

(All right. my master.)

なのははレイジングハートに声をかけ、魔力の羽根を展開する。そして魔法陣を大きくし、魔力を貯める。

「バルディッシュ、…問題は？」

(No problem. sir.)

フェイトがそう聞くとバルディッシュから魔力の羽根が出現する。

三人が三人とも強大な魔力を集束させる。

「せゝ…の!!」

なのはの掛け声で、一斉に砲撃の発射体勢に移る。

「サンダー…!!」

「ディバイン…!!」

「シャ

イニング…!!」

三人で魔力を最大限まで溜め…

「レイジ!!」

フェイトが魔力陣にバルディッシュを向け…雷の集束魔力砲撃を放つ。

「バスター!!」

なのはが強大な魔力が集束された集束砲をジュエルシードに向けて放つ。

「ブレイズ!!」

俺もなのとは同様に強大な魔力が集束された集束砲撃をジュエルシールドに放つ。

強大な三種類の魔法が一齐にジュエルシールドを襲い、竜巻を吹き飛ばす。

それによって…

6つのジュエルシールドが完全に封印された。

嵐は静まり、空も青空へと変わった…

~~~~~

「ジュエルシールド!! 6つ全ての封印を確認しました!」

「な……なんてバカ魔力…」

あれを一気に封印するなんて…
正直、うまく言葉にできない。

「でも凄いわ……」
母さんもただ呆気にとられているようだ。

三人で呆れたようにモニターを見ていた。
すると突然、アースラに警報アラームが鳴り響く。

「次元干渉！？…あと6秒で別次元から本艦及び戦闘空域に魔力攻撃来ます！ あっ！！ さらに戦闘空域に転移反応です！」

「なっ！？」

「すぐに奏真君たちに連絡を…！」

僕たちが奏真たちに通信をする前にアースラに魔力攻撃が衝突した。

そのさんじゅうろく！(前書き)

ぎりぎり今日中に投稿できましたー！！！！

そのさんじゅうろく!

「…は、はは。あれを一発で封印しちゃったよ」
ユーノが封印されたジュエルシードを見て、そう呟く。
その言葉のどこかに呆れが混じっているのもわかった。

「まあ、あいつらならこれくらいできるだろ」
俺はユーノにそう言う。

原作ではなのはとフェイトの二人でもいけたんだ…
奏真も入れて三人なら余裕だろ。
…まあ、すごいとは思うけどさ…
もう破壊兵器だよな…あれ。

「フェイトはわかるけど…あの子たちは一体何者だい？」
まだ魔法を使いだしてそんなに経ってないだろ、と続けるアルフ。

それに俺は、
「奴らは、地球生まれの戦闘民族さ。普段は穏やかそうなのに、実は戦闘が大好きなんだ」
と冗談のような話をする。

でも高町家とかリアル戦闘民族でしょ…

原作だって、最終的には肉体言語になって行くしな。

なのはもそのうち…

なのは↓悪魔↓魔王、みたいになってしまうのか…

あー、若干鬱だ…

どこかで修正しなければ…

「うわー、完全には否定できないな。模擬戦とか訓練とか好きだもんね…」

そう言って、ユーノはどこか遠い目をしている。

…たぶんこの間のスターライトブレーカーを思い出しているんだろう。

身体が少し震えている…

「…アンタたちも苦労してんだね……」

アルフがそれを見て苦笑いを浮かべる。

「まあな。あいつらのフォローするのも大変なんだよ……アルフもそうだろう？」

俺はおそらく苦労しているであろう、アルフに尋ねてみる。

「…そうなんだよ！ あたしがいくらフェイトにご飯を食べるようにとか、休むようにとか、色々言っても全然聞いてくれないんだよ」

「それは…」

「心配だな…」

やっぱり食事とか休息とか取らずに探してたのか…

「そう！ あたしは心配してたんだよ！　なのに、あたしの話は聞いてくれないのに…：奏真が言うとすぐに聞くんだよ。…：そりゃあ、フェイトに友達が出来たのはうれしいし、良かったと思うけど…」

なんか複雑だ、と言うアルフ。

「…それはなのもだよ。基本、奏真中心で行動するし…」

「俺たちに向ける顔とは全然違うもんな…」

そう俺とユーノが愚痴を言うのと、三人そろってため息が出た。

「…：今度、愚痴り合いでもしようか？　コーラでも飲んで…」

「…：そうだね」

「あたしも参加するよ…」

こうして、俺たちの愚痴りの会に新たなメンバーが加わった。

…この時の俺たちは完全に油断していたんだろう。

もうすでになのはたちと仲良くなっているフェイト。

全部、封印したジュエルシード。

なんかすべて終わった気がしていた。

だから、ユーノ達と暢気に話なんかをしていたんだ…

…俺はまだあの人が残っていることを完全に失念していた。

————だから。

「竜也っ！ ユーノっ！」

「逃げて！ 竜也君！ ユーノ君！」

「アルフ————！」

奏真となのは、フェイトの声を聞くまで、気づかなかったんだ…
俺たちの真上に落ちてくる攻撃に…
紫色の雷に…

~~~~~

「よし、封印完了!!」

「やったね、奏真君！ フェイトちゃん！」

「…うん。二人のおかげだよ」

俺たちはジュエルシードを封印出来たことを喜びあう。  
これで21個すべてのジュエルシードを封印できた。  
もう街に被害が出ることはないだろう。

「さてと、このジュエルシードだけど……」

「フェイトちゃん、本当に半分こでいいの？」

俺となのははフェイトに尋ねる。

フェイトはジュエルシードを3個ずつに分けようと言ってきた。

「…うん。二人がいなかったら、封印は無理だったし…：…本当は私の分はなくても…」

さらにフェイトは自分の分はいらないと言おうとするが、俺はそれに待ったをかける。

「いや、それだとフェイトが困るだろ？ 半分は持っていけ」

「そうだよ、フェイトちゃん。フェイトちゃんが頑張ってたから私たちも手を貸したんだし…」

なのはの言うとおりだ。

俺たちはフェイトがいたから手伝いに来たわけだし…

それにジュエルシードはフェイトのお母さんの探し物だしな。

要らないはずはない。

「…奏真…なのは…：…ありがとう」

フェイトはそう言うのと、優しく微笑んだ。

うん。これを見ただけで頑張ってたって感じだ…

「別にお礼なんて…：…っ！」

言わなくてもいい、と返そうとした時、俺は周りの様子が変わって

いたことに気づく。

「…奏真君？」

「……奏真？」

なのはとフェイトが頭を傾げ、不思議そうに聞いてくる。

「…何で…また雲が…」

空を見上げると、晴れたはずの空に再び分厚い雲が覆ってきた。よく見ると雷雲のようで…紫色の雷が帯電している。

まさか…魔法…？

俺がそんなことを考えていると、突然、雷の放電が強くなってきた。竜也たちがいる場所のちょうど真上で…

竜也たちはまだ気づいていない…  
まずいっ！！

「っ！ 竜也っ！ ユーノっ！」  
俺はすぐに竜也たち呼びかける。

「逃げて！ 竜也君！ ユーノ君！」

「アルフーーー！」

なのはとフェイトも三人に呼びかけるが……

その俺たちの叫びも空しく……

紫色の雷が竜也たちに直撃した。

辺りが黒煙に包まれる。

「……嘘、だろ？」

「そんな……竜也君……ユーノ君……」

「あ、アルフ？」

それを見て俺たちは一瞬、放心状態になってしまった。  
頭の中が真っ白になっている。

その間に、煙から抜け、海に落ちていく三人。  
三人とも気を失っているのか……  
ピクリとも動かない。

「「っ！」」

それを見て俺となのはは我に返る。

しかし、フェイトは…

「か、母さん…なんで…」

空の紫の雷を見てそう呟いていた。

母さん？

今の攻撃が…？

いや、とにかく今は…

あいつらを助けなくちゃ。

そう考え、俺となのはが竜也たちを救出にしようとした時、

「っ！ フェイト！」

今度はフェイトに雷が落ちてきた。

フェイトは呆然としていて、かわすことができない…

くそっ、間に合え!!

(Protection.)

俺はフェイトの上に移動し、障壁を張る。

「う、ぐっ……!!」



なんとか障壁で防ぐが…衝撃が半端じゃない。  
気を抜くとすぐに破られそうだ…

「奏真君っ!!」

なのはがそう言って、俺のもとに来ようとするが…

「…っ！　なのはっ！　また来るぞ!!」

さらに雷はなのはにも襲いかかる。

「っ！　レイジングハートっ！」

(Protection.)

俺の声を聞いてなのはも障壁を張り、防ぐ。

「……奏真君…ユーノ君たちがっ！」  
上からの雷、いや魔力攻撃を防ぎながらなのはが俺にそう言うてる。

どうやら攻撃が直撃した三人は海に落ちてしまったようだ…  
もう姿が見えない…

「…わかってる!…けど、今は…!!」

この攻撃を防ぐだけで精一杯だ…。

攻撃はとどまることを知らず、尚も続いている。

早く、助けに行かないとヤバいっていうのに…!!

「くっそおおおおお!!!!」

俺は叫びながらも障壁で攻撃を防ぎ続けた。

いつまでも続く攻撃と、友達を助けに行くこともできない自分に苛立ちを感じながら…

~~~~~

アルフが墜ちていった。

母さんの攻撃でアルフが：

なんで…母さん…：

「っ！ フェイト！」

奏真の声を聞いて上を見ると、私に雷が墜ちてきた。
それを呆然と見ていると…

奏真が障壁を張って私を攻撃から守ってくれた。
けど、ショックが大きくて私は何もできない。

母さんは私にも…

やっぱり、母さんは変わってしまったのかな…
もう私には優しい笑顔を向けてはくれないのかな…

母さん…私の母さん…

いつも優しかった私の母さん。
私の名前を優しく呼んでくれた母さん。

浮かぶのは美しい草原。

昔、母さんと二人でピクニックにいった思い出…

「ねえ！ とても綺麗ね、アリシア？」
母さんが笑顔で私にそう言ってくる。

アリシア？
違うよ母さん…私はフェイトだよ…

「さあいらっしゃい、アリシア」

とても綺麗で美しい草原に佇む私と母さん…

綺麗な花冠を作り…頭に被せてもらう。

「ほら、可愛いわアリシア…」

「…えへへ」

だから、違うよ、母さん！

私はフェイトだよ！！

なんでアリシアって呼ぶの？

アリシアってだれ？

私は……フェイトだよ、ね…？

母さん…

「くっそおおおおお！！！」

私のそんな考えは、奏真の叫び声を聞いて吹き飛んだ。
奏真の悔しそうな、悲痛そうな叫び。

そうだ、アルフ達を助けに行かないと…！
母さんのことを考えるのはそれからでも遅くない…！

そう考え、私が落ちていった三人を助けに行こうと、動き出した時。

私たちの目の前に、
ボロボロの三人をバインドをかけて…
こちらを睨んで来る母さんがいた。

やっぱりそんな顔しか見せてくれないんだね…
母さん……

そのさんじゅうろく！（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます！

今回の話はどうでしたか？

ついにプレシアさんの登場です！

ここからは少しオリジナルな感じになるはず…なるといいな～

あつ、ご意見、ご感想などなにかありましたらぜひ！

ではまた次回、会いましょう！

そのさんじゅうなな！（前書き）

総合評価が300を超えました！
みなさん、ありがとうございます！

そのさんじゅうなな!

上空から来る雷の攻撃がやっと止んだ。

これで墜ちていった三人を救出に向かえると思ったら、一人の女性が俺たちの目の前に現れた。

ボロボロの竜也たちを連れて…

誰だこの人。

俺がそう思っていると…

「母さん…」

フェイトがそう呟く。

「母さん…?」

フェイトの?

この人が…?

なんでここに…

「…母さん、なんで…」

フェイトがそう尋ねる。
しかし、その返答は：

「……フェイト……やっぱり貴女じゃダメね」

「…えっ？」

「役立たずでちっとも使えない……ただのお人形」
驚きの表情を見せるフェイトに冷たい眼差しを向けて、フェイトの母親はそう言った。

「か、母さん…何を言ってる…」

何を言っているのか理解できないのか、理解したくないのか。
フェイトの声が裏返る。

「もう貴女は用済みと言ったのよ、フェイト」
しかし、母親はそんなフェイトに冷酷に告げる。

「母さ…」

「私を母と呼ばないで！！ その顔で！ その声で！ 見るのも汚らわしいわ…」

冷たい眼差しを汚いものでも見るような眼差しに変えてくる。

人形…？
用済み…？

汚らわしい…？
何を言って…

「っ！」

「私の娘はただ一人。アリシアだけよ！！ 貴女のような失敗作なんか娘ではないわ！ どこへなりと…消えなさい！！」

「…………っ！！」

「フェイトちゃん！！」

大きなショックを受けてふらついたフェイトをなのはが支える。
フェイトの目は光を失くし、ただ虚空を眺める。

…娘じゃない…？

アリシアって誰だよ…

さっきから何を言ってやがるんだ…こいつ。

「…おい、さっきからなんだよ…失敗作とか人形とか」

家族の会話に入るのはいけないと思い、今まで我慢してきたが…
それも限界を超え、とうとう俺はフェイトの母親に話しかけた。

「何ってそのままよ。その人形はただの人間じゃないの…使い魔とは異なる…使い魔を超える人造生命体」

人造生命って、人が作った命ってことだよな…
それって…

「人造生命…っまさか！」

「そう、それはクローンなのよ。私の愛しい娘の失敗作…似ても似つかないまがい物よ!!」

「……………」

「…っ！」

話は聞こえているのか…フェイトが一瞬、ビクツと反応した。

……失敗作…？

…まがい物、だと？

「すぐに廃棄しても良かったんだけど…丁度コマが必要だったから今まで生かしていたのよ。けど、ダメね。言ったことも守れない…本当に使えない出来そこないだったわ！」

…廃棄。

…コマ。

…出来そこない。

「……………れ…」

「けど今日で、それも終わりよ。もうあんなものを娘扱いなんかしなくてもいい」

…もういい。

…もう聞きたくない。

「……まれ…」

「フフッ…そうだわ。聞こえていないかもしれないけど…良いことを教えてあげるわ、フェイト。あなたを作り出してからずっとね…私、あなたのことが…大嫌いだったのよ!!」

それをフェイトの母親が言った瞬間、フェイトは糸の切れた操り人形のようにがくつと倒れ、意識を失った。

「フェイトちゃん!!」

…もう限界だ……

こいつの話はもう聞きたくないっ!!

「もう黙れっ!!!!」

(Break Saber.)

俺はフェイトの母親、いや…このくそババアに切りかかった。

「あら、どうしたの。突然」

くそババアは顔に笑みを浮かべながら障壁を張り、それを防ぐ。

けどな…

「ブレイク！」

俺はその障壁を突破して、さらにババアを切りつける。

しかし、ババアは少し距離を取ることでそれをかわした。

「あんたは…：あんたはっ！ フェイトが今までどんな気持ちで頑張ってたと思ってるんだ！」

俺は知ってる。

うれしそうに…けど、どこか寂しそうに母親のことを話すフェイトの姿を…

「……………」

「…フェイトはどんなにきつくても、辛くても、…耐えて、耐えて、耐えて！…：今まで頑張ってきたんじゃないか！！ それも全部…：」

俺は知ってる。

母親に喜んでほしくて、食事や休息も取らずにジュエルシードを探

していたフェイトの姿を：

(Divine Lancer.)

周囲に魔力弾を形成し、ババアに放つ。

全部で20もの数の魔力弾をババアは障壁で防いだ。

「全部…あんに…母親に喜んでもらいたかったからだろうがっ！
！ それを…！！」

そう、すべてはこいつのために…
なのにつ…！！

「…私はそんなこと頼んだ覚えはないわ。その人形が勝手にしたことよ」

なんであんなにそんなことを言うんだよ…
なんであんなにわかってあげないんだよ…
なんで…なんで………

俺はありったけの魔力を魔力刃に込め、もう一度突撃する。

「…なんでフェイトの気持ちを分かってやらないんだよっ！！
んたはー！ー！！！」 あ

しかし、それは破れないほど堅い障壁に阻まれ…

「……うるさいわね。今は貴方に構っている暇はないの……」
ババアがそう言った刹那。
俺の腹部に魔力弾が撃ち込まれた。

「奏真君っ！」

俺は突然の攻撃に吹き飛ぶ。
それと同時に鮮血が宙に舞う。

なのはの悲鳴が聞こえたなと思ったら……
腹部に激痛が走った。

どうやら腹に穴があいているみたいだ。
血もたくさん溢れてくる。

「ぐっ……まだだっ!!」
そう言っ、なんとか体勢を直して前を向く。
まだ、俺は……

「いいえ、これで終わりよ……」

「えっ？」
その声で気がついた。

俺の目の前には杖があつて…
もう魔力もチャージされてて…
回避なんてできないってことに…

「はい、さようなら」

俺は腹部にもう一発食らい…撃墜された。

「奏真君————！！
い、いやああああ————！！！！！！！！」

〵〵〵〵〵〵〵〵

奏真君が…奏真君がやられちゃった。

私とおそろいの真っ白なバリアジャケットが真っ赤…真っ赤になつて……

そのまま海に落ちていっちゃった。

「ふん、バカな坊や…」

「……なんで、こんな…こんなひどいことを…」

私はフェイトちゃんのお母さんを睨みつけながらそう尋ねる。

なんでこんなひどいことが出来るの…？

なんであんなひどいことをフェイトちゃんに言えるの…？

「目的のためよ」

「…目的…？」

「そう。私はジュエルシードを使って生き返らせるの！ 私のかわいいアリシアを…！」

「で、でもジュエルシードは…正しく願いを叶えたりなんかしませんよ!？」

そう、ジュエルシードは願いを正しい形では叶えてくれない…ユーノ君もそう言ってたはず…

「…それは正しい方法で使わないからよ…あのジュエルシードはね。21個全部そろってはじめて願いを叶えることが出来るのよ」

「全部…そろって…」

それじゃあ今までへんな形で願いが叶っていたのもそのせい？

「そうよ。だから私はすべてが封印されるタイミングを待っていたの…貴女たちには感謝するわ。私の願いのために今まで御苦労さま」
そう言ってフェイトちゃんのお母さんが笑いながらお礼をいつてる。

けど…

「…私も奏真君もあなたのために頑張ったわけじゃない。ジュエルシードは危ないもので、この街が危険だったから集めたの。絶対にあなたの願いのためなんかじゃない!!」

「…そう。まあ、それは正直どうでもいいのよ…さあ、早く私にジュエルシードを渡しなさい」

「…嫌です! これはみんなで頑張って、今まで集めてきたものです。だから渡せません」

私はそう言った。

みんなで集めたジュエルシード……
そう簡単に渡すなんてできるわけがない。
こんなひどいことをする人になんて絶対に……

「……どうしてもジュエルシードを渡す気はないというの？」

「あれはユーノ君のものだから!! あなたには渡せない!!」
私ともう一度、強くそう言う……

フェイトちゃんのお母さんはバインドで囚われている竜也君たちに杖を向けた。

「そう。……じゃあ、この子たちはどうなってもいいということね……」

「っ!」

「あなたがジュエルシードを渡してくれないっていうのなら……この子たちもあの坊やみたいになって貰おうかしら……」
そういつてフェイトちゃんのお母さんは歪んだ笑みを浮かべる。

それはつまり、ジュエルシードを渡さなければ三人を攻撃するとうことで……

私一人で、しかもフェイトちゃんを支えた状態じゃ、どうしようもないわけで……

「……………」

思わず、レイジングハートを握る手に力が入る。

悔しい…

悔しいけど…

ここは言うことを聞かないと…

「……………」レイジングハート…」

(Put out.)

私はレイジングハートから今まで集めたジュエルシードをすべて渡した。

「フッフ、賢い子は好きよ。じゃあ、ありがたく貰って行くわね…」
そう言い残して…フェイトちゃんのお母さんは転移していった。

みんなを地上に降ろして、奏真君を海から救出した…
奏真君は重傷で…血だらけで…

私は無言で治癒魔法をかける。

クロノ君たちとは通信が繋がらない。

今、動けるのは私一人だけ…

「……………」

(Master…)

私はレイジングハートの声には答えずに、周りを見る。
視界にはボロボロで倒れているみんな…

「フェイトちゃん…竜也君…ユーノ君…アルフさん……………奏真君…みんな、みんな…」

みんな、ごめんね…

私、ジュエルシードを渡しちゃったよ……

みんなであんなに頑張って集めたのに…
私は……

私は…

なんか涙が出てきた…

私は泣きながら奏真君の治療を続ける。

もう血は完全に止まったみたいだ。

「…奏真君…：起きてよ…大変なんだよ…：このままじゃあ…私…
…私…」

そう言っ、私の涙が奏真君の顔に落ちる…

「うううう…：…」

悔しい…

悔しいよお…

奏真君…：…

私がそう思っていると…

「…まだ、終われ、ねえよな…：こんなところじゃあ…」

奏真君がゆっくりと目を開けて、私の頬に手で触れてくる。

「…：奏真君…」

私はその手をぎゅっと握りしめる。

「……悔しい、よな…このままじゃあ」

「…うん。うん、うん……」

奏真君も悔しいって感じてるんだ…
私と同じ気持ちなんだ。

「まだ、俺はあいつには言いたいことが、たくさんある」

「…うつ、ん、ぐすっ…。…」

「……だから泣くな…なのは……俺たちはまだ……まだ、負けてねえ！！」

身体中が血まみれで…ボロボロで…

だけど、奏真君の目はまだ諦めていなかった。

その声は私の暗くなってた心を晴らしてくれた。

「絶対、絶対にあいつに今度は勝つ、…勝つぞ、なのは！！」

「…うん！　そうだね…」

やっぱり奏真君はすごい…

私が世界で一番好きな……
私のヒーローだ！

そのさんじゅうはち！（前書き）

学校が休講になったので朝から投稿です！
みなさんも台風には気を付けてくださいね。

では、本編をどうぞ！

そのさんじゅうはち！

「……以上がレイジングハートに記録されていた情報のすべてです……」

僕たちはレイジングハートに記録されていた、この事件の黒幕とのやり取りをすべて見た。

あのフェイトという少女の事実……

撃墜される奏真の姿……

なのはがジュエルシードを渡すところ……

そして、その涙……

奏真の心からの誓い……

全部、アースラが攻撃されて動けない時に起きたことだ。

僕も悔しい……

何もできないで……ただ、じっとしているしかなかった自分がすごく嫌いだ……

「……ジュエルシードは奪われてしまったのね……でも問題はこれからよ……クロノ、事件の大元について何か心当たりは？」
見ていたモニターから視線を僕に向け、母さんが聞いてくる。

…そう。

まだこれからだ。

まだこの事件は終わってない…

「はい、エイミィ…モニターに」

「はいはい」

エイミィが操作すると、

会議用の机の中心にモニターが現れ、そのモニターにある人物が映し出された。

「あら!？」

「そう、僕らと同じミッドチルダ出身の魔導士プレシア・テストロツサ。専門は、次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導士でありながら…違法研究と事故によって放逐された人物です」

「………」

母さんは食い入るようにモニターを見つめる。

同じ母親として何か感じるものがあるのかもしれない…

「登録データとさっきの攻撃の魔力波動も一致しています。そして

あの少女…フェイトは……」

「彼女が…プレシアが奏真君に言っていた通り…自分の娘のクローン体…」

「…はい。そして、事故で亡くした娘を生き返らせるために…ジュエルシードを…」

プレシアは人を生き返らせようとしている。
ジュエルシードというロストログアの力を使って…

「でも…あんなものを21個…すべて発動させたら…」
エイミィがそう言葉を漏らす。

1個でもあんなに力のあるロストログアだ…
それが21個も発動したら…

「今までにない規模の次元震…いえ、最悪、次元断層も起こる……
…」

「…なんとしても止めないとね……彼女の本拠地は？」

「…すみません。まだわかっていません」
エイミィがぐくつと肩を落とす。

機器が使えなかったからとはいえ、自分の仕事が出来なかったことがショックのようだ。

「…あの子たちに聞いてみるしかない、か…」

「……しかし、彼女たちも知らない恐れもありますね…」

彼女…

フェイトにプレシアの居場所を聞かなければ…

だが、今の彼女は…

「そうなれば、八方塞りよ……それで、なのはさんたちの容体は？」
母さんも悪い想像をしたのか。

それを振り払うかのように、話を変えてくる。

「まず、なのはちゃんにこれといったケガはありません。ユーノくん、竜也くん、あの子の使い魔は魔力攻撃の直撃を受けましたが…おそらく今日中には目を覚ますかと…」

ユーノたちは見た目ほどダメージは酷くなかった。
なのははもちろん無傷だ。

「ただ…あの子、フェイトちゃんは身体的にはともかく、精神的なダメージが大きくて…いつ目を覚ますか…それと奏真くんですが…なのはちゃんの治療が早かったので命に別状はありません…ですが重傷です」

あの後、フェイトは起きるのを拒否しているかのように目を覚まさないし…

奏真…あのバカなのはとは会話した後、再び意識を失った。

そのせいで救護班が駆け付けた時のなのはの慌てようは凄まじかった…

今も医務室で奏真の傍に貼りついているだろう。

「……そう。本当にあの子は心配をかける子ね…」

「…母さん…奏真はもう…」

あのケガでは無理をさせる訳にはいかない。
それを母さんに伝えると、

「ええ、はずすつもりなんだけど……はあゝ。納得しないんでしょ
うね…」

母さんはため息をついてにそう言った。

「…はい。おそらく…」

「勝手に突っ込んで行っちゃいそうだよね…。奏真くん…」

「「「はあ……」」」

僕たちは三人で深い…本当に深いため息をついた。


~~~~~

「フッフ、待っていてね…アリシア。もうすぐ…もうすぐよ…」  
私は生体ポットに入っているアリシアを見つめながら…そう呟く。

やっと…やっとアリシアに会える…  
あのバカな女でさえ成し遂げられなかったことが私にはできる。

これでやっと本物になれるわ…  
この記憶も…  
このアリシアへの愛情も全部…  
全部、本物に…

「あと少し…あと少しよ…!!」  
私の魔力が回復したら…  
すべてが…すべてが変わる。  
いえ、ここからすべてが始まるのよ…!

ああ、アリシア…

私のかわいいアリシア…

私は宙に浮かぶジュエルシードを眺める。

「この石さえあれば…フッフ……ん？」

おかしい…

おかしいわ…

なんで…なんで…なんで！

「なんで…1個足りないの…!!」

あの人形が持っていたものは全部ここにある…

あの女の子が隠した…？

いや、あの子の表情からそれはない…

じゃあ一体どこに…？

私が考えていると、頭に一人の男の子の顔が浮かんだ…  
あの坊や…

「そう…あの坊やがまだ持っていたのね…フッフ…フッフ、フ  
フ…ハハハー！！」

そう、あの坊やね。

あの坊やが私とアリシアの邪魔をするのね…

「やっぱりあの時、殺しておくんだったわ……………」

たぶん、まだ生きているんでしょうね…  
なんとなくだけど…そんな気がする。

いいわ。

今度こそ…

きちんと……………

「…もう少し待っていてね、アリシア…邪魔をする悪い子を始末し  
てくるから…」

……………殺してあげるから……

私はもう一度アリシアを眺めてから部屋を出ていった。

〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃

「…う、…あ、うん？」

目を開ける。

なのはと会話した後、意識をまた失ったみたいだ。  
真っ白な天井が見える。

あっそうだ。

竜也に教えてもらったあの言葉を今なら言えるな…

「知らない天「奏真君っ！」…最後まで言わせてくれよ…」

竜也曰く、一度は言ってみたい言葉らしいんだけど…  
なのはに見事に邪魔された…  
まあいいんだけどさ。

「奏真君…奏真君……良かった…良かったよお……」  
なのはが泣きながら俺にしがみついてくる。

うつ…。

いや、なのはさん。

あの…腹がすごく痛いんですが…  
あ、あと鼻水が……あっ！

…もう…いいや。

「…悪い。また心配かけたな」  
気を取り直して…なのはの頭の上にポン、と手を乗せる。

「本当だよ、バカ…奏真くんのバカ！ バカ、バカ、バカァー  
ー！！」  
そうやって俺の胸をぽかぽかと叩いてくるのは。

叩くのはそんなに痛くないんだけど…さ。

「…そんなにバカって言われると…少しへこむんだけど…」

俺が少しへこみながらそう言うとき…

「…そんなの関係ないの。バカな奏真くんはもっとへこんでしまえばいいの！ もっとベッコベコに…」

なのはがそんなことを言いだした。

それはあんまりではないですかい…

そう思った俺は言い返すことにした。

「なっ！？ またバカって言ったな！ バカっていう方がバカなんだぞ！！」

「私は少なくとも奏真君よりはバカじゃないの」

「…お前っ！ 年上の人に向かって…」

「年下にいつも宿題を手伝ってもらっている人はだれなのかなー？」

…うっ、痛い所を…

こいつ…

「ぐっ…！ 宿題なんかで、俺のことを測ることなどではしない！！！」

「ふふん。おバカな子はみんなそう言うの！」

このやろー、謝れ。

全国のおバカな子に謝れ！

「何を。この運動音痴！」

「にゃ！ 人の気にしていることを……奏真君のアホー！」

「なのはのペッタンコ！」

「~~~~っ！ 奏真くんのバカ！ 鈍感！ この朴念仁！！」

「「むう~~~~！」」

俺となのはは睨みあう。

そんな俺たちを止めたのは…

「……一体何をしているんだ…君たちは…」

病室の入り口から呆れたような顔をしてこちらを見ているクロノだった…

そのあと、なのはとの言い合い？の矛を収めるとクロノから詳しい

話を聞いた。

まだ、竜也たちは目を覚ましてないらしい…けど、心配はいらないとのこと。

フェイトは…あれから眠り続けている。  
まるで嫌な現実から目を逸らすように…

けど…当然だと思う。

あんなことをいきなり言われたんだ。

…あとで様子を見に行こう…

あのババア…プレシアはジュエルシールドを奪ってから逃走…居場所はまだ分らないらしい…

ジュエルシールドを全部集めた今…いつ発動させるかわからないとか。

そうか…全部…

ん？ 全部？

「…あっ！」

「ん？ どうしたんだ奏真？」

「奏真くん？」

二人の声に何も返さず…  
俺は自分の鞆へと向かう。

その中には…



「…やっぱりあった…」

一個のジュエルシードがあった。

「っ！ これは…！」

「ジュエルシード!?」

クロノとなのはが驚く。

クロノはともかくなのはは知ってたんじゃ…  
まあ、忘れてたんだろうな。

「ああ、俺が一個だけ持ってたんだっ…」

「じゃあ…」

なのはの顔に笑みが浮かぶ。

…そうだ。

まだあいつは…プレシアは…

「たぶん…まだプレシアは願いを叶えることが出来ない…そして…」

「最後のジュエルシードを狙ってやってくる…」

俺の言葉にクロノが続けてくる。

俺となのははそれに頷いた。

次が最終決戦だ。

今度は：

今度は絶対に負けないっ！

俺は強く手を握り締めた。

そのさんじゅうきゅう！（前書き）

PVが10万を超えました！

みなさん、ありがとうございます！

あつ、あと今回は少し短めです。

そのさんじゅうきゅう!

クロノたちと話をした後。

俺はなのはの監視をうまくすり抜けてフェイトの病室へと向かった。  
まだ傷は痛むが…歩けないほどじゃない。  
今はフェイトの様子が見たかった…

「……フェイト…」

俺はそれしか言葉が出なかった。

病室に入ると、ベットの上にフェイトが寝ていた。  
まるで魂が抜けた抜け殻のように…  
ただ…ただ静かに…

そんなフェイトの姿を見て、なんか俺は涙が出そうになった。  
無性に悲しくなったんだ…

その痛ましい姿が…

そのまま消えてしまいそうな存在感が…

「……まだ暖かい…」

フェイトの手を握る。

その手の温もりだけが…ここにフェイトがいる証だと思った。

「……なんで：なんだろうな……」  
思わず、声が漏れる。  
どうしていつも……

「：なんで、いつも世界はこんなに優しくないんだろうな……」

あんなに頑張ってた女の子がなんで……  
なんで：こんな目に合うんだろう。  
こんなに優しい女の子がなんで……  
なんで：こんな目に合うんだろう。

「……なんでこんなに理不尽なんだろうな……」  
別に他の人でもいいじゃないかとは思わない。  
けどさ：別にフェイトじゃなくてもいいと思うんだよ……

もし、神様っていうのがいるなら：なんでこんなことをするのか問い質したい。  
もし、これが試練だとか運命だとか抜かすのならぶっ飛ばしてやりたい。

そんなことより、なによりも……  
自分の無力さをひしひしと感じる。

友達がこんな姿になっているのに俺は嘆くことしかできないなんて……  
もっと俺がうまくやれていたらフェイトはこんな風にはならなかったんじゃないだろうか。  
フェイトの身体には無数の鞭の跡があったらしい。

それに俺が早く気付いていたら：

そんな意味のないことを考えながら、もう一度フェイトを見る。  
静かに呼吸の音が聞こえる。

けど：俺はフェイトがここにはいないように感じた。

だから俺は話しかけることにした。

この頑張った女の子に：

このまま消えてほしくなかったから：

「……今はゆっくり休んでいいからな。：きっとフェイトは今まで一生懸命走ってきたから、疲れちゃったんだよ。：だから今は立ち止まってもいいんだ：」

俺はそう言って、フェイトの頭を優しく撫でる。

フェイトの髪はサラサラのままなのに、どこかいつもより艶がないように見えた。

「：今はゆっくり休んで、元気になったら：また歩けるようになってたら：：また歩き始めよう？ 本当の：：本当のフェイトの人生ってやつを：」

誰かに与えて貰うんじゃない。

今度は自分で考えて：自分の意思で：

「……もし、暗くてその道が見えないっていうのなら：俺が照らす

から……怖くて歩けないっていうのなら俺が手を牽いてやるから……」

俺が力になるから……

またフェイトが立ち上がれるように……

何度だって俺が力になってみせるから……

「……だから……一歩ずつでもいいから……ゆっくりでもいいから……前に向かって歩いていこう。そうすれば明日はきつと今日よりいい日になると思うから……」

きつと明日は笑えるようになってると思うから……

そんな毎日をフェイトと過ごしていききたいと思うから……だから……

「だから今はお休み……フェイト……」

俺はそう言ってフェイトの頭から手を放す。

そろそろ病室に戻らないと、また叱られるからな。

「……あの人のことは任せといて。今度は負けないから……」  
最後にフェイトにそう言い残して俺は病室をあとにした。

~~~~~

夢を見ている。

仕事で疲れているのに母さんが料理を作ってくれて…

それを二人で食べて…

口の周りに付いたソースを母さんが拭いてくれる。

一緒にお風呂に入って…

一緒のお布団に入る。

そんなありふれた生活の中で母さんはいつも笑顔だった…

昔の楽しかった記憶。

ううん、違うね…

楽しかったアリシアの記憶。

結局、母さんは、最後まで私に微笑んでくれなかった…
私の記憶は全部偽物で…

母さんが私に^{フエイト}微笑んでくれたことなんて一度も、ない。

私はただ母さんに認めてほしかったんだ…。
愛してほしかったんだ…。

だから…どんなに足りないと言われても…
どんなに酷いことをされても…
我慢できた…。

けど…捨てられた時に…やっぱりなってどこか納得してた自分もいたんだ。
見ないふりをしていたけど…どこかおかしいなって思ったこともいっぱいあったから…

それでも…

やっぱりそれでも…母さんに捨てられたことはショックだった。
私は母さんがすべてだったから…
だから今もこんな夢を見て、現実から逃げてる。

……もう嫌だ…

何もかも嫌だ…

このままでもいい…

このまま……消えてしまいたい…

私がそう考えていた時。

私の頭に暖かな温度を感じた。

私を知っている暖かさ。

この温もりは…きつと…

奏真だ…。

私の意識が表に引き戻される。

そして奏真の声が聞こえた。

どうやら私に語りかけてくれているみたいだ。

「……今はゆっくり休んでいいからな。…きつとフェイトは今ままで一生懸命走ってきたから、疲れちゃったんだよ。…だから今は立ち止まってもいいんだ…」

奏真…私の大切な友達…

いつでも私の助けになってくれる大好きな人。

その奏真が言ってくれてる、休んでいいよって。

奏真…私、頑張ったよね…

もういいよね…？

けど、奏真はそれだけじゃダメだって言ってきた。

「…今はゆっくり休んで、元気になったら…また歩けるようになったら…また歩き始めよう？ 本当の…本当のフェイトの人生ってやつを…」

厳しいな…奏真は…

とっても厳しいよ…

本当の私の人生…

私の全ては…まだ始まってもない…

…確かにそうなのかも知れないね…

生きていたいと思ったのは、母さんに認めてもらいたいからだ…
…それ以外に、生きる意味なんてないと思ってた。
それが出来なきゃ、生きていけないんだと思ってた…

母さんの言って通りだ…

私は本当に人形だったんだね。

けど、奏真…私、自信がないよ…

…私は奏真みたいに心が強くないから…

自分で歩き出せる自信がないよ…

そんな私の思いが分かったのか。

「……もし、暗くてその道が見えないっていうのなら……俺が照らすから……怖くて歩けないっていうのなら俺が手を牽いてやるから……」

奏真はそう言ってくれる。

すごく心強いな……

……奏真が力を貸してくれる。

傍にいてくれるのなら……

出来るかもしれない。

ううん、きつと出来る。

「……だから……一歩ずつでもいいから……ゆっくりでもいいから……前に向かって歩いていこう。そうすれば明日はきつと今日よりいい日になると思うから……」

明日には奏真たちと笑えるようになるのかな……？

奏真となのはとアルフと……一緒に……

「だから今はお休み……フェイト……」

そう言って、奏真は部屋を出ていった。

私はゆっくり目を開ける。

「…そうだったね。死ぬって思ったあの時も…浮かんだのは母さんじゃなくて奏真たちだった…」

そう、私が本当に死にたくないって思ったのは…
一番心の残りだったのは…

私はベッドの横にあったバルディッシュを掌に乗せる。

「……はじめはつけないとね…」

今までの自分とお別れするために…
新しい自分を始めるために…

「バルディッシュ…お前も、このまま終わるのなんて…嫌だよね…
？」

(Yes sir.)

バルディッシュがコアを光らせながら答えてくれる。

私にはこんなに力強い相棒がいたんだったね…

「上手く出来るかわからないけど…一緒に頑張ろう」

奏真はあの人のことは任せてって言ってたけど、私も母さんに言いたいことがある。

捨てればいいって訳じゃない…逃げればいいって訳じゃ…もつとない。

だから…戦おう。

…母さんと…

本当の自分を始めるために…!

奏真たちと生きていくために…!

そのよんじゅう！（前書き）

記念すべき第四十話なのに…
内容がないっ！！

なんというか閑話みたいなお話です。
では、どうぞ

そのよんじゅう！

フェイトのそこから自分の病室に戻ると…般若がいました…
今はむりやりベットに座らされています。

「…奏真君…まだ安静にしているとダメって言われてたよね…
？」

なのは声がいつもより低い。
目は前髪で隠れて見えないけど…どうやら怒っていらっしやるようだ。

「えっと…いや、ほら…ちょっとトイレに…」

「嘘なの…奏真君は嘘をつくど、まばたきの回数が多くなるの…
なんとか言い訳を試みるが…すぐに一刀両断された。

ていうか、何それっ！？

俺にそんな癖があったの！？

じゃあ、今までのウソって全部ばれてるー！？

血の気が引いていくを感じる。

どこまでばれてたんだ…

なのは分のプリンを勝手に食べて竜也を犯人にしたことか…
いや、ケーキかもしれない…
嫌いなピーマンをなのはの皿にこっそり移したことも…
などと色々な事が頭に浮かぶ。

「……ソ、ソンナコト、ナイヨ？」

思わず、言葉がカタコトになったような気がしないでもない。

「……奏真君…私は嘘をつくいけない子にはお仕置きが必要だと思うの…」

そう言っ、なのはさんはレイジングハートを起動させ…
って！

これはまずい…まずいですよー！！

「…すいません！ 自分、嘘をついていました！！」

俺はすぐになのはさんに謝る。

今日は別に悪いことしてないよな、とか思ったら負けだ。

「………で？」

その短い返しがすごく怖いんですけど…

俺は少しビクビクしながら正直に話すことにした。

「フェイトが心配だったので、様子を見に行っていました！
ー！」
サ

ここは軍隊かよって突っ込みはなしでお願いします。

なのはさんの威圧感が半端ではありません。

「……………」

「……………」

無言で見つめ合う、俺となのはさん。
痛いです。

非常に沈黙が痛いです！

そのまま少し時間がたつと…
ふう、となのはさんが息を吐いた。
それと同時に威圧感がなくなっていく。

どうやら助かったようです…
俺も内心でほっと息を吐く。

「それなら…私にも言ってくればいいのに…私だってフェイトちゃんのこと…心配なんだよ？」
なのはさんがなのはに戻って、俺にそう言ってくる。

「…悪かったよ…行かせてくれないかもって思ったからさ…」
水飲むときとかも、ケガしてるからとか言ってベッドから一切、出してくれなかったし…

「むう。私はそんなに頑固じゃないの！ 今だって奏真君が一人で勝手に動いたから怒ったんだよ？」
そう言ってなのはは頬を膨らませる。

いや、結構頑固だよなと思ったけど…
心配かけてる俺の方が悪いかと思って言わなかった。

「ははは、ごめん、ごめん」

「…それでフェイトちゃんはどうだった？」

俺がなのはに謝罪しながら、なのはの頭をポンポンと叩くと、少し
機嫌が直った。

その後、フェイトのことを考えたのか、暗い顔をしながら様子を聞
いてくる。

「……眠ってたよ。だからしばらく休ませてあげよう…」

「……そっか…」

俺がそう伝えたと…なのははゆっくりと頷いた。
そのまま少し重い空気が流れる。

そんな空気が嫌だったので、

「……フェイトの分も頑張らないとな…今度は勝って、あいつに色
々言ってやんなくちゃ！」
そう言って元気を出した。

うん、今は暗くなってる場合じゃないよな。

「…うん。頑張ろうね、奏真君」

なのはもそんな風に思ったのか、笑顔でそう返してくる。

「ああ。……ところでどこまで俺の嘘がばれてるのかな？」

それに返事をし、先ほどから気になっていることを軽い感じで聞いてみる。

しかし、その反応は：

「えっ？」

「いや、あれ？ えっ？」

何のこと？　みたいな感じだった。

思わず俺も同じように返す。

そして直感的に思った。

これはしまったなど。

墓穴を掘ってしまったなど。

「…ふーん。奏真君は他に私に何か隠し事があるんだ…？」

またなのは声が一段低くなった。

「…いや、でもさっき癖がどうとかって…」

ばれてたんじゃなかったの？　みたいな感じに恐る恐る聞いてみると…

「…あれはカマをかけてみたの。アリサちゃんに奏真には墓穴を掘らせた方がいいわよって教えて貰ったんだ…」

予想外の…いや、ある意味予想通りの最悪の答えが帰ってきた。
というか、アリサ…!

「…あのツンデレ娘が…!」

小さな声でアリサに呪詛を吐く。

なのはに余計なことを…

「あとすずちゃんも言ってたの…奏真君みたいにいけない子には
口よりも体で教えた方がいいって…」

怖いよ、優しそうに見えてやっぱり一番怖いのがすずかだよ!

あの腹黒娘エ…!

「…恨むぞ…すずかぁ…」

すずかにもアリサと同じように呪詛を吐く。

しかし、その声はどんどん小さくなっていった。

目の前には般若を越して修羅がいます。

なのはさん降臨です。

め、目に光がない…

あとレイジングハートも Set up じゃないよ!?

頑張ってセカンドマスターを守ろうよ!!

「……それじゃあ奏真君…少し、頭を――――」
なのはが完全になのはさんに変わって俺にレイジングハートを向けた。

あつ俺、終わったかも…と思ったまさにその時！

「奏真、なのは。今、ユーノ達が目を覚めました。すぐに病室に…つて何をやっているんだ？」

我らが神が通信クロノを入れてきた。

やったよ、クロノ！

すごいよ、クロノ！

さすがだよ、クロノ！

クロノは俺の救世主だよ！！！！

「…な、なんでもないぞ！ そっか起きたのか！ ならすぐに見に行かないとな！」

俺はそう言ってそそくさと病室を出る。

なのはさんの方は一切見ない！

ただ俺が丁度外に出た時。

「…ふふふ。クロノ君…あとでお話なの……」
って聞こえたような…

いや、聞き間違えだろう。

そんな声を俺は聞いてない！
聞いてないっいたら聞いてないんだ！！

〵
〵
〵
〵
〵

「う…ん？」
俺は目を開ける。
まぶしい光が目に入ってくる。
そのまぶしさに思わず目を細める。
ここは病室みたいだ。

あれ？

俺はどうしたんだっけ？

たしかフェイトが無茶して…

それをなのはたちと助けにいつて…

ジュエルシードを封印して…

ユーノ達を話をしてて…それで…

そうだ。

紫色の雷。

プレシアが攻撃してきたんだ！

それで撃墜されて…

俺は色々と思い出しながら…隣を見てみると。

ユーノとアルフが寝ていた。

これは明らかに原作の流れと違ってきてるよな…

アルフがもうアースラにいるし…

ユーノが撃墜されるとこなんかなかったはずだ。

今までもちよこちよこ細かいことは違ってたけど…
これからどうなるんだ？

一体……

そんなことを考えて、はあくため息を吐いていると……

「う……ん」

「……………っん」

ユーノ達が目を覚ましたようだ。

「…ん？」

「…………あれ？　ここは？」

「ユーノ、アルフ、おはようさん」

まだ寝ぼけているようなユーノとアルフに声をかける。
すると、同じように返事が返ってきた。

「…おはよう」

「…あつ、竜也。うん、おはよう」

「…………俺たちがどうなったか覚えてるか？」

「んー……」

「えっ？　えーと……」

俺がそう聞くと二人は考え込む。
まだ状況は理解していないようだ。

さて、どっちが早いかな？

「……はっ！ フェイト！？ そうだよ！ フェイトは！？」

どうやらユーノよりアルフが先に思いだしたようだ。

フェイトはどこだ！ と言わんばかりに俺に詰め寄ってくる。

まあ当然か。

アルフからすればここは敵地だもんな…

「俺も今起きたばかりだから知らないけど…アルフがいるんだからフェイトもいるんじゃないか？」

実際はわかんないけど…アルフを置いて行ったりはしないだろうし…奏真たちと仲良くなってるし…

うん、普通にアースラにいそうだな。

「……じゃあ、早くフェイトを助けなくちゃ！」

そう言っ、外に出ようとするアルフをユーノと二人で止める。

「ちょっと落ち着け！」

「今動くのは得策じゃないよ…あの子がどこにいるかもわかんないでしょ？」

「…そりゃ、そうだけどさ…」

まだ納得していない様子のアルフをなんとかだめていると…
突然スライドドアが開いた。

三人ともドアの方を注目すると…

「ん？ 三人とも起きたのか…」

そういいながらクロノがやってきた。

とりあえず、俺は事情をクロノに聞こうと口を開いたが…

「あんたっ！ フェイトはどこだい！ もし何かしてたら…ただじゃ置かないよ！」

アルフに遮られて言葉が出ることはなかった。

「…彼女は…」

なぜかクロノが返答に詰まる。

やっぱり何かあったのか？

くそっ、状況がさっぱりわかんねー。

「とにかく…奏真たちを呼ぶよ。すごく心配していたからね…」
そう言ってクロノが通信を開く。

奏真はどうでもいいけど…なのはが俺のことを心配してたのか…
俺が心配で涙目ののは…

いかん。考えてたら顔がにやけてきた。

こんな顔をなのはに見せられん。

俺はきりつとした顔を作って通信のほうをしてみる。

「奏真、なのは。今、ユーノ達が目を覚ました。すぐに病室に…って何をやっているんだ？」

クロノ言った通り、通信で見えるなのはたちは様子がどこかおかしかった。

なのはがベッドの上に座っている奏真にレイジングハートを向ける。

目もハイライトが消えてるし…

まさか、OHANASHI中だったのか！？

てーことはもう魔王に覚醒しているのか…！

なんてことだ…！

俺が戦慄を覚えていると。

「…な、なんでもないぞ！ そっか起きたのか！ ならすぐに見に行かないとな！」

そう言っただけで奏真が逃げるように病室を出ていく。

あいつ…悪運つえーな。

奏真がいなくなって通信に映っているのは、なのはだけになった。そのなのははゆっくりこっちを見て…

「…ふふふ。クロノ君…あとでお話なの……」

いつもより低い声でそう言った。

怖い…

笑顔が怖いっすよ、魔王^{なのは}さん！

クロノは冷や汗をかき、ユーノとアルフはぶるぶると震えている。
かくいう俺もちよっとビビってます。

言えることは一つだけだ――――

――――ご愁傷さま、クロノ君……

そのよんじゅういち！（前書き）

ユニークが1万人を超えました。
みなさんありがとうございます！

今回も楽しんでもらえたら嬉しいです！
では本編をどうぞ！

そのよんじゅういち!

あの後、奏真が俺たちの病室に逃げ込んできて、すぐになのはもや
って来たけど…いつものなのはに戻っていた。
それを見て俺たち全員がほっと息をついたのは秘密だ。

やはり心配していたらしく、何度大丈夫？ と聞かれた。

まあ、三人まとめてだったけどな！

別に悲しくなんて、ないんだからね！

自分で言っててキモって思った…

それは横に置いて、俺たちが撃墜された後のことを詳しく聞いた。

プレシアが直接登場したこととか。

もうフェイトに事実を話しちゃったこととか。

なんかジュエルシードがドラゴン○ールみたいとか。

色々と突っ込みたいことが満載だったけど…

もうこれは完全に『リリカルなのは』の世界じゃないな。

もう原作知識とか当てになんないですよ、マジで…
まあ、今まで有効に使えたことないような気もするけどさ……
となると、やっぱり鍵になるのはこいつか…

そう思って俺は奏真を見る。

もう普通に戻ってるなのはと一緒にアルフと話をしているみたいだ。

典型的な日本人の特有の黒目黒髪。

背はまあまあ高い方かな。

顔は…俺よりちよつとだけ…ほんのちよつとだけ整っている。

といっても俺だって中の上くらいはあるんだぞ！

くそ、やはり奴も高町家の人間ということか…

イケメンなんて滅んでしまえ！！

おっと話が脱線してしまったな…

ようするにあいつがこの物語の要ってことだ。

あいつの行動ひとつでたぶん大きく話が変わってくる。

良くも悪くもあいつ次第ってことだな…

まあ俺はせいぜい陰でフォローしてやりますかね…

あつ、でもなのは譲らねえぞ！
これだけは絶対譲れないな！！

（
（
（
（
（

「あのババア…！ …あんなに一生懸命な子に…：…なんであんな酷いことが出来るんだよ！？」

アルフ達が撃墜された後のことを俺たちが話すと、アルフが怒りに震えながらそう叫んだ。

当然だと思う。

アルフはいつもフェイトと一緒にだったわけだし…
確か少し精神も繋がってるって聞いたことがある。

フェイトの気持ちが誰よりもわかるから余計にプレシアことは許せないんだろう。

「…アルフ」

「……アルフさん…」

俺となのははかける言葉がうまく出て来ない。

ただ名前を呼ぶだけしか出来ない自分たちに、気持ちも少し暗くなつた。

そんな俺たちを見かねたのか…

「あつ、ごめんよ…あんたちが悪いわけじゃないっていうのはわかってるから…：ううん。むしろフェイトと友達になってくれてすごく感謝してるんだ…フェイトもあんたたちのことを話すときはいつも笑顔でね…」

そう謝ってフォローまでしてくる。

本心で言っていることはアルフの目を見てればなんとなくわかった。

「…だからお願いだよ。これからもフェイトと友達でいてやってくれないかい？」

もしかしたらフェイトの生まれのことを聞いて俺たちが態度を変えるかもしれないと思っただろう。

アルフが真剣な…それでいて懇願するような顔でそんなことを言うてくる。

でもそれは愚問だよ、アルフ。

だからそんな心配しなくていいよ。

「当たり前だろ。クローンだとかそんなの関係ない…」

「…たとえどんなことがあっても…フェイトちゃんは…」

「俺たち（私たち）の大事な友達だ（よ）」

「……うくっ、……ありがとう……あんたたちはさ……ほんとにいい子だね……ヒクッ……」

俺となのはが二人でそう言うと、アルフがいきなり泣き出した。

まったく…この主従は泣き虫だな。

いや、意外と俺の周りは泣き虫が多いのかもしれない。

アルフを宥めながら、そんなことを考えていると…。

「クロノ執務官!!」

いきなり部屋に局員が飛び込んできた。

そうとう慌てている様子だ。

そして聞かされるのは驚きの出来事。

「一体どうしたんだ!？」

「あの少女の姿がどこにもありません…!」

「なんだって!？」

「おいっ! クロノ!! フェイトは…!」

「……わからない…あの状態で一体どこに…？」

そう言ってクロノは考え込む。

さっきまでは寝てたんだ…

それがいきなり…。

俺はとり合えず念話を送ってみるが…返事はない。

拒否しているのか届かない場所にいるのか。

俺がいた時は眠ってたはず…

いや、確かめていないから…途中で起きたのかもしれない。
だとしたらフェイトが行くところは…

「……まさか…あのバカっ！」

俺は急いでブリッジへと動き出す。

あそこなら何かわかるだろう。

でも俺の勘は告げている。

たぶん、フェイトはプレシアのところに行ったんだと。

それがどんな意味での行動なのかは分からない。

母親にすがりに行ったのか…

母親と決別しに行ったのか…

もしかしたら無意識で行ったのかもしれない。

でもわかっていることは一つだ。

フェイトが危ない。

プレシアは…あいつはたぶんフェイトを傷つける…。

だから…助けに行こう！

何時だって…

何処だって…

どんな時だって…

俺はフェイトの味方なんだから…！

「…奏真君！ どこにいくの！？」

突然、動き出した俺になのはが聞いてくる。

「ブリッジだ！ あそこなら何か情報が分かるかもしれない！」
俺はそう言い残して、部屋を飛び出した。

~~~~~

時の庭園…。

私の家…。

アルフとの…リニスとの…そして…。

母さんとの思い出が詰まった…私の家。

魔法の勉強は大変だったし…。

母さんとのいい思い出は残ってないけど…。

それでも私が育った場所。

…もしかしたら生まれた場所でもあるかもしれないね。

奏真たちには何も言わないで出てきた。

たぶん…ううん。

絶対に言えば、奏真たちは力を貸してくれると思う。

私がアリシアのクローンだと知っても…奏真もなのはもきつと友達だからって言って協力してくれるって確信がある。

私もそうだから…。

奏真たちがたとえ何者でも…たとえ人間じゃないとしても私は二人の力になる。

二人は大切な友達だから…だから助ける。

それが友達だって思うから…。

まあ、奏真たちに教えて貰ったことなんだけどね。

けど、私は今、一人で時の庭園に帰ってきた。

母さんとは自分一人で話をしたいって思ったんだ…。

…正直、まだ怖いけど。

また拒絶されるのが…。

あの冷たい目で見られることが…。

それでも…このことは自分で決着をつけたいから…  
これから前を向いて歩いていくために…。

母さんがいる奥の部屋へと歩いていく。

ここはすごく静かだ。

コツコツと私の歩く音だけがただ響いている。

私がここに来たことはもう知られているはずだから、何か反応があると思っていたんだけど…何もない。

奥まで来いつてことなのかな…。

それとも、私なんか気にもとめてないのかな…。

…いい。…それでもいいんだ。

私は私の思いを伝えるだけだから。

長い廊下を歩いていると、奥に扉が見えた。

重くて大きな扉。

母さんに会えるから楽しみなはずなのに、いつもその奥には行きたくなかった、この扉。

今思えば、怖かったんだね…。

あの扉を抜ければ…冷たい母さんの目と飛んで来る鞭。

私の中の優しい母さんが壊れていくみたいで……すごく怖かった。だからこの近くにはあまり近づかなかったし…。ここに来るのがすごく嫌だった。



でも今日は違うよ。  
確かに怖いっては感じるけど……でも前ほど嫌じゃない。

これは私の試練なんだ。  
このくらいで引き返すくらいの気持ちでは新しい自分を始められないよっていう試練。  
私はそう思う。

だから……。  
私は堂々とこの扉を開けるんだ。  
私はこんなところじゃあ負けたりしない。

扉の奥に進むと……母さんが立っていた。  
やっぱり私が来たことは知っていたみたいだ。  
いつも通りの……いやそれ以上に冷たい目で私を見ている。

それを見て、私は委縮してしまう。

やっぱり、怖い。

怖いよ…奏真…。

あんなに意気込んできたのに…直接母さんを見るとこの有り様だ。

「なにをしにきたの？」

母さんの声が聞こえる。

視線と同じように冷たいその声に私の心も凍えてしまいそうになる。

奏真…。

助けて、奏真…。

私が目を閉じてそう念じると。

病室で奏真の言っていた声がもう一度聞こえてきた。

——もし、暗くてその道が見えないっていうのなら…俺が照らすから……怖くて歩けないっていうのなら俺が手を牽いてやるから——

その優しい声が…暖かな声が私に力をくれた。

あの声を思い出すだけで…勇気が湧いてくる。

…傍にいらなくても奏真が力を貸してくれる。

それだけで私は……！

「…何もないのなら…消えなさい…もうあなたに用はないわ…」

母さんがそう言って踵を返そうとする。

けど、その前に私は口を開いた。

「…あなたに…母さんに言いたいことがあって来ました」

「……………」

母さんはその場に残ってくれた。

どうやら話は聞いてくれるみたいだ。

「私は…私は…アリシア・テストロッサじゃありません。あなたが作ったただの人形なのかもしれません。…母さんとのこの記憶も思い出も…全部…全部借り物で…私のものとはいえないのかもしれない…」

「……………」

「だけど、それでも、私は…フェイト・テストロッサは…あなたに生み出してもらって…育ててもらった…あなたの娘です！」

私は思いの丈を全部、母さんにぶつける。

きっと言葉にしないと私の本当の気持ちは母さんに伝わらないから…

「フツ…フツフ！ アハハハ…アハハハ…だからなに？ いまさらあなたを娘と思えというの？」

「あなたが…それを望んでくれるのなら…一緒に始めませんか…私は…新しく母さんと思いい出を作って行きたい……」

私は真っ直ぐな瞳で囓う母さんを見る。

これは私の本心だから…  
だって…

「私は…どんなひどいことをされても…言われても…あなたのこと

が……母さんのことが大好きだから……この思いだけは……私の……私だけの思いだから……」

そう言って母さんに手を差し出す。  
この手を握り締めてほしいから……  
私の思いが届いて欲しいから……

だけど……現実残酷で……。

「フツ………くだらないわね」

母さんはもう一度嘲笑を浮かべると、私の手を払った。  
私は払われた手を抑える。

痛い。

手も痛いけど……心はもつと痛い。

少し涙も出てきた。

やっぱり母さんは私のことが……

「……あのバカな女だったら……その薄汚い手を取ったかもしれないわね……あのあなたをアリシアの妹だとか言ってたあの女ならね……」

「えっ？」

突然の母さんの言葉が理解できない。

バカな女？

アリシアの妹？

母さんは誰のことを言ってるの？

「フフフ……あなたにひとついいこと教えてあげるわ、あなたの本当のお母さん……本当のプレシア・テストロッサはね……」

ダメだ！

聞いちゃダメだ！

私の頭の中でそんな警鐘が鳴り響く。

それを聞いたら、全部……私の中の母さんが全部……

「……私が殺したの……」

全部……壊れた。

## そのよんじゅういち！（後書き）

最後まで読んで頂いてありがとうございます！

今回の話はどうでしたでしょうか？

うまくフェイトの気持ちをかけてるかな？ ちょっと不安です。

また何かご感想やご意見等がありましたら、お願いします！

## そのよんじゅうに！（前書き）

小学生ってあんなにガキだったかな？  
どうもはくおろくです！

今日、小学生5年生の相手を20人くらいしてたんですが…あんなに幼かったかな…穴掘って池！　って…。11歳だよね？　不思議です。

この話の奴らってまだ年齢一桁台なのにこの精神年齢の高さ。  
余計にギャップを感じました…。

っと無駄な話が長くなりましたね。  
では第四十二話です。どうぞ！

そのよんじゅうに！

「こ、殺した…？」

私は声を震わせながらそう尋ねた。

何を言ってるの…？

誰を…。

「ええ、そうよ。…だって邪魔だったもの…死にぞこないのくせに、アレコレうるさくてね…」

母さんは思い出すのも嫌といった感じでそういつてくる。

「う、そだよね…だって…母さんは…母さんは…」

だって私の目の前にいるじゃない。

この人が母さんじゃない？

そんなはずは…

「…まだ分からないの？ それとも理解したくないのかしら…」

「…だって、私が母さんを見間違えるはずが…」

そんなはずないっ！　だって…

その声も…

その顔も…

私の記憶の中の母さんと同じで…

「見た目は同じはずよ……だって私はあの女のクローンだもの…」



説明するのも面倒そうに母さんはそう言ってくる。

クローン…。

私と同じ…クローン…。

「そうね…だから遺伝子的にはあなたの母親かもしれないけど…生まれたのはあなたよりも後…なんならお姉ちゃんとも呼んであげようかしら…」

嗤いながら目の前の人がなにか言っているけど、私の頭には入ってこない。

この人がクローン…。

それならアリシアの記憶の中の母さんと違うことにも説明がつく。全部…ついてしまう…。

まだ信じられない…

信じたく、ない…。

私は下を向いた。

…もう一度尋ねた。

「……それじゃあ本当に…あなたが…」

否定してほしい…

間違いであってほしい…

そう願った。

「だから言ってるじゃない…あなたを生みだしたプレシア・テストタロツサは私が殺した……ついでに言えばあの猫の使い魔もね」

でも…その返答はやっぱり肯定で…。

おまけに…リニスも…  
あの大好きだったリニスも…この人が…。  
この人が全部…！

そう考えたら…私の中で何とも言えない感情が湧きあがってきた。  
これは怒りに近いけど…違う。

「本当、あなたは滑稽だったわ…親を殺した奴を母と呼んで、あげくに新しい人生と一緒に始めよう？ …フッフ！ アハハハ…本当に笑わせてくれるわね…」  
そう言って目の前の人が嗤う。  
それを見て確信した。

これは憎しみだ…憎悪だ。

私は目の前のこいつが…憎いっ！

「…そう……わかったよ…」

私はバルディッシュを掴む手に力を込める。

すると私の意志を酌んでくれたのか、

(Set up)

バルディッシュは起動してくれる。

「フッフ、何がわかったのかしら…？」

またその顔で嗤う…。  
もう見たくない…

大好きだけど…大嫌いな顔だ…。

…許さないから…!

私はあなたを許さないから…!

「……あなたは…母さんたちの仇で…私の…敵だっ!」  
私はそう言って、母さんと同じ顔をした奴に突撃した。

~~~~~

「エイミィさん! フェイトの居場所は!」

俺はブリッジに行くと、すぐにエイミーさんにそう聞いた。
エイミーさんならもうフェイトの居場所がわかってるはずだ。

「もう割り出してるよ！」

そう言うときエイミーさんは送信ボタンを押し、リンディさんの元へデータを送っていた。

「武装局員、転送ポートから出動！…任務はプレシア・テストロッサの身柄確保およびフェイトさんの保護です！」
リンディさんが局員に向かってそう指示を出す。

「「「「おう！！」」」」

それに大人数の武装局員たちが声を上げ、転送されていく。

よし、俺も…！

「リンディさん！俺もっ！」

「それは許可できません！」
転送してくれ、と頼んだが、それは却下された。
なんで…！？

早く行かないといけないのに…！

「リンディさんっ…！」

俺は声を荒げて抗議するが…

「あなたは前回、約束を守らずに行動して重傷を負ったでしょ！
ここの責任者として今回は認めることはできません！」

それも却下された。

たしかに約束は破ったのはいけないと思うけど…でも…!

「っ! …だけどっ!」

「ダメです! まだケガも完全には治ってはいないんですよ!」

「くっ! …っ、バインド!」

「絶対に行かせませんよ」

説得は無理だと感じたので、また勝手に行こうとすると、それを察知したリンディさんにバインドで拘束された。周りにも局員が二人付く。

何かなんでも行かせないつもりだな…

どうすれば…

俺がそんなことを考えていると、

「奏真君っ!」

なのはがブリッジに入ってきた。

なのははそのまま俺のところに来て話しかけてくる。

「…えっと、大丈夫?」

「全然大丈夫じゃない…」

なのはにそう返していると…

「艦長っ! 状況は!」

遅れてクロノ達が入ってきた。

クロノがさっそく状況をリンディさんに聞いてくる。

「今、武装隊を送り込んだところよ…。あとは見ての通り…」

「奏真…はぁ…やっぱりか君は…」

クロノとリンディさんが俺を見てため息をつく。

さらに…

「うわっ、拘束されてやんの。だっせー」

「また勝手に行こうとしたんだね…奏真…」

「…何してんだい、あんたは…」

呆れた顔する、ユーノとアルフ。

あと竜也は後で覚えてろよ…。

「…お前らな…!」

「そ、奏真君、落ち着いて」

文句を言おうとした俺をのが止めてくる。

さっきの緊迫感はどこへやら。

ブリッジはいつもの空気に戻っていた。

しかし、それも武装隊からの通信でまた一気が変わる。

モニターにはプレシアの本拠地…時の庭園が映っている。

「魔力反応を確認! この奥にいるものと思われます!」

「わかりました。各員！ 突入っ！！」

「了解！ 総員、玉座の間に侵入せよ！」

「」「了解！」「」

部隊の隊長にリンディさんが指示を出し、それに隊員たちが従って突入していく

そして玉座の間の奥に隊員たちが到達し、そこでモニターに映し出されたものは：

こちらを見ながら嘲笑を浮かべるプレシアと…。

プレシアに足元にうつ伏せで倒れている…ボロボロのフェイトの姿だった…

「フェイト！！」

「フェイトちゃん！」

「フェイト！ フェイトー！！！！」

俺となのは、アルフはモニターを見て叫ぶ。

けど…フェイトはピクリとも反応しない。

あの女がフェイトをボロボロにしたんだよな…
あのクソアマ…！

俺は思いっきり手を握り締める。

血が出てきたけど…さらに強く握る。

こうでもしないと自分を抑えてられない…

そんな俺の気持ちをよそにモニターでは状況が進んでいく。

「プレシア・テストロッサ！ 時空管理法違反及び管理局艦船への攻撃、さらにロストログアの不正所持、ならびに殺人未遂の現行犯であなたを逮捕します！」

武装局員が杖を向けてプレシアの周りを取り囲んで、プレシアの罪状を言うて行く。

それにプレシアは何も反応しない。

「武装を解除して、その子を…こちらへ」

隊長はそれを見て抵抗しないと思ったのかプレシアに近づいていく。しかし…。

「…うるさいわね…。」

プレシアはそう言うと言い周りに魔力を高めていく。

「っ！ 危ない！ 防いで！」

それを見てリンディさんが声を上げるが…間に合わず…。

「うあああああああ」

隊長に魔力弾が直撃し、倒された。

「隊長っ！！」

「くっ、このっ！」

残った武装局員は杖を向け魔力弾を撃ち込む。
しかし、それはすべてプレシアの障壁によって阻まれた。

「…雑魚に用はないの」

そう言うとプレシアの強力な魔法攻撃が局員たちに降り注ぎ、時の庭園にいた残りの局員全員が倒された。

「フッ…フフフ、フフ…ハハハ」

それを見て、高笑いするプレシア。

「いけない！ 局員達の送還を！！」

「りよ…了解です」

リンディさんの指示ですぐさま局員たちが収容されていく。

「さて…邪魔者は居なくなったわね…はじめまして、でいいのかしら？ 管理局のみなさん」

それを見届けた後、プレシアは俺たちの方に話しかけてくる。

「…アースラ艦長 時空管理局提督 リンディ・ハラオウンです。
…プレシア・テストアロッサ…もう逃げられませんかよ…降参して貰えないかしら」

それにリンディさんが答え、投降を呼び掛ける。

「降参？ 今、倒されたばかりなのに私が降参？ 笑わせるわね
…さっきのみたいのが何人来ても無駄よ…それに管理局に用はないの…私が用があるのは……」

しかし、そんなことは歯牙にもかけないで、プレシアは俺へと視線を向けてくる。

「あら、坊や…バインドなんてされて…まるで犯罪者みたいね…」

「……あんたにだけは言われたくないな」

「そう……まあいいわ。最後のジュエルシード……あなたが持っているのかしら？」

尋ねているように聞こえるが……あいつは確信している。

俺が最後のジュエルシードを持っていることを……。

「ああ。俺が持つてるぞ……欲しいのか？」

別に隠すことでもないので正直にそう返すと……

「ええ。それがない所為で余計な手間が増えたもの……ほんと……殺したくなるくらい……頭に來たわ……」

そう言ってきた。

後半は殺気を込めていてのおまけつきだ。

「それは良かった……俺もあんたにはいい加減、頭にきてるからな……！」

「私はここで待ってるわ……だからジュエルシードを持って早く來なさい……じゃないと……」

そう言うとプレシアは足元で倒れているフェイトを足で蹴飛ばした。フェイトは壁へと吹き飛ばされる。

「フェイト——！！」

アルフがそれを見て悲鳴をあげる。

でもそれに意味はなくて……

フェイトは壁に直撃し、そのまま倒れた……。

頭から血も流れている。

赤い：赤い：真っ赤な血が：フェイトを染め上げる。

そのフェイトの姿を見て：俺の頭の中で何かが切れた音がした。

そして：

「プレシアアアアアアア！！！」

俺はそう叫んだ。

――カッ！！

魔力が俺の気持ちを映しだしているのか…。

体中から魔力が緋色の烈風となって吹き上げるように沸き立つ。
バインドもその魔力に耐えきれなくなり解除された。

「：早く来ないとあのゴミを処分するわよ」

ゴミって言いやがった。

フェイトをゴミって…。

許さねえ：絶対許さねえ：

「：上等だ！　：今すぐ：あんたをぶちのめしてやる！！」

俺は殺気のこもった眼でプレシアを睨みつける。

「フッフ、待ってるわよ…」

そうプレシアは楽しそうに笑いながら言い残し、通信が切った。
ブリッジでは誰も口を開かない。

シーンと静寂が訪れる。

俺は無言で転送ポートへと向かう。

「っ！ 奏真君！」

「っ！ 待て、奏真っ！ 落ち着け！ 敵の罠かもしれないぞ！」
それに気づいたなのは声を聞いて、クロノが急いで俺の前に立つ。
そして説得しようと口を開いてくる。

「罠…だからなんだ？」

自分の声じゃないかと思うくらい低い声が出る。

…邪魔すんな。

そんな気持ちを込めてクロノを見据える。

「奏真君！ 落ち着いて！」

なのはも俺を止めようと前に出てくる。

「相手は大魔道師で…条件付きとはいえ魔導師ランクSSだ！ 返り討ちにされるぞ!？」

「…俺は落ち着いてるさ…自分が自分じゃないって思うくらい…
…それにランクなんて関係ない…あいつは俺が倒す。…もしそれを邪魔するっていうのならお前らでも容赦しない」
そう言う俺はなのはたちにデバイスを向ける。

「「っ！」」

…俺は止まらない。

止まるつもりなんて、ない。

だから…邪魔する奴は…

「…デイベイン…シューター…」

俺は魔力弾を作る。

それをなのはたちに撃とうした時…。

「…わかりました。許可します」

リンディさんがそう言った。

それを聞いて俺は魔法をキャンセルする。

「艦長っ!!」

「…ありがとうございます」

クロノがリンディさんに文句を言っているが、

それを聞きながし…礼を言って転送ポートに行く。

待ってろよ、プレシア・テストロッサ…。

絶対、ぶっ倒してやるからな…。

そのよんじゅうに！（後書き）

読んでもらってありがとうございます！

何かありましたら感想など貰えるところ嬉しいです！

では！

そのよんじゅうさん！（前書き）

物語はいよいよ最終章に向かいます！

これから戦いが始まって行くわけですが…戦闘描写が難しいです…。
まあこんな話は置いといて…。

それでは本編をどうぞ！

そのよんじゅうさん！

奏真君が出ていった。

フェイトちゃんのお母さんと戦いに……行った……。

いつもなら迷わずについて行くはずなのに……

今は、身体が動かない……。

————邪魔するっていうのならお前らでも容赦しない

そう言って私たちにデバイスを向けてきた奏真君。

その時の顔が……目が……

いつも色んな表情を浮かべてくれる奏真君が……

私の大好きな笑顔を向けてくれる奏真君が……

私の見たことのない顔をしていた。

怒ってるのとも違う。

悲しんでいるのとも違う。

全く感情の読みとれない無表情。

いつも暖かくて優しい目は……冷たくて……

見ているこっちが凍えてしまいそうになるほど冷たくて…。

そんな奏真君を怖いと思った。

はじめて怖いって感じた。

そして気が付いたら身体が動かなくなった。

ただひたすら怖かった。

私の知っている奏真君が奏真君じゃなくなったみたいで…。怖くなった。

「母さん！　なんで奏真を行かせたんだ！！」

クロノ君がリンディさんに詰め寄る。

興奮しているのか呼び方が変わっている。

「…彼は本気だったわ…。私がああ言わなかったら…迷わずあなた達に攻撃していた。それはクロノだってよくわかってるんじゃないの…？」

「…それは……」

リンディさんにそう言われてクロノ君は言葉が詰まる。

私もあの時の奏真君は止まらなかったと思う。

だっていつもの奏真君じゃなかったから…。

「…情けないけど…あの時の奏真君は私たちでは止められなかったわ…それにあの魔力…」

「…たしかに凄まじかったですね……」

「……くそっ！」

クロノ君が強く机を叩く。

その表情はとても苦々しい。

ブリッジに重い空気が流れる。

たぶんクロノ君は奏真君を止められなかったのが悔しいんだと思う。
止められなかった自分に責任を感じているのかもしれない。

じゃあ私は？

私はどうなんだろう…？

たしかに怖かった。

怖くて身体が震えて、動けなかった。

けど…このままでいいの？

このまま…。

私がそんなことを考えていると…。

「それで…あんたたちはこれからどうするんだ？」
竜也君がそう言ってきた。

「あいつは…あのバカは…一人で行っちゃったぞ？ お前たちはいいのか？ このままここでじっとしてて…：…だだ見ているだけで…」
竜也君はみんなを見渡しながらそう言ってくる。
私たちに語りかけてくる。どうするんだ、と。

「俺は…正直…あのバカがそんなに好きじゃねえ…」

「竜也君っ！」

私は思わず声をあげる。

別に…今そんなことを…そんな酷いことを言わなくてもいいと思う。

「あいつは…いつも勝手に動いて…みんなに心配かけて…：…迷惑ばっかり掛けやがる」

だけど竜也君はそんな私の声を見捨てて話を続ける。

うっ、それは否定できないかも…

奏真君、いつもケガとかするし…。

「けどな…それでもっ！ あのバカは俺たちの仲間だ！ 大事な仲間なんだよ！ だから…だから…俺はあいつを助けに行く。相手があのプレシアならなおさらだ！俺も頭にきてるからな」

竜也君はそう力強く言った。

好きじゃないけど仲間だから助けるって…。

竜也君…素直じゃないの。

男の子ってみんなそうなのかな？

「…まったく君たちは…」

「本当に竜也は素直じゃないよね？」

「あたしもあのババアは一発殴ってやんないと気がすまないね！」

クロノ君は呆れたようなことを言いながら、小さく笑みを浮かべて。
ユーノ君は竜也君をからかいながら、笑顔で。
アルフさんは拳を合わせて気合いを入れた顔で。

完全に竜也君の言葉でブリッジの空気が変わった。

「うるせーぞ、ユーノ。…それでなのははどうする？ どうせあのバカのことだからケガでもしてるかもしれないぜ？」

竜也君はそう私に聞いてくる。

そうだよね…。奏真君は私が見ていないとすぐ無茶するから…。
フェイトちゃんのことにも気になるし…。
フェイトちゃんのお母さんにもなんであんな酷いことをするのか聞かないと…。

「うん、行くよ…。フェイトちゃんと奏真君を助けに行かないとね！」

だから私は力いっぱい頷いた。
大丈夫…。もう怖くない。

竜也君…ありがとう…。

「艦長！ 許可を！」

クロノ君がリンディさんに許可を求める。

みんなの視線がリンディさんに集まった。

「…わかりました。許可します。…ただしみんな無事に帰ってくる
こと…いいですね?」

「「「「はいっ!」「」「」」」」

リンディさんの問いにみんなで返事をし、私たちは時の庭園へと向
かった。

「「「「はいっ!」「」「」」」」

時の庭園に着いた俺は、すぐに行動を開始する。
バリアジャケットを纏い、飛行魔法を使いながらプレシアのもとへ
向かった。

途中にあった扉は全部破壊しながら進んでいく。
時間短縮の意味もあったが…半分は八つ当たりだ。

そして長い廊下に着くと先にモニターでもみた大きな扉があった。
あの先にあいつがいるっ！

(D i v i n e B u s t e r.)

俺は扉に向かって砲撃を放ち、中に突入する。
部屋の奥の玉座にあいつは座っていた。

「プレシアアアアアア！！！！」

(B r e a k S a b e r.)

俺は叫びながら、プレシアに切りかかる。
それをプレシアは障壁で防いだ。

「行儀の悪い子ね…」

「…ここには遊びに来たわけじゃないからな…！！」

そう言葉を交わした後、俺はすぐさま後ろに後退する。
前回みたいによられるわけにはいかない…！！

こうして俺たちは二度目の対決は始まった。

「…フェイトは…？」

「…あのゴミならそこよ」

そう言って壁の方を指すプレシア。

その方向を見ると…フェイトはバインドで十字を描くように吊るされていた。

「フェイトっ！ お前…！」

俺はプレシアを睨みつける。

どこまでお前はフェイトに酷いことをすれば、気が済むんだよ…。
とことん腐ってやがる…！

「あれが返してほしいのなら…私を倒すことね…」

「…待ってろ、フェイト…絶対、あいつは倒すからな…」
俺はフェイトにそう言うと、デバイスをプレシアに向ける。

「行くぞ…！」

「ふん、来なさい！」

その言葉が引き金だった。

(Flash Move.)

俺はすぐさまプレシアの後ろに回り、杖に纏った魔力刃で切りつける。

それをプレシアは障壁を張って防いだ。

「またそれなの？ ワンパターンね」

「……………」

(Flash Move.)

プレシアの言葉には何も返さずにもう一度後ろを取り、切りかかる。しかし、これも防がれた。

すかさず、魔力弾が飛んでくるので、それを移動魔法で回避した。再び二人の距離が開く。

やっぱり駄目か。

堅い障壁に：高い魔力攻撃。

タイプとしてはなのはに近い。

障壁を張るのも早いし：実力はあっちが上か。

「そんなことではいつまでも私は倒せないわよ」

「そんなことは、わかってる、よ！」

プレシアのスピードの速い魔力弾をかわしながら、そう話す。かわすのが無理なものは魔力刃で切り、対処していく。

：あいつはあの場所からほとんど動いてこない。
ならっ！

(Arc Saber.)

俺は杖を横に振り、魔力刃をプレシアに向かって飛ばす。その軌道は直線ではなく弧を描き、プレシアの背後に向かう。

「小賢しいわね…」

それをプレシアが障壁で防ぐ。

魔力刃と障壁が当たるその瞬間。

「バースト！」

刃を爆発させた。

ダメージはなくても衝撃は残る。

「くっ！」

そしてプレシアがひるんだ隙に：

「食らえ!!」

(Flash Impact.)

高速移動で近づき、圧縮魔力を乗せた打撃攻撃を行う。

「ぐっわああ！」

プレシアはそれをもろに食らい、吹き飛ぶ。

(Divine Lancer.)

俺はさらに魔力弾をプレシアに撃ち込む。

それは全弾直撃した。

それにより発生した煙が視界を覆う。

今でダメージは与えたと思うけど…このくらいじゃまだ倒せてはいない。

俺は油断なくデバイスを構える。
すると、

突然、煙の中から無数の魔力弾が飛んできた。

それを障壁で防ぐ。

しかし…。

「フォトンバースト…」

その声とともに飛んできた魔力弾は障壁に当たった瞬間、大爆発した。

「……ぐっ!!」

その爆発で障壁を破られ、俺は吹き飛ばされる。

プレシアはそんな俺の後ろに回り込む。

そして魔力で強化した蹴りを放つ。

なんとかそれを杖で防いだが…今度は逆方向に飛ばされる。

俺が空中で体勢を整え、前を見るとプレシアがさらに蹴りを加えてきた。

それも俺はデバイスで防ぐ。

それにほっとしたのも束の間。

「まだよ」

その声とともに息を呑む連撃が加えられる。

こいつっ！ 格闘戦もできる!?

プレシアの猛攻をなんとかデバイスで防いでいくが…どんどん押されていく。

そしてついに俺の体勢が大きく崩れた。

やばいっ！

そう思った時。

「はあああああ！」

気合いの籠った一撃が俺に腹に直撃した。

「ぐはあっ」

魔力で強化された蹴りはバリアジャケットを纏っているのに凄い衝撃を俺に与えた。

一瞬、呼吸が止まる。

その動けなくなった俺に…。

「吹き飛びなさい！」

プレシアは至近距離から魔力弾を撃ち込んだ。

それを受け、吹き飛ばされた俺はそのまま壁に激突した。

強い…。

圧倒的に強い。

俺との差はかなりあるな…。

一撃食らわせてからは動きが全然違う。

「もう終わりかしら？」

「…そんなわけがないだろ？」

俺の方にゆっくりと歩いてきたプレシアの言葉に俺は立ち上がりながらそう返す。

まだダメージは抜けていないが…それは顔には出さない。

「…そう、よかったわ…。簡単に終わったらつまらないもの…もつと痛めつけてあげる」

そう言ってプレシアは俺に無数の魔力弾を撃ってくる。

(D i v i n e L a n c e r .)

「シュート！」

俺も同じように魔力弾でプレシアのものを相殺させる。
しかし、数があちらの方が多い。

当然、相殺できなかったものが俺に飛んでくる。

くそっ！

俺はそれをなんとか回避していく。

「フフフ、いつまで逃げ回れるかしら？」

そう言ってプレシアは数をどんどん増やしてくる。
まるで弾幕だ。

とうとう、かわしきれなくなって障壁を張る。

「くっ…！」

障壁に魔力弾が当たり、衝撃が俺を襲ってくる。
それになんとか耐えてきると…

「ダメよ…足を止めちゃ…」

そんな声が聞こえた。

それと同時に動かなくなった身体。

「バインドっ!？」

まずいっ!!

俺がそう思った時。

「プラズマスマッシャー…！」

俺に向けて紫色の砲撃が飛んできた。

(Lightning Protection)

なんとか障壁を俺の前に張ってそれを防ぐが…

「うっ…くっ…！ くそっ！」

徐々に張っている障壁にひびが入っていく。

頼む！ もう少し…

あと少しだけ…耐えてくれ…！

しかし俺の願いは叶わず…障壁は粉々に粉碎される。
そしてそのまま紫色の砲撃が俺に直撃した。

そのよんじゅうさん！（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます！

前書きで少し触れましたが…。

戦闘描写が難しいです。このままの感じでいいもんか正直、不安だったりします。

なのでここをこうしたらいいなどのアドバイスを貰えるところがうれしいです！

そのよんじゅうよん！（前書き）

連続更新が止まってしまったorz
ううう。無印はこのまま行きたかったんだけど…。
今回ののはかなり難産でした。

あとで書き直すかもです。

では第四十四話です、どうぞ！

そのよんじゅうよん！

立ちこめていた煙が晴れていく。

立っているのは二人。

しかし、そのうちの片方が動いた。

「…うつ、くつ…」

砲撃の直撃を受けた俺はその場に倒れる。

バインドもすでに解けていた。

いつもの障壁とは少し違う…対雷撃系の防御魔法を使ったが、結局は防げなかった。

身体はもうボロボロだ…。

電撃の付加効果か…身体もしびれている。

そんな俺の耳にコツコツという足音が聞こえてきた。

…トドメを刺しに来たみたいだ。

ここまで、か…。

俺じゃあ勝てない…。

そんなことが頭に浮かぶ。

初めから無理だったんだ…。

仕方ない…。

まだ魔法をはじめて一か月も経ってないんだ。

俺はよくやった…。

そんな言い訳も頭に浮かんでくる。

結局…。

一人で突っ走って…。

一人でやられて…。

俺は何がしたかったんだ…？

「まるでボロ雑巾みたいね…」

その声を聞いて、視線をプレシアに向けた。

あいつは無様な俺の姿を見て嗤ってる。

…もういいや…。

どうせ俺の負けなんだから…。

考えることを放棄して…俺は無機質な目でプレシアを見つめる。
でもその時、俺の視界に目の留まるものが入ってきた。

それは…金色の髪で赤い目をした優しい女の子。
バインドで今もお、吊るされたままのフェイトだった。
今はボロボロの姿になっている俺の大事な友達…。

そのフェイトの姿を見て、俺は思い出した。

そうだった…
そうだったな…

俺は約束したんだった…。
助けるって…！
絶対に勝つって…！
やり遂げてみせるって…！

俺はギュッと拳を握り締めた。
俺はバカ野郎だ。

プレシアを倒すことだけに頭がいつていて、一番大切なことを忘れていた。
なんだかんだ言って頭に血が昇ってたんだろうな…。

帰ったら謝ろう。
みんなに…ごめんって。

それに約束は守らないとな…。
もう少し…足掻いてみようか。
そう思うと、なんだか胸から力が湧きあがってくるように感じた。

ゆっくりと俺は立ち上がる。

「あら？ まだ立てるのね…」

「…ああ。…まだ終われない…！ デイバインランサー…」
そう返すと俺は魔法陣を展開する。
身体は不思議と調子が良かった。
魔力もまだ余裕があるみたいだ。

「シュート…！」

プレシアはそれを障壁を張らずに回避した。
俺はそのプレシアへと突撃していく。

「自棄にでもなったの…？」
プレシアはそう言う俺に魔力弾を撃ってくる。
俺はそれを見殺してなお突っ込む。

「なっ…！」

俺は驚いて動きの止まっているプレシアの懷にそのまま当たりをする。

この位置なら近すぎてすぐに蹴られる心配もない。
だから…！

(Break Saber.)

デバイスの先端から出現した魔力の刃は、プレシアの身体をそのまま貫く。

腹部を貫かれたプレシアの顔が苦痛に歪んだ。

だけど、まだまだっ！！

「バースト！」

そう言って俺はにやりと笑ってキーワードの言葉を口にする。
それに反応して魔力刃は大爆発。

俺とプレシアはその爆発に包まれた。

~~~~~

時の庭園に到着した俺たちはすぐさまプレシアのもとに向かうことにした。

アルフの案内で奥へと進んでいく。

しかし、大量に出てくる傀儡兵を倒しながらなので…その歩みはかなり遅い。

目的は三つ。

フェイトの救出。

プレシアの逮捕。

そして…最後にあのバカの援護だ。

それにしてもプレシアがすごく元気そうだった。

たしか…ガンかなんかだったと思うんだけどな…。

てか健康体だとしたら相当強いだろ。

SSランクってStrikersのはやて並みってことだし…

ってことはあのバカ、一人じゃ絶対勝てないだろ!?

正直、俺たち全員で行けば何とかってところじゃないか?

体調は良くないし…傀儡兵も多いし。

原作だと100体くらいだったような気がするけど…その軽く3倍を居ると思う…。

なんか嫌な予感がぷんぷんするな。

マジで勘弁してほしいな。

プレシアの強化とかマジで誰得だよ…。

「竜也君」

俺が考えごとをしていると…いきなりなのはに声をかけられた。

さっきもなんかお礼を言われたし、なんか距離が縮まってるんじゃないの、これ!?

ヤバイ。テンションが上がってきた!!

「どうしたんだ、なのは?」

あくまでも普通どおりを装って俺はなのはにそう聞く。

「竜也君…。奏真君は大丈夫かな…?」

そう言っただけ顔を曇らせるなのは。

なのはがこんなことを言う理由は簡単だ。

今まで通ってきた所の扉がすべて破壊されていた。

それを見て、あいつが無事かどうか心配になったってとこだな。

はぁ、あいつの話ですか…

少しどころじゃなく、かなりテンションの下がった俺だが…なのはの暗い顔は見たくない。

「…大丈夫だろ。あいつはなんだかんだで悪運強いし。それに…あいつを助けるために俺たちは向かってるんだ。だから早く着いたら、心配かけた分、あいつに文句言っただけいいさ!」

「…うん、そうだね! 後で奏真君にはちゃんとお話をしないとっ!」

ふんす、といった感じで気合いを入れてるなのはを見て、かわいい

なと思いながらも：  
また魔王になったら怖いなと思う俺なのであった。

こうして俺たちはさらに奥へと進んでいく。

くくくくくくく

魔力弾と魔力弾がぶつかり合う。

攻撃。回避。防御。攻撃。回避。防御。

くり返される攻防を一旦、終え：二人の距離が開く。

戦いはじめてどのくらい経ったんだろう。

たぶんそんな時間は経っていないんだけど：すごく長く感じた。

玉座の間で：俺たちはまだ戦っている。

俺は身体中がさらにボロボロになっていた。

頭からも血が出ている。

対するプレシアもボロボロとまでは言わないが：ところどころバリ  
アジャケットが破けている。



「はあ、はあ、はあ、はあ……」

「はあ、はあ、しぶといわね……坊や」

息を切らしながらプレシアがそう言ってくる。

疲れも目に見えるようになってきた。

「はあ、はあ……つ、まだだ！……デイベイン……！！」

俺は息を整え、デバイスをプレシアに向ける。

そして魔法陣を展開し、砲撃を撃つ体勢になる。

「プラズマ……」

対するプレシアもデバイスを構え、魔法陣を展開してくる。

魔力を集束させ、放ったタイミングはほぼ同時だった。

「バスター！！」

「スマッシャー！」

緋色と紫色の砲撃が俺たちの中間地点でぶつかった。

それと同時に部屋が壊れるような衝撃。

しかし、ぶつかり合う砲撃が拮抗していたのは、ほんの一瞬だった。

「くうっ！」

そんな俺の声とともに、

じりじりとプレシアの砲撃が俺の砲撃を押し返していく。

負けじと、魔力をもっと込めるが…自力がやはり違う。  
そんなのは関係ないと言わんばかりに押し返され…そして遂には撃ち碎かれた。

なんとかプレシアの砲撃が俺の体を飲み込む直前に移動魔法を使って回避する。

しかし、その移動先にはプレシアが追撃をしていた。  
俺はその魔力弾に右肩を撃ち抜かれる。

舞う鮮血。

俺は声にならない叫び声をあげ、右肩を押さえる。

完全にバリアジャケットを抜いてきた殺傷設定の攻撃だ。  
肩は血だらけとなり…右手はもう、うまく動かせない…。

まずい…片手になってしまった…。  
そして何より…

「あらあら、ダメじゃない。デバイスを落とすなんて」  
そういつてプレシアは俺のデバイスを踏んで破壊した。

…俺は杖も失ってしまった。  
普通なら詰みのこの状況だ。

だけど…俺はまだ諦める気はない。  
最後までやるって…そう決めたから…。

「もう諦めて…ジュエルシードを渡しなさい。そうすれば命だけは助けてあげてもいいわよ」

「…デバイスはなくてもまだ戦えるさ…」

プレシアの降伏勧告にそう返して俺は構える。

しかしその姿は、右手はだらっと下ろしているのですごく不格好だ。

「…なんでそこまでするのかしら…？ 正直、理解に苦しむわ」

「…別に理解されなくてもいいさ…。ただ俺は約束のために…」

フェイトとの助けるって約束…。

なのはとの次は勝つって約束…。

父さんたちとのやり遂げてみせるって約束…。

たくさん…たくさんの約束をしたんだ…。

「約束…？」

「ああ。俺は約束は破らない…そう決めてるから…だから…まだ諦めるわけにはいかないんだ」

それを破ると自分に誇れる自分でなくなってしまいうから…。

俺を庇って死んだ母さんに顔向けできなくなるから…。

だから…。

「…バカな子…他人のために…」

「…誰かのために頑張ることは間違いないかなんかじゃない…。いや…誰かのためにだからこそ…人は強くなれるんだと…俺は思う」

俺は…誰かの助けになれるような人間になりたい。  
今までも…そして、これからも…。

「…ふん。くだらないわね…」

プレシアは俺の言葉を鼻で笑った。

それは気にせずに俺は前から思っていたことを聞いてみた。  
どうしてあんなことができるのか、と。

「…で、あんたはなんでこんなことをするんだ？ …死んだ人を  
生き返らせるためとはいえ…もう一人の娘にあんなことができるな  
んて、とても正気とは思えない」

「…娘？ あの人形のことかしら。…あれは娘なんかじゃないわ…。  
だって私が作ったわけでもないもの…」

「えっ…!？」

「私もクローンよ…。あの人形を作ったプレシア・テストロッサの  
クローン…。」

それは驚きの事実だった。

こいつも実は作<sup>クローン</sup>れられた存在だったなんて…

でもそれだけではフェイトにあんなことをする理由にはならない。

「だったらなおさらじゃないか…。同じ境遇ならもっとフェイトに

優しくできるはずだろう!!」  
俺はそう声を張り上げる。

「そうね…。けどあの女が言ったのよ…アリシアが妹を欲しがって  
いたって…だからフェイトはもう一人の娘なんだって…」

「なら…」

どうして、という言葉はプレシアの言葉によって遮られた。

「…けど、私にそんな記憶はない…。私の知らない、あの女とアリ  
シアだけの思い出。……認められないわ…そんなこと…認める  
もんですか…! …あれが娘だなんて誰が認めるか…!」

「…たった…たったそれだけのことで…」

「それだけ…? …あなたにはわからないわ…! 自分と同じ存在  
がいるってことの辛さが…今の自分が全部偽物って感じる恐怖が!  
」

「……っ、…」

今までに見たことのない顔のプレシアに思わず息を飲む。

それは必死の形相で…。

なによりその表情には恐怖が滲み出ていた。

「このアリシアへの愛情も思い出も全部…全部偽物かもしれないっ  
て怖さがあなたにわかるの!? 私は本物になりたい…だからあの  
女を殺して…プレシア・テストロッサになった。…あとはアリシア  
を生き返らせて…アリシアの本物の母親になるだけ。…だから……  
!」

そう言うとプレシアは俺にバインドをかけた。

突然のことであつた。反響できなかった俺はそれにより動きを封じられる。

「…あなたはもう消えなさい…！　サンダー…！」

プレシアのデバイスに雷撃が集まっていく。

俺はただそれを呆然と見ているだけだ。

動けない…。

バインドの影響もある。

だけど…それ以上に…プレシアの気迫に気押されている。

どうにかしないといけないとわかっていても…どうもできない。

そして…無情にもチャージが完了し…

「…レイジ…！」

…俺に紫の雷撃が放たれた。

## そのよんじゅうご！（前書き）

どうも。はくおろゝです。

二日も経ってしまいました…

ううう、この二日間は忙しすぎました。

今月中に無印は完結させたかったのに…。

まあ愚痴は置いといて、では本編をどうぞ！

そのよんじゅう！

迫りくる砲撃。

襲ってくるであろう衝撃。

俺はそれに耐えるために目を瞑って身体を硬直させた。

……

……

……

ん???

しかし……いつまで経っても痛みが来ない……。

不思議に思い、目を開けるとそこには……。

「……なのは……？」

「……奏真君……お待ちせ！」

桜色の障壁を張って、俺に声をかけて来るのはがいた。少し苦しそうな顔をしながらもなのはは砲撃を防いでいる。



しかし…プレシアの砲撃にじりじりと押されているようだ。

これはまずいと思って俺も障壁を張ろうとすると…

「っ、レイジングハート!!」

(O K . m a s t e r .)

レイジングハートがその声に応え、障壁の強度が一気に上がる。  
そして砲撃を完全に防いでしまった。

俺はそれを呆然と眺めている。

すげえな…。

俺の粉碎されたんだけど…

「はあ、はあ、奏真君。ケガは…って、いっぱいしてるね…」

「…えっ…ああ」

突然にそう言われ、返答が適當になる。

しかし、なのははそれがご不満のようで…

「もうっ、また無茶ばかりしたんでしょ!？」

「いや、無茶は…したかもだけど…そうしないと…あいつ、強いし…」

「かもじゃないよ! まだケガだって完全には治ってなかったんだよ!？」  
それなのにまたそんなにケガして…」

「それは…そうなんだけど…」

なのは俺の方に詰め寄って怒りながらそう言うてくる。  
俺は必死で言い訳をするが…なかなか収まらないようだ。

でもそうでもしなきゃ、攻撃が通らないし…。  
仕方ないか…？

そんな風になのはと会話をしていると…。

強い衝撃音とともに壁が壊され、クロノ達が入ってきた。

「奏真！ 無事か！？」

「やっと追いついたな…」

「なのは…早すぎだよ…」

クロノ達はみんな無傷とは言えなかった。

ここに着くまでに…戦闘があったみたいだ。

「なんとかな…クロノ…。お前らこそ大丈夫なのか…？」

「君よりも軽傷さ…なんだい、その右手は…まったく…本当に君は世話をかける」

「そうだよね！？ クロノ君！ もっと言ってやってなの！」

俺が頭をケガしているクロノに聞くと…俺の姿を見て、ため息をつ

かれた。

なのはももっと言ってやれ、とクロノに言っている。  
…まだお怒りのようだ。

「そうだな…俺たちが来なかったら…やられてただろ、絶対」

「奏真。今すぐ応急処置をするからそこを動かないで…」

竜也もなのはの味方をする。

いや、これはいつもか…。

ユーノは俺の右肩の治療をしてくれる。

だんだんと傷から出ていた血が止まっていく。

それを見ていて…アルフがいないと思った時、オレンジ色の影が視界に入った。

横を見るとフェイトを抱きかかえたアルフ。

どうやら…隙についてアルフが見事にフェイトを救出したみたいだ。

「アルフ…フェイトは…」

「…大丈夫だよ…傷は多いけど、命に別状はない」

「そっか…。よかった」

俺は治癒魔法をかけているアルフに聞く。

すると答えは大丈夫とのこと…。

それに俺はほっと息をついた。

俺一人だと…救出は無理だったしな。

いや……倒すのも無理だった。  
なのはが来なかったら……確実にやられていた。  
それに……

「虫みたいにわらわらと……。一体、何の用かしら。あなたたちには  
用はないのだけれど……」

いままで黙っていたプレシアがクロノ達に向かってそう口を開く。  
その声は本当に面倒くさそうで、すこしイライラしているようにも  
感じた。

「そっちにはなくても……こっちにはあるんだ。プレシア・テストロ  
ツサ！ 貴方を逮捕する！」

「私は……プレシアさんを止めに来たの！」

「そう……やれるもんなら、やってみなさい！」

クロノ達はデバイスを構える。

また戦闘が始まろうとする。

俺は加勢しようか迷っていたが……。

「奏真。君はここで休んでいろ……後は僕たちがやる」

「奏真君。後は任せて！ いくよ、レイジングハート！！」

クロノとなのはにそう言われて休むことにした。  
クロノが接近戦を仕掛け、なのはが誘導弾でプレシアの牽制してい  
く。

「さて、俺たちも行くぞ。ユーノ！」

「うん！ 奏真はここを動かないでね！」

そう言うど竜也とユーノも参戦していった。

二人はなのはたちのサポートに回るみたいだ。

「…あたしも一発、あいつを殴ってくるよ…。奏真、フェイトのこ  
とをお願いっ！」

アルフも俺にフェイトを任せると…みんなの加勢に行った。  
残されたのは俺と、まだ眠っているフェイト。

俺はフェイトの傍でみんなの戦いを見ている。

一対五ではやり難いのか。

プレシアが押さえているように見える。

アルフが格闘戦を仕掛け、クロノがそのフォロー。

竜也とユーノがバインドなどで動きを止めて、なのはが大きい砲撃  
を撃つ。

みんなが自分の役割をしっかりとこなしていて…戦いを有利に進め  
ていた。

「…どっちが正しいんだろうな……」

俺は一人呟いた。

俺の考えとあいつの考え。

どっちが良くて…どっちが悪いんだろ…。

「あいつのやったことは絶対に許せないけど…あいつもあいつで苦しんで…」

俺には自分が自分でないというあいつの恐怖がわからない…だから、それがどのくらい辛いのかなんて見当もつかない。

あの時のあいつの顔…。

あんな必死な顔を見て、俺はどうしていいのか分からなくなった。

「なあ。フェイト…。俺はどうしたらいいんだろうな…」

俺は隣にいるフェイトに語りかけてみる。

もちろん、答えは返って来るわけじゃない。

けど、誰かに聞いてみたくなっただ。

そのくらい…いいよな。

~~~~~

「ディバイン…バスター!!」

「ブレイズキャノン！」

なのはとクロノがプレシアに砲撃を放つ。

しかし、それは障壁によってなんなく防がれた。

てか、プレシア強すぎね…。

なんだよ、あの鉄壁ぶりは…。

まだ一発も決まってるぞ…攻撃。

一対五で押しているようにも見えるけど…。

このままプレシアがやられてくれるわけもないしな。

奏真との戦闘でかなり疲れてるはずなのに…。

てか、あのプレシアに一人でダメージを与えた奏真も普通じゃねーよ。

まったく本当に嫌になるぜ…。

「プレシアさん！ もう終わりにしようよ…。こんなことしたって

…大好きなお母さんが…悪いこととしてまで生き返らせてくれたっ

て……きつとアリシアちゃんだってうれしくないよ!!」

俺がそう思っていると…なのはが口を開いた。

話でできるだけ説得したいんだろう。

ありったけの思いをなのは口にする。

「……じゃあ…アリシアは死んで良かったっていうの…?」

プレシアが低い声でなのはにそう言った。
その目は今にも飛び掛からんといった感じだ。

「そんなことは言っていないよ！　ただ、フェイトちゃんにあんなひどいこととして…奏真君にあんなケガさせて…それで…それでアリシアちゃんは本当に喜ぶの？　貴女の大好きな女の子は本当に喜んでくれるのかな？」

「……喜ばないでしょうね…あの子は優しいから、きっと悲しむわ」
なのはの問いにプレシアは一度、目を閉じて…そう答えた。
たぶん、アリシアの記憶を思い出しているんだろう。

「ならっ！」

「けどね…それじゃあ今までの私は何のために頑張ってきたの……
？　私は一体、何のために生まれてきたというの……！」

「っ！」

プレシアは無数の魔力弾を俺たちに向かって撃ってくる。
それを俺たちはそれぞれ障壁を張って防いだ。

この魔力弾。

魔力が込められすぎで…俺が油断するとたぶんすぐに破られてしま
うほどに強力だ。

しかし…生まれてきた？
もしかして…このプレシアは……

「私のすべてはアリシアのために存在する…。それができなくちゃ、私は……………生きてる価値がない…」

「そんな、こと…」

なのはは否定の言葉を言おうとする。

しかし、それはプレシアによって遮られた。

たぶん…この人はプレシアのクローンだ。

だからこんなに元気で、強いんだ。

「私は…私は手に入れる…私とアリシアの…未来を！ ……そして変えてみせる…こんなはずじゃなかった…世界の全てを…私の人生を…。だから…だから…！ 私の邪魔をするなーーー！！」

プレシアはそう叫ぶと…。

身体から一気に広範囲に雷を纏った魔力をまき散らす。

俺たちはその衝撃に少し吹き飛ばされた。

体勢を整え、プレシアの方を見ると紫色のオーラを纏い、帯電しているプレシアの姿があった。

周りにも雷の混ざった烈風が生じ、近づけそうにない。

いや、どこのサイヤ人ですか！？

俺がそんなアホなことを思っていると…。

「世界は…世界はいつだって、こんなはずじゃないこと…ばつかりだよ！…ずっと昔から…いつだって誰だってそうなんだ！！」

クロノがそんな中飛び出し、プレシアに向かって行った。

そして杖でプレシアに攻撃を加える。

しかし、それも同じようにプレシアの杖で防がれてしまった。

二人はまだ話を続ける。

「そのこんなはずじゃない現実から…逃げるのか、それとも立ち向かうのか…は個人の自由だよ…だけど、その自分の勝手な悲しみに無関係な人間まで巻き込んでいい権利は…どこの誰にもありはしないんだ！！」

「……さい」

「貴女は間違ってる。そんなじゃあ誰も幸せになんか…」

「うるさい！！」

その声とともにプレシアの魔力の出力が上げたのか。

さらに魔力を放出して…クロノを吹き飛ばした。

そして…複数の魔法陣を展開させる。

そこからは無数の傀儡兵たちが現れてきた。

…って、召喚魔法かよっ！！

「行きなさいっ！！」

傀儡兵はプレシアの命令を聞いて動き出し、俺たちに一斉に襲いかかってきた。

俺たちは即座にそれぞれ対応していく。

なのはは誘導弾で牽制しながら…砲撃。
アルフはどんどん殴り倒していく。

クロノは無駄のない動きで…確実に破壊して行き…。
俺とユーノは二人で組み、ユーノがバインドで縛ったものを俺が攻撃する。

それを繰り返して順調に数を減らしていくと…。

「奏真君っ！」

突然、なのはの切羽詰まったような声が聞こえてきた。
その声を聞いて俺は後ろを振り向く。

そこには…。

片手で、フェイトを守りながら二体の傀儡兵と戦っている奏真の姿が見えた。

魔力で剣を作って二体の傀儡兵の攻撃を防いでいるが…多勢に無勢。
見るからに押されている。

その顔も攻撃を受けるたびに苦痛で歪んでいた。

「奏真っ！！」

クロノも助けに行こうとするが…傀儡兵が邪魔でなかなか近付けな

いようだ。

そして俺は見た…。

奏真が目の中の二体の傀儡兵に気を取られているときに…後ろから、もう一体の傀儡兵の姿が来ているのを…。

「っ！ 奏真君っ！ 逃げてっ！！！」

なのはも傀儡兵に気が付き、そう叫ぶ。

その声で奏真は後ろを振り返り、驚きの表情を浮かべる。

もうすでに傀儡兵は持っている槍を奏真に突き刺そうと構えている所だった。

それを見て奏真は…何かを悟ったような顔をした。

その顔が気に入らなくて…。

その諦めたような顔がすごく気に入らなくて…。

俺は――

――気が付いたら飛び出していた。

そのよんじゅうご！（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます！
今回のお話はどうでしたでしょうか？

なにかありましたら：ご意見、ご感想など貰えるとすごくうれしい
です！！

ではまた次回にお会いしましょう。

そのよんじゅうろく！（前書き）

どうも、はくおろくです。

もしかしたら、前回の話で展開が読めてる人もいるかも……ですが、第四十六話です、どうぞ。

そのよんじゅうろく！

プレシアが召喚した傀儡兵は展開されたままの魔法陣からどんどん出てくる。

なのはたちが倒してはいるけど…これじゃきりがない。

俺がそう考えていると…二体の傀儡兵がこちらに向かってきた。

近くにはフェイトが寝ているんだ。

ここで俺が引くわけにはいかないっ！

俺は魔力で剣を作り、片手で構える。

治療はしてもらったが…右手はまだ動かせる状態じゃない。

この状態でどこまでいけるか…。

そんな俺に大剣を容赦なく振って来る傀儡兵。

大振りなそれは簡単に回避できた。

そしてこちらから斬りかかろうとするが…もう一体が横から槍を突き出してくる。

それよって攻撃を断念し、剣で槍を受け流す。

二体相手じゃ…きついな…。

逃げるわけにもいかないし…。

ここは回避と防御に徹するしかないか…。

しかし、この量の召喚をしてプレシアは平気なのか…。

そう思い、俺が横目でプレシアを見てみると…息を苦しそうに吐いている姿が見えた。

そこまで…。

そこまでして叶えたい願いなのか。

…それもそうか。

もし俺も母さんを生き返らせることが出来るのなら…。

そのくらいするかもしれない…。

やっぱりあいつの行動が間違ってるとは思うけど…

理解できないわけではない。

死んだ人が大事なら大事なだけ…生き返らせたいって思う気持ちは、みんなも持つんじゃないかな。

それにプラスして…あいつはクローンで…そのことに恐怖を感じてる。

アリシアを生き返らせることで偽物の自分が本物になると思い込んでいる。

それはさっきのなのはとのやり取りを見てもわかったことだ。

たぶん、俺はどこかあいつに同情してるんだと思う。
あいつの境遇に…。その生き方に…。

だから迷ってる。

このままあいつを倒していいのかどうかを…。

そんな俺の迷いは完全に裏目に出た。

少しの間、隙を作ってしまった、回避ができなくなった。
俺はひたすら受けに回る。

傀儡兵の攻撃は俺が片手で受けるには重い…重すぎる。

うまく受け流すこともできず、一撃一撃の衝撃が俺を襲う。
加えて、二体による攻撃なので…どんどん押されていく。

それでもなんとか片手で受けていた…。

そんな時。

「っ！ 奏真君っ！ 逃げてっ！！！」

そんななのは声が聞こえた。

俺はそれで気がつく。

俺の後ろにいる第三の傀儡兵の存在に…。

二体の傀儡兵の攻撃を片手で受けている時の、後ろからの攻撃。

その向かってくる槍を見て、俺にはこれをかわす手段も…防御する手段もないと悟った。

すべてがスローモーションに見える。

ああ、俺はここで終わるんだなと感じた。

戦闘中なのに…正しいとか正しくないとか…

余計なことばかりを考えて…迷って…そして、やられる。

俺は弱い…。

すぐに迷って…縊って…。

こんなんで誰かを助けるなんて…できるわけがないじゃないか…。

ごめん。

父さん、母さん。

兄さん、姉さん。

アリサ、すずか。

クロノ、ユーノ、アルフ、竜也。

なのは…。フエイト…。

どうやら俺はここまでみたいだ…。

本当にごめん。

俺はもう諦めて、その槍を受け入れることにした。

そう…。

為す術もなく、俺は槍を受けるはず、だったんだ…。

なのに…。

それ、なのに…！

ドウシテオマエガ、ソコニイル？

その槍は俺を貫かず…。

俺の前に飛び出してきた竜也の腹を貫いた。

「竜也君!!」

「「「竜也!!」」」

みんなの叫び声が響く。

こちらに来ようとするが…どんどん湧いて出てくる傀儡兵に阻まれて、それができない。

「た、たつ、や……?」

俺は呆然とそう呟く。

ただ目の前の光景が信じられなかった…。

信じたくなかった…。

けど目に映るのは腹から槍が突き出た竜也の後ろ姿で…。

そのバリアジャケットが…どんどん赤く染まっていく様子で…。

それを見て俺は頭の中が真っ白になる。

そして…動きをすべて止めてしまった。

「ぐっ、うつ、こ、のっ、機械風情がっ!」

竜也は槍を掴み、傀儡兵の動きを止めると…。

至近距離で砲撃を放ち、その傀儡兵を破壊した。

そして、すぐに腹に刺さった槍を抜くと…
俺の方を向き、…その槍を繰り出した。

「…よそ見してんじゃねえよ、バカ」

竜也が俺にそう言ったと瞬間に…。

槍は俺の顔の横を通り過ぎ、俺の後ろにいた傀儡兵を撃破した。
そのままその場に倒れ込む竜也。

その時、俺は初めて…傀儡兵が俺に攻撃をしようとしていたことに
気がつく。

そして…まだ傀儡兵はもう一体いる…！

そう思い、俺は後ろにいたもう一体の傀儡兵にすばやく振り向き、
魔法剣を一閃。

傀儡兵が倒れるのを確認せずに、倒れ込んだ竜也のもとへ駆け寄る。

「竜也っ！！」

傀儡兵が倒れる音が聞こえたのと俺が竜也の元に付くのは同時だった。

具合を見ると…竜也の腹から血が溢れてくる。

「竜也…お前、なんで…」

俺は傷口を手で塞ぎながら…竜也に声をかける。

くそっ、止まれ！

止まれよっ!!

力を込めて左手で傷口を押さえるが、どんどん竜也は真っ赤に染まっ
っていく…血が止まる気配がない…。

「…知るかよ…身体が勝手に、動いたん、だよ」

「動いたって…お前…」

それでお前がこんな傷を負ってどうすんだよ…!

早く! 誰か…早く!

こいつを…!

周りを見ると…ユーノが一人、傀儡兵の群れを潜り抜け…こっちに
飛んできているのが見えた。

よし、もう少しだ。

「それより、もだ」

「竜也! 話は後で聞くから…だから、もうこれ以上話すな!」

「いや、今言わなきゃいけねえ。…お前、何を簡単に諦めてんだ
よ…! いつものお前らしくも、ねえ…。どんなことでもバカみたい
に、諦め、ないのが、お前、だろうが…」

竜也が苦しそうな声で俺に話しかけてくる。

今は話さない方がいいのだろうか、竜也の真剣な表情を見て…俺は
止めるのをやめた。

「迷ってもいい…悩んでもいいさ……」

「……………」

「けどな……諦めんなよ!! そんなのは俺が認めたお前じゃねえ!!
!! そんなのは俺の知ってる山城 奏真じゃねえぞ!!」

竜也の言葉のひとつひとつが俺の中に響いていく。

俺らしくない、諦めるなよ、か。

確かに…俺らしくなかったのかもしれないな。

やり遂げるって決めたのに…すぐに諦めてしまった。

プレシアの見たことのない顔を見て…迷ってしまった。

迷ってもいい…悩んでもいい……

そうなのか。

それでもいいのなら…。

俺は本当は弱いから…たくさん…悩んだり、迷ったり、落ち込んだり、悔んだりしてしまうけど…。

それでもいいのか…そう思うと、なんだか胸のつかえが取れたような気がした。

悩んで、迷って、それでいい答えが出せるのなら…

いや、もし答えが出せなくても…

俺は……!

「うっ…ゲホっ!」

「竜也っ! もう話さないで!!」

竜也が急に血を口から吐いてしまう。

それを見て駆け付けたユーノが治癒魔法をかけながら、竜也を止めようとするが…。

「まだだ…いいか。奏真、良く聞け…。…これはお前の、物語だ…。お前の選択、ひとつひとつで、すべてが変わって行く…。だから…。だから、今を後悔する選択だけは絶対にするな!!」

それを拒否して…竜也は言葉を続ける。

その声は俺より年下の奴の言葉とは思えないくらいの重みがあった。

「…ああ。…分かった」

俺がその言葉に力強く頷く。

それを見て、竜也はやっと真剣な表情を崩した…。

「……そっか…じゃ、後のことは…頼む…ぜ…ヒーロー主人公?…」

そしてそう言い残すと笑顔を浮かべて…静かに目を閉じた。

竜也は…もう何も言わない。

何も口を開かない。

嘘、だよな…

なあ、嘘だって言ってくれよ…。

いつもみたいにさ…軽口を叩いてくれよ!

俺がそう思っても竜也は何も言わない。

「…お、おいつ、竜也!! 嘘、だろ…?」

「竜也っ！！　しっかりして！」

ユーノも声をかけるが何も返事が返って来ない。
まるで死んでしまったように動かない。

「くっ、エイミーさん！　すぐに転送を！！　あと医務官に準備を
！」

「もう準備しているよ！　転送まであと5秒！」
エイミーさんの声が聞こえると同時に竜也とユーノの下に魔法陣が
展開された。

「竜也っ！　もう少し頑張って！」

ユーノのその声を最後に二人はアースラに転送されていった。
俺はその様子を呆然と見ているだけだった。

俺のせいで…。

俺のせいで…。

竜也が死ぬ…？

また誰かが…俺の代わりに…

また俺だけ助かって…。

俺の心はどんどん暗くなって行く。
気持ち、悪い。

突然、吐き気も襲ってきた。

そんな時、俺の頭の中に竜也の言葉が響いてきた。

――諦めんなよ！！ そんなのは俺が認めたお前じゃねえ！

――今を後悔する選択だけは絶対にするな！

――後のことは…頼む…ぜ…ヒーロー主人公？

そうだった…。

そうだったな…。

悔むのは後でいくらでもできる…。
俺は今、俺がやるべきことを…。

竜也。

俺は、お前に誓うよ。

――俺は床に付いていた竜也の血を握り締める――

俺のせいでお前が流した…この血に誓う。
もう俺は絶対に諦めたりなんかしない。

――俺は敵を見据える――

たとえば、どんなことがあっても…。
どんなに強い敵が相手でも…。

――魔力が湧きあがって来る――

俺が正しいとか正しくないとかはどうでもいい。
ただ俺が正しいと思ったことを貫き通す。

――俺は静かに言葉を紡ぐ――

だから見ててくれ、竜也…。

俺の選択を…。

――ただ敵を倒す呪文を紡いでいく――

俺の戦いを…。

今は、もう…前しか見ないから!!

悪いな…。

プレシア…。

俺はお前の今から本^{悪者}当の敵になる。

（みんな…傀儡兵から離れろ）

俺が念話でそう言う…なの。は。た。ち。は。傀。儡。兵。か。ら。距。離。を。取。っ。た。

「シャイニング……!!」

撃ち壊すのは…残りのすべての傀儡兵…
一機だって逃がしはしないっ!!

「ブレイズ!!!!」

俺は緋色の強大な魔力が集束された集束砲撃を上^上に撃ち上げる。
そして砲撃は空中で一旦止まり…。

「ブレイク・アップ!!」

それは俺の言葉をトリガーに砲撃が分散し、傀儡兵の一体一体へと

向かって行く。

まるで緋色の流星のように砲撃が降って行く。

回避したものは回避した場所で二射目によって粉碎。

防御したものはその防御を貫いて。

バリアが堅いものも関係なく破壊していく。

一切の慈悲もなく、ただただ破壊されていく傀儡兵。

あれだけいた数も、もう両手で数えられるものまで減っていく。

そして、その生き残りたちも…破壊の雨に晒される。

砲撃が終わった時に残ったものは…破壊された傀儡兵の残骸と…。
その下にできた数多くのクレーターだけだった。

「殲滅…完了」

そのよんじゅうろく！（後書き）

最後までありがとうございます！！

というわけで…竜也とユーノが退場です。

やっぱり展開、わかりやすかったかなーと思ってますが…。

まあいいですよね…！

なんとか50話までには終わらせたいな…予定より10話くらい伸びてるし…。

それではまた、次回にお会いしましょう！！

そのよんじゅうなな!

「なんて…威力だ…」
クロノ君がそう呟く。

「こりゃ…すごいね…」
アルフさんも呆然とクレーターを眺めている。

斯く言う私も奏真君の攻撃の威力には驚いている。
あんな魔法は練習の時も見ただことはないし…。
たくさんいた傀儡兵達も、今は一機も動いていない。
床もクレーターだらけだし…。

「みんな、無事か？」

「奏真君…うん。私は大丈夫だよ」

「あたしも問題ないよ」

「僕もだ。…奏真こそどうなんだ？」

奏真君が私たちのところにやってきてそう聞いてくる。
それに私たちは大丈夫と答えた。

「そっか。俺も問題はないよ…。竜也が庇ってくれたからな…」
クロノ君の問いに少し暗く返す奏真君。

竜也君が心配なんだよね…。

あんなに血を流して…。

意識を失って…。

「…奏真君っ！ 竜也君は…その…」

奏真君は覚えていないらしいけど…昔に奏真君はお母さんを目の前で殺されてる。

その時のことがあってかはわからないけど…奏真君は誰かが自分のせいで傷つくことをすごく怖がる。

だから、私はなにか奏真君に言葉をかけてあげたいんだけど…うまく言葉が出て来ない。

今は、そんな自分がすごく…恨めしく思った。

「…ありがとう…なのは。でも俺は大丈夫だよ、今は…やらなきゃいけないことがあるから…」

奏真君は微笑を浮かべながら私にお礼を言うと、その後に顔を真剣なものへと変えた。

竜也君がアースラに転送されてから…なんだか奏真君の雰囲気が変わった。

前みたいに怖いって感じじゃなくて…。

なんていうかいつもと変わらないように見えるんだけど…

凛々しくなったというか…。
カッコ良くなったというか…。
なんか大人になったような感じがするの。

「竜也のことなら大丈夫だよ。彼は簡単に死ぬようなタマじゃない」
クロノ君が奏真君をさりげなくフォローする。
この辺の気配りがクロノ君が年上なんだなと思える点の一つだ。

「…そうだな…俺はあいつを信じる」

「うん！ きっと竜也君なら大丈夫だよ！！」

「まあ、あいつのことだから、どうせ戻ったら…ひょっこりと元気な姿を見せるよ」

奏真君はクロノ君の言葉に頷き、それに私とアルフさんも同意する。
なんとなくだけど…竜也君は大丈夫な気がするの。

…直感みたいなものなんだけど…。

「…たぶん、これから激しい戦いになる…。だから…アルフはフ
ェイトを守ってやってくれ…」

「あ、ああ、わかったよ」
アルフさんは奏真君の言うとおりにフェイトちゃんの所に向かった。
今の奏真君の言葉は、思わず頷いてしまうような不思議な力がある。

「なのは…クロノ…サポートを頼んでいいかな？」

「う、うん！ 任せて！」

「僕も了解したよ」

奏真君の提案を受けて私たちはプレシアさんの前に三人で並んで立つ。

プレシアさんは召喚していた時は辛そうな顔をしていたけれど…今は平気そうだった。

周囲に数個のスフィアを形成して、私たちを睨んでいる。

「最後に一つだけ聞きたい。あんたはアリシアを生き返らせたい…それはどうしても譲れないんだよね…？」

奏真君がプレシアさんに口を開く。

その声にはどこか覚悟を決めたような重みがあった。

「…ええ、そうよ」

「そっか…。じゃあ、俺はあんたの悪者になる。俺にも譲れないものがあるから…だからもう終わらせよう。俺が…いや、俺達が…ここであんたの夢を終わらせる」

奏真君の言葉に合わせて私たちはデバイスを構える。

「私の夢が終わる？ 私の夢は叶うわ…。あなたたちを倒せばいいんですもの、簡単よ!!」

そう言うとプレシアさんはスフィアから魔力弾を私たちに発射してきた。

すぐに私とクロノ君は散開。

最後まで残っていた奏真君に弾速の早い魔力弾が襲いかかる。

奏真君はそれを移動魔法で回避し、プレシアさんの後ろに回った。
そして左手の魔法剣を横に一閃。

それはかわされてしまうが…そこにすかさず、クロノ君が射撃魔法を放つ。

「くっ！」

動きを制限されたプレシアさんにさらに奏真君が突撃した。
魔法剣と杖が激突し、火花が上がる。

私はその隙に砲撃をチャージして…。

（奏真君！ 離れて！！）

奏真君に合図を出し、砲撃を放った。
プレシアさんは障壁を張って私の砲撃を防ぐ。

「ブレイズキャノン！！」

けど、後ろからクロノ君の放ったもうひとつの砲撃が向かって行った。

前後からの攻撃…これなら防げないはず…。

私はそう考えたけど、プレシアさんは違った。

後ろの砲撃を見ると、すぐにプレシアさんは空中に飛んで回避する。

「はあああああ！」

しかし、その行動を読んでいたのか。

空中で待ち構えていた奏真君が上から剣を振りおろす。

気合いの入ったその一撃はプレシアさんの杖に防がれた。

二人は鏖迫り合いをしながら会話を始める。

「ぐっ！」

「…確かにあんたは強いよ…俺なんかより全然強い…」

「…それは…お褒めに預かり光荣ね…！」

「けど…それでも…俺たちには敵わない…！」

「っ…！」

「うおおおおお…！」

クロノ君の完全に隙をついたデバイスによる一撃。

プレシアさんはそれをお腹に直接食らい、吹き飛ばされた。

「デイベインランサー…シュート…！」

「ステインガースナイプ…！」

そこに追撃で二人の魔力弾の嵐。

そして…最後に…。

「ディバイン：バスター!!」

私がトドメの砲撃を放つ。

プレシアさんに直撃した砲撃はそのまま床にも当たり、辺りに粉塵が舞った。

~~~~~

「…やったのかな？」

煙で見えなくなった下を見ながらなのは俺に聞いてくる。

普通なら終わりだけど…相手はあのプレシアだ。

油断はできない。

「…いや、まだだと思う」

「僕もそう思う。とにかく…今は用心しよう」

クロノの言葉に俺となのはは頷き、油断なく下を見据える。  
すると…。

突然、聞こえた大きな雄叫びとともに、一つの紫色の閃光がなのはに向かって飛び込んできた。

「なのはっ！」

「うん！」

俺の声を聞いてなのははレイジングハートを構え、迎え撃とうとする。

しかし、次の瞬間にはなのはが下に吹き飛ばされた。勢いよく床に叩きつけられるなのは。

「えっ!？」

速過ぎて…プレシアの動きが全く見えなかった。

今も見えるのは紫色の閃光の残滓だけ。

その光は俺とクロノの周囲を飛び回る。

「くっ！ ステインガーレイ!!」

クロノが魔力弾を放つが…。

それは掠りもせずですり抜けていく。

そして…

「ぐああああ！」

遂にクロノも撃墜された。

残すは俺だけだ。

未だに俺の周りには光が飛び回っている。

あれは俺の目じゃ追えない…。

かといって、気配を読めるほどの能力も俺にはない。

なら…手は一つ。

魔力を薄く周囲に放出。

これで感知できるはず…。

何か反応があった所にプレシアがいる…

……後ろかつ!!

俺は後ろから近づいてくるものに魔法剣を一閃。

しかし…斬ったのはプレシアではなく、魔力弾だった。

「残念…」

その声とともに俺も下に叩き落とされる。

ケガをしている右肩から床に衝突し、声も出せないような激痛が走った。

「うっ…ぐっ、う…」

「これで…終わりね。フォトンランサー……ジェノサイドシフト…」  
空中でプレシアが100基あまりのスフィアを作る。

しかし、今の俺にあらがう手段は残っていない。

それでも…身体に鞭を打って、なんとか立ちあがろうとする。



だが、その前に…。

「ファイアー!!」

数えるのもバカらしくなるくらいの魔力弾が俺に向かって飛んできた。

まるで嵐だなこれは…

俺は上を見上げてそう考えた。

視界を一色に染めていく紫色。

すべてが紫色に変わった、と思った時。

突然、目の前に別の三種類の色が飛び込んできた。

その色は…桜色と青色とオレンジ色。

…なのはとクロノ、アルフの魔力光だ。

「…ここで奏真君を……」

「…やらせは…」

「しないよっ!!!!」

三人は俺の前に立ち、全力で障壁を張り、魔力弾から俺を守る。けど…その障壁も魔力弾でどんどん削られていく…。

「三人ともやめろ…！ 俺はいいから早く逃げろ…！」  
俺は三人に退くように言うが…三人は逃げない。

「嫌、だよ…！ 私はここに…奏真君を助けにきたんだからっ…！」  
「管理局員として…民間人を守るのが、僕の仕事だ…！」

「あんたにはフェイトのことで、たくさん借りがあるからね！ このくらいは…するさ…！」

そう言って絶対に退こうともしない。

その間にも障壁は削られていて…。  
遂には三人の障壁にヒビが入って来る。

なんでだよ…。

そんな状況なのに…。  
なんで…みんな…。

「なんで…みんな…笑ってんだよ…」

俺はそう言って下を向く。

「だって…奏真君の力になれてうれしいから…」

「自分の力で…誰かを守れるから…」

「あんならなんとかしてくれるって…信じてるから…」

「」「だから…笑えるんだ(よ)」「」

三人は声を合わせてそう答えた。

俺は顔を上げる。

障壁が壊れても三人はそこを動かなかった。  
両手を広げ、身体を張って俺を庇った。

痛いのに…。

痛いはずなのに…。

それでも三人は耐え続けた。

俺は涙で霞む視界を気にせず…。  
ひたすら三人の背中を見つめた。

その背中を目に焼き付けるように…。  
その姿を絶対に忘れないように…。

魔力弾の嵐は収まった…。

俺の目の前には倒れている三人がいる。

「なのは…」

俺が一番近くにいたなのはを抱き上げる。

なのははバリアジャケットもボロボロで…身体中が電撃で焦げ付いた。

呼吸をしていることに、ほっとしながら…俺はなのはを抱きしめる。

ごめんな。

こんな風に頑張らせて…。

俺が弱いから…。

だから…。

「あらあら。結局あなた一人になってしまったわね…」

そう言ってプレシアは嗤う。

しかし、あれだけの攻撃をしたからか…。

その顔には疲労の色が窺えた。

「……………」

無言でプレシアを睨みつける。

「…これで今度こそお終いにするわ…」

プレシアはそう言う…空中で巨大な魔法陣を展開した。  
どうやら砲撃を放つみたいだ…。

もし、あれを避けたら…なのはたちに直撃する。

かわせない。

障壁もたぶん…もたない。

なら…。

俺はなのはを床に優しく寝かせる。

…今度こそ、守るから…。

みんな守るから…。

俺は、なのはが握りしめていたレイジングハートに声をかける。

「レイジングハート…」

(……………)

レイジングハートは声は出さないが、赤い宝石が点滅している。

話を聞いてくれてるみたいだ。

「…俺は…なのはを…みんなを守りたい……だから…俺に……君の力を貸してくれ」

(…OK. Please use me.)

「…ありがとう」

レイジングハートは自分を使えと、そう応えてくれた。  
それに俺は顔を綻ばせ、レイジングハートにお礼を言う。

よし、頑張ろう…！

俺は空中に浮かぶプレシアを見つめ、レイジングハートを左手で構える。

そして、魔法陣を展開した。

「あら、抵抗する気なの？ 前にあなたの攻撃は私に押し負けたはずだけど…」

余裕の表れなのか…チャージが完了したプレシアは魔力をチャージしている俺を見て声をかけてくる。

「最後まで抗うさ…。それにこれは俺一人だけの攻撃じゃない…」

そうさ…。

俺だけなら…

俺一人ならあいつには敵わないけど…。

「？ 何をいつてるのかわからないわ…あなた以外はもう全員倒れてるわよ？」

「違う…全部…全部、繋がっているんだ…」

倒れていたフェイトの…。

俺に言葉を残した竜也の…。

俺を庇ったのはたちの…。

いままで関わってきたみんなの顔が浮かんでくる。

「みんなの思いは全部、繋がってるから…だから…！ 俺もすべてを賭けて、この一撃を撃つ…！」

「…ふん。なら私がそれを粉碎してあげるわ！ トライデント…！！！」

「絶対に勝つぞ、レイジングハート…！」

(OK. Divine.)

俺もプレシアも発射体勢に移る。

そして…魔力を杖先に集束させて…。

「スマッシュ…！」

「バスター…！！！」

同時に放った。

上からは紫色。  
下からは緋色。

二つの砲撃が再度、  
激突する。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5272u/>

---

魔法少女リリカルなのは For Myself

2011年8月11日19時59分発行